

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

— 12 —

甘木市所在柿原遺跡群の調査 III
(E・F地区)

1987

福岡県教育委員会

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

— 12 —

甘木市所在柿原遺跡群の調査 III
(E・F地区)

序

本書は、福岡県教育委員会が、日本道路公団から委託を受けて、昭和54年度から実施している九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書であります。

今回の報告書は、昭和58・59年度に行った甘木市所在の柿原遺跡群についてのもので、その第3冊目にあたります。柿原遺跡群の調査は昭和60年度で完了いたしており、今後もその調査結果の報告書を、順次刊行してゆく予定であります。

調査に際しましては、地元の方々をはじめ、関係各位の御協力をいただき、多大な成果をあげることができました。深く感謝いたします。

本書が、文化財愛護思想の普及、学術研究等に役立つならば幸いです。

昭和62年11月30日

福岡県教育委員会

教育長 竹井 宏

例 言

1. 本書は、昭和58・59年度に福岡県教育委員会が、日本道路公団から委託を受けて、九州横断自動車道建設に伴う土取りのために破壊される埋蔵文化財を発掘調査した柿原遺跡群の第3冊目の報告書であり、九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告の第12冊目にあたる。
2. 本書の執筆は、小池史哲・新原正典・小田和利・日高正幸・武田光正が分担し、各文末に銘記した。
3. 掲載の写真のうち、遺構は主に小池が、遺物は九州歴史資料館の石丸洋・藤美代子と、小池が撮影した。
4. 遺構の実測は、担当者他に、栗原和彦・伊崎俊秋・木村幾多郎・高田一弘・佐土原逸男・田中康信が、遺物の実測には、担当者他に、原田和枝・松島邦子・速見公己・原富子が従事した。なお、図面の浄書には、豊福弥生・鶴田佳子・塩足里美の協力を得た。
5. 出土遺物の整理にあたっては、岩瀬正信と、九州歴史資料館の横田義章の協力を得た。
6. 挿図で使用する方位は、個別の遺構図にあっては磁北、その他の配置図・地形図は真北に統一している。
7. 本書の編集は、小池史哲があたった。

本文目次

柿原遺跡群の調査 (E・F地区)

I	調査の経過	1
II	位置と環境	6
III	縄文・弥生時代の遺構と遺物	10
	1. 住居跡	10
	2. 土坑	25
	3. 木棺墓	31
	4. 石蓋土墳墓	46
	5. 石棺墓	48
	6. 甕棺墓	49
	7. その他の遺構と遺物	76
IV	古墳時代以降の遺構と遺物	87
	1. 横穴式石室古墳	87
	2. 石棺墓	163
	3. 火葬墓	168
	4. その他の遺構と遺物	170
V	おわりに	176
	1. 生活遺構について	176
	2. 弥生時代の墓制について	183
	3. 古墳について	187

図 版 目 次

本文対照頁

図 版 1	柿原遺跡周辺航空写真……………	1
図 版 2	(1) 柿原遺跡E・F地区全景(東から)……………	1
	(2) 柿原遺跡E・F地区全景(南から)……………	1
図 版 3	(1) 調査開始時のE地区(F地区から)……………	1
	(2) 調査開始時のF地区(E地区から)……………	1
図 版 4	(1) 1号住居跡(東から)……………	10
	(2) 1号住居跡埋土堆積状況……………	10
	(3) 完掘後の1号住居跡(東から)……………	10
図 版 5	(1) 2～4号住居跡(北西から)……………	14
	(2) 2・3号住居跡(南西から)……………	14
図 版 6	(1) 2号住居跡(南東から)……………	14
	(2) 4号住居跡(南西から)……………	15
図 版 7	(1) 5号住居跡(東から)……………	19
	(2) 6号住居跡(東から)……………	22
図 版 8	(1) 6号住居跡埋土堆積状況……………	22
	(2) 完掘後の6号住居跡(東から)……………	22
	(3) 7号住居跡(東から)……………	24
図 版 9	1～7号住居跡出土遺物……………	12
図 版 10	(1) 2号土坑(西から)……………	26
	(2) 3号土坑(東から)……………	26
	(3) 3号土坑のピット……………	28
図 版 11	(1) 4号土坑(南西から)……………	28
	(2) 4号土坑のピット……………	28
	(3) 5号土坑(南西から)……………	28
図 版 12	(1) 7号土坑(西から)……………	76
	(2) 弥生時代墓地群(西から)……………	31
図 版 13	(1) 弥生時代墓地群西端部(北から)……………	31
	(2) 弥生時代墓地群西端部(南から)……………	31
図 版 14	(1) 1号木棺墓(南東から)……………	32
	(2) 1号木棺墓(南西から)……………	32

図版 15	(1)	2号木棺墓 (南西から)	32
	(2)	3号木棺墓 (南東から)	34
図版 16	(1)	4号木棺墓 (南西から)	35
	(2)	4号木棺墓 (北西から)	35
	(3)	4号木棺墓出土土器	35
図版 17	(1)	5号木棺墓 (北西から)	35
	(2)	6号木棺墓 (北西から)	38
図版 18	(1)	7号木棺墓 (北西から)	38
	(2)	8号木棺墓 (北西から)	38
図版 19	(1)	9号木棺墓と標石 (北西から)	39
	(2)	9号木棺墓 (北西から)	39
図版 20	(1)	10号木棺墓 (北西から)	39
	(2)	10号木棺墓墓塚 (北西から)	39
図版 21	(1)	11号木棺墓 (南東から)	42
	(2)	12号木棺墓 (南から)	42
図版 22	(1)	13号木棺墓 (南東から)	42
	(2)	13号木棺墓墓塚 (南東から)	42
図版 23	(1)	14号木棺墓 (北西から)	45
	(2)	14号木棺墓墓塚 (北西から)	45
図版 24	(1)	1号石蓋土墳墓 (北東から)	46
	(2)	2号石蓋土墳墓 (北東から)	46
	(3)	3号石蓋土墳墓 (北東から)	48
図版 25	(1)	1号石蓋土墳墓墓塚 (北東から)	46
	(2)	2号石蓋土墳墓墓塚 (北東から)	46
	(3)	3号石蓋土墳墓墓塚 (南西から)	48
図版 26	(1)	石棺墓蓋石 (北西から)	48
	(2)	蓋石除去後の石棺墓 (北西から)	48
図版 27	(1)	1号甕棺墓 (南西から)	50
	(2)	2号甕棺墓 (南西から)	50
	(3)	3号甕棺墓 (南西から)	53
図版 28	(1)	4号甕棺墓 (北西から)	53
	(2)	5号甕棺墓 (西から)	54
	(3)	6号甕棺墓 (南東から)	56

図版 29	(1) 7～9号壺棺墓 (南東から)	56
	(2) 7号壺棺墓 (南東から)	56
	(3) 8号壺棺墓 (南東から)	57
図版 30	(1) 9号壺棺墓 (南東から)	59
	(2) 10号壺棺墓 (南東から)	59
	(3) 11号壺棺墓 (北西から)	61
図版 31	(1) 12号壺棺墓覆石 (北東から)	61
	(2) 12号壺棺墓 (北東から)	61
	(3) 13号壺棺墓と標石 (北西から)	64
図版 32	(1) 14号壺棺墓覆石 (南東から)	65
	(2) 14号壺棺墓 (南東から)	65
	(3) 15号壺棺墓 (南西から)	66
図版 33	(1) 16号壺棺墓蓋石 (東から)	66
	(2) 蓋石除去後の16号壺棺墓 (東から)	66
	(3) 17号壺棺墓 (北西から)	70
図版 34	(1) 18号壺棺墓標石 (北西から)	70
	(2) 18号壺棺墓 (南東から)	70
	(3) 19号壺棺墓 (西から)	71
図版 35	(1) 20号壺棺墓 (南から)	71
	(2) 21号壺棺墓覆石と蓋石 (南東から)	72
	(3) 覆石除去後の21号壺棺墓 (北東から)	72
図版 36	(1) 蓋石除去後の21号壺棺墓 (南東から)	72
	(2) 22号壺棺墓 (北西から)	74
	(3) 23号壺棺墓 (東から)	75
図版 37	(1) 23号壺棺墓 (南から)	75
	(2) 24号壺棺墓 (南から)	75
	(3) 25号壺棺墓 (南西から)	76
図版 38	1～3・5号壺棺	50
図版 39	4・7・8号壺棺	54
図版 40	9～11号壺棺	59
図版 41	12～14号壺棺	62
図版 42	15・17・18号壺棺	66
図版 43	16・19・20号壺棺	67

図版 44	21-23号墓棺	74
図版 45	その他の縄文・弥生土器, 石器	78
図版 46	(1) 柿原E地区古墳群全景 (南東から)	87
	(2) 柿原E地区古墳群全景 (南から)	87
図版 47	(1) 1号墳全景空中写真	87
	(2) 1号墳石室 (東から)	87
	(3) 1号墳石室 (南から)	87
図版 48	(1) 2号墳全景 (南から)	88
	(2) 2号墳玄室 (東から)	89
図版 49	(1) 3号墳石室 (南から)	90
	(2) 3号墳玄室内遺物出土状況	90
	(3) 3号墳出土遺物	93
図版 50	(1) 3-5号墳全景空中写真	89
	(2) 4号墳全景 (南から)	95
図版 51	(1) 4号墳石室 (南から)	95
	(2) 4号墳石室閉塞状況 (西から)	95
	(3) 4号墳玄室内遺物出土状況	98
図版 52	4号墳出土土器・装身具・鉄滓	98
図版 53	(1) 5号墳全景空中写真	102
	(2) 5号墳石室閉塞状況 (南から)	103
図版 54	(1) 5号墳石室 (西から)	103
	(2) 5号墳周溝出土土器	104
図版 55	(1) 6・9号墳全景空中写真	106
	(2) 6号墳全景空中写真	106
	(3) 6号墳石室閉塞状況 (南東から)	106
図版 56	(1) 7号墳全景空中写真	108
	(2) 7号墳石室 (南から)	109
	(3) 7号墳主体部掘り方 (南から)	109
図版 57	(1) 8号墳全景 (南から)	109
	(2) 8号墳石室 (南から)	110
	(3) 9号墳全景空中写真	111
図版 58	(1) 9号墳全景 (南から)	111
	(2) 9号墳石室 (南から)	111

図版 59	(1)	9号墳前室遺物出土状況	113
	(2)	9号墳前室出土土器	113
図版 60		9号墳前室出土土器②・玄室出土鉄製品・装身具	115
図版 61	(1)	10号墳全景空中写真	116
	(2)	10号墳全景(南から)	116
図版 62	(1)	10号墳全景(東から)	116
	(2)	10号墳石室(南から)	116
図版 63	(1)	10号墳石室閉塞状況(西から)	116
	(2)	10号墳石室閉塞状況(北から)	116
	(3)	10号墳奥壁(南から)	116
図版 64	(1)	10号墳玄室内床面遺物出土状況	118
	(2)	10号墳玄室内床面遺物出土状況	118
	(3)	10号墳墓道遺物出土状況	118
図版 65		10号墳出土土器・装身具	118
図版 66	(1)	F地区西斜面11~13号墳(南西から)	123
	(2)	F地区東斜面14~20号墳(南から)	131
図版 67	(1)	11号墳全景(南から)	123
	(2)	11号墳石室(西から)	123
	(3)	12号墳全景(南から)	126
図版 68	(1)	12号墳周溝遺物出土状況	126
	(2)	12号墳周溝出土土器	127
	(3)	13号墳全景(南から)	128
	(4)	13号墳出土装身具	130
図版 69	(1)	F地区東斜面14~16・19号墳(東南から)	131
	(2)	F地区東斜面14~16・19号墳(南から)	131
図版 70	(1)	14号墳全景(南から)	131
	(2)	14号墳石室(西から)	131
	(3)	14号墳石室閉塞状況	131
	(4)	14号墳墓道出土土器	134
図版 71	(1)	15号墳全景(南から)	134
	(2)	15号墳石室(東から)	135
図版 72	(1)	15号墳墓道遺物出土状況	136
	(2)	15号墳墓道遺物出土状況	136

図版 72	(3)	15号墳墓道前方遺物出土状況	136
図版 73	(1)	15号墳玄室下部床面(南から)	135
	(2)	15号墳出土土器①	136
図版 74		15号墳出土土器②・装身具・鉄製品・鍍刻石	139
図版 75	(1)	16号墳全景(東から)	145
	(2)	16号墳石室(東から)	145
図版 76	(1)	16号墳前室遺物出土状況	145
	(2)	16号墳前室出土土器・鉄製品	145
図版 77		16号墳墓道・竪溝出土土器	146
図版 78	(1)	17号墳全景(東から)	150
	(2)	17号墳列石とその転落石	151
	(3)	17号墳石室(南東から)	152
図版 79	(1)	18号墳全景(南から)	153
	(2)	18号墳石室(南から)	153
	(3)	18号墳出土装身具	156
図版 80	(1)	19号墳全景(南から)	156
	(2)	19号墳石室(南から)	156
	(3)	19号墳出土鉄製品	157
図版 81	(1)	20号墳全景(南から)	158
	(2)	20号墳石室閉塞状況(南・東から)	158
	(3)	20号墳石室と墓道(南から)	158
図版 82	(1)	20号墳石室前面(南から)	158
	(2)	20号墳出土遺物	159
図版 83	(1)	21号墳全景(南から)	160
	(2)	21号墳石室(南から)	161
	(3)	22号墳石室(西から)	163
図版 84	(1)	1号石棺墓(西から)	163
	(2)	1号石棺墓(南から)	163
図版 85	(1)	2号石棺墓(西から)	165
	(2)	3号石棺墓(東から)	165
図版 86	(1)	4号石棺墓(南西から)	166
	(2)	4号石棺墓(南東から)	166
	(3)	4号石棺墓墓外出土土器	167

図版 87 (1)	1号火葬墓 (南から)	168
(2)	2号火葬墓 (北東から)	168
(3)	3号火葬墓 (南東から)	170
図版 88	包含層出土・表探遺物	172

挿 図 目 次

第 1 図	九州横断自動車道路線図	2
第 2 図	周辺の地形と遺跡の分布 (1/50000)	折込み
第 3 図	柿原 E・F 地区地形測量図 (1/600)	折込み
第 4 図	柿原 E・F 地区遺構配置図 (1/600)	折込み
第 5 図	E・F 地区住居跡配置図 (1/600)	10
第 6 図	1号住居跡実測図 (1/60)	11
第 7 図	1号住居跡出土土器実測図 (1/4)	13
第 8 図	2～4号住居跡実測図 (1/60)	折込み
第 9 図	2～4号住居跡出土土器実測図① (1/4)	17
第 10 図	2～4号住居跡出土土器実測図② (1/4)	18
第 11 図	5～7号住居跡実測図 (1/60)	20
第 12 図	5号住居跡出土土器実測図 (1/4)	21
第 13 図	住居跡出土土器実測図 (1/2, 1/3)	22
第 14 図	6号住居跡出土土器実測図 (1/4)	23
第 15 図	7号住居跡出土土器実測図 (1/6, 1/4)	25
第 16 図	F 地区土坑配置図 (1/200)	26
第 17 図	1・4号土坑実測図 (1/30)	27
第 18 図	2・3号土坑実測図 (1/30)	29
第 19 図	5・6号土坑実測図 (1/30)	30
第 20 図	F 地区弥生時代墓地配置図 (1/100)	折込み
第 21 図	木棺墓配置図 (1/200)	31
第 22 図	1・2号木棺墓実測図 (1/30)	33
第 23 図	3号木棺墓実測図 (1/30)	34
第 24 図	4・5号木棺墓実測図 (1/30)	36

第 25 图	6·7号木棺墓实测图 (1/30)	37
第 26 图	8·9号木棺墓实测图 (1/30)	40
第 27 图	10号木棺墓实测图 (1/30)	41
第 28 图	11·12号木棺墓实测图 (1/30)	43
第 29 图	13·14号木棺墓实测图 (1/30)	44
第 30 图	木棺墓出土土器实测图 (1/4)	45
第 31 图	1~4号石盖土壙墓实测图 (1/30)	47
第 32 图	石棺墓实测图 (1/30)	49
第 33 图	1~7号甕棺墓实测图 (1/30)	51
第 34 图	1~3号甕棺实测图 (1/6)	52
第 35 图	4~6号甕棺实测图 (1/6)	55
第 36 图	7号甕棺实测图 (1/6)	57
第 37 图	8~11号甕棺墓实测图 (1/30)	58
第 38 图	8~10号甕棺实测图 (1/6)	60
第 39 图	11号甕棺实测图 (1/6)	62
第 40 图	12~15号甕棺墓实测图 (1/30)	63
第 41 图	12·13号甕棺实测图 (1/6)	64
第 42 图	14·15号甕棺实测图 (1/6)	67
第 43 图	16~20·23号甕棺墓实测图 (1/30)	68
第 44 图	16~18号甕棺实测图 (1/6)	69
第 45 图	19号甕棺实测图 (1/6)	72
第 46 图	20~23号甕棺实测图 (1/6)	折込み
第 47 图	21·22号甕棺墓实测图 (1/30)	73
第 48 图	24·25号甕棺墓实测图 (1/30)	75
第 49 图	24·25号甕棺实测图 (1/6)	76
第 50 图	7号土坑实测图 (1/30)	76
第 51 图	E·F地区出土縄文土器拓影 (1/3)	77
第 52 图	F地区出土异形局部磨製石器实测图 (1/1)	78
第 53 图	周边採集石器实测图 (1/3)	78
第 54 图	E·F地区出土弥生土器实测图 (1/4)	80
第 55 图	周边採集弥生土器实测图① (1/4)	82
第 56 图	周边採集弥生土器实测图② (1/4)	83
第 57 图	1号墳填丘·地山整形面实测图 (1/200)	87

第 58 図	1号墳石室実測図 (1/60)	88
第 59 図	2号墳墳丘・地山整形面実測図 (1/200)	89
第 60 図	2号墳石室実測図 (1/60)	90
第 61 図	3～5号墳墳丘・地山整形面実測図 (1/200)	91
第 62 図	3号墳石室実測図 (1/60)	92
第 63 図	3号墳玄室遺物出土状況 (1/20)	93
第 64 図	3号墳出土土器実測図 (1/3)	94
第 65 図	3号墳出土鉄製品実測図 (1/2)	94
第 66 図	4号墳墳丘土層実測図 (1/60)	96
第 67 図	4号墳石室実測図 (1/60)	折込み
第 68 図	4号墳玄室遺物出土状況 (1/20)	99
第 69 図	4号墳出土土器実測図① (1/3)	100
第 70 図	4号墳出土土器実測図② (1/3)	101
第 71 図	4号墳出土装身具実測図 (1/1)	102
第 72 図	5号墳石室実測図 (1/60)	折込み
第 73 図	5号墳周溝遺物出土状況 (1/20)	104
第 74 図	5号墳出土土器実測図 (1/3)	105
第 75 図	6～9号墳墳丘・地山整形面実測図 (1/200)	107
第 76 図	6号墳石室実測図 (1/60)	折込み
第 77 図	7号墳石室実測図 (1/60)	折込み
第 78 図	8号墳石室実測図 (1/30)	110
第 79 図	9号墳石室実測図 (1/60)	112
第 80 図	9号墳前室遺物出土状況 (1/20)	113
第 81 図	9号墳出土土器実測図 (1/3)	114
第 82 図	9号墳出土装身具実測図 (1/1)	115
第 83 図	9号墳出土鉄製品実測図 (1/2)	115
第 84 図	10号墳墳丘・地山整形面実測図 (1/200)	116
第 85 図	10号墳石室実測図 (1/60)	折込み
第 86 図	10号墳玄室遺物出土状況 (1/20)	118
第 87 図	10号墳出土土器実測図 (1/3)	119
第 88 図	10号墳出土装身具実測図 (1/1)	121
第 89 図	11号墳墳丘・地山整形面実測図 (1/200)	123
第 90 図	11号墳石室実測図 (1/60)	124

第 91 図	12・13号墳墳丘・地山整形面実測図 (1/200)	125
第 92 図	12号墳石室実測図 (1/60)	126
第 93 図	12号墳周溝遺物出土状況 (1/20)	127
第 94 図	12号墳出土土器実測図 (1/3)	128
第 95 図	13号墳石室実測図 (1/60)	129
第 96 図	13号墳出土装身具実測図 (1/1)	131
第 97 図	14~16・19・20号墳墳丘・地山整形面実測図 (1/200)	132
第 98 図	14号墳石室実測図 (1/30)	133
第 99 図	14号墳出土土器実測図 (1/3)	134
第 100 図	15号墳石室実測図 (1/60)	折込み
第 101 図	15号墳周溝遺物出土状況 (1/20)	137
第 102 図	15号墳出土土器実測図① (1/3)	138
第 103 図	15号墳出土土器実測図② (1/4)	140
第 104 図	15号墳出土土器実測図③ (1/3)	140
第 105 図	15号墳出土土器実測図④ (1/5)	141
第 106 図	15号墳出土土器実測図⑤ (1/3)	142
第 107 図	15号墳出土装身具実測図 (1/1)	142
第 108 図	15号墳出土鉄製品実測図 (1/2)	142
第 109 図	15号墳出土線刻石実測図 (1/4)	143
第 110 図	16号墳石室実測図 (1/60)	144
第 111 図	16号墳周溝遺物出土状況 (1/20)	146
第 112 図	16号墳前室遺物出土状況 (1/20)	147
第 113 図	16号墳出土土器実測図① (1/3)	147
第 114 図	16号墳出土土器実測図② (1/3)	148
第 115 図	16号墳出土土器実測図③ (1/3)	149
第 116 図	16号墳出土鉄製品実測図 (1/2)	150
第 117 図	17号墳墳丘・地山整形面実測図 (1/200)	151
第 118 図	17号墳列石実測図 (1/60)	152
第 119 図	17号墳石室実測図 (1/60)	153
第 120 図	17号墳出土土器実測図 (1/3)	153
第 121 図	18号墳墳丘・地山整形面実測図 (1/200)	154
第 122 図	18号墳石室実測図 (1/60)	155
第 123 図	18号墳出土装身具実測図 (1/1)	156

第 124 図	19号墳石室実測図 (1/60)	157
第 125 図	19号墳出土鉄製品実測図 (1/2)	158
第 126 図	20号墳石室実測図 (1/60)	折込み
第 127 図	20号墳墳丘下集石遺構実測図 (1/20)	折込み
第 128 図	20号墳出土土器実測図 (1/3)	160
第 129 図	21号墳墳丘・地山整形面実測図 (1/200)	160
第 130 図	21号墳石室実測図 (1/60)	161
第 131 図	22号墳墳丘・地山整形面実測図 (1/200)	162
第 132 図	22号墳石室実測図 (1/30)	162
第 133 図	1～3号石棺墓実測図 (1/30)	164
第 134 図	4号石棺墓実測図 (1/30)	166
第 135 図	4号石棺墓墓域外出土土器実測図 (1/3)	167
第 136 図	1号火葬墓実測図 (1/30)	168
第 137 図	2～5号火葬墓実測図 (1/30)	169
第 138 図	8号土坑実測図 (1/40)	171
第 139 図	9号土坑実測図 (1/30)	171
第 140 図	E地区包含層出土土器実測図 (1/3)	172
第 141 図	F地区包含層出土土器実測図 (1/3)	173
第 142 図	周辺採集土器実測図 (1/3)	174
付 図	柿原遺跡群地形図 (1/2000)	

表 目 次

表 1	柿原遺跡群調査工程表	3
表 2	包含層出土土器観察表	84
表 3	表採土器観察表	85
表 4	10号墳玄室出土玉類計測表	122
表 5	弥生時代墳墓一覧表	折込み
表 6	古墳計測表	折込み
表 7	石室各部計測値と各所の比率・推定尺度	189

I 調査の経過

九州横断自動車道建設に伴う採土場となった、甘木市大字柿原所在の柿原遺跡群の発掘調査は、昭和55年度初め以来継続実施してきたが、今回報告するE・F地区の調査は、昭和58年度末から59年度の中頃にかけて実施したものである。

昭和58年度は、主に柿原I地区の調査を前年度から継続して実施してきたが、昭和58年度末にはその調査も大半が済み、先に調査を終了していた柿原G・H地区の調査報告書作成作業のため現地の調査は一時中断していた。柿栽培の段々畑に閉鎖されていたE・F地区は、年度末の3月から調査を実施することになった。現状では古墳の存在もはっきりしないため、まず重機を用いてF地区の表土・再堆積土を除去することから始めたが、尾根の頂部には全く遺構が存在しなかったため、斜面の表土剥ぎを進めて遺構の有無を確かめるといった方法をとった。そしてこの作業の終わった部分から地形測量をはじめたが、一方ではI地区の調査が一部残っていて、併行して実施するといった状況であった。斜面の再堆積土・表土の除去によって古墳が次々と姿を現すようになり、それまで予想していた尾根上の古墳占地でなく、斜面での占地という新知見を得たのは、その後の調査への契機ともなった。さらに、尾根先端側の斜面からは、甕棺墓や石蓋土墳墓などの弥生時代墳墓群も姿を現すようになって、遺構密度の高さにも驚きを新たにさせられたものである。この年度は昭和59年3月23日までで現地の調査を中止したが、この間に、F地区西斜面から古墳3基（F地区1～3号墳、後にE・F地区11～13号墳と改称する）をはじめ、石蓋土墳墓・甕棺墓など10余基を確認した。しかし、これらをはじめとする各遺構の本格的な調査は次の年度に持越しことになった。

昭和59年度は、昭和59年4月2日から、担当者の変更もなく調査を再開したが、東斜面にも古墳が次々と姿を現し、弥生時代墳墓も数を増していった。このため調査担当者を増員して、これに対処することにしたが、1ヶ月を経過した5月上旬には、古墳10基、甕棺墓16基、石蓋土墳墓4基、木棺墓は16基を越すようになった。甕棺墓や木棺墓には、扁平石をたてて据えたものや、墓壇の上部に横石と思われる石塊を置いたものもあり、興味深い。4月は降雨が少なく乾燥気味だったが、5月になって降雨も多くなり地面は過度に湿って遺構検出が容易になると、今度は弥生時代の住居跡なども検出されるようになり、墓地群の調査がほぼ片付いた5月中旬には、東斜面に3軒の弥生時代住居跡が姿を現し、西斜面からは新たに2基の古墳や土坑なども現れた。

一方、表土剥ぎの排土は、谷部に積みあげることにしたが、E地区とF地区の間の谷は用地境との間に余裕が少なく、F地区東斜面に引続きE地区南西斜面の再堆積土・表土剥ぎを実施

したが、F地区10号墳（後に20号墳と改称する）の主体部部分まで露呈させるのが限界で、それ以上はF地区側の調査終了を待って排土を撤出しなければならない状況であった。4月下旬からは、すぐ隣で岩盤の発破作業が始まり、ブルドーザー・ダンプカーなどもフル稼働で騒然とした状態となった。工事工程から5月の下旬には、F地区尾根の高所でも土取りがはじまり、まさに尻に火が付くような状況となった。さらに、追討ちをかけるがごとく、L地区尾根の土取りを急ぎたいという公団側の要望があり、6月上旬からL地区の調査を併行実施することに



第1図 九州横断自動車道路線図

表1 柿原遺跡群調査工程表

年 度	調査地区	調査期間	調査担当者	調査内容	調査面積	調査概要	備考
昭和55年度	D・I・L	S55.4.26~7.24 S55.11.15~S55.1.10	栗原 石山 新藤 佐々木	地形測量	14,700㎡		
◇ 56年度	C	S56.10.12~S57.2.19	新藤 地蔵	発掘調査	900㎡	横穴式石室	報告書第4巻
◇ 57年度	C・H・S	S57.5.10~S58.3.29	河田 新雄 中野	＊	8,300㎡	横穴式石室、土塚墓 石棺承盤式石室	＊
◇ ◇	I	S57.6.14~S58.3.31	栗原 新雄 中野	地形測量 発掘調査	15,000㎡	横穴式石室、石棺承盤式石室 土塚墓、住居跡、縄文土器	報告書第6巻
◇ 58年度	I	S58.4.4~12.28 S59.3.1~3.23	新藤 中野 小池	発掘調査			＊
◇ 59年度	F	S59.4.2~7.24	栗原 新藤 小池	＊	5,000㎡	横穴式石室、石棺墓、火葬墓、住居跡 土塚墓、土塚墓、石蓋土塚墓、土塚	報告書第12巻
◇ ◇	L	S59.6.4~7.26	栗原 小池	＊	1,600㎡	横穴式石室、住居跡	
◇ ◇	E	S59.7.3~10.23	新藤 新藤 小池	＊	4,600㎡	横穴式石室、石棺墓、火葬墓 住居跡、土塚墓	報告書第12巻
◇ ◇	D	S59.9.10~S60.3.30	栗原 新藤 小池	地形測量 発掘調査	7,300㎡	横穴式石室、石棺墓	
◇ 60年度	D	S60.4.1~4.30	小池 日高	発掘調査	1,000㎡	＊	
◇ ◇	L	S60.10.22~11.19	中野 小池	＊	3,400㎡	横穴式石室	

なった。

L地区では、尾根部に古墳2基と、斜面に奈良時代の住居跡3軒を確認し、調査した。住居跡のうち1軒は製鉄炉跡を伴う特殊なものであったので、専門的な見地から数名の先生方の指導を仰ぎ、7月下旬には製鉄炉跡部分の切取り保存処置をとった。

E地区は、地形測量などの一部の調査を先行させていたが、本格的な調査は7月3日から実施した。E・F地区谷部の掘土は、文化課がL地区調査に重点を置いている間に、公団と白石・才田共同企業体の配慮で、搬出できた。しかし、F地区・L地区共に補足的な調査が少しづつ残っていて、完了したのは7月下旬になってからである。この頃から8月下旬にかけては夏休みを利用した九州大学・鹿児島大学・別府大学の学生の援助も得ることができた。古墳10基と石棺墓3基などの調査は9月一杯まで要した。9月中旬からはD地区の調査に手を割くことになったが、10月にはE地区尾根の先端側で、古墳の下などから弥生時代住居跡4軒が確認された。これらの調査を含めてE地区の調査が完了したのは10月下旬である。

調査にあたっては、柿原地権者協議会の山下利雄委員長に、地元との調整などの種々の協力をいただき、作業員として参加された柿原・相違・堤地区の方々との協力を得た。

また、L地区の製鉄炉跡に関連して、九州大学文学部横山浩一教授、広島大学文学部瀬見浩教授、九州歴史資料館調査課石松好雄課長、学芸第二課横田義章技術室の指導・助言を得たほか、調査中には奈良県立橿原考古学研究所石野博信調査部長、北九州市教育文化事業団前田義人氏や中村勝氏らの助言を得ることができた。記して感謝したい。

昭和58年度と昭和59年度の調査関係者は下記のとおりである。

日本道路公団福岡建設局

局 長	今村 浩三	
総務部長	落合 一彦 (前任)	
	菱刈 庄二	安元 富次
管理課長	梅田 道人 (前任)	森 宏之
管理課長代理	野口 利夫 (前任)	佐伯 豊

日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所

所 長	乗松 紀三	
副 所 長	西田 功	
副所長 (技術担当)	中村 義治	
庶務課長	松下 幸男 (前任)	徳永 登
用地課長	岩下 剛	
工務課長	山口 宗雄 (前任)	・後藤二郎彦
小郡工事区工事長	友田 義則	
甘木工事区工事長	猪狩 宗雄	
朝倉工事区工事長	平沢 正 (前任)	小手川良和
杷木工事区工事長	前田 雄一 (前任)	山中 茂

福岡県教育委員会

総 括

教 育 長	友野 隆	
教育次長	安部 徹	
管理部長	伊藤 博之 (前任)	大鶴 英雄
文化課長	藤井 功 (前任)	前田 栄一
文化課長代理	中村 一世 (前任)	平 聖峰

庶 務

文化課庶務係長	松尾 満 (前任)	平 聖峰 (兼任)
文化課事務主査	長谷川伸弘	

調 査

文化課調査第二係長	栗原 和彦
文化課主任技師	木下 修
文化課主任技師	児玉 真一
文化課主任技師	新原 正典
文化課主任技師	中間 研志

文化課主任技師	佐々木隆彦		
文化課主任技師	小池 史哲		
文化課 技 師	伊崎 俊秋		
文化課文化財専門員	木村幾多郎		
文化課臨時職員	緒方 泉		
文化課臨時職員	日高 正幸		
文化課臨時職員	森山 栄一		
文化課臨時職員	宮田 浩之		
調査補助員	高田 一弘	武田 光正	佐土原逸男
	小田 和利	樋口 秀信	平嶋 文博

柿原E・F地区の調査で検出された遺構は次のとおりである。

	E地区	F地区	計
縄文・弥生時代の遺構			
住居跡	4	3	7
土 坑	1	5	6
木棺墓	—	14	14
石蓋土塚墓	—	4	4
石棺墓	—	1	1
甕棺墓	2	23	25
古墳時代以降の遺構			
横穴式石室	10	12	22
石棺墓	3	1	4
火葬墓	1	4	5

E・F地区の調査は、主として栗原・新原・小池・日高・高田・武田・小田が担当したが、伊崎・木村・佐土原の各氏の援助など、多くの方々の協力を受けて実施した。また、古墳の全景写真や空中写真の撮影には福島建設・フォトオオツカの協力を得た。

出土遺物の整理は、九州歴史資料館と文化課甘木発掘事務所でおこなったが、土器類の接合復原は文化課整理指導員岩瀬正信氏の、鉄製品の保存処理は九州歴史資料館技術補佐横田義章氏の、遺物写真撮影には同館技術主査石丸洋氏・藤美代子氏らの協力を得た。また、土器類の実測、遺構図の浄書には豊福弥生・鶴田佳子・塩足里美・原田和枝・松島邦子・速見公己・原富子・原かよ子の各氏の協力を得た。この他、発掘調査・整理作業を通じて多くの方々の有益な助言・協力を得ることができた。感謝に耐えない。

(小池)

II 位置と環境

柿原遺跡群は、福岡県甘木市大字柿原字若山、同字大谷と、大字板屋字城ノ下の一部にかけて所在する。

柿原E・F地区は、柿原採土場の八手のように広がる丘陵のうち東南部に延びる丘陵で、標高100mあたりから2つの尾根に分れて、先端の標高55m位で蓮池の水面に没している。この蓮池の中にせり出した2つの尾根の東側がE地区、西側がF地区である。この2つの尾根の先端側は日当りのよい斜面で、柿畑やブドウ畑として利用されていたが、尾根を横断するように設けられた農道から先端側は採土場用地から除外されている。E・F地区の調査範囲は、この農道から北西側で、標高95mの高さまで。字大谷1352-1、1352-2、1353、1366-1、1366-3にわたり、約9600m²である。

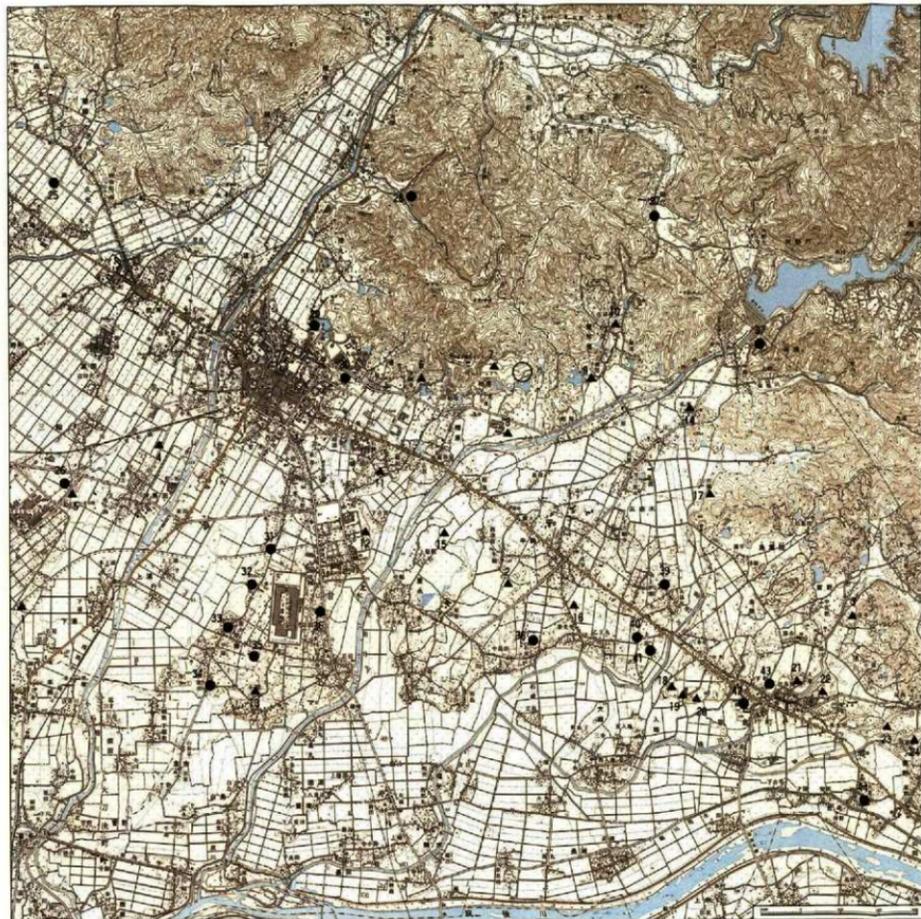
この調査区では、横穴式石室を主体部とする古墳が斜面を中心として点々と占地している。また、尾根の先端側緩斜面の部分では、弥生時代の壟槽墓・木棺墓などで構成される墓地や、住居跡なども検出された。

甘木・朝倉地方は、巨視的には朝倉山地と筑後川流域の平野部からなるが、朝倉山地の一部をなす大平山塊の東南裾部に柿原遺跡群が位置している。この山塊は、三郡変成岩類と総称される古世代末期頃の結晶片岩類の岩盤からなる地質で、緑色片岩・黒色片岩類が顕著だが、比較的軟質な黒色片岩類の風化部分も多い。

朝倉山地の降水量は年間を通じてやや多めである。雨水は、この山塊を浸蝕して八手のような尾根を残し、南西側の有明海方面に流下する河川を形成する。付近では、大平山塊の北側から西側をまわる小石原川、東側から南側へまわる佐田川、その東側では荷原川・桂川・妙見川などが流れる。いずれも筑後川に合流して肥沃な筑後平野を通過して有明海に注ぐ。これらの河川は山塊の風化土などの土砂を流して扇状地をつくるが、甘木市街から一木・小田につづく台地、三奈木から牛鶴・石成につづく台地、宮野・須川の台地をそれぞれ形成している。この地域の山麓・扇状台地部では、古くから遺跡・遺物が発見されており、著名な遺跡も少なくない。周辺の遺跡については、多くの紹介がある。特に、古墳時代を中心とした周辺遺跡の記述では、『柿原古墳群』Ⅰ・Ⅱをはじめ、いくつか詳しいものがある。ここでは、縄文・弥生時代の周辺遺跡について少し眺めてみることにしよう。

縄文時代の遺跡

甘木・朝倉地域では、旧石器時代・縄文時代を通じて、遺跡・遺物の発見例は他の時代のそれに比べると少ないが、近年の発掘調査の増加に伴い、副次的な出土などで縄文時代関係の資



- 1 立野遺跡 C・D地区
 - 2 碓の上遺跡
 - 3 長安寺横突遺跡
 - 4 馬田上川原遺跡
 - 5 馬田ひばりヶ丘遺跡
 - 6 堤大野遺跡
 - 7 柿原遺跡 1地区
 - 8 柿原野田遺跡
 - 9 飯屋田中原遺跡
 - 10 城原遺跡
 - 11 朝田高見遺跡
 - 12 屋水西原遺跡
 - 13 神藏遺跡
 - 14 三倉木小学校校原遺跡
 - 15 高原遺跡
 - 16 平道遺跡
 - 17 古閑山ノ鼻遺跡
 - 18 嵐坂町遺跡
 - 19 治部ノ上遺跡
 - 20 坂神寺遺跡
 - 21 下旗川別内遺跡
 - 22 井出野遺跡
 - 23 長島遺跡
 - 24 原ノ木遺跡
 - 25 粟田野田遺跡
 - 26 馬田上原遺跡
 - 27 田代片基遺跡
 - 28 下湖遺跡
 - 29 丸山公園遺跡
 - 30 宇原遺跡
 - 31 一本遺跡
 - 32 平塚大願寺遺跡
 - 33 粟山遺跡
 - 34 中寒水原散敷遺跡
 - 35 小田道遺跡
 - 36 小田東落遺跡
 - 37 荷原地沼遺跡
 - 38 石成遺跡
 - 39 久保島遺跡
 - 40 大原久保遺跡
 - 41 上ノ原遺跡
 - 42 堂ノ木遺跡
 - 43 下町遺跡
 - 44 古毛遺跡
- 柿原遺跡 E・F地区

第 2 図 周辺の地形と遺跡の分布 (1/50000)

料も結構増加してきている。

まず、旧石器時代末期から縄文時代草創期頃の遺物としては、小石原川右岸の立野遺跡C地区出土のスクレイパー1点(註1)と、牛鶴の塔ノ上遺跡出土の細石刃(註2)などがあり、桂川左岸の朝倉町長安寺鐘突遺跡出土の神子榮型石斧2点(註3)も知られている。

縄文時代早期になると、山形・格子目・楕円などの押型文土器の出土例が幾つかあり、柿原遺跡群I地区の緩斜面で結構まとまった出土をみている。小石原川流域右岸の、馬田上川原遺跡では山形押型文土器(註4)、馬田ひばりヶ丘遺跡では山形・格子目・楕円押型文土器、条痕文土器や黒曜石製の打製石鏃など(註5)が出土しており、立野遺跡C・D地区では山形押型文土器の出土や陥し穴と思われる土坑も発見されている(註6)。佐田川右岸の神蔵遺跡では山形・楕円押型文土器など(註7)が出土し、山麓先端部の板屋田中原遺跡では楕円押型文土器、黒曜石・安山岩製の石槍など(註8)が出土している。佐田川左岸では、三奈木小学校校庭遺跡から山形・楕円押型文土器が(註8)、塔ノ上遺跡からは山形押型文土器が出土し、荷原川右岸に近い中道遺跡からも山形・楕円押型文土器の出土や陥し穴と思われる土坑の発見例(註9)がある。荷原川左岸の治部ノ上遺跡でも押型文土器・石槍などの出土(註9)があり、妙見川右岸の長島遺跡、左岸の原ノ東遺跡でも押型文土器の出土がある。今回報告の柿原遺跡E・F地区でも該期の遺物出土をみるが、九州横断自動車遺関係の調査によって確認された例が多い。

縄文時代前期の資料としては、柿原野田遺跡出土の管畑式土器がよく知られている。直径80cm程度の不整形土器から出土したが、この遺跡では他に葬式土器なども出土(註10)している。また、馬田上川原遺跡、柿原遺跡E・F地区や、荷原川左岸の台地先端部に占拠する狐塚南遺跡、座禪寺遺跡(註9)、山麓部にある古熊山ノ鼻遺跡(註8)からも前期の遺物出土がある。

縄文時代中期の資料は、今のところ発見例が皆無である。

縄文時代後期では、後期中葉の北久根山式期の土器が桂川右岸の下須川別所遺跡から出土している。磨縄縄文手法をとる例のほか、アナグラ属貝殻腹縁を用いた条痕文の土器も含まれており、打欠石鏃もこの時期のものであろう(註8)。後期後半の西平式土器は長島遺跡から出土しており、板屋田中原遺跡などにも後期の遺物が知られている。

縄文時代晩期では、前半から中頃の土器・石器類が、佐田川左岸の高原遺跡(註9)や、治部ノ上遺跡、柿原遺跡I地区などからまとまって出土している。この他、馬田上川原遺跡出土の扁平打製石斧や、中道遺跡出土の異形石器も該期の可能性が高い。晩期後半から末期の資料は馬田ひばりヶ丘遺跡に隣接する馬田上原遺跡の夜白式土器を用いた甕棺墓、立野遺跡C地区の夜白式土器を伴う土壇や、長島遺跡・原ノ東遺跡の甕棺墓などが知られている。この他に、佐田川右岸の屋水西原遺跡・頓田高見遺跡、山麓部の堤大岩遺跡・城原遺跡、桂川右岸の井手

野遺跡などから出土した土器・石器類(註8)も晩期の可能性があろう。また、柿原遺跡E・F地区からも晩期の遺物出土がある。なお、最近の編年研究では、北部九州の夜白式土器段階を弥生時代の初頭期に置く見方(註11)もある。

弥生時代の遺跡

この地域の弥生時代遺物については、既に明治年間には知られていたようだが、大正年間には平塚栗山遺跡のから貝銅や鉄戈の出土があり『考古学雑誌』などに発表されて広く知られるところとなっている(註12)。また、銅戈・銅矛などの出土も比較的早くから知られていた。加えて近年の発掘調査はより広い面積が対象になり、住居跡などの発見が相次いでおり、群の構成なども理解されるようになってきている。

小石原川右岸の馬田上川原遺跡や馬田上原遺跡は、弥生時代中期中頃から後期にかけての壘棺墓を中心とした墓地だが、馬田上原遺跡の資料中には、弥生時代初頭期ともされる夜白式土器を用いた壘棺墓や、2本の有柄石剣の出土例がある。この他に弥生時代初頭期の可能性のあるものとして、小石原川左岸の中寒水出土の有柄柄銅剣があり、大陸から伝わったものとされている(註13)。この後の弥生時代前期のまとまった資料は、この地域ではみられず、前期末あたりまでは空白の状態である。

弥生時代前期末から中期初頭頃の遺跡としては、佐田川右岸の小田集落遺跡、荷原川右岸の上ノ原遺跡や、治部ノ上遺跡、原ノ東遺跡があり、円形堅穴住居跡・貯蔵穴などが発見されている。この地域での堅穴住居跡は、円形住居跡から中期には楕円形・隅丸方形の住居跡が現れるようになり、後期には方形の住居跡へと変遷するようである。

小田集落遺跡では、佐田川右岸の台地縁辺に沿って集落が営まれていたと考えられるが、中期中頃・後期中頃・後期末頃の住居跡がある(註14)。また、この台地の西側縁辺に占地する一本遺跡や平塚大願寺遺跡にも中期前半から中頃の住居跡が発見されている(註15)。

後期の住居跡は、小田集落遺跡の西南方に立地する小田遺跡(註16)や、高原遺跡、中道遺跡、上ノ原遺跡、狐塚南遺跡、治部ノ上遺跡、長島遺跡などから発見されている。

一方、墓地では、大平山塊麓部の宗原遺跡で中期初頭から前半の壘棺墓が発見されている。合口壘棺の上蓋の横に緑泥片岩板石を2・3段小口積みして上蓋をL字形に囲む施設が発見され(註17)ていて興味深い。荷原川右岸の大庭久保遺跡、上ノ原遺跡、久保島遺跡でもこの時期の墓地が発見されている。大庭久保遺跡では木棺墓・石蓋土墳墓・壘棺墓・石棺墓など、後期前半から後半の例を含めて120基余りの墓が確認され、小形仿製鏡や磨製石剣なども発見された。中期前半から中頃の例は上ノ原遺跡、原ノ東遺跡などから、中期後半の例は栗山遺跡などにある。後期では大庭久保遺跡などの例もあるが、石棺墓・石蓋土墳墓などの後期末頃にまで至る墓地群は、大平山塊麓部の丸山公園遺跡・宗原遺跡、台地縁辺部の大願寺遺跡・狐塚南遺跡、堂ノ本遺跡・下町遺跡(註15)などにみられる。

金属製品の出土例では、中期後半の粟山遺跡壙棺墓群から前漢鏡や鉄戈が出土しているが、大平山塊麓部で佐田川右岸の小さな谷に臨む板屋田中原遺跡から単独埋納された中細銅戈2本が発見され、中期後半頃のものとしてされている。また、後期前半頃と考えられる中広銅戈は、佐田川と荷原川に挟まれる山城裾部の荷原池辺遺跡に埋納された3本が発見されており、筑後川と妙見川に挟まれる平野部微高地の古毛遺跡から1本単独に出土している。同じく後期前半頃と考えられる中広銅矛は小石原川左岸で大平山塊の小さな谷に面した下測遺跡から3本まとまって出土している(註15)。このように単独出土の青銅製品が、古毛の例を除けば、地理的にみて、直接平野部に臨まず小さな谷に面した場所から出土していることは、祭祀の性格を考える上で重要な要素であろう。最近話題になった鳥根県荒神谷遺跡の多量埋納の例をみても、同様な占地であることも関連があろう。

集落・墓地の占地では、まだ充分に集落構造が把握できる状況ではないが、台地縁辺部の占地が多く、扇状台地の中央部に占地がみられないことも興味深い。今後発見されないとは断言できないにしても、扇状台地の伏流水が湧き出る水源が至近にあるような場所に集落が営み易いのに対し、水源に乏しい扇状台地中央部を避けたものと解したい。墓地は、必ずしもこのような制約を受けないものの、台地縁辺でも比高差のある段丘崖に近接するか、山麓部でも先端部に占地する傾向がみられる。

(小池)

註1 福岡県教育委員会 1986 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-8-

註2 福岡県教育委員会 1987 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-9-

註3 横田義章 1981 いわゆる「埴子築型石斧」の資料 九州歴史資料館研究論叢 7

註4 甘木市教育委員会 1982 上川原遺跡 甘木市文化財調査報告 第13集

註5 福岡県立朝倉高等学校史学部 1969 埋もれていた朝倉文化

註6 福岡県教育委員会 1983 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-2-および註1 前掲書

註7 甘木市教育委員会 1978 神蔵古墳 甘木市文化財調査報告 第3集

註8 甘木市役所 1982・1984 甘木市史 上巻 甘木市史資料 考古篇

註9 福岡県教育委員会が九州横断自動車道建設に先立ち発掘調査を実施。各調査担当者から御教示を得た。

註10 神原野田遺跡調査会 1976 神原野田遺跡

註11 橋口達也 1985 日本における稲作の開始と発展 今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第13集 福岡県教育委員会に所収

註12 中山平次郎 1925 筑前朝倉郡福田村平塚宇栗山新発見の壙棺内遺物 考古学雑誌15-4

註13 甘木市役所 1982 甘木市史 上巻

註14 甘木市教育委員会 1974 小田集落遺跡 甘木市文化財調査報告 第2集

註15 註5 前掲書 および註8 前掲書

註16 甘木市教育委員会 1981 小田遺跡 甘木市文化財調査報告 第8集

Ⅲ 縄文・弥生時代の遺構と遺物

柿原E・F地区では縄文時代・弥生時代の遺構として、次の種類・員数を検出した。

	E地区	F地区	計
住居跡	4	3	7
土坑	1	5	6
木棺墓	—	14	14
石葺土墳墓	—	4	4
石棺墓	—	1	1
甕棺墓	2	23	25

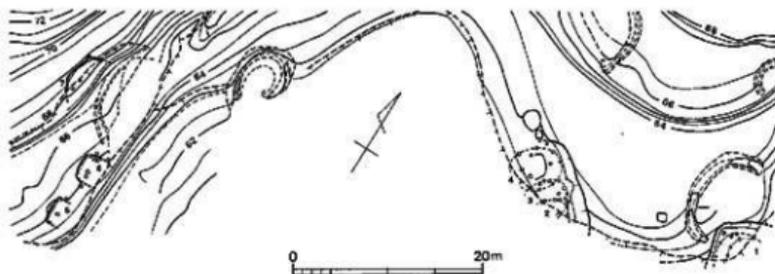
このうち、縄文時代に属す遺構と思われるものは土坑のみで、他はすべて弥生時代に属すであろう。住居跡はE・F両地区共にみられるが、墓地を構成する遺構はほとんどF地区先端部から検出されたものである。

なお、便宜上住居跡・土坑はE地区から遺構番号を付し、甕棺墓はF地区から遺構番号を付して、統けて通し番号にした。

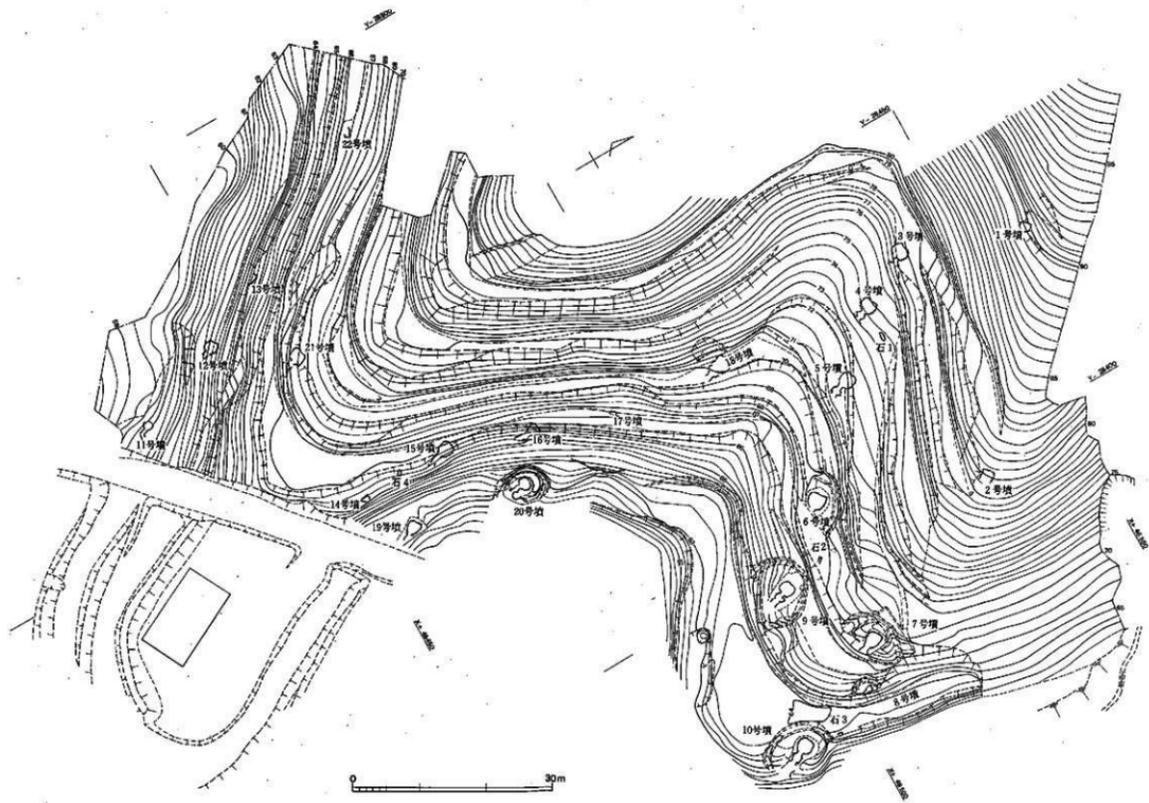
(小池)

1. 住居跡

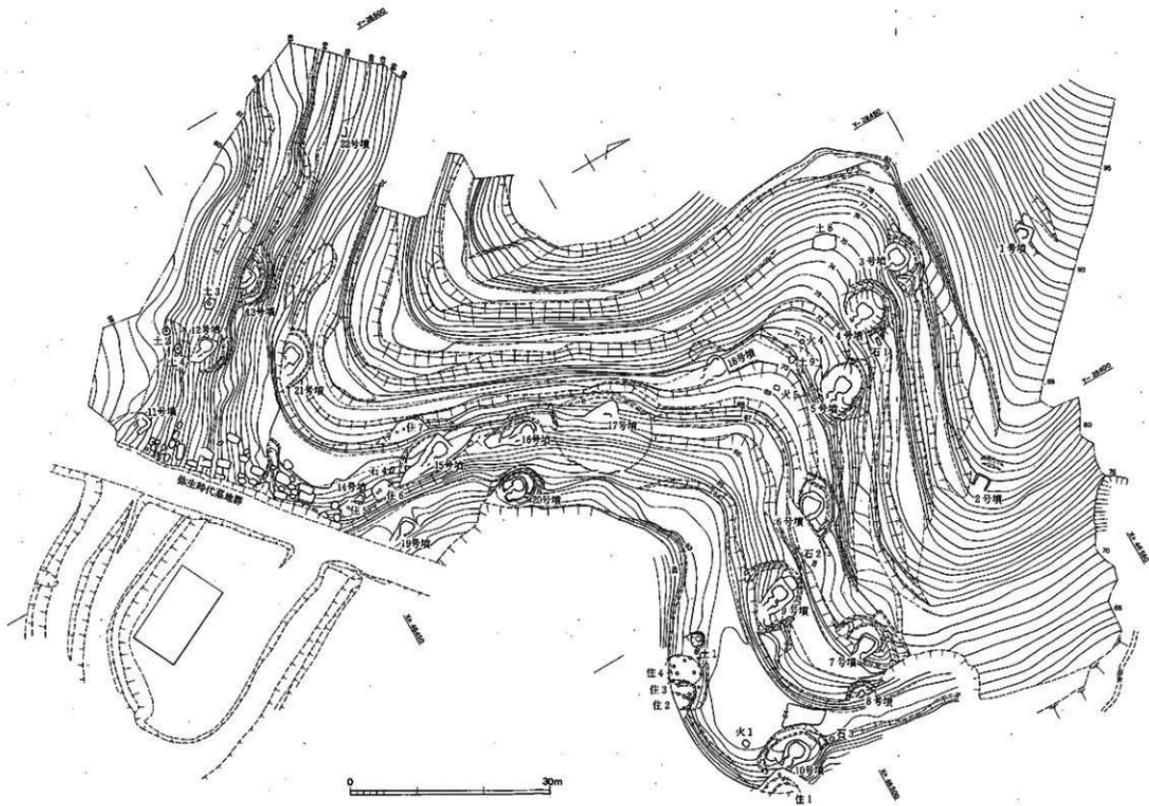
1号住居跡 (図版4, 第6図)



第5図 E・F地区住居跡配置図 (1/600)



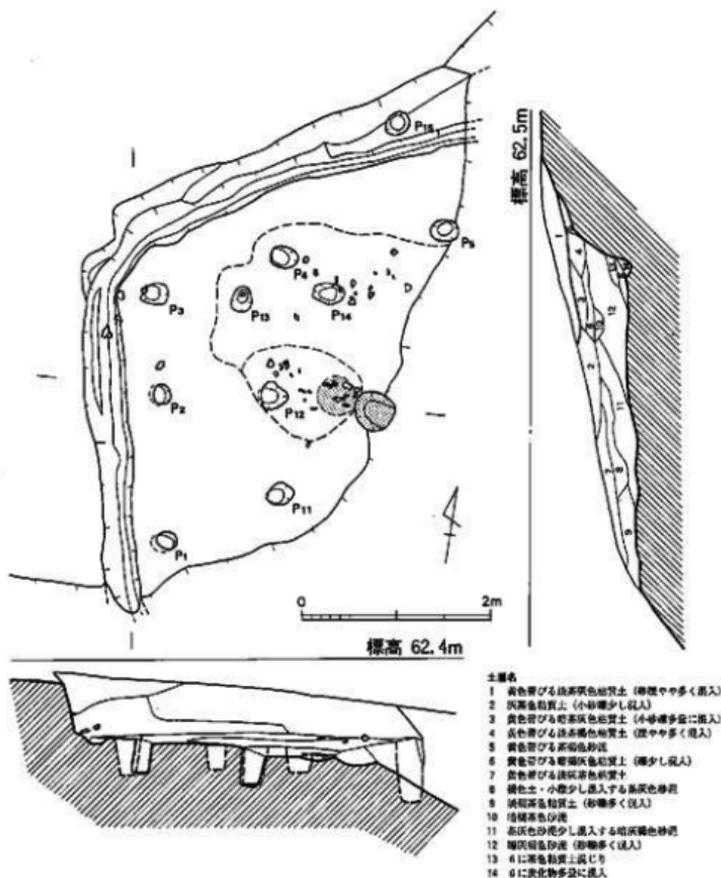
第 3 图 栎原 E·F 地区地形测量图 (1/600)



第 4 圖 韩国 F · F 地区遺構配置圖 (1/600)

10号墳土層図作成時に弥生土器を包含する落ち込みが確認され、葦石や墳丘等を除去した後に住居の平面プランを検出した。農道及び谷部の侵食等で大半以上喪失して全貌は不明ながら、東西辺長4m、南北辺長4.1mが残在する。北壁部がやや膨張りをなすが、竪穴部が略方形の平面形態を呈する住居跡である。最大壁高65cmを測り、急勾配の壁面をなす。

上層の埴土は地山と大差なく、下層において灰・褐色土が多く混入する。土層図①は10号墳



第6図 1号住居跡実測図 (1/60)

盛土の一部であり、2-14が本住居に流入した埋土である。6号住居で確認された整体に関連する遺構は認められなかったが、途切れることなく連なり、周溝内には多量の炭化物が確認された。なお床面上には炭化物がさほど認められず、本住居が焼失家屋であると断定する迄には至っていない。斯る状況で床面掘削り下げを行なったが、床面上には柱穴10個と炉址2基及び北壁周溝外にテラス部が検出された。柱穴の配列や上記の状況より建て替えがなされていることが判明した。

建て替えた住居には柱穴P₁~P₅と西側の炉址が伴う。周溝が巡る範囲が竪穴部と考えられ、平面形態・規模共に前述と略同じとなる。柱穴間P₁~P₂~P₃~P₄~P₅は1.57m・1.08m・1.42m・1.75mを計測し、略壁面に平行して在する。炉址は径41cmの円形を呈し素掘りである。炉址周辺部は浅い窪みとなり土器片が多数散布している。床面は若干の凹凸が在するもの略水平に造られている。

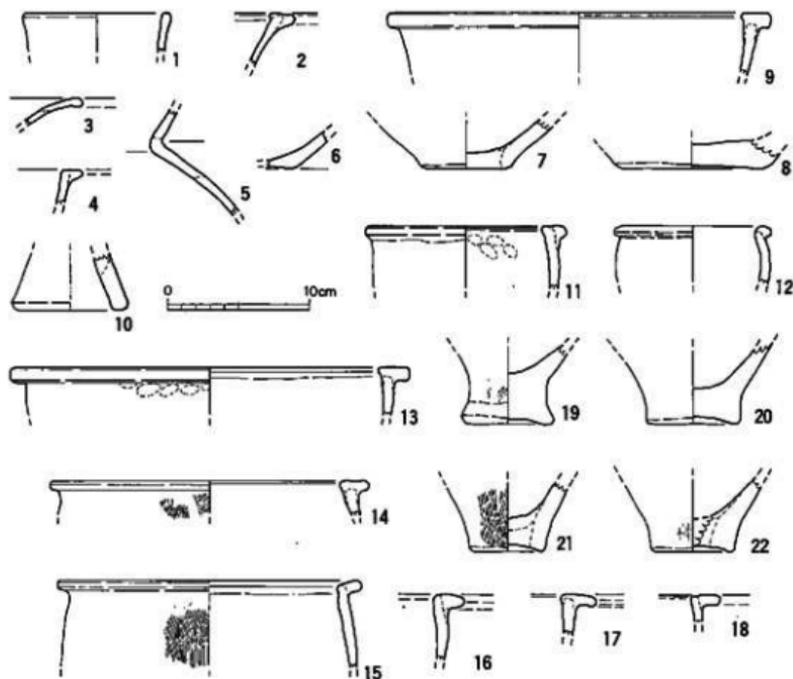
以前の住居には柱穴P₁₁~P₁₄と東側の炉址が伴う。竪穴部はテラス部が北壁側となり、西壁側は新住居に切られているものの柱穴P₁₁~P₁₄列の僅か外方になると推定される。平面形態は新住居と同じ方形になろう。柱穴間P₁₁~P₁₂~P₁₃~P₁₄は1.05m・1.1m・0.94mを計測し、配列も新住居と略同じ様相を呈している。柱穴P₁₆は5・6号住居に見られる竪穴部外柱穴と同様の機能を有すると考えられる支柱であろうか。炉址は素掘りであり、炭化物が多量に認められた。

時期は新旧共に大差なく新住居が切頭に近い中期前葉に、古住居はそれよりも若干遅ると考えられる。

土器(図版9, 第7図) 1は埋土下層より出土した直口壺の口縁部で復原口径10.4cmを測る。内面はナデ調整を施すが外面は不明。焼成は良好。胎土は細砂粒を若干含む。淡灰褐色を呈す。2は炉址周辺部より出土した鋤先状口縁を有する壺形土器の小破片である。内外面共に風化し調整は不明。胎土は細砂粒を多く含む、肌色を呈す。3も炉址周辺部床面上より出土し、大きく外反する壺の口縁部片である。調整は不明で、若干の雲母と細砂粒をやや多く含む胎土である。暗褐色を呈する。5は壺頸部片で、北西部隅床面上より出土。調整は不明。胎土は雲母を僅かに含む。焼成は不良。赤っぽい淡橙色を呈す。6-8は壺底部片で、6と8が僅かな上げ底状をなす。調整は内外面共にナデを施す。胎土は砂粒を多く含む。7は底径6.5cmを測り、淡黄灰色を呈す。8は底径11.2cmを測り、赤褐色を呈す。

4と9は鉢であろうか。4は口縁外面に粘土紐を貼付し、内外面共にナデ調整を行なう。細砂粒を若干含む胎土で、茶赤色を呈す。南側埋土下層より出土。9は窪み内の北側床面上より出土し、上端部に粘土紐を貼付した口縁部を有す。極めて多量の砂粒を含む胎土で、淡黄灰色を呈す。復原口径26.8cmを測る。焼成は良好。

10は炉址周辺部床面上より出土した。器台形土器の下半部であろうか。内面はナデ調整を施す



第 7 図 1号住居跡出土土器実測図 (1/4)

が、外面は風化して不明。赤っぽい黄褐色を呈し、復原底径8.2cmを測る。

11～22は甕である。11と12は粘土紐を貼付した口縁部より少し腰らむ胴部へと続く小型品である。11は内面ナデ調整・外面は風化して不明である。内面口縁部下に指頭痕が認められる。胎土は細砂粒を多く含み、雲母も少し含まれている。淡黄灰色を呈し、復原口径14cmを測る。12は内外面共にナデ調整を施し、口縁端部は丸味を呈す。胎土は細砂粒を多く含み、黄赤色を呈す。焼成は軟質。11は埋土上層より、12は北部埋土下層より出土した。13はP₄内出土で、逆L字状口縁を有し垂直な胴部へ続く。内外面共にナデ調整を施し、外面口縁部下に指頭痕が認められる。胎土は細砂粒を多く含み、金雲母・角閃石を若干含む。赤褐色を呈す。復原口径28cmを測る。14も逆L字状口縁を有し、やや外反する胴部に続く。内外面共に風化しているが外面にハケ目調整が認められる。胎土は細砂粒を若干含み、淡茶灰色を呈す。復原口径22.

4cmを測り、南側埋土下層より出土。15は大きく内傾する口縁部を有し、僅かに外反する胴部へ続く。外面には明瞭なハケ目調整が認められ、口縁部と内面はナデ調整を施す。胎土は粗砂粒を多く含み、赤橙色を呈す。復原口径21.5cmを測る。16～18は逆L字状口縁を有する小破片で、17はやや外傾している。胎土は細砂粒を多く含み、内面にナデ調整が施されている。17が炉址床面上出土、他は埋土下層より出土した。19～22は上げ底状の底部片であり、19と22が炉址周辺床面、20が北西部床面、21が北部埋土上層より出土した。21は明瞭なハケ目が、19と22は僅かなハケ目調整が認められ、内面はナデ調整を施す。胎土は砂粒を多く含み、19には委母が若干含まれている。底径は19が6.4cm、20が6.6cm、21が5.3cm、22が5.9cmを測る。

石器（図版9、第13図）1と3は埋土上層より、2は床面上より出土した。1は緑泥片岩製で完形の紡錘車である。最大径3.4cmの角張った円形を呈し、最大0.6cmの厚みを有する。周縁端部は僅かに剥落するものの敲打調整後研磨している。有孔部も同様の調整が行なわれている。12.8gを測る。2は花崗岩質砂岩の砥石片である。二面に使用痕が認められ、229gを測る。3は玄武岩製の太形磨製石斧で、刃部を欠損する。頂部に敲打調整痕が認められる。現存長14.2cm・幅7.8cm・厚さ4.4cm・重量829gを測る。

植物種子（図版9）炉址周辺よりドングリの実5個が出土した。長径1.0～1.15cm、短径0.8～0.95cmを測る。

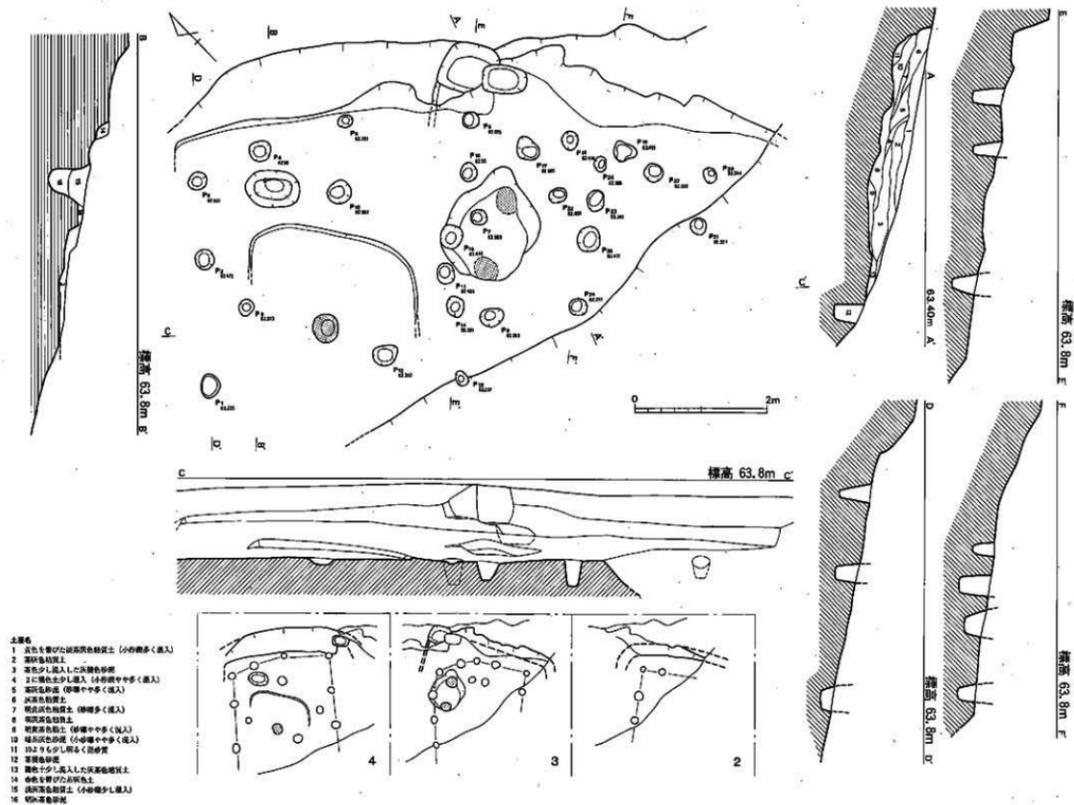
2～4号住居跡

概要

1号住居西方約15mに位置し、略同標高で営まれている住居群である。遺構検出時に多量の弥生土器片に混じり須恵器・土師器片が散布していた。平面形態は不整形を呈し、上記の如く土器が混在した状況より当初は土壌が落ち込みであろうと想定した。斯る状況を解決するためにA-A'の試掘坑を設定し土層観察を行なったが、性格を断定する迄に至らなかった。次にA-A'を東西に分け、更にA-A'の略中央部で南北の四グリッドに分割し漸次掘り下げることにした。上面より10～15cm下げると須恵器・土師器片は全く出土しなくなった。この時点においても埋土とさき程変わらぬ色調と土質であり、住居群の切り合い関係を識別することは出来なかった。

更に掘り下げを行ない床面迄到達するに至って初めて多数の柱穴・炉址・小土坑等が検出され住居群であったと判明した。検出した諸々の遺構より3棟の住居跡であったと判断し、第8図下方の略図の如くなると考えられる。なお北西・南西グリッド出土品の大半以上が4号住居に帰属すると考えられ、このことより2・3号住居が4号住居より先行することになろう。

2号住居跡（図版5-2・6-1、第8図）畑の開墾等で大半以上を喪失し、切り合い関係



第 8 图 纳屋 E·F 地区 2~4 号住居跡平面图 (1/60)

が不明であったため規模は不明である。竪穴部の平面形態は略図の如く方形を呈すると考えられる。柱穴は4本のみが残し、柱穴間 $P_{24} \sim P_{25} \sim P_{26} \sim P_{27}$ はそれぞれ $1.03\text{m} \cdot 1.14\text{m} \cdot 0.8\text{m}$ を測る。床面は若干の高低差が生じているものの、5・6号住居に認められた貼床を施していた可能性も在す。その他の付属施設は何ら在しない。

3号住居跡 (図版5-1・5-2, 第8図)

2号住居と同じ理由で約半分程を喪失していると考えられるが正確な規模は計測出来ない。平面形態は2号住居と同様方形の竪穴部を呈すると想定される。本住居に伴う遺構は、11個の柱穴と北東部隅の方形を呈する小土坑及び2ヶ所に炭化物が散布する浅い窪みである。柱穴配置は $P_{13} \sim P_{21}$ が方形になると推定され、柱穴 $P_{13} \sim P_{14} \sim P_{15} \sim P_{16} \sim P_{17} \sim P_{18} \sim P_{19} \sim P_{20} \sim P_{21}$ 間はそれぞれ $1.1\text{m} \cdot 1.05\text{m} \cdot 1.0\text{m} \cdot 1.0\text{m} \cdot 0.65\text{m} \cdot 0.83\text{m} \cdot 1.35\text{m} \cdot 0.76\text{m}$ を計測する。なお柱穴 $P_{13} \sim P_{16}$ と $P_{19} \sim P_{20}$ 間は 3.05m と 3.58m を測る。これら柱穴列 $P_{19} \sim P_{20}$ 間の略中央内側に柱穴 P_{22} と P_{23} が 0.58m 離れて在す。この柱穴2個は棟支え柱の片方になると想定されるが、全貌不明ゆえに差測の域を出ない。

炉址は検出されなかったが、浅い窪み内に炭化物が散布しておりこの近辺に在したことが窺える。北東部隅に小土坑が在する。平面形態は方形を呈し、最大辺長 0.78m 、最大擁高 0.6m を測る。性格は4号住居にも検出されているが不明である。

4号住居跡 (図版5-1・6-2, 第8図)

住居群の西端に位置し最も新しい住居跡と考えられる。約1/3が喪失していると推定され、竪穴部の規模は一辺約 5.5m 程で平面形態方形を呈すると考えられる。竪穴部の壁高及び壁面の形状も正確とは言い難いけれども、約 65cm 程の壁高を有したと思われる。

本住居に伴う遺構は、12個の柱穴と炉址1基及び小土坑2基である。柱穴配置は $P_1 \sim P_8$ が平面形態略方形を呈し、柱穴 $P_1 \sim P_2 \sim P_3 \sim P_4 \sim P_5 \sim P_6 \sim P_7 \sim P_8$ 間はそれぞれ $1.86\text{m} \cdot 1.16\text{m} \cdot 1.07\text{m} \cdot 1.37\text{m} \cdot 1.86\text{m} \cdot 1.45\text{m} \cdot 1.48\text{m}$ を測る。なお $P_1 \sim P_3 \cdot P_3 \sim P_6 \cdot P_6 \sim P_8$ 間は $3.04\text{m} \cdot 4.23\text{m} \cdot 2.92\text{m}$ を測る。これら柱穴列の内側に $P_9 \sim P_{12}$ の4本が平面形態菱形を呈して在す。 $P_9 \sim P_{10} \sim P_{11} \sim P_{12} \sim P_9$ 間は $2.20\text{m} \cdot 1.83\text{m} \cdot 2.02\text{m} \cdot 2.23\text{m}$ を測り、また $P_9 \sim P_{11} \cdot P_{10} \sim P_{12}$ 間は $3.05\text{m} \cdot 2.52\text{m}$ を測る。どの様な上屋構造を構成し、これら4本の柱穴が如何なる機能を果たしていたかは定でない。しかし特異な形態を有しており別取を設け若干考えてみることにしたい。上記4本の柱穴内に炉址と周辺部より1段浅くなる床面が在する。炉址は茶振りであるが、床面は著しく焼土化をなし多量の炭化物が認められた。この炉址を中心として1段浅くなる床面が在したと考えられるが、南側の範囲は把握出来なかった。確認面で1辺 2.5m 程と最大高低差 10cm を測り、炉址を中心に平面形態略方形を呈す居間の空間であったろうか。

北東部隅と P_4 付近に平面形態隅丸長方形を呈する小土坑が在する。北東部隅の土坑は長軸 67cm 、短軸 40cm 、深さ 28cm を測り、他方は長軸 82cm 、短軸 53cm 、深さ 54cm を測る。性格は

3号住居の土壌と同じく不明である。

2～4号住居跡出土遺物（第9・10図）

前述した通り切り合い関係や住居範囲を正確に把握出来なかつたので、個々の遺物についての確な出自を解明する迄には至っていない。けれども北西・南西両グリッドよりの出土品の大半以上が略同時期に比定出来る。かつ東部両グリッド出土品は上記より遅る時期の土器しか含まれていない。このことより4号住居が最も新しいと考えられる。

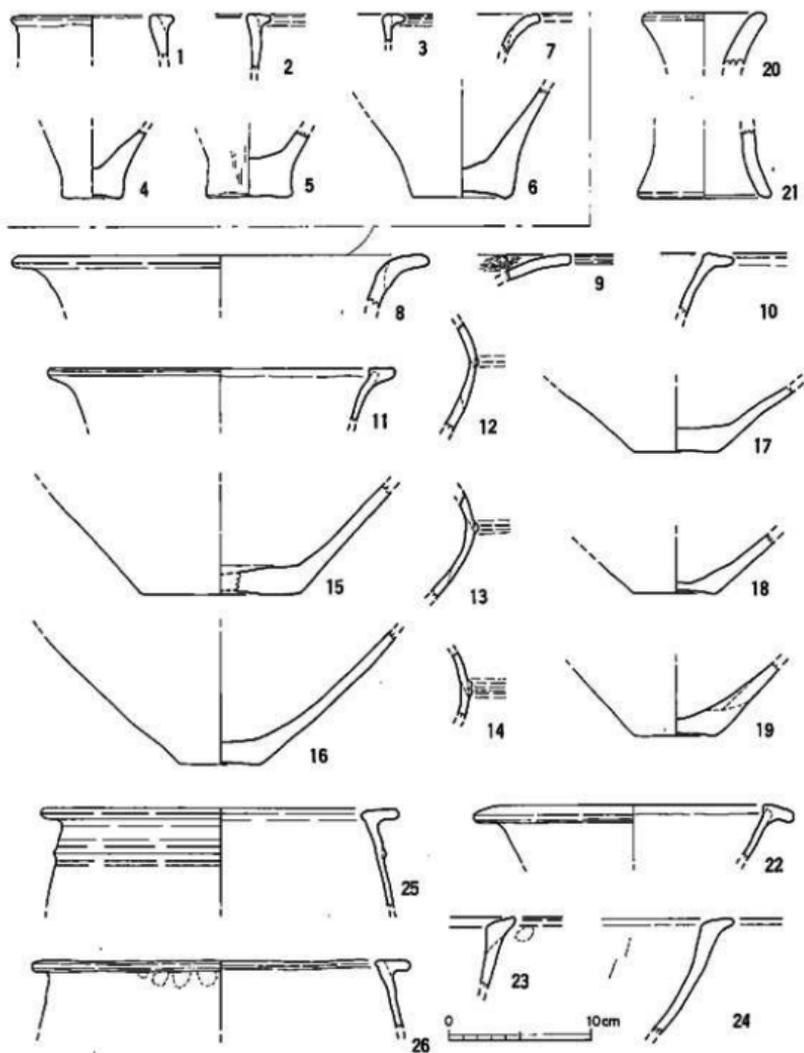
上記理由より埋土中品は西側両グリッド出土品を4号住居に、東側両グリッド出土品を2・3号住居に便宜上帰属するであろうと考え図示する次第である。

2号住居の土器 1は柱穴P₂₄内より出土し、唯一出自明白な小型の甕である。粘土紐を外表面端部に貼付し、外方にあまり肥大せず丸味を有する口縁部をなす。内外面共に風化して調整は不明。胎土は細砂粒をやや多く含む。復原口径11.2cmを測り、茶褐色を呈す。焼成は良好。

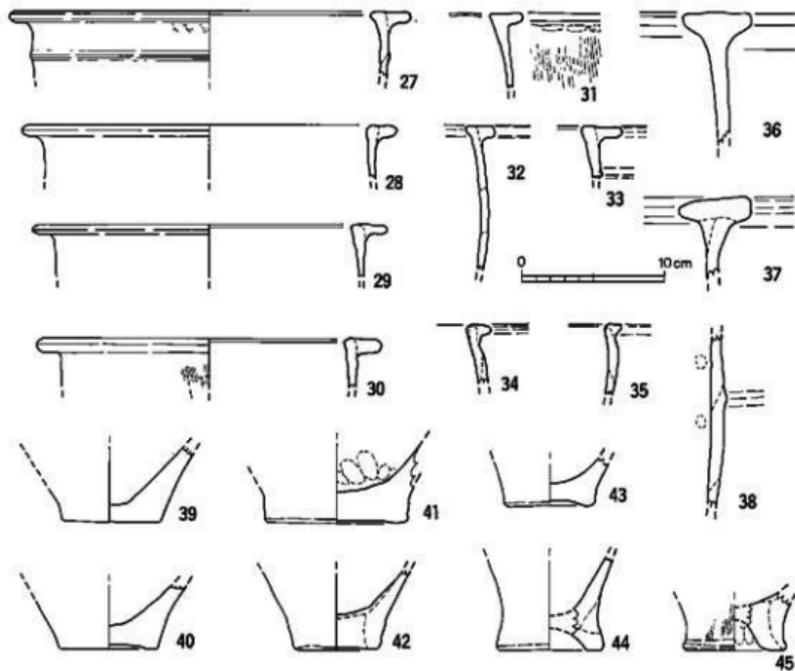
3号住居の土器 4は柱穴P₂₁より出土し、若干上げ底状を呈す甕底部片である。焼成は良好であり、内外面の調整は不明。胎土は砂粒を多く含む、茶灰色を呈す。底径4.3cmを測る。

2・3号住居の土器 5と6が埋土上層より、2と3と7が埋土下層より出土した。2と3は1と同タイプの口縁部片ではあるが1より若干肥大する。内外共にナデ調整を施す。胎土は粗砂粒を多く含む。2が茶褐色、3が赤褐色を呈す。5は平底、6は少し上げ底の甕底部片である。調整は不明だが5の外面にハケ目が僅かに認められる。胎土は粗砂粒を多く含む。5が赤褐色を、6が黄褐色を呈す。底径は5が6.1cm、6が7.2cmを測る。7はやや大きく外反する壺口縁部片で、調整は不明。胎土は粗砂粒を若干含む。色調は茶褐色を呈す。焼成は2と6が良好。

4号住居の土器 8～19は壺形土器である。8はやや外反し肉厚な口縁部片で、調整は内外面共に不明。胎土は雲母・角閃石が少し含まれ細砂粒を多く含む。赤褐色を呈す。復原口径29.3cmを測る。9は薄手のやや大きく外反する口縁部片である。内面にハケ目調整が認められる。胎土は角閃石を含むが砂粒をあまり含まない。肌色を呈し、焼成は良好である。10と11は初原的な鋤先状口縁を有す。調整は内外面共に不明。10は細砂粒を多く金雲母を若干含む。内面と口縁の一部が黒色を、他は黄褐色を呈す。焼成は良好。11は細砂粒を多く含む、淡黄灰色を呈す。復原口径24.2cmを測る。12～14は胴部片である。12と13が三角凸帯を14がM字状凸帯を貼付されている。15～19は底部片である。16と17が平底で、他は僅かな上げ底状を呈す。調整は内外面共に風化して不明だが、僅かにナデ調整が認められる。胎土は細砂粒を多く含む、15に角閃石、16・18・19に金雲母が含まれる。15と16が黄褐色、17と18が橙褐色、19が淡黄灰色を呈す。焼成は全て良好。底径は15が11cm、16が5.5cm、17が5.7cm、18が5.6cm、19が5.



第 9 圖 2~4号住居跡山土土器実測図① (1/4)



第 10 図 2～4号住居跡出土土器実測図② (1/4)

5cmを測る。

20と21は同一固体と考えられる器台形土器である。胎土は細砂粒を多く金雲母を若干含む。調整は不明で、橙褐色を呈す。口径8.6cm、底径9.2cmを測る。

22は高杯の杯部であろうか。外傾する口縁部より僅かに内彎する胴部へ続く。調整は不明。胎土は細砂粒を多く含む、内黒で外面黄褐色を呈す。復原口径22.4cmを測る。

23と24は鉢であろう。僅かに外方へ伸展する口縁部を有し、若干丸味を有す胴部へと続く。23は内外面共にナア調整、外面口縁部に指頸痕が認められる。胎土は細砂粒をやや多く含む。淡茶灰色を呈す。焼成は良好。24も内外共にナア調整で、内面には工具の押圧痕が認められる。胎土は角閃石を含む。

25～33は逆L字状口縁を有す甕である。胎土は略同じで細砂粒を多く含む。25・27と33は口縁部下に三角凸帯が1条廻る。調整は27・30と31にハケ目が外面に認められるが、他は不明で

ある。26と30に外面口縁部下に指頭痕も認められた。25は橙褐色を呈し、復原口径25cmを測る。焼成は良好。26は赤褐色を呈し、復原口径26.5cmを測る。焼成は良好。27は淡赤褐色を呈し、復原口径28cmを測る。28も淡赤褐色を呈し、復原口径26.2cmを測る。29は黄色い赤褐色を呈し、復原口径24.6cmを測る。30も淡赤褐色を呈し、復原口径24.2cmを測る。31は橙褐色、32と33は赤褐色を呈す。34と35は粘土紐を貼付し僅かに肥大する口縁部を有する壺の小片である。34は調整不明で、橙褐色を呈す。35は内外面共にナデ調整で、金雲母が若干含まれる。褐灰色を呈す。34の外面に煤の付着が認められる。36と37はT字状口縁を有する大型壺であろう。調整は不明。胎土は粗砂粒を多く含み、36には金雲母が認められる。36が淡茶褐色、37が淡黄褐色を呈す。焼成は良好。38は大型壺の肩部片であろう。略直をなし三角凸帯を貼付する。36と胎土、色調が略同じである。39～45は寛底部片である。39は柱穴P₁₁内より出土した平底である。調整は不明。細砂粒を多く金雲母を若干含む。内面灰褐色、外面うす橙色を呈す。底径6.8cmを測る。40～43は少し上げ底状をなす。調整は外面が不明で、内面はナデを施す。41の内面に指頭痕が認められる。胎土は砂粒を多く含み、40に金雲母が若干含まれている。40は橙褐色を呈し、底径6.9cmを測る。41は淡赤褐色を呈し、底径10.1cmを測る。42は赤褐色を呈し、底径6.3cmを測る。43も淡赤褐色を呈し、底径6.4cmを測る。44と45は上げ底をなす。45に僅かなハケ目と指頭痕が認められる。44に金雲母・角閃石が含まれる。44は赤褐色を呈し、底径7.5cmを測る。45は赤褐色を呈し、底径6.8cmを測る。

39以外は埋土中品である。

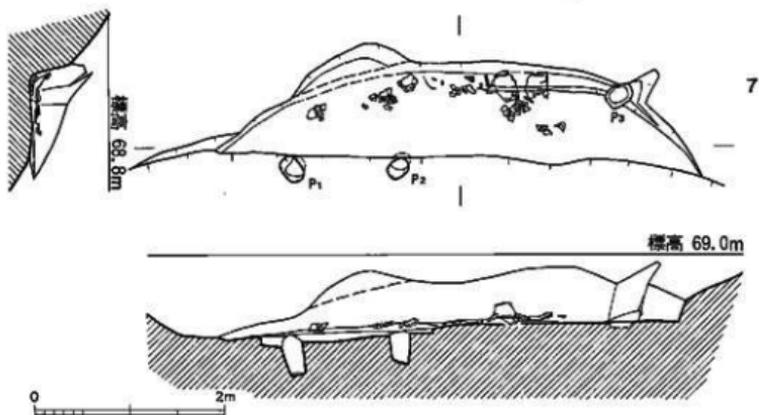
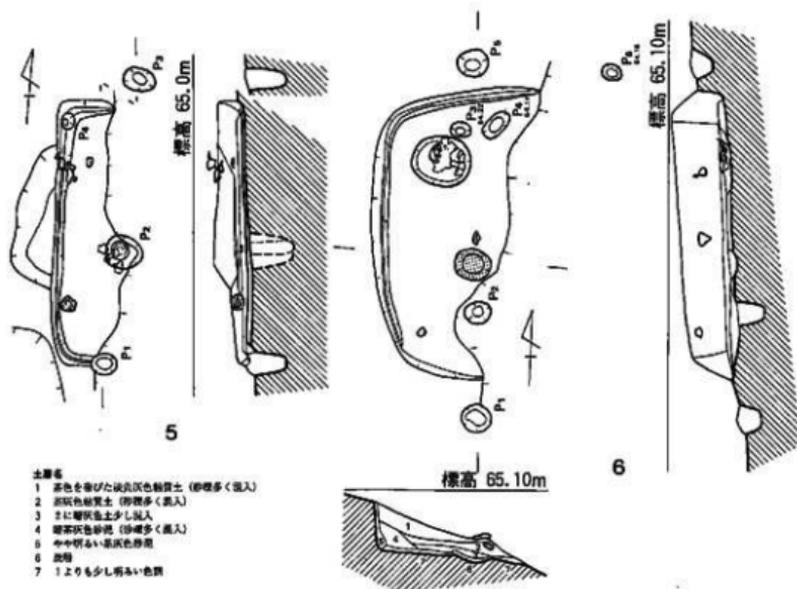
石器(図版9、第13図)4は砂岩製の砥石片である。4面に研ぎ痕が認められる。5は頁岩製の挟入柱状片刃石斧で、刃部を欠損する。残在長15.4cm、厚さ3.3cm、最大幅3.85cm、重さ395gを計測する。

2～4号住居の時期について

4号住居には中期初頭の土器も若干含まれているが、数量的にも中期前葉の土器が多くこの時期が比定出来るよう。2・3号住居とも中期初頭に比定出来るが、十分な資料もないので先後関係を断定する迄には至らない。ただ2号住居が若干古い様相を有していたのではなかろうかと考えている事を述べるに止めておきたい。

5号住居跡(図版7-1、第11図)

F地区には3棟の住居が比較的近距离で点在する中で最も南に位置し、14号墳墳丘下に在し22号壙棺墓と僅か数cmしか離れていない。東西辺の大半以上を喪失しているものの、竪穴部の平面形態は隅門長方形を呈していたと想定される。最大壁高20cmを測り、やや急勾配の立ち上りをなす壁面である。南北辺長は2.8mと小振りで、東西辺は0.71mが残存する。南北辺



第11図 5-7号住居跡実測図 (1/60)

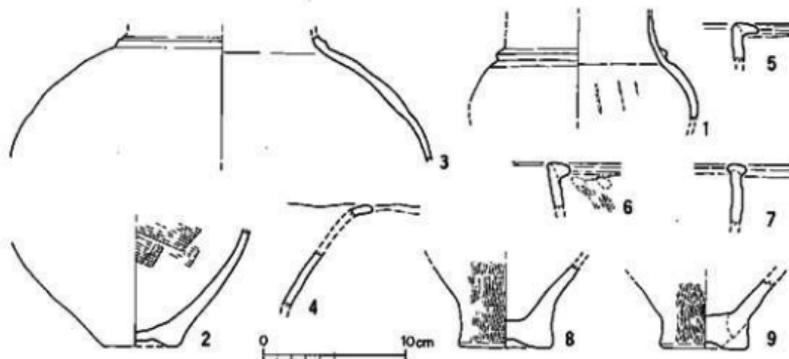
の略中央部外に段状を呈する落ち込みを検出したが、出入口施設と考えるよりも壁面の崩落と解すべきであろう。なぜならこの位置は急斜面側に面しており、若干の降雨で土砂の流入を助長するからである。また下方に巡る周溝内には多量の炭化物が認められ、6号住居で確認された壁体が在していたとも考えられるので不合理となろう。

柱穴は竪穴部内に1、竪穴部外に2の計3個検出した。3つの柱穴は北壁と略平行線上に位置し、6号住居跡と同じ様相を呈している。床面は略水平で、貼床を施している。残存する床面上に炉址は検出されなかった。周溝は竪穴部壁面下に巡り西側柱穴に至る。北東部隅周溝内に浅い小穴が在するが、周溝内に認められた多量の炭化物と関連していたのであろうか。

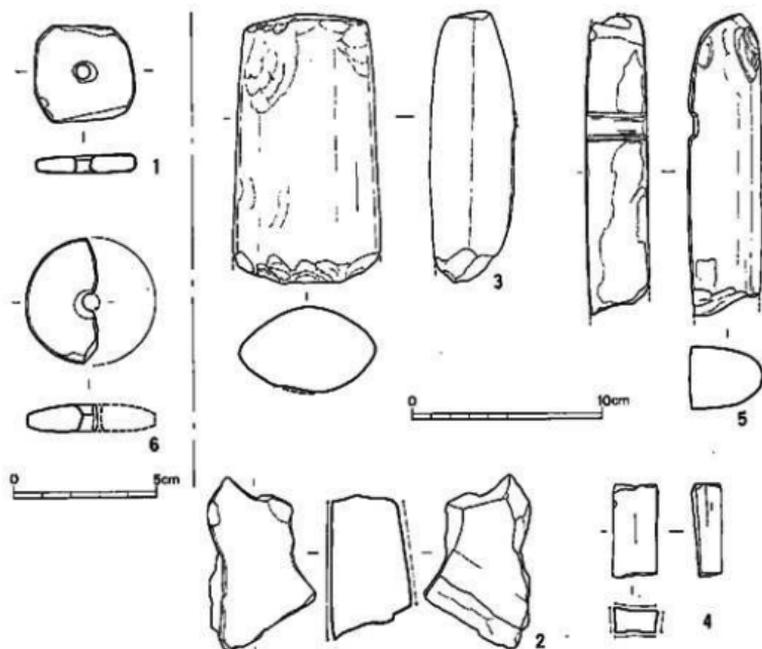
柱穴及び柱痕や周溝内と床面上に炭化物が在したことより焼失家屋であろう。

後述する事項であるが、柱配置及び竪穴部の規模等より当住居は竪穴部外に伸展していたと考えられる。必然的に22号墓棺蓋と切り合いは生じていたと考えられる。当住居は出土遺物より弥生中期初頭頃に比定され、墓棺蓋より先行する。

土器(図版9、第12図)1と2は床面直上より出土した同一一体の壺であり、口縁部と胴中央部を欠損する。頸部下方に1条の三角凸帯を貼付している。内面はハケ目調整後ナデを施し、外面の調整は不明だが凸帯周辺に僅かなナデが認められる。胎土は細砂粒を多く金雲母・角閃石を若干含む。黄褐色を呈し、焼成は良好。上げ底状を呈し、底径5.3cmを測る。3は頸部より胴上半部迄の壺で床面より出土した。頸部下方に三角凸帯が巡る。外面は風化し不明。内面もナデ調整で一部工具痕が認められる。胎土は1と略同。暗黄褐色を呈し、胴部最大径16cmを測る。4は大きく外反する壺口縁部である。内外面共に調整は不明。胎土は細砂粒を



第12図 5号住居跡出土土器実測図(1/4)



第13図 住居跡出土石器実測図 (1/2, 1/3)

多く含む。5と6は初源的な逆L字状口縁を有する甕片である。5は細砂粒をやや多く含む、調整は不明。淡赤褐色を呈す。6は外面にハケ目調整が施され、口縁部下方の接合部に指痕が認められる。胎土は細砂粒を若干金雲母・角閃石を少し含む。7は上端に粘土紐を貼付し、内外面に僅少伸展する口縁部を有する甕小片である。内外面にナデ調整。胎土は細砂粒を若干含む。淡茶褐色を呈す。5～7は埋土上層より出土。8と9はやや上げ底状をなす甕底部片である。内面はナデ調整を施し、外面には明瞭なハケ目が認められる。胎土は細砂粒を多く金雲母を若干含む。焼成は良好。8は茶褐色を呈し、底径6.6cmを測る。9は黄灰色を呈し、底径6.2cmを測る。埋土中品である。

石器(図版9, 第13図)6は埋土上層より出土した紡錘車で、約半分程を欠損する。中央部に両面より穿孔し、周縁部は研磨している。推定4.56cm程となり略円形を呈す。厚み9.6mm, 重さ12.9gを計測する。石材は白雲母片岩である。

6号住居跡 (図版7-2・8-1・8-2, 第11図)

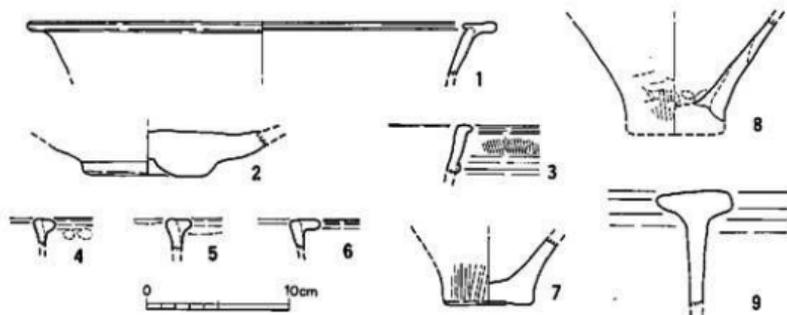
5号住居跡北東4mに位置し、規模・形態等同タイプの住居跡である。約半分程が流失を受けていると考えられるが、西壁は約50cmの壁高が残存する。竪穴部の平面形態は若干胴張りの隅丸長方形と推定される。残存する最大規模は南北辺で3.05m, 東西辺で1.54mを測る。埋土は地山(淡黄灰色粘質土)と略大差なく瞬時に埋没したと考えられるが、土層図に図示した如く壁際に何らかの壁体が在していたことが窺われる。5号住居と同様と思われ、護壁用の化粧壁であろうか。

柱穴は竪穴部内外に3個ずつ検出したが、他に3個以上在したと推定される。3・4号住居の柱穴配置とは若干異なる様相を呈している。

床面は4cmの貼床である。床面上には炭掘りの炉址と北西部隅に浅い窪みが在する。炉址は長軸39cm, 短軸34cmの円形に近い楕円形を呈している。浅い窪み内には小破片の殻が在したが、性格は不明である。周溝は一部途切れ、かつ高低差が一定でない。溝の機能を果していると考ええるよりも、前述した壁体に付随して掘られたと考えるべきであろう。

出土遺物より当住居は5号住居と大差ない中期初頭に比定される。

土器(図版9, 第14図)7が床面上の窪み内より出土し、他は埋土中品である。1は鐏先状口縁部の壺片であり、復原口径22.8cmを測る。内外面共に調整は不明だが、僅かにナデ調整が認められる。胎土は細砂粒を多く角閃石を若干含む。内黒で赤褐色を呈す。2は底径8.5cmを測る上げ底状の壺底部片である。内外面共に調整は不明。胎土・色調は1と略同。3は粘土紐を貼付した口縁部を有す鉢の小破片である。外面には明瞭なハケ目が認められ、内面は不明。口縁端部はナデ。口縁部下方に三角凸帯を貼付する。胎土は細砂粒を多く角閃石が若干



第14図 6号住居跡出土土器実測図(1/4)

含まれる。4と5は外面に粘土紐を貼付し若干伸展する堯口縁部片である。調整は不明。4は口縁部下に指頭痕が認められる。細砂粒を多く含み、赤褐色を呈す。5は細砂粒を多く角閃石を若干含み、黒んだ暗灰色を呈す。6は4と5よりも肥大する口縁を有する堯の小片である。4と同じ胎土である。7は少し上げ底状の堯底部で、底径6.3cmを測る。外面に明瞭で荒いハケ目が認められる。胎土は細砂粒を多く含む。8も堯底部片である。外面に僅かなハケ目が認められる。胎土は細砂粒を多く雲母・角閃石を若干含む。淡黄褐色を呈す。9はT字状口縁を有す大甕片である。調整は内外面共に風化し不明。胎土は粗砂粒を多く含む。橙褐色を呈す。

7号住居跡（図版8-3、第11図）

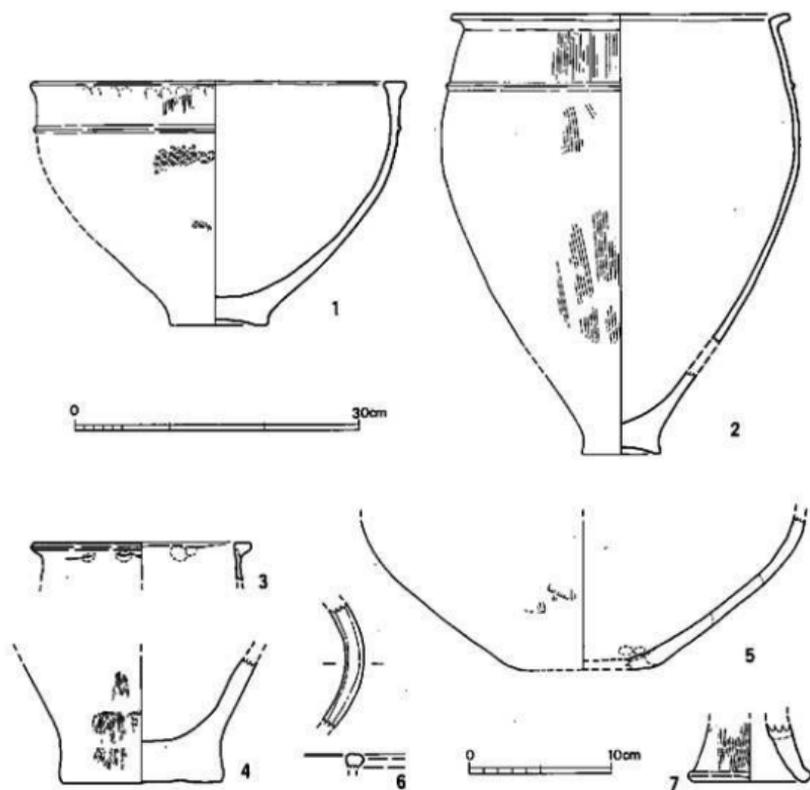
6号住居跡北方8mに位置し、大半以上を畑の造成で喪失している。平面形態は当遺跡唯一の円形を呈し、最大長5.12mが残存する。壁面は略垂直な立ち上りをなし、最高57cmを測る。一部突出しているのは壁面の崩落と考えられる。壁面下に塗切れているものの周溝が在す。

柱穴は竪穴部内に2個、壁面に1個検出したが、全貌は不明である。

床面は北東部がやや高くなる。壁際に土器が整然と並べた如く置かれていた。

出土遺物より当住居は中期前葉に近い初頭に比定出来るであろう。

土器（図版9、第15図）3と4が埴土中品で、他は床面上より出土した。1は口径39.6cm、器高25.7cm、底径10.4cmを測る鉢である。口縁上端部に粘土紐を貼付し、上端面を平坦となす。口縁下方に三角凸帯が1条巡る。調整は外面がハケ目を施した後一部ナデを行ない、内面はナデ。外面口縁部下に指オサエが認められる。胎土は細砂粒を多く雲母・角閃石を若干含む。内面は茶褐色、外面は黄褐色を呈す。焼成は良好。2は逆L字状口縁の略完形の甕である。口径35.6cm、器高45.9cm、底径8.2cmを測り、底部は少し上げ底状を呈す。胴上半部に三角凸帯を1条貼付する。調整は内外面共に風化し不明だが、外面にハケ目が認められる。胎土は1と同じ。黄褐色を呈し、焼成は良好。3は初源的逆L字状口縁を有する甕で、復原口径15.5cmを測る。内外面共に調整は不明。口縁下内外面に指頭痕が認められる。胎土は細砂粒をやや多く含む。灰褐色を呈す。4は平底の堯底部片で、底径11.3cmを測る。外面にハケ目が残り、内面はナデ調整。胎土は1と略同。5は鉢の胴下半部であろう。調整は不明だが、外面に僅かなハケ目と内面底部に指オサエが認められる。胎土は3と同じ。茶灰色を呈す。6は甕か鉢の口唇部であろうか。下方に接合痕が認められる。胎土は細砂粒を多く角閃石を若干含む。黒んだ茶灰色を呈す。7は器台形土器の下半部で、底径8.6cmを測る。調整は内面が不明で、外面にハケ目が認められる。胎土は6と同じ。赤褐色を呈す。 (武田)

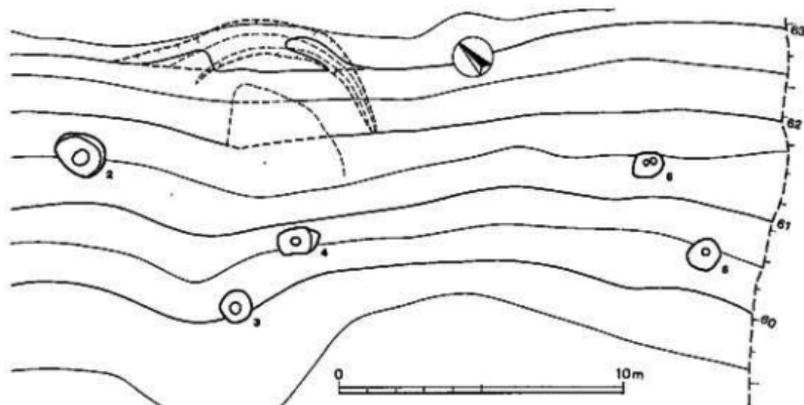


第 15 図 7号住居跡出土土器実測図 (1・2は1/6, 他は1/4)

2. 土 坑

1号土坑 (第17図)

4号住居跡西方5.5mに位置し、E地区では唯一の陥し穴状遺構である。平面形態は上下端共に隅丸長方形を呈し、南西辺の一部は壁面の崩落であろう。壁面は略垂直な立ち上がりをな



第 16 図 F 地区土坑配置図 (1/200)

す。埋土は暗茶灰色粘質土で、床面 5 cm 程は同色調の砂泥が凹レンズ状で充填していた。

床面は略水平で、略中央部に土坑内と同じ埋土の小穴が在す。小穴内には径 8 cm の枕状痕が認められ、ポソッとした感じの柔い土であった。枕状痕は小穴底部迄伸展していたが、土坑内では確認する迄には至らなかった。

3ヶ所の隅部に略同レベルで窪みが在したが、他に例を見ない特徴である。この種の土坑を陥し穴と仮定するならば、上部部に隠蔽物を敷設したとも考えられこれに関連する施設と推定される。

遺物は全く出土しなかった。

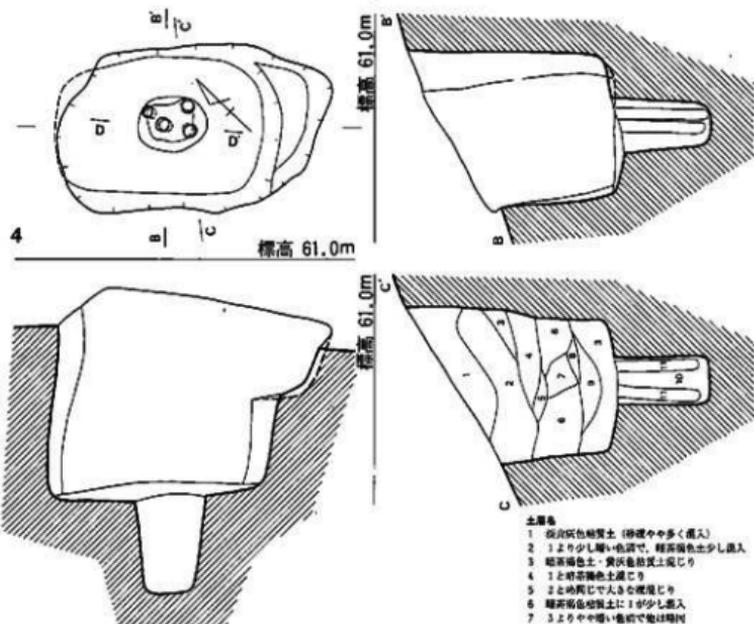
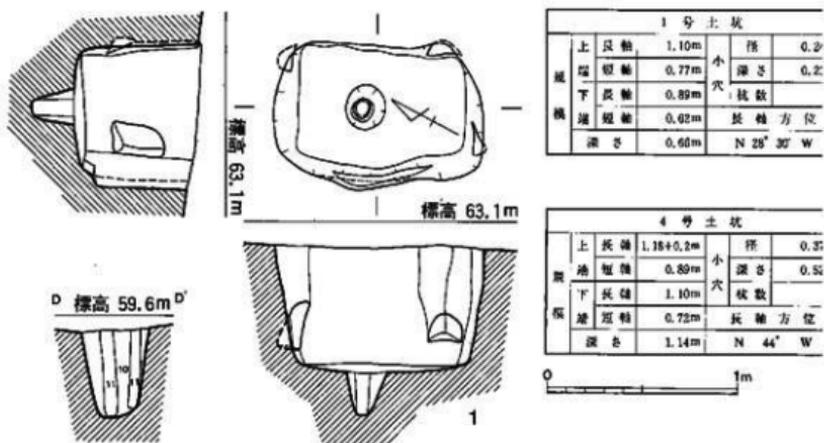
2号土坑 (図版10-1, 第18図)

F 地区では 5 基の陥し穴状遺構を検出したが、当土坑は最西端に位置する。平面形態は卵形を呈し、埋土は黄灰色粘質土で地山と大差ない。壁面はやや旧勾配の立ち上がりなす。

床面は略水平な床面で、略中央に小穴が在する。小穴は他の土坑と比較してやや大きく掘られていたが、枕状痕は 1 個しか確認していない。

他の土坑と比較して土坑の規模・形態等に若干の差異が認められるが、小穴・枕状痕が在することより当土坑の性格は同様であろう。

遺物は全く出土していない。



第17図 1・4号土坑実測図 (1/30)

- 土層名
- 1 灰白色粘質土 (砂礫やや多く混入)
 - 2 1より少し細かい色調で、軽褐色土少し混入
 - 3 軽褐色土・黄灰色粘質土混じり
 - 4 1と軽褐色土混じり
 - 5 2と地層で入るや混じり
 - 6 軽褐色粘質土に1が少し混入
 - 7 3よりやや細かい色調で軽褐色
 - 8 灰褐色粘質土
 - 9 1と地層で混じり少ない
 - 10 6と地層でやや1が多く混入
 - 11 1と地層でゴツツとした土

3号土坑 (図版10-2・3, 第18図)

2号土坑の東方に位置し、4号土坑とは距離4mと隣接して在す。平面形態は上・下端隅丸方形を呈し、壁面はやや暖やかな勾配の立ち上がりをなす。埋土は2号土坑と略同じで、図示している小石塊は流入物であろう。

床面は略水平を呈し、略中央に小穴が在す。小穴内及び床面上に枕状痕を検出したが、黄灰色粘質土と灰褐色土の混じりが充填していた。小穴外に枕状痕が在するのは当遺跡で希有な例となるが、陥し穴状遺構では他に類例が多く在す。

遺物は全く出土していない。

4号土坑 (図版11-1・2, 第17図)

3号土坑の東方に隣接して在す。平面形態は上・下端共隅丸長方形を呈す。壁面は北西側がオーバハング気味となり、他は急勾配な立ち上がりをなす。南東辺のテラスは当土坑廃絶時前後に壁面が崩落したと解すべきであろう。埋土は上層が他の土坑と全く大差なく、下層において灰色土が多く混入していた。

床面は略水平をなし、中央部に小穴が在す。小穴内には図版の如く全く異なる埋土が充填した4本の杭が在した。この枕状痕が坑内にまで伸展していたか否かは、土層図作成時確認する迄には至らなかった。当遺跡の陥し穴状遺構でも有数な残存状況で、示唆的な遺構であり後章で検討を行なってみたい。

遺物は全く出土していない。

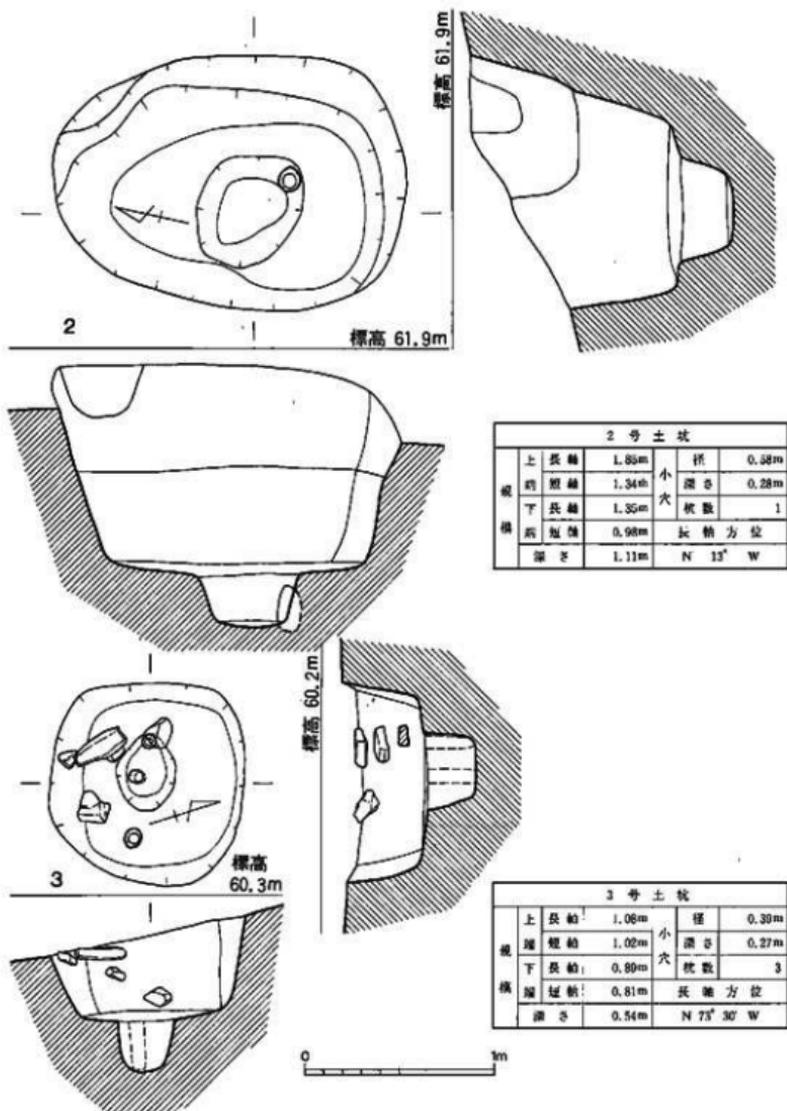
5号土坑 (図版11-3, 第19図)

4号土坑東方13mに位置し、2号壺形墓と2号石蓋土壘墓及び2号木棺墓に切られている。平面形態は上・下端共に隅丸長方形を呈し、壁面は急勾配の立ち上がりをなす。埋土は他の土坑と大差なく黄灰色粘質土に灰色土が若干混入している。

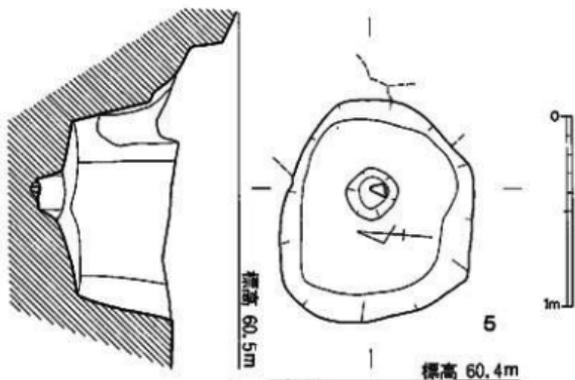
床面はやや舟底状を呈し、床面上に小穴と浅い窪みを検出した。小穴内の二段摺りが枕痕と断定する迄には至っていない。

遺物は全く出土していないが、切り合い関係より当土坑は弥生時代中期前葉が下限となる。

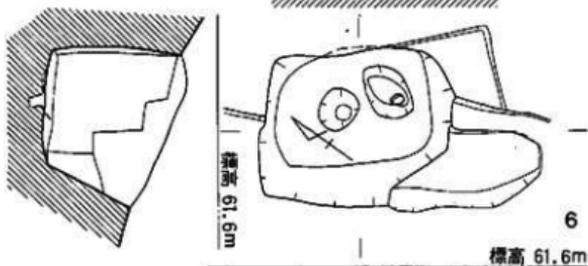
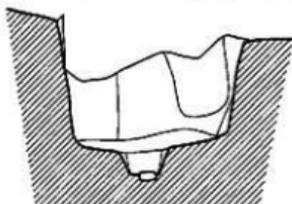
6号土坑 (第19図)



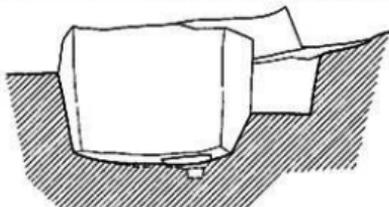
第 18 图 2・3号土坑実測図 (1/30)



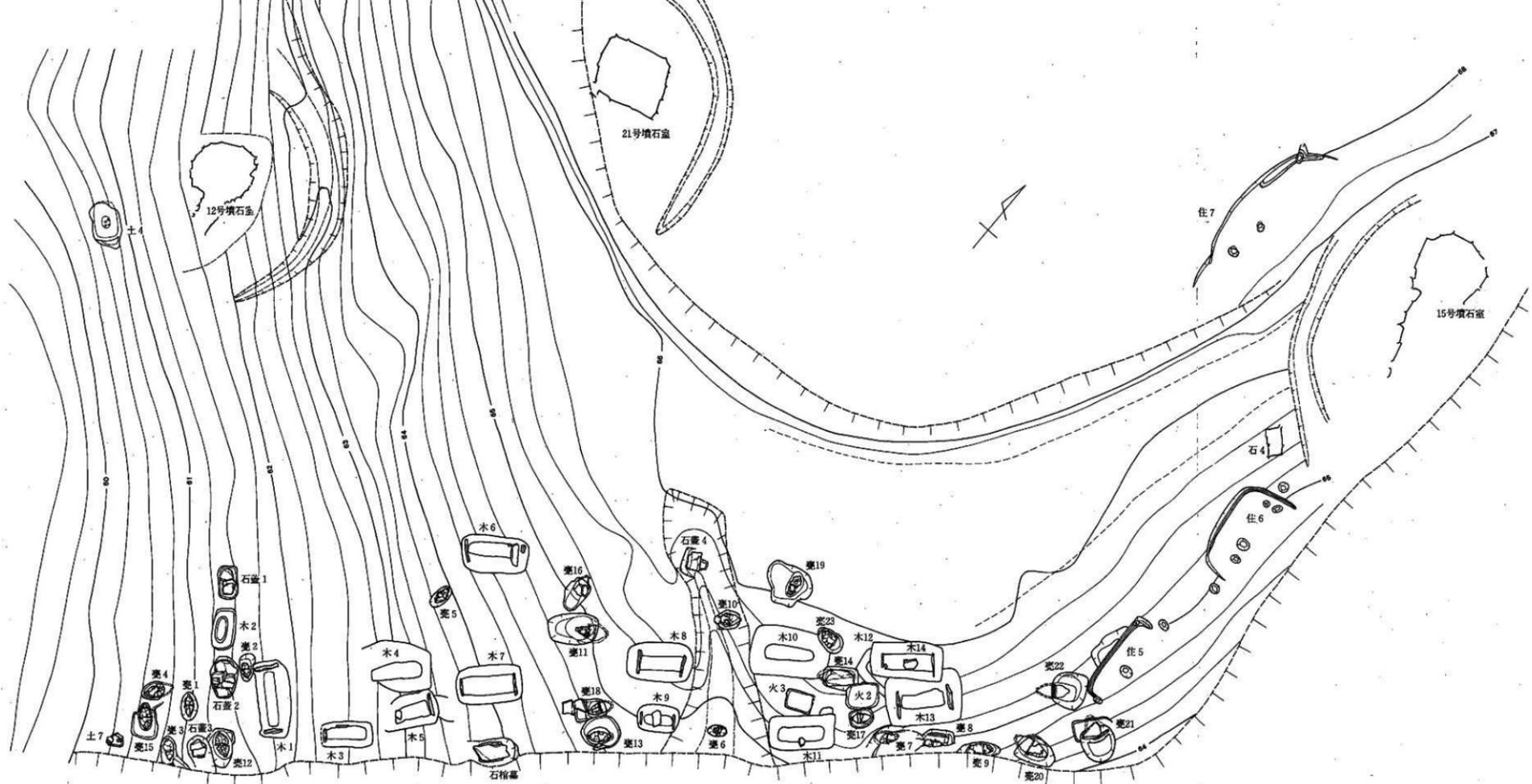
5号土坑						
縦	上	長軸	1.17m	小	徑	0.28m
	端	短軸	1.00m		深さ	0.13m
	下	長軸	0.92m	穴	枕数	
	端	短軸	0.80m		長軸方位	
		深さ	0.57m		N 4° 30' W	



6号土坑						
縦	上	長軸	0.98m	小	徑	0.29m
	端	短軸	0.85m		深さ	0.12m
	下	長軸	0.82m	穴	枕数	1?
	端	短軸	0.61m		長軸方位	
		深さ	0.73m		N 37° W	



第 19 図 5・6号土坑実測図 (1/30)



第 20 图 神原 E·F 地区弥生时代遗址配置图 (1/100)



5号土坑の南方3mに位置し、4・15号壘棺墓に切られている。平面形態は上・下端共にやや不整形ながらも隅丸長方形を呈し、壁面は急勾配な立ち上がりをなす。強土は他の5基とさ程に異なる。

床面は中央部へ緩やかな傾斜をなし、略中央に小穴が在す。この小穴内には他の土坑で確認された杖状痕は認められなかった。

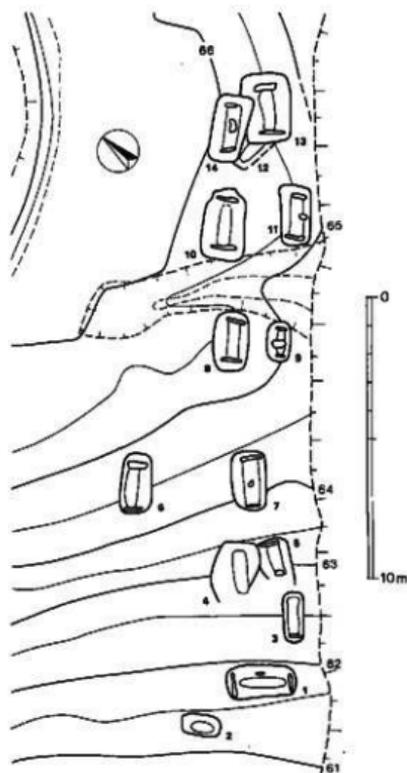
遺物は全く出土していないが、壘棺墓との切り合いより中期前葉を下限とする。（武田）

3. 木棺墓

F地区において壘棺墓・石蓋土墳墓と木棺墓で若干時期差を有しつつも墓域を構成するが、標高62m程で2グループに大別出来る。1号木棺墓以南と3号木棺墓以北であり、両グループは長軸方位が略直交をなしている。なお南グループは数量的に少数であるが、多くは農道や畑の造成で喪失または調査区外に伸展していると考えられる。この墓域において特異な形態をなす木棺墓の概略をまず述べることにしたい。

遺構検出時に確認出来たのは僅かに露出している小口石のみで、墓壙プランの検出は裏込め土及び棺内流入土が地山と大差なく離解を極めた。斬る状況より木質部は全く検出してはいないが、3・8・13号など比較的良好な資料より判断して木棺墓と考えるに至った。

棺自体の有り様は、一部岩盤まで割り抜く二段掘りの墓壙を有する。特例として7号は二段掘りではない。段上略中央に小口石を設置し、側壁に板材を用いた組み合せ棺が想定される。この棺を設定



第21図 木棺墓配置図 (1/200)

した後裏込めがなされる。4・13号等に見られる標石の位置及び床面よりの高さから、木蓋がなされ若干の盛土が在したと推察される。なお個々において若干差異が認められるので、これを三形式に分類した。

I……二段掘りの墓壇を有し、段上部に小口石を設置する。下段の平面形態は隅丸長方形。

II……素掘りの墓壇であるが小口石を有する。7号のみ。

III……二段掘りの墓壇を有するが小口石は在しない。11号は粘土を用いているが、一応この形式に含めた。下段の平面形態は隅丸長方形。

I型式の内でも棺の構造は個々異なる。小口石が側板を挟むⅡ状タイプ。片方は小口石が、他方は側板が挟むⅢ状タイプ。側板が小口石を挟むⅣ状タイプ。これら3種類が推定される。

III型式は木蓋土墳墓とも考えられるが、11号に粘土の高まりが在し組み合せ式木棺の可能性を有しているので一応木棺墓の範疇に含めた。

以上が木棺墓の概略である。最後に甘木・朝倉地方における類例を挙げると、柿原野田遺跡(註1)で1基報告されている。横断道関係でも未報告ではあるが原ノ東遺跡(註2)・杷木宮原遺跡(註3)で検出されている。これらからこの地方における中期初頭～前葉にかけての墓制と言え、成人用壺棺墓は数例(註4)しか報告されておらず未発達な部分を補っていたと言えよう。

なお紙面の都合上個々の寸法等は計測表を掲載しておく。

末尾ながら棺の種類で小口石が側板を挟むタイプをAタイプと。片方は小口石が、他方は側板が挟むタイプをBタイプと。側板が小口石を挟むタイプをCタイプと仮称しておく。

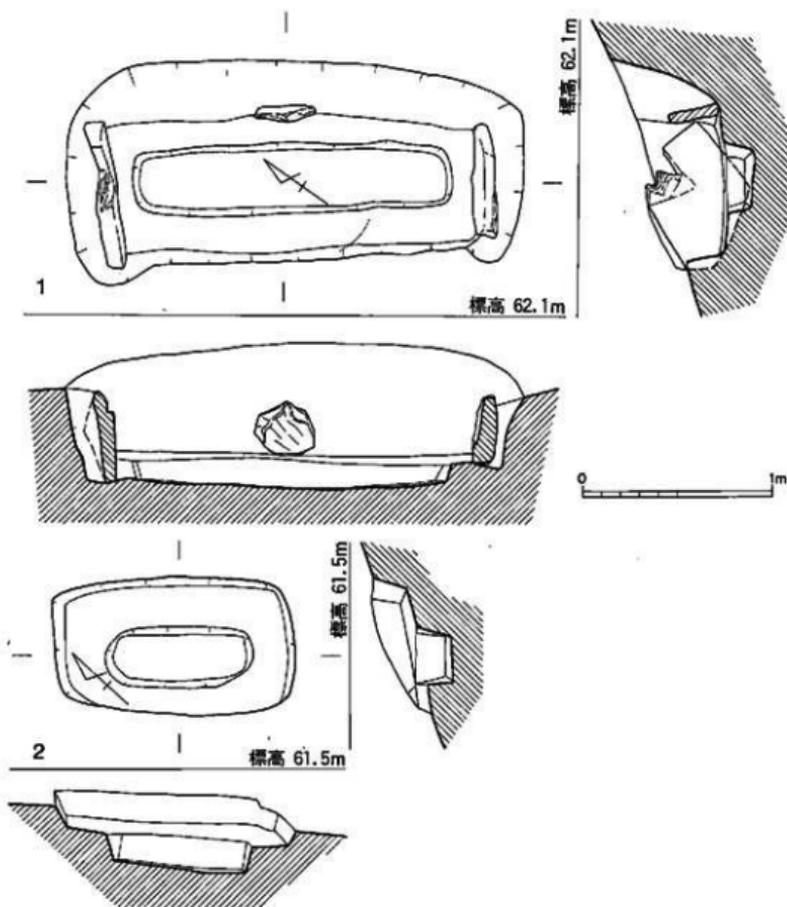
1号木棺墓(図版14-1・2, 第22図)

南側グループに属し2号壺棺墓に隣接する。I型式の墓壇を有し、小口石は厚手の結晶片岩を使用している。北西小口部を深く掘り込んでいるのは南東小口部との高低差を調整したものと考えられる。埋土は他の木棺墓と大差なく、埋土が黄褐色粘質土で下層に灰・褐色土が僅かに混じり地山とさほど変わらない。棺はAタイプと考えられ、屍床の長さ153cm、幅27cmと棺の高さ(屍床より小口石の上端面迄)49cmを測る。北東壁に立石する小石塊は側板を固定していたのであろうか。

屍床は略水平に透られており、他に特筆するべき事象は認められなかった。

遺物は全く出土していないが、他の木棺墓と略同年代に比定出来るよう。

2号木棺墓(図版15-1, 第22図)



第 22 図 1・2号木棺墓実測図 (1/30)

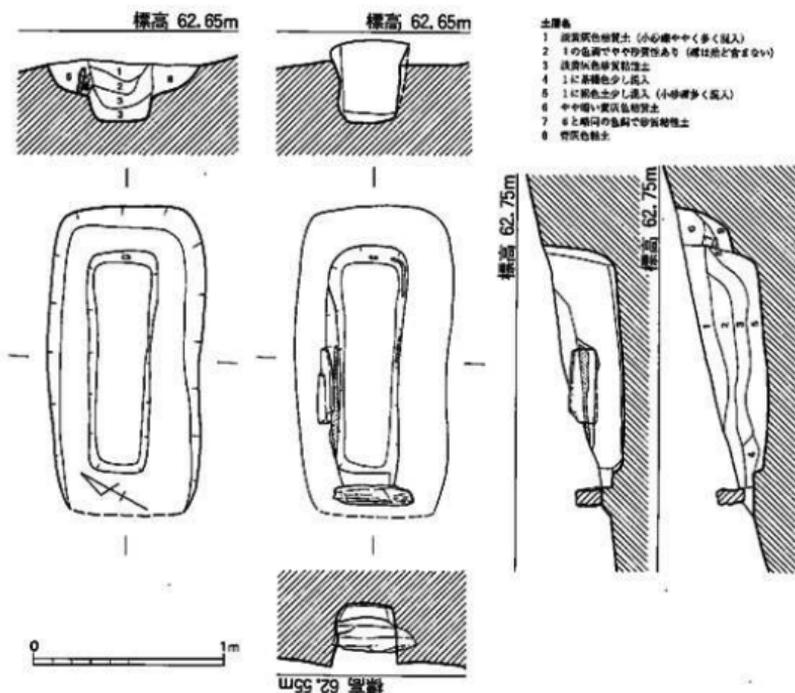
1号木棺墓西南1.5mに位置し、5号土坑を切っている。墓塚はⅢ型式で、平面形態兩丸長方形を呈す。11号木棺墓に見られる粘土等は何ら在しないし、2号石蓋土塚墓が隣接していること等より木蓋土塚墓の可能性が大である。しかし9号木棺墓と略同規模であることより組合

せ式木棺が段上部に在した可能性も有す。埋土は1号と略同じであった。

遺物も1号同様全く出土しておらず正確な年代は比定出来ないが、他と同年代と考えられる。

3号木棺墓 (図版15-2, 第23図)

1号木棺墓北東1.7mに位置し、北側グループに属すると思われる。墓墳はI型式であり、平面形態は隅丸長方形を呈する。なお南西部は土砂の流出を受け一部墓墳が不明確となる。小口石は南西部しかなく、北側壁に同様な緑泥片岩の板石が立石する希有な例である。この側壁石の内側と北東部裏込の内中程に青灰色粘土が認められたが目張りの為であろうか。これらから類推して北東小口は板材を用いたと考えられる。棺の構造は側壁石の内側に板材が設置され



第23図 3号木棺墓実測図 (1/30)

ていたと考えられ、北東部が不明なゆえにAタイプであった可能性を有す。

屍床は略水平である。

遺物は何ら出土しなかったが、他の木棺墓と近い時期と考えられる。

4号木棺墓（図版16-1・2，第24図）

5号木棺墓と隣接し3号木棺墓北方1mに位置する。南西部が土砂の流出で喪失し北壁側の一部を掘りすぎているものの、墓塚の平面形態は隅丸長方形を呈していたと考えられる。北東部は残存状態が良好であるが、小口石は在せず2号と同じくⅢ型式に属する。2号と異なる点は屍床が約倍近い規模と、成人でも充分な下段の壁高を有していることである。この規模ならば木蓋でも充分な棺となり得るので、当遺構はⅢ型式中でも木蓋土塚墓の可能性を有している。なお北東部の板石は寸法及び出土地点より小口石とは成りえない。

屍床は略水平をなしているが、特筆すべき痕跡は認められなかった。

出土遺物より弥生時代中期初頭頃が比定される。

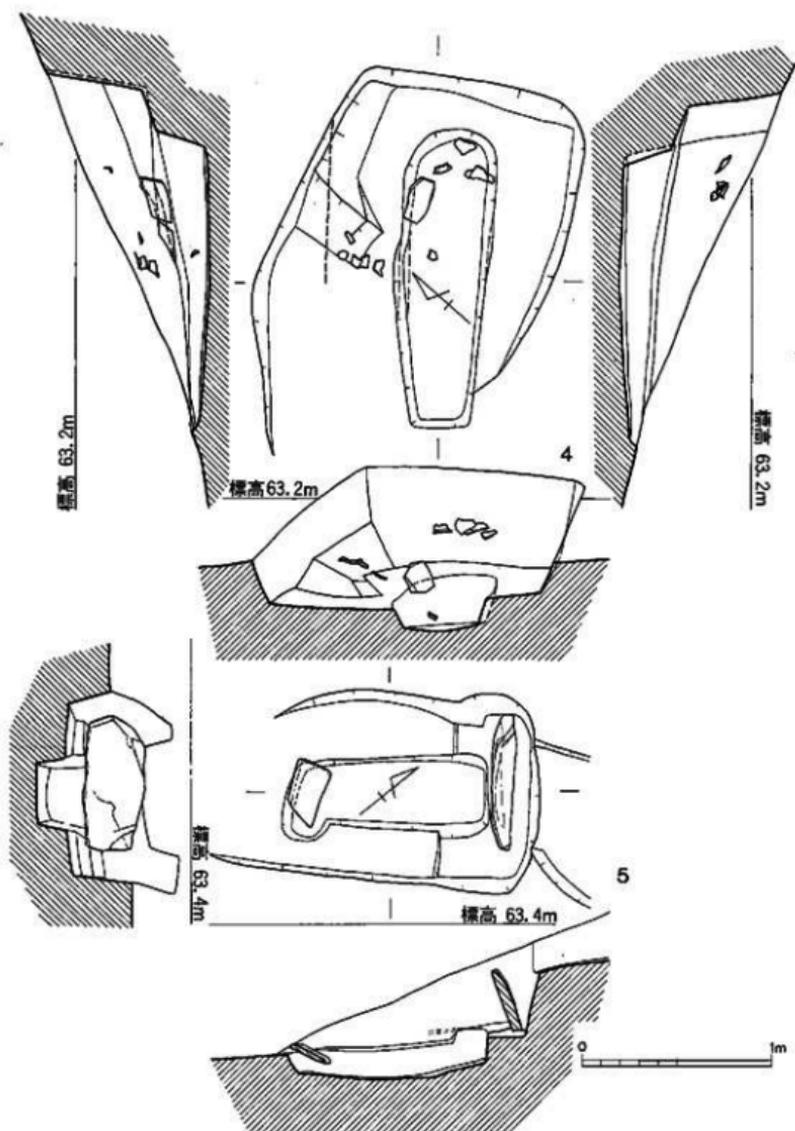
土器（図版16-3，第30図）1と2は同一個体となる壺の破片である。1は大きく外反する口縁部から略垂直に立ち上がる頸部を経て三角凸帯を貼付した肩部に連がる。調整は内外面ともに風化して不明。色調は内面が灰褐色、外面が灰白色を呈す。細砂粒をやや多く含む、焼成は良好。復原口径16.5cmを測る。2は平底であろうか。内外面ともにナデ調整を施す。胎土・色調・焼成は1と同じ。復原底径9.3cmを測る。3は如意形口縁を有する甕片である。口縁下方に1条の沈線が巡る。内面はナデ調整を施し、外面は僅かにハケ目が認められる。細砂粒を多く含む。内外面共に茶褐色を呈す。焼成は良好。復原口径18.8cmを測る。

5号木棺墓（図版17-1，第24図）

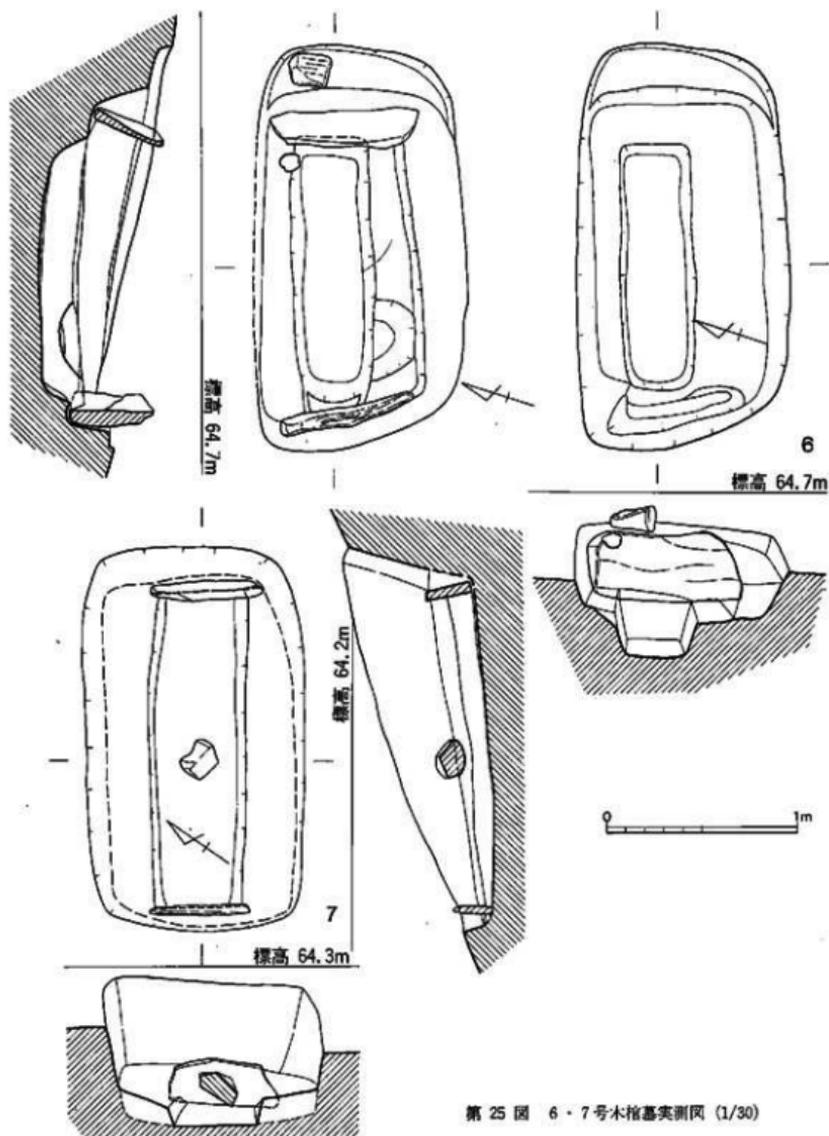
4号と隣接するものの切り合っていない。北東小口側の一部が後世の擾乱で、南西小口側も土砂の流出で喪失しているものの墓塚の平面形態は略隅丸長方形と見える。北東小口石は内斜し、南西小口石は転倒した状態で検出したがⅠ型式に属するであろう。なお南西小口石の最大幅は33cmであり下段掘り方幅と略同じとなり、棺の構造はBタイプと想定される。北東小口石が略旧態を止めているのは棺の構造に起因するだけでなく、下に青灰色粘土を敷設し固定されていたからであろう。石材は緑泥片岩の板石を使用している。平面図に見られる北東部のテラスと南西部の下段掘り方の一部は地山との識別が難解なため掘り過ぎたものである。

屍床は船底状を呈す。

遺物は何ら出土しなかったが、他の木棺墓と大差ない時期に比定されるであろう。



第 24 图 4・5号木棺墓穴测图 (1/30)



第 25 图 6・7号木棺墓实测图 (1/30)

6号木棺墓 (図版17-2, 第25図)

4号木棺墓北方4mに位置し、7号木棺墓と約4m離れているものの略同長軸方位を有し並列して在す。墓壇は東側にテラス部を有すがⅠ型式の範疇に納まるであろう。両小口石は結晶片岩の板石を略垂直に立てていたと考えられ、東小口側が大きく内斜しているのは棺の崩落に伴って傾いたと推定される。一方の西側小口石は若干掘り窪めて設置されている。棺は下段掘り方上端に側板を設置したAタイプと推定されるが、南側蓋部は裏込めと棺埋没土との差異が認められず掘りすぎってしまった。西南部の浅い窪みは築造時に掘られたもので、性格は全く不明である。

東小口部外の石塊は標石が崩落したと解される。

屍床は東側が僅かに高くなる。

当遺構は出土遺物より中期初頭頃に比定される。

土器(第30図)4は中央部が僅かに窪む壺底部片である。両面共にナデ調整を施すが、外面にハケ目が僅かに認められる。胎土は細砂粒を多く含む。淡茶褐色を呈し、焼成は良好である。底径2.8cmを測る。

7号木棺墓 (図版18-1, 第25図)

4・5号木棺墓北東1mに位置し、6号木棺墓と並列して在す。墓壇は唯一のⅡ型式をなし、平面形態は隅丸長方形を呈す。両小口石は緑泥片岩のやや薄手の板石を使用している。棺の高さは小口石の上端面と考えられ、最大値が長さ166cm、幅43cm、高さ26cmを測るAタイプと考えられる。棺内中央の石塊は標石が崩落したものであろう。

屍床は略水平となるが、西南小口側が僅かに低くなる。頭位は北東側となろう。

遺物は裏込め内及び盛土内と考えられる位置より土器片が出土したが、小破片であり正確な時期は比定出来ないが中期前葉を下るまい。

土器(第30図)実測可能なのは5のみで、平底の壺底部片である。内外面共にナデ調整を施す。胎土は細砂粒を多く含む。茶褐色を呈し、焼成は良好。復原底径8cmを測る。

8号木棺墓 (図版18-2, 第26図)

7号木棺墓北東5mに位置し、9号木棺墓と1m隔てて並列している。墓壇はⅠ型式に属し、平面形態は隅丸長方形を呈す。両小口石は緑泥片岩の板石を使用し、若干内斜して検出したが本来は垂直に立てていたと思われる。下段の掘り方は平面形態がやや不整形な隅丸長方形を呈

す。棺は図示した如くAタイプとなり、側壁は略垂直な立ち上がりなす。なお棺の高さは小口石上端面まで達すると思われる56cmを測る。

屍床は略水平である。

遺物は土器片が4点出土したが、裏込め内及び壺土内に脱落する。当遺構の時期は中期初頭に比定される。

土器(第30図)6は大きく外反する壺の口縁部片である。調整は不明。胎土は粗砂粒を若干含み、角閃石が僅かに認められる。橙色を呈す。7は壺の底部片である。調整は不明。胎土は粗砂粒を多く含む。茶灰色を呈す。復原底径5.5cmを測る。

9号木棺墓(図版19, 第26図)

8号木棺墓と並列し東方1mに位置する。当初は標石しか確認出来ず、約15cm程掘り下げて初めて墓壇等が確認された。墓壇はI型式に属し、平面形態は隅丸長方形を呈す。小口石は緑泥片岩の板石を略垂直に立てていたと推定されるが、棺の崩落時に内斜したのであろう。棺は下段掘り方を囲むAタイプと想定される。

標石は図面上でも浮き上がっているが、棺の崩落時に下がることを考え合わせると当木棺墓の壺土は相当高かったと想像される。

屍床は略水平に造られている。

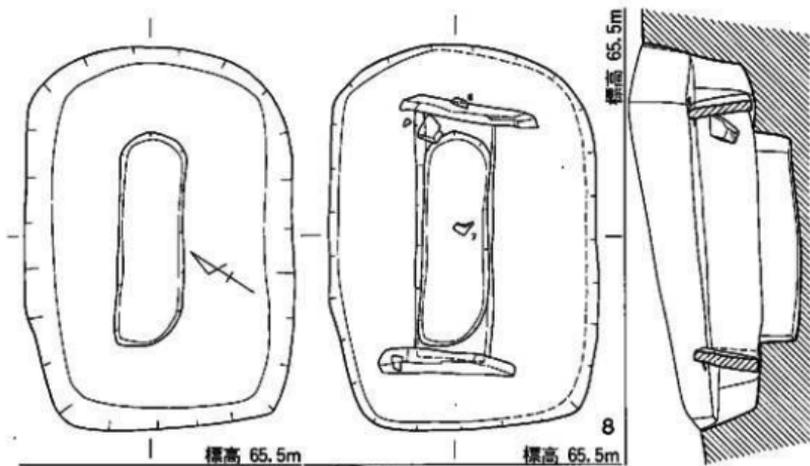
遺物は全く出土していないが、他の木棺墓と大差ない時期が考えられる。

10号木棺墓(図版20-1・2, 第27図)

8号木棺墓の北東2.5mに位置し、11号木棺墓とは略同じ長軸方位を有して並列しつつ在する。東小口部側の墓壇は14・23号壺棺墓に切られている。北側壁も性格不明な不整形の土坑に切られているが、当初は木棺墓が切り合っているのではなからうかと考えた。平面形態や板石が在するなど木棺墓の可能性を有するものの、元来木棺墓には壺土が在すると考えられ木棺墓が切り合う可能性は薄いと思われる。

当木棺墓の墓壇はI型式に属し、平面形態は隅丸長方形を呈する。両小口石共に浅く掘り込みを施して設置し、西側小口では粘土と小さな板石を用いてより強堅に固定している。けれども両小口石は若干内斜しているが、これは棺の崩落時に生じたものと考えられる。石材は結晶片石の板石が使用されていた。棺は下段掘り方を取り囲むAタイプと想定される。

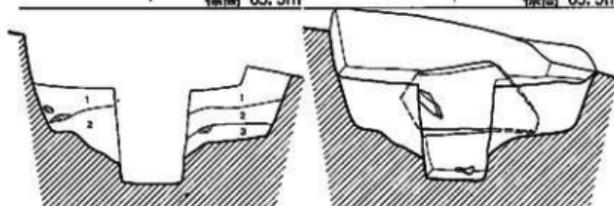
屍床は略水平をなしているが、東端には約5cm程の深さを有する円形の窪みが在する。11号木棺墓にもこの種の窪みを検出しているが、11号の場合は足元部の掘り込みと解される。当



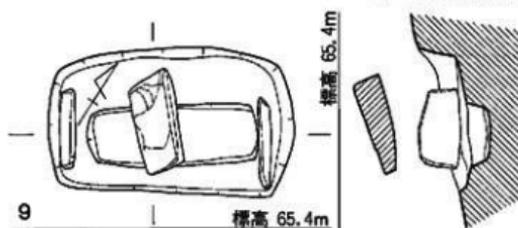
標高 65.5m

標高 65.5m

8



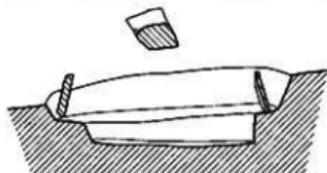
- 土層名
 1 淡灰色粘質土 (60%多く混入)
 2 1に赤色土少し混じり砂層がやや多い
 3 やや明るい一色灰白色粘質土



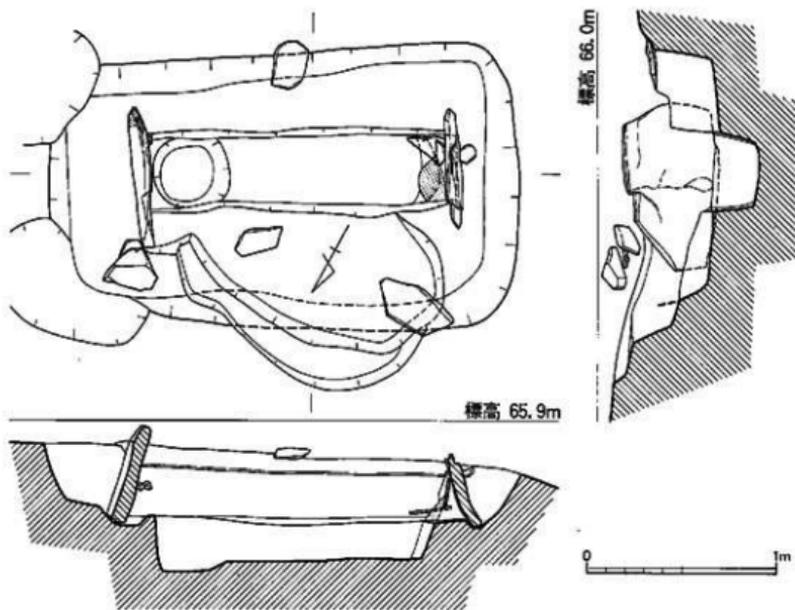
9

標高 65.4m

標高 65.4m



第 26 図 8・9号木棺墓実測図 (1/30)



第 27 図 10号木棺墓実測図 (1/30)

遺構では窪み内に多量の炭化物が混入していることと、他の木棺墓から頭位が北側になると推定され、11号の窪みとは異質な性格を有すると思われる。当遺構に伴うことは明白であるが、如何なる性格を有しているかは不明である。

墓室内に小石塊が四散した状態で検出されたが、北側及び墓室中央部の東西の石塊は裏込め内及び盛土内に混入していた可能性が大であろう。前述の不整形な土坑内のやや大きな板石は土坑の掘削時に移動したと解せば標石の可能性がなくもないであろう。なお9号木棺墓の標石の有り様や木棺墓が並列及び切り合いが生じない点などから、盛土が在しかつ標石を置いていたと考えられ上記の板石が標石であったろうと推定するに至った。

遺物は弥生土器と断定される小破片が5点出土したのみで、図示不可能な土器片のため掲載していない。遺物より当遺構の時期は比定されないが、変棺墓との切り合い関係より中期前葉か若干溯る時期が妥当と考えられる。

11号木棺墓 (図版21-1, 第28図)

10号木棺墓東方1.6mに位置し並列して在す。南側壁が土砂の流出を受け喪失しているものの墓壇の平面形態は隅丸長方形と考えられる。両小口部は石材を用いず、幅13~15cmで青灰色粘土の高まりが認められた。墓壇の型式は一応Ⅲ型式に属す。3・10・13号木棺墓に小口石を固定する為の粘土が在したことから類推して、木質部の確認をしていないが組み合せ式の木棺が在したと推定される。棺は粘土の幅及び下段の規模よりCタイプが想定される。

屍床は北東部がやや高く漸次南が低くなる。南西隅には10号同様に浅い窪みが在するが、炭化物は認められない。足元掘り込みであろう。

遺物は棺内埋没土より土器が数片出土した。土器より当遺構の時期は中期初頭頃に比定される。

土器(第30図)8は口縁外面に粘土紐を貼付した壺片である。内外面共にナデ調整を施すが、外面には僅かにハケ目が認められる。胎土は粗砂粒を多く金雲母を若干含む。茶褐色を呈し、外面に黒斑が認められる。焼成は良好。復原口径28.1cmを測る。

12号木棺墓 (図版21-2, 第28図)

10号木棺墓東方1mに位置し、1号火葬墓と14号壺棺墓及び13・14号木棺墓に切られ約半分程喪失している。残存部より墓壇の平面形態は隅丸長方形を呈すと思われる。西小口部に石材が在しなかったので一応Ⅲ形式に納まる。形態及び構造は2号と略同じになると考えられる。

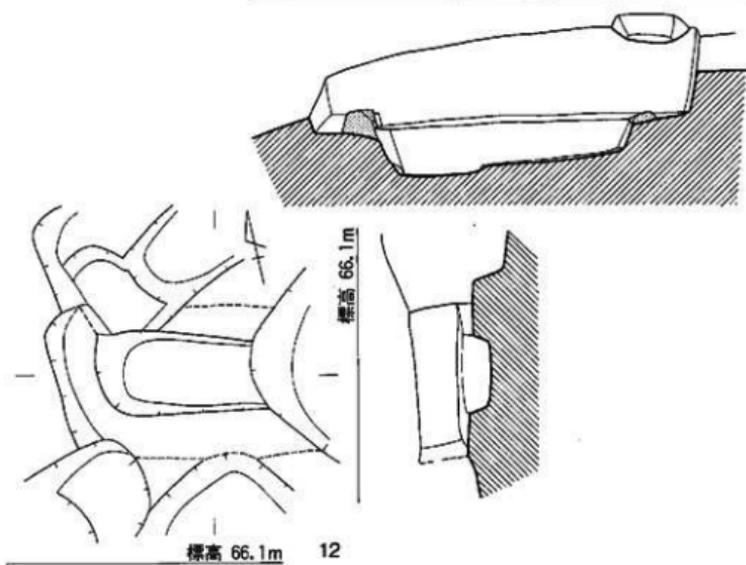
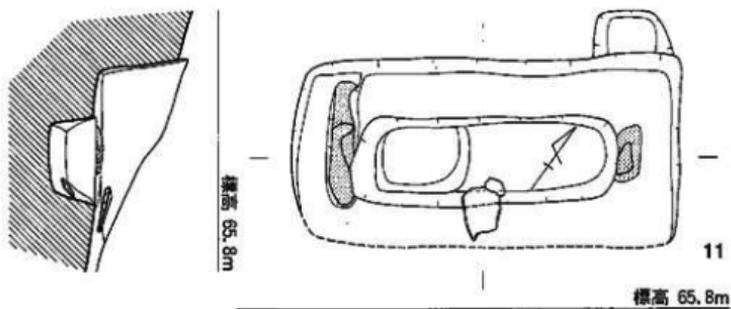
屍床は略水平に造られている。

遺物は全く出土しなかったが、当遺構の時期は13号より古い時期に比定される。

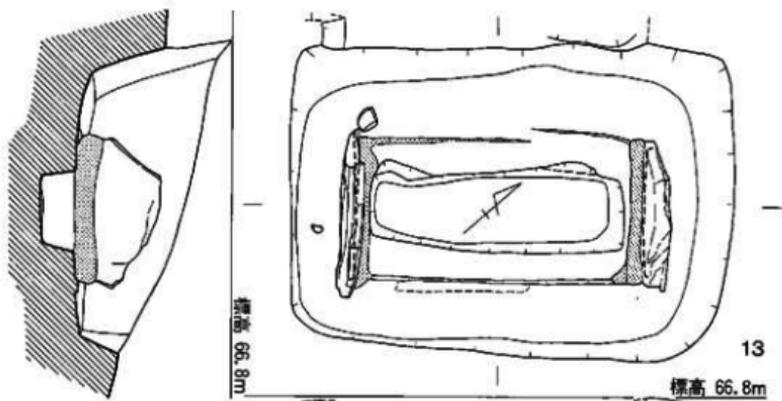
13号木棺墓 (図版22-1・2, 第29図)

12号木棺墓を切り14号木棺墓に切られている。墓壇はⅠ形式に属し、平面形態は隅丸長方形を呈す。両小口部はやや厚手の緑泥片岩の板石を垂直に立て、内面を青灰色粘土で固定している。この両小口石端部を結ぶ線上には高低差2cm程の不明瞭な段が在す。先述した粘土はこの不明瞭な段北西部内側約70cmまで進展している。これらの状況より不明瞭な段下端に側板を設置したAタイプの棺が想定される。棺の法量は長辺151cm、短辺72cm、高さ約45cmを測る。

この棺内略中央には岩盤を傾り抜き中段より18cm下方で略水平な屍床が在す。この様に棺の構成及び棺内の有り方が想定されたのは、当遺構でも希有な遺構である。



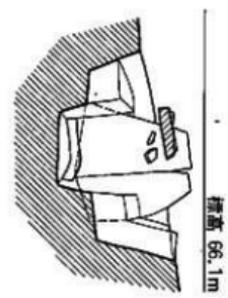
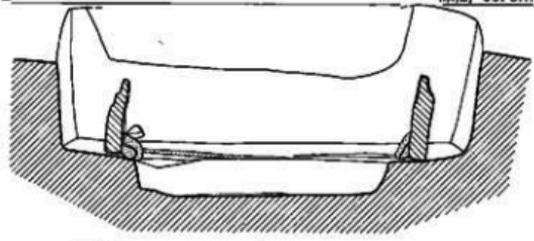
第 28 图 11・12号木棺墓穴測図 (1/30)



標高 66.8m

13

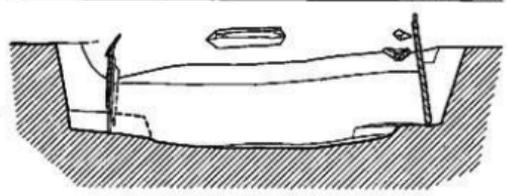
標高 66.8m



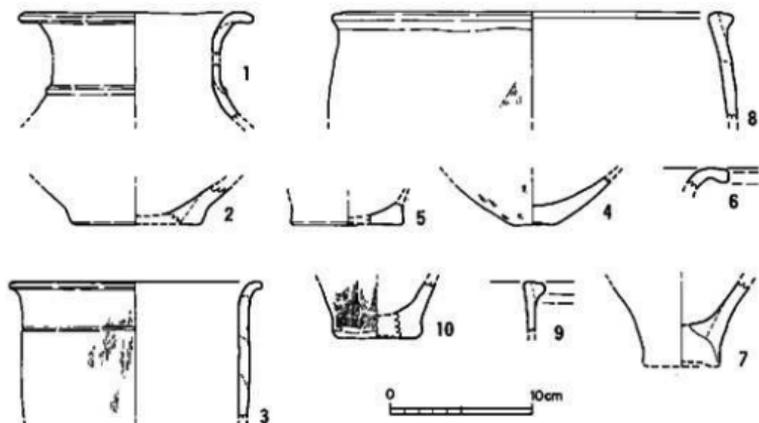
標高 66.1m

14

標高 66.1m



第 29 回 13・14号木棺墓実測図 (1/30)



第30図 木棺墓出土土器実測図 (1/4)

遺物は峯込め内より土器片が4点出土した。これらより当遺構の時期は中期初頭に比定される。

土器(第30図)9は口縁上端外面に粘土紐を貼付した壺口縁部片である。内外面共に風化して調整は不明。胎土は細砂粒を若干含む。淡茶褐色を呈し、焼成は良好。10は壺底部片である。内面はナデ調整を施し、外面には明瞭なハケ目が認められる。胎土・色調・焼成ともに9と同じ。復原底径6.3cmを測る。

14号木棺墓 (図版23-1・2, 第29図)

12・13号木棺墓を切っている。墓壇はI型式に属し、平面形態は少し歪む隅丸長方形を呈す。小口部には木米1枚石と考えられる結晶片岩の薄い板石を略垂直に設置している。南西小口石は浅く掘り窪めた上に設置しているが、他方は一部掘り過ぎたと考えられ、段上部に小口石が在していたであろう。棺は岩盤を例り抜いた下段を囲むAタイプが想定される。

屍床の平面形態は南西側が不整形となるが概ね隅丸長方形となろう。やや船底状を呈す床面となる。

中央部の石塊は標石と考えられ、棺の崩落時に沈下したと思われる。

遺物は全く出土していないが、切り合い関係より当木棺墓は中期前葉までは下るまい。

(武田)

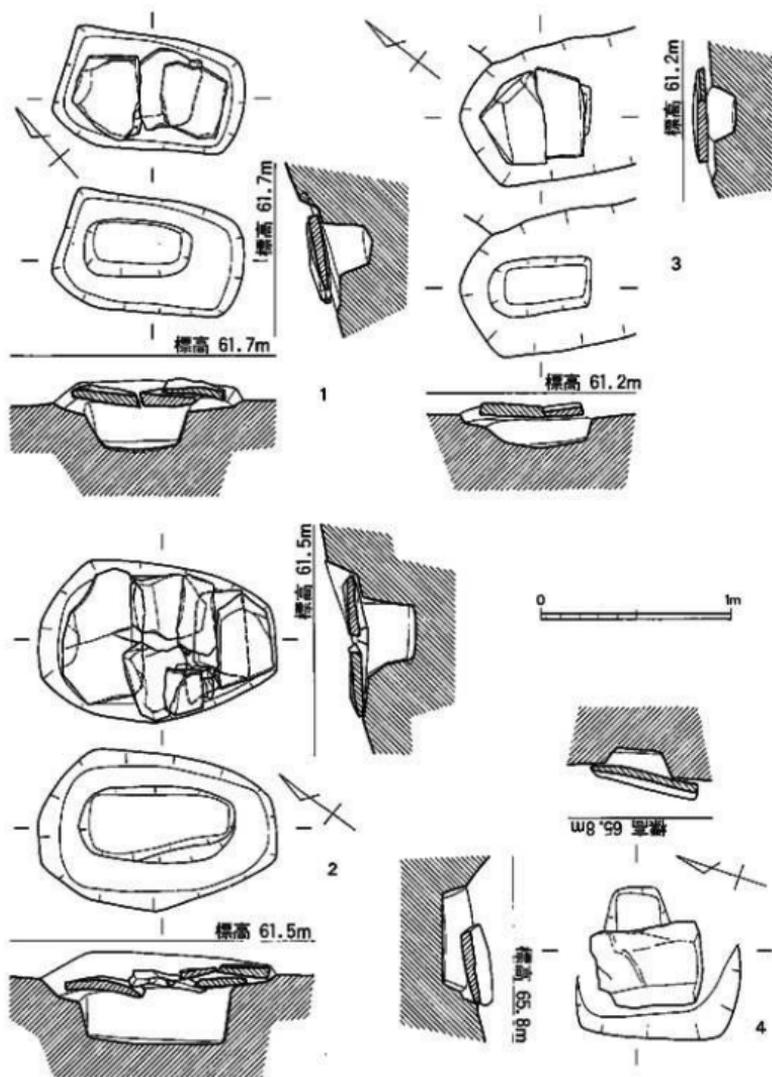
4. 石蓋土墳墓

1号石蓋土墳墓 (図版24-1・25-1, 第31図)

墓地群のなかで西北隅に存在し、2号木棺墓の北に隣接する、二段掘りの石蓋土墳墓。一段目の掘り込みは、不整形な長方形プランで、長辺0.97m、短辺0.60m、本来はもっと深かったものと思われるが深さ0.05m程度が残る。二段目掘り込みは、長さ0.55m、幅0.30mの長方形プランに掘り込まれるが、一段目掘り込みのなかでやや北側に偏り、深さは0.20mを有す。床面の長さは0.47mで、幅は0.17~0.22m。南側より北側がやや広い。土墳墓の主軸方向は、二段目掘り込みの主軸でN46°Wである。蓋石は、A3判程度の広さで5~6cm厚さの緑色片岩板石を3枚用いているが、北側の2枚は二段目掘り込みをほぼ覆うように接して並べられており、南側の3枚目は薄めの方を真中の石の上に被せて並べられている。墓境内・床面などに遺物の出土は無く、顔料塗布の痕跡もみられない。

2号石蓋土墳墓 (図版24-2・25-2, 第31図)

2号木棺墓の南側、2号夷棺墓の西側に隣接する、二段掘り込みの石蓋土墳墓で、主軸方向はN37°20'Wをとる。一段目の掘り込みは、北側が広めになる楕円形プランで、長径1.25m、短径0.65~0.80m程度の広さで、最も高低差のある部分で0.20m程の深さを有す。二段目の掘り込みは、長さ0.85m、幅0.40mで、深さは0.20~0.30mを測る。床面は、北側の幅0.32m、南側の幅0.22m、長さ0.74mを測るが、足位と思われる南側がわずかに下がる。蓋石には、緑色片岩の扁平石が用いられ、5枚の細長い石と1枚の小さな石で覆っている。蓋の並べ方は、頭位と思われる北側に長さ70cm、幅40cm、厚さ5cm程度の石をまず置き、5~6cm重なるように長さ70cm、幅15~40cm、厚さ5cm程度の石を南側に乗せ、さらに南側に長さ35~45cm、幅25cm、厚さ5cm程度の石を少し重なるように乗せて並べる。2番目と3番目の石の間は小さな扁平石で補っており、この上に長さ60cm、幅20cm、厚さ2~5cm程度の石で覆って、さらに南側に接して長さ40~50cm、幅30cm、厚さ4~7cm程度の石が並べられている。なお、2番目・4番目の石が削平時に割れて西側部分はズレを生じており、1番目と2番目の石の上を覆う石が有ったか否かは不明。埋土中には、目貼り粘土の名残らしい粘土塊を若干検出したが、顔料の痕跡や遺物の出土はみられなかった。



第 31 图 1~4 号石瓮土墳墓实际图 (1/30)

3号石蓋土壙墓 (図版24・3・25-3, 第31図)

1号甕棺墓の南, 3号甕棺墓の東, 13号甕棺墓の西に接して位置する二段掘りの石蓋土壙墓で, 墓壙は13号甕棺墓墓壙と一部重複するが, 切り合い関係は明確でない。一段目の掘り込みは不整形円形で長径 $0.85\text{m} + \alpha$, 短径 0.70m 程度の広さを有すが削平のため深さは不明。二段目の掘り込みは, 長方形プランで, 長さ 0.55m , 幅 0.30m , 深さ 0.15m , 主軸方向 $\text{N}44^{\circ}30' \text{W}$ を測るが, 幅 0.20m 程度と狭い床面は北側がやや下がる。蓋石は緑色片岩の扁平石が2枚並べられた状況で残るが, 掘り込みの状態からすると, 南側にもう1枚有ったのかも知れない。北側の石は長さ 50cm , 幅 $20\sim 30\text{cm}$, 厚さ 7cm 程度の, 南側の石はこれより少し小さく薄い石を用いている。埋土は暗赤褐色土で, 蓋石の目貼り粘土の一部と思われる灰白色粘土が少し混じる。埋土中・床面には, 顔料の痕跡や遺物の出土はみられなかった。

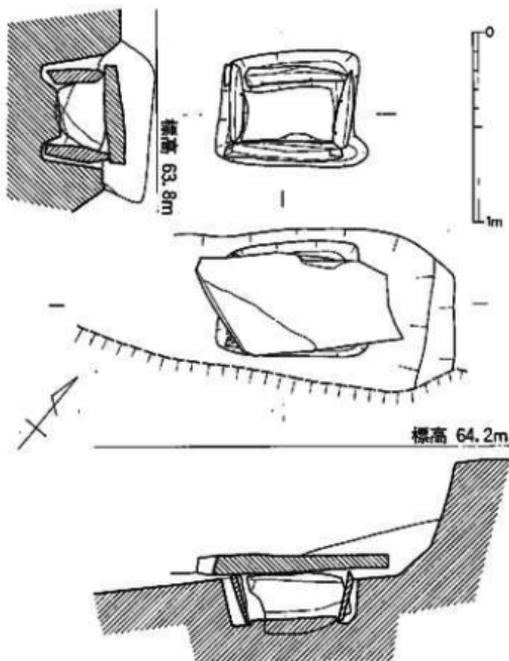
4号石蓋土壙墓 (第31図)

8号木棺墓・11号甕棺墓の北側に位置する二段掘りの石蓋土壙墓で, 上部は後世の溝によって削平されている。一段目の掘り込みは, ちょうど溝の底面と重なるため残存状況は悪いが, 長さ $0.75\text{m} + \alpha$, 幅 0.80m 程度の広さの不整形プランを呈する。二段目の掘り込みは, 長さ 0.55m , 幅 0.30m 程度の長方形で, 深さ 0.15m 前後を測る。床面は, 長さ 0.47m , 幅 0.22m の広さで平坦に掘り込まれている。埋土中に遺物などの出土はない。蓋石は, 長さ 55cm , 幅 40cm , 厚さ 5cm 程度の緑色片岩扁平石が1枚, 南西側に残されているものの, 蓋石は二段目の掘り込みを完全に覆わない。本来は蓋石が北西側にもあったのに散逸し, 残った石も削平時に傾いたのであろう。

5. 石棺墓 (図版26-1・2, 第32図)

農道の崖際に検出された石棺墓で、7号木棺墓・9号木棺墓の南側に位置する。この墓地群では弥生時代の石棺墓はこの1基だけである。崖で墓塚の南側を失うが、崖面で墓塚東側の掘り込みを確認しえた。ただし墓塚西側については確認できなかった。現状での墓塚は、長さ1.40m + α 、幅0.85m + α の長方形だが、一段目の底面は長さ1.10m、幅0.65m、崖面で確認した深さは0.60mを測る。

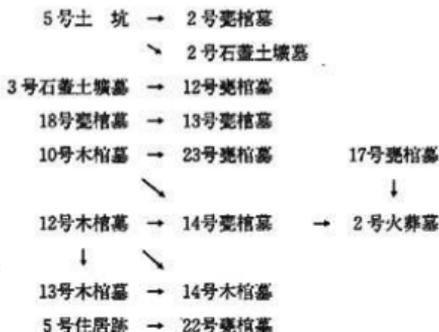
一段目の底面から、長さ0.70m、幅0.60mの二段目の墓塚が掘り下げられており、この中に、緑色片岩扁平石4枚を用いて石棺を箱形に組合わせている。主軸方向はN51°Eをとる。厚さ5~7cmの銅板は、墓塚底面よりさらに0.10m程度深く掘り下げて、厚さ3cm程度と薄めの小口板は0.05m程度掘り下げて据えられる。蓋石は、長さ80~100cm、幅50cm、厚さ7~10cmの緑色片岩の扁平石を用いており、目貼り粘土はない。棺内床面は素掘りのままだが、長辺47~52cm、短辺29~33cm、高さ22~25cmの空間を作っている。棺内への土砂の流入はほとんどみられなかったが、遺物の出土もなかった。時期について、明確に判断できる材料はないが、木棺墓・変棺墓と同様の時期を考えておきたい。(小池)



第32図 石棺墓実測図 (1/30)

6. 甕 棺 墓

甕棺墓は調査区の全域で25基検出したが、丘陵の南側は道路としてカットされているため全容は揃えなかった。甕棺墓は丘陵に対して直交する一群（A群）と平行する一群（B群）がある。甕棺墓の時期は、弥生時代中期初頭～前半を主体とし、他の遺構との切合い関係は次のようになる。（矢印は古→新を表す）

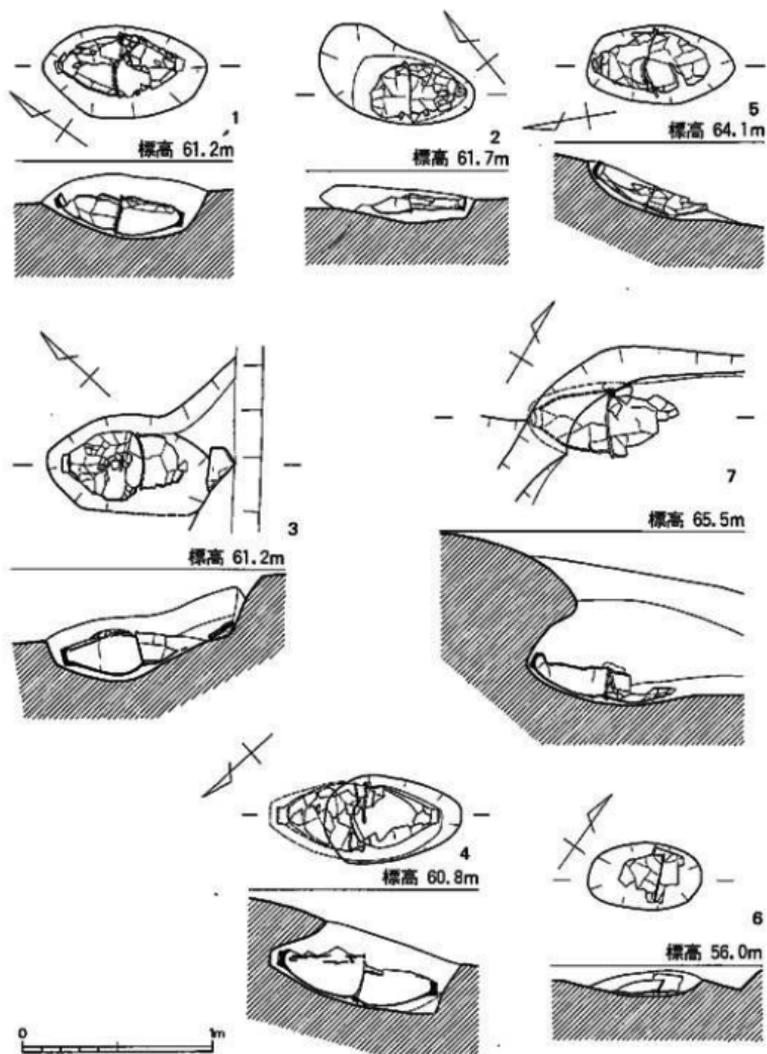


1号甕棺墓（図版27-1，第33図）

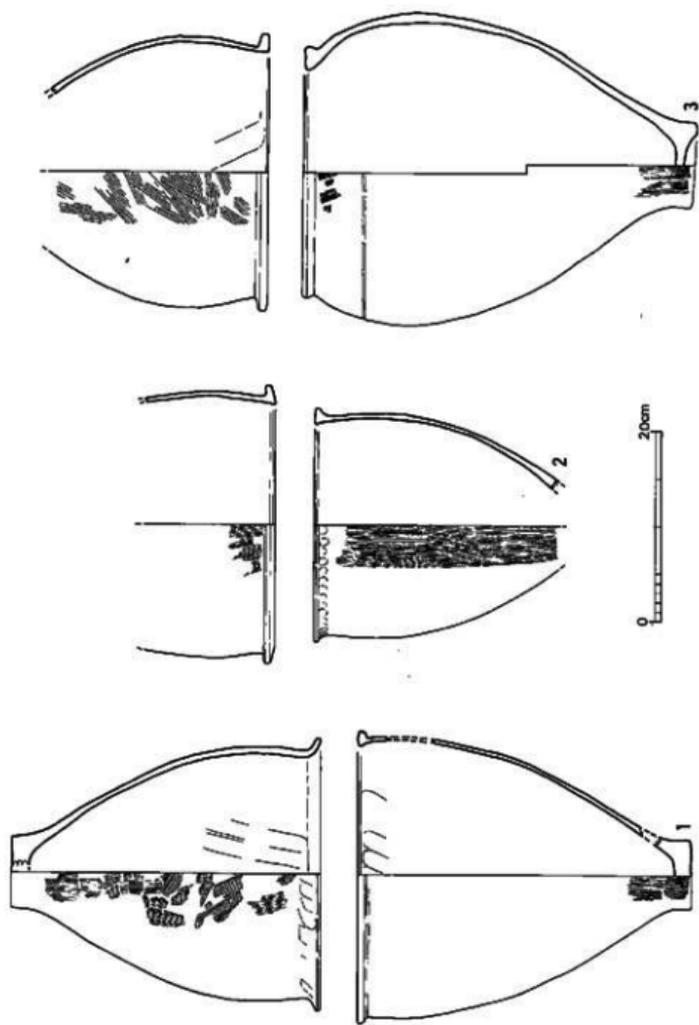
調査区の西側で検出した接口式の小児用甕棺墓であり、A群に属する。墓壙は長軸0.87m、短軸0.49mを測る楕円形を呈し、北甕の方が高くなっている。また、南甕に穿孔がみられたので北甕を上甕、南甕を下甕とした。上甕は上半部が大破している。主軸方位はN34°Wを示し、埋置角度は+10°を測る。甕棺内からの遺物の出土はなかった。

上 甕（図版38，第34図）器高32.4cm，復原口径28.9cm，復原底径7.6cmを測る小型の甕である。口縁部は緩やかに外方に開き、胴部の張りは弱い。底部は厚い平底である。調整は口縁部ヨコナデ，内面ナデ，外面ハケ目による。また，口縁部外面には指頸圧痕がみられる。胎土に細砂を多く含む。焼成は良好で，黄褐色を呈する。

下 甕（図版38，第34図）推定器高35.0cm，復原口径30.8cm，底径7.3cmを測る小型の甕である。口縁部は突出度の弱い逆L字状を呈し，頸部よりそのまま底部に移行する。底部は厚い平底である。調整は口縁部ヨコナデ，内面ナデ，外面ハケ目による。口縁部内面には指頸圧痕がみられる。胎土に細砂を多く含む。焼成はやや軟質で，灰黄褐色を呈する。下甕には円孔を施しているが，器壁が脆いため接合が十分できず，その部位は図示できなかった。



第 33 图 1—7号粟柏墓穴平面图 (1/30)



第 34 图 1~3 号素胎夹陶器 (1/6)

2号甕棺墓 (図版27-2, 第33図)

2号石蓋土墳墓の東隣に並列し、5号土坑を切る。接口式の小児用甕棺墓であり、A群に属する。墓壇は楕円形を呈し、長軸0.85m、短軸0.40mを測る。甕棺は掘削を受け大破しており、何れが上甕か下甕か区別付け難いが、墓壇の西側が広がっているため西甕が上甕であろう。甕棺はほぼ水平に埋置しており、主軸方位はN50°Wを示す。甕棺内からの遺物の出土はなかった。

上甕 (第34図) 残存器高13.8cm、復原口径29.4cmを測る小型の甕であり、胴部中位以下を欠く。口縁部は逆L字状を呈し、口縁部平坦面は外傾する。調整は口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ハケ目による。胎土に細砂を多く含む。焼成は良好で、黄褐色を呈する。また、外面には黒斑がみられる。

下甕 (図版38, 第34図) 残存器高25.8cm、復原口径24.8cm、底径7.3cmを測る小型の甕であり、底部を欠く。口縁部は突出度の弱い逆L字状を呈し、胴部上位で若干膨らみ、底部に移行する。調整は口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ハケ目による。また、口縁部外面には指頭圧痕がみられる。胎土に細砂を多く含む。焼成は良好で、黄褐色を呈する。また、内外面とも黒斑がみられる。

3号甕棺墓 (図版27-3, 第33図)

1号甕棺墓の南東に位置する接口式の小児用甕棺墓であり、A群に属する。墓壇の南東側はカットされているため形状・規模は不明。上甕は上半部が大破しているが、下甕は口縁部を欠く程度である。墓壇の南側にある石は、上甕を安定させるための寝石と考えられる。底面は上甕の方に高くなっており、主軸方位はN42°Wを示す。甕棺内からの遺物の出土はなかった。

上甕 (図版38, 第34図) 残存器高23.1cm、復原口径29.0cmを測る小型の甕であり、底部を欠く。口縁部は逆L字状を呈し、口縁部平坦面は水平である。胴部はやや張りみせ底部に移行する。調整は口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ハケ目による。胎土に細砂を多く含む。焼成は良好で、黄褐色を呈する。また、外面には黒斑がみられる。

下甕 (図版38, 第34図) 器高42.2cm、復原口径26.6cm、胴部最大径33.0cm、底径9.1cmを測る小型の甕である。口縁部は肥厚し、内側に突出する。口縁部平坦面はほぼ水平である。頸部がよく締まっているために胴部は強く張っている感がある。胴部上位にヘラ描き沈線を1条巡らし、上底の底部に移行する。調整は口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ハケ目による。胎土に細砂を多く含む、雲母粒もみられる。焼成は良好で、黄褐色を呈する。また、外面には黒斑がみられる。下甕には円孔を施しているが、接合が十分でなく、その部位は図示できなかった。

た。

(小田)

4号甕棺墓 (図版28-1, 第33図)

1号甕棺墓の西側に発見された小児用の甕棺墓である。斜面に平行する長径0.70m, 短径0.50m弱の楕円形を呈する墓墳で、斜面の高い側に横穴を穿って甕棺を挿入している。主軸方位はN48°20'Eにとり、傾斜角度は挿入された下甕底部が高くなる-10°30'を示す。甕棺は接口式だが目貼り粘土の痕跡はなく、甕棺内外からの遺物の出土もない。(小池)

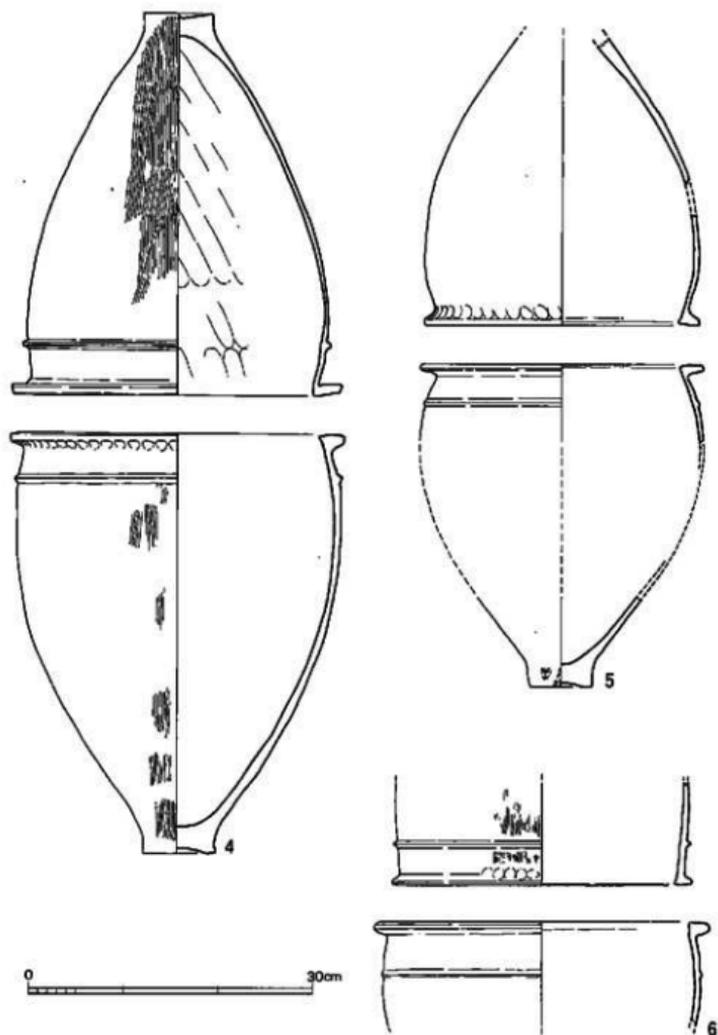
上 甕 (図版39, 第35図) 器高40.1cm, 口径34.7cm, 胴部最大径31.8cm, 底径7.6cmを測る小型の甕である。口縁部は逆L字状を呈し、口縁部平坦面はやや外傾している。胴部の張りは弱く、頸部よりそのまま内窪みの底部に移行する。頸部のやや下位に断面M字形凸帯を1条貼付している。調整は口縁部ヨコナデ、内面ユビナデ、外面ハケ目による。胎土に細砂を多く含み、雲母・角閃石粒も見られる。焼成は良好で、黄褐色を呈する。外面には煤が遺存しており、日常容器の転用品か。

下 甕 (図版39, 第35図) 器高44.5cm, 口径35.3cm, 胴部最大径34.3cm, 底径7.8cmを測る小型の甕である。口縁部は逆L字状を呈するが、上甕程突出していない。口縁部平坦面は水平である。胴部でやや張り、内窪みの底部に移行する。頸部のやや下位に断面三角形凸帯を1条貼付している。調整は口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ハケ目による。また、口縁部外面には指頭圧痕が一周する。胎土に細砂を多く含み、雲母・角閃石粒もみられる。焼成は良好で、黄褐色を呈する。また、外底部には黒斑がみられる。(小田)

5号甕棺墓 (図版28-2, 第33図)

4号木棺墓と6号木棺墓のほぼ中間に位置する小児用の甕棺墓である。斜面の削平によって大半を失うが、斜面の高い方に横穴を穿って甕棺を挿入しており、主軸方位はN10°Eで斜面に平行する。傾斜角度は下甕底部が高くなっていて-15°前後になるかと思われるが、大半を失うためははっきりしない。甕棺は接口式だが、下甕の口縁部下の一部が失われている。甕棺内外からの遺物の出土はない。(小池)

上 甕 (図版38, 第35図) 残存器高30.5cm, 復原口径29.0cmを測る小型の甕であり、底部を欠く。口縁部は肥厚する逆L字状を呈し、口縁部平坦面は若干内傾している。胴部の張りは弱く、頸部より底部に移行する。調整は磨滅しているため不明であるが、口縁部外面には指頭圧痕が一周する。胎土に細砂を多く含み、雲母・角閃石粒もみられる。焼成は良好で、黄褐色を呈する。外面には黒斑がみられる。



第 35 图 4~6 号瓷棺实测图 (1/6)

下甕(第35図)下甕は器面が脆く接合ができず、ために器高は不明。復原口径30.0cm、底径6.0cmを測る。口縁部は逆L字状を呈し、口縁部平坦面は水平である。頸部のやや下位に断面三角形凸帯を1条貼付している。底部は内窪みである。調整は口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ハケ目による。胎土に細砂を多く含む。焼成は良好で、茶褐色を呈する。(小田)

6号甕棺墓(図版28-3, 第33図)

9号木棺墓と11号木棺墓の中間に位置し、この木棺墓とはほぼ主軸方向が揃う小児用の甕棺墓で、尾根道によって上部を大きく削平されている。現状では墓壁のうちで最も深い部分のみが残ったような状態で、長径0.60m、短径0.35mの凹みのなかに接口式の甕棺が、上甕・下甕共に口縁部の一部が残るのみである。主軸方位はN54°30'Eにとり、斜面の高い方の東北側に横穴を穿って下甕を挿入するタイプの甕棺墓であろう。(小池)

上甕(第35図)口縁部一胴上位の破片であり、残存器高11.0cm、復原口径31.0cmを測る小型の甕である。口縁部は肥厚する逆L字状を呈し、突出度は弱い。口縁部平坦面は水平である。頸部のやや下位に断面三角形凸帯を1条貼付している。調整は口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ハケ目による。また、口縁部外面には指頭圧痕が一周する。胎土に細砂を多く含む、黄褐色を呈する。

下甕(第35図)上甕同様、口縁部一胴上位の破片であり、残存器高11.0cm、復原口径35.0cmを測る小型の甕である。口縁部は上甕よりも肥厚し、逆L字状というよりは断面三角形を呈する。頸部のやや下位に断面三角形凸帯を1条貼付している。調整は口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ハケ目による。胎土に細砂を多く含む、雲母・角閃石粒のみられる。焼成は良好で、茶褐色を呈する。(小田)

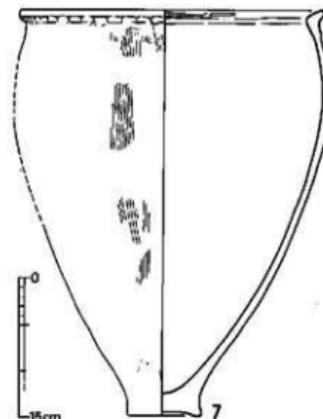
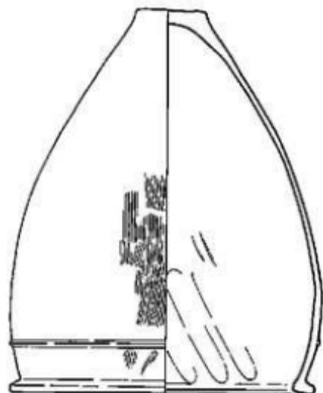
7号甕棺墓(図版29-1・2, 第33図)

農道の崖面に接し、11号木棺墓の東側に位置する小児用の甕棺墓である。墓壁は崖でその大半を失っているが、斜面の高所側に相当する西側に横穴を穿って甕棺を挿入している。主軸方位はN59°Eにとり、傾斜角度は挿入された下甕が高くなる $-8^{\circ}30'$ を示す。甕棺は接口式で北側の接口部に目貼り粘土がみられるものの、床面側では粘土はみとめられない。現状では0.60m以上の深さに墓壁が掘り込まれて一部岩盤を掘り進めているが、崖面を伝って粘土が流出してしまったのかどうかの判断はしえなかった。あるいは当初から床面側の粘土が不要であったのであろうか。棺内外からの遺物の出土はみられなかった。(小池)

上甕(図版39, 第36図)器高31.8cm、口径31.8cm、胴部最大径32.8cm、底径7.3cmを測

る小型の甕である。口縁部は肥厚する逆し字状を呈し、口縁部平坦面は内傾する。胴部には張りが見られ、胴径が口径を上回る。底部は締まりが悪く、平底を呈する。頸部のやや下位に断面三角形凸帯を1条貼付している。調整は口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ハケ目による。胎土に細砂を多く含み、雲母・角閃石粒もみられる。焼成は良好で、茶褐色を呈する。また、外面には黒斑がみられる。

下甕(図版39、第36図)器高42.9cm、口径32.4cm、底径7.9cmを測る小型の甕である。口縁部は肥厚し、「く」字状に屈曲する。胴部でやや張り、内窪みの底部に移行する。調整は口縁部内面ハケ目、内面板ナデ、外面ハケ目による。また口縁部外面には指頭圧痕が一周する。胎土に細砂を多く含み、雲母粒もみられる。焼成は良好で、黄褐色を呈する。また、外面には煤が遺存しており、日常容器の転用品であろう。(小田)



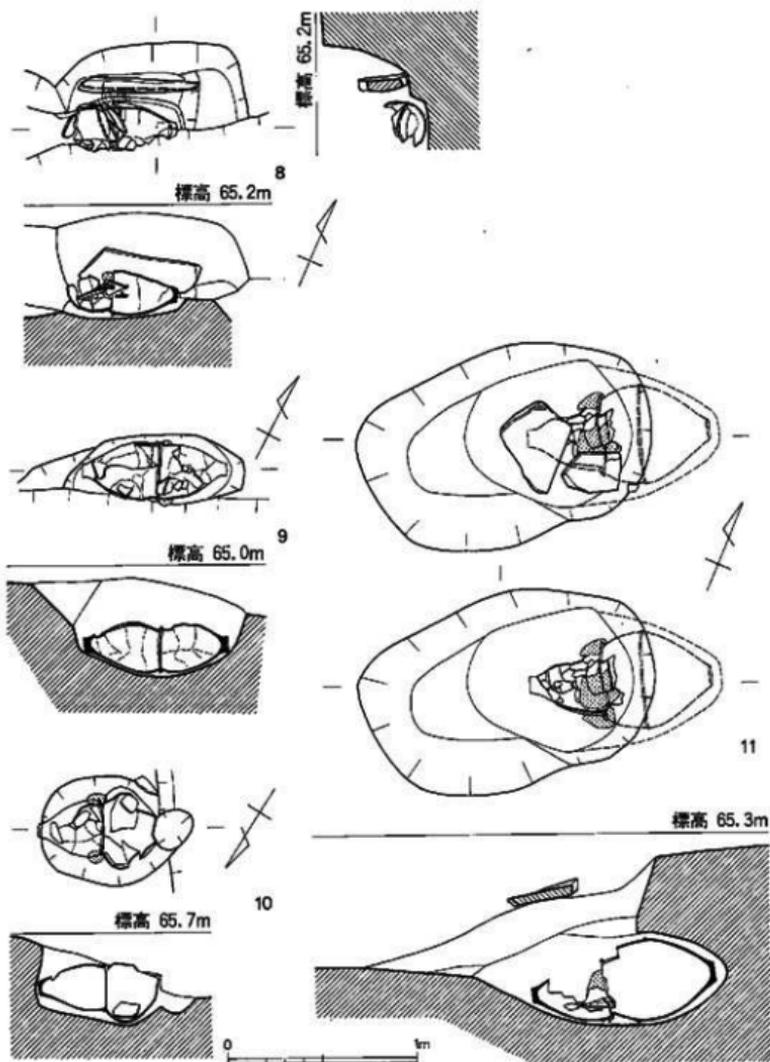
第36図 7号甕棺実測図(1/6)

8号甕棺墓(図版29-3、第37図)

7号甕棺墓の東側に隣接し、同じように南側を奥道の壁で削り取られている小児用の甕棺墓である。墓壇は長径1.00m + α 、短径0.45m + α の隅丸方形ないし楕円形の平面形を呈する。残りの良い部分で上面から0.45mの深さの所に小さな平坦面があり、この面から

0.10m掘り下げて接口式の甕棺を埋置しているが、西側の墓壇壁面が削り取られているため横穴を穿つタイプか否かははっきりしない。

甕棺は主軸方位をN67°Eに埋置されているが、北側に平行して緑色片岩扁平石が立てて据えられている。石は長さ60cm余り、幅15~25cm、厚さ3~7cmで上面は西側に高くなっている。甕棺の南側にも同様に扁平石が据えられていたのか、あるいは甕を覆うように蓋石があっ



第 37 图 8-11号壘枪高实测图 (1/30)

たのか判断しうる痕跡はないが、仮に相対する石と蓋石があったとしてもその空間の中に甕棺が納まってしまふであろう。もし、この仮定が許されるならば、側石の角度と墓墳の状況からみて、西側を下甕とする方が妥当であろう。傾斜角度は -5° を示す。甕棺の接口部の目貼り粘土は、側石との間にやや厚くみられるが、床面の部分では7号甕棺墓同様みとめられない。また、棺内外からの遺物の出土もみられなかった。

(小池)

上甕(図版39, 第38図)器高33.4cm, 復原口径32.4cm, 底径7.2cmを測る小型の甕である。口縁部は逆L字状を呈し、口縁部平坦面は水平である。胴部の張りは弱く、内底の底部に移行する。調整は口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ハケ目による。また、口縁部外面に指頭圧痕が一周する。胎土に細砂を多く含む。焼成は良好で、茶褐色を呈する。外面に黒斑がみられる。

下甕(図版39, 第38図)胴部以下を欠く小型甕の破片であり、残存器高18.1cm, 復原口径31.7cmを測る。口縁部は肥厚する逆L字状を呈し、口縁部平坦面はほぼ水平である。胴部はやや張りをみせ、胴径と口径はほぼ等しい。頸部のやや下位に断面三角形凸帯を1条貼付する。調整は口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ハケ目による。胎土に細砂を多く含む。焼成は良好で、黄褐色を呈する。外面に黒斑がみられる。

(小田)

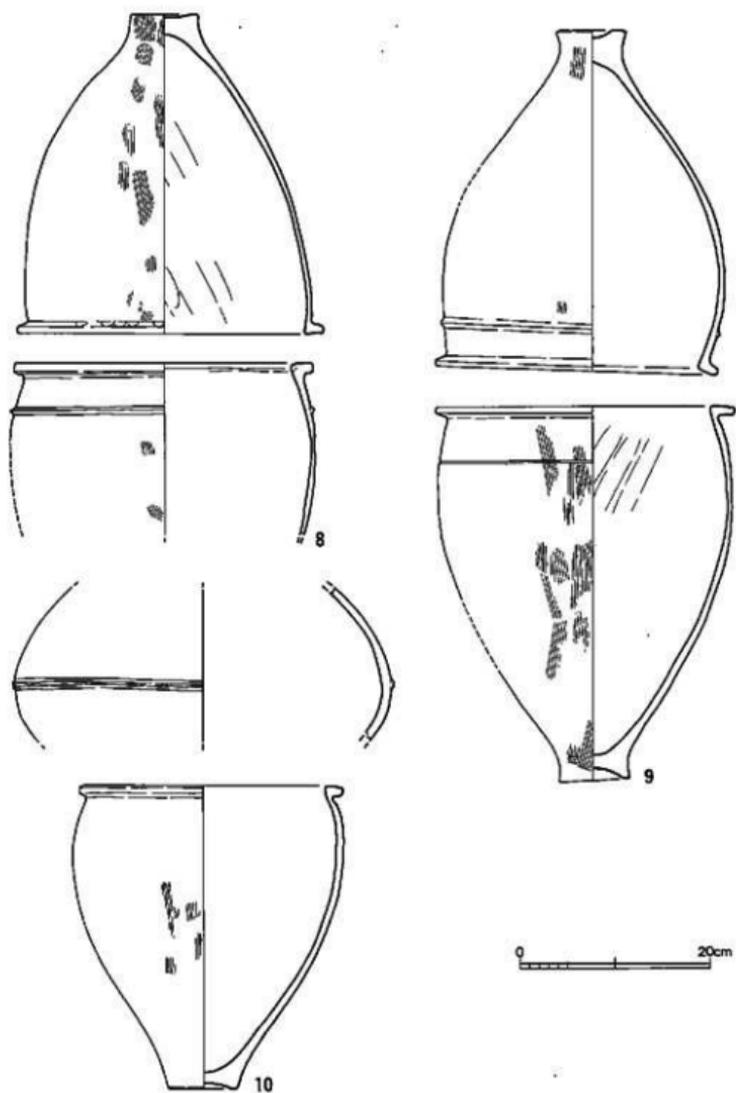
9号甕棺墓(図版30-1, 第37図)

8号甕棺墓の東側に隣接し、同じように南側を農道で削り取られている小児用甕棺墓。墓墳は長径0.95m, 短径0.35m+ α の楕円形に確認したが、西側は崩壊して広がっているのだろう。残りの良い部分で上面から0.50m程度の深さである。甕棺は、この墓墳底ぎりぎり一杯に埋置されているが、接口式で、主軸方位は $N61^{\circ}E$ をとる。東側が上甕であろう。下甕底部がやや上がり気味で $-0^{\circ}30'$ の埋置角度を測る。目貼り粘土は、上甕口縁部を覆うが下甕の口縁部上面より先には及ばず、墓墳底側ではみられない。棺内外からの遺物の出土はない。

(小池)

上甕(図版40, 第38図)器高36.5cm, 口径29.8cm, 胴部最大径29.6cm, 底径7.4cmを測る小型の甕である。口縁部は肥厚する逆L字状を呈し、口縁部平坦面は内傾する。胴部でやや張り、上底の底部に移行する。頸部のやや下位に断面三角形凸帯を1条貼付している。調整は口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ハケ目による。胎土に細砂を多く含む。焼成は良好で、黄褐色を呈する。また、外底部には黒斑がみられる。

下甕(図版40, 第38図)器高39.2cm, 口径32.0cm, 胴部最大径31.6cm, 底径7.3cmを測る小型の甕である。口縁部は逆L字状を呈し、口縁部平坦面は若干外傾する。胴部には張りがみられ、胴径と口径はほぼ等しい。底部は上底を呈する。頸部のやや下位にヘラ状工具による沈線をもつ。調整は口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ハケ目による。胎土に細砂を多く



第 38 图 8~10号菱棺夹铜网 (1/6)

含み、雲母・角閃石粒もみられる。焼成は良好で、黄褐色を呈する。また、外面には煤が遺存しており、日常容器の転用品であろう。

10号甕棺墓（図版30-2，第37図）

B群に属し、10号木棺墓の西側に位置する接口式の小児用甕棺墓である。墓域は後世の道路によって上部が破壊されているが、検出面では楕円形を呈し、長軸0.8m程、短軸0.58mを測る。甕棺はほぼ水平に埋置され、上甕は壺の口頸部を打ち欠いて使用している。また、接口箇所には灰黄色粘土による目張りを施す。上甕の底部はピットに壊され存在しない。主軸方位はN58°Eを示す。甕棺内からの遺物の出土はなかった。

上 甕（図版40，第38図）残存器高16.5cm，復原胴径40.0cmを測る壺であり、口縁部を打ち欠く。胴部最大径の部位に断面M字形凸帯を1条貼付している。磨滅顕著なため調整は不明。胎土に細砂を多く含み、雲母・角閃石粒もみられる。焼成は良好で、暗黄褐色を呈する。

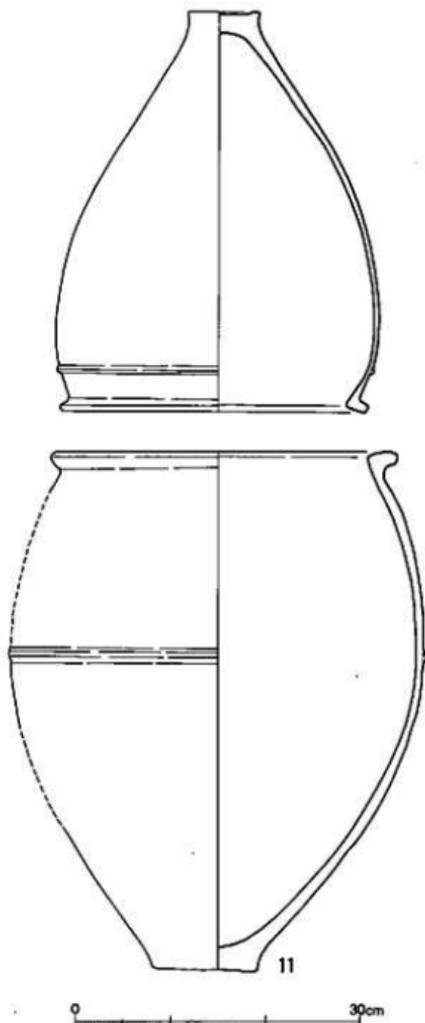
下 甕（図版40，第38図）器高31.7cm，口径28.0cm，胴部最大径28.7cm，底径7.4cmを測る小型の甕である。口縁部は逆L字状を呈し、口縁部平坦面は若干外傾する。胴部はよく張っており、胴径が口径を上回る。底部は上底を呈する。調整は口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ハケ目による。胎土に細砂を多く含み、角閃石粒もみられる。焼成は良好で、黄褐色を呈する。また、外面には黒斑がみられる。

11号甕棺墓（図版30-3，第37図）

8号木棺墓の西側に位置する接口式の成人用甕棺墓であり、B群に属する。墓域は長軸1.55m，短軸1.01mを測る楕円形の墳域を掘り、さらに奥行き0.48mの横穴を掘り込み下甕を挿入している。また、西側にはステップが付く。甕棺は上甕の方が下がっており、埋置角度は-6°を測る。接口箇所には粘土による目張りがみられる。主軸方位はN63°Eを示す。甕棺内からの遺物の出土はなかった。

上 甕（図版40，第39図）器高42.3cm，復原口径32.2cm，底径7.6cmを測る小型の甕である。口縁部は逆L字状を呈し、口縁部平坦面は内傾する。胴部は張っており、内窪みの深い底部に移行する。頸部のやや下位に断面三角形凸帯を1条貼付している。磨滅顕著なため調整は不明。胎土に細砂を多く含む。焼成は良好で、茶褐色を呈する。

下 甕（図版40，第39図）器高55.1cm，口径36.8cm，底径11.1cmを測る中型の甕である。口縁部は突出度の弱い逆L字状を呈し、口縁部平坦面はやや内傾する。頸部はよく締まり、胴部中位に最大径があり、そこに断面台形凸帯を1条貼付している。磨滅顕著なため調整は不明。



第 39 図 11号壺棺実測図 (1/6)

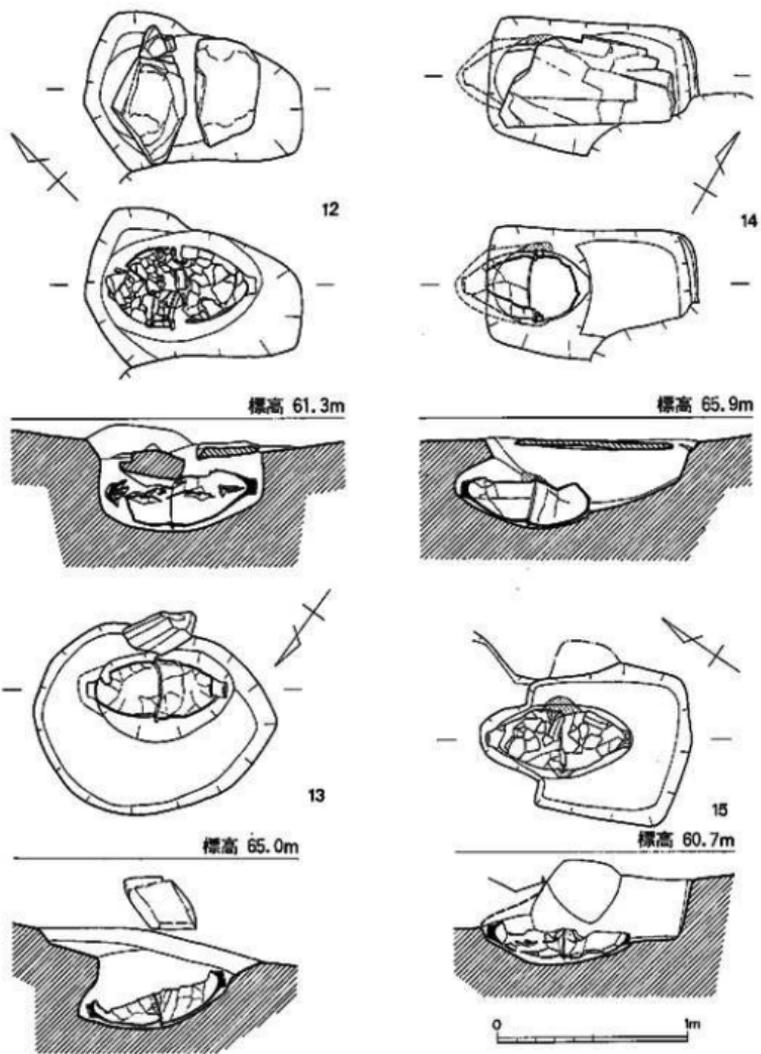
胎土に細砂を多く含み、雲母・角閃石粒もみられる。焼成は良好で、茶褐色を呈する。また、胴部外面には黒斑がみられる。

12号壺棺墓 (図版31-1・2, 第40図)

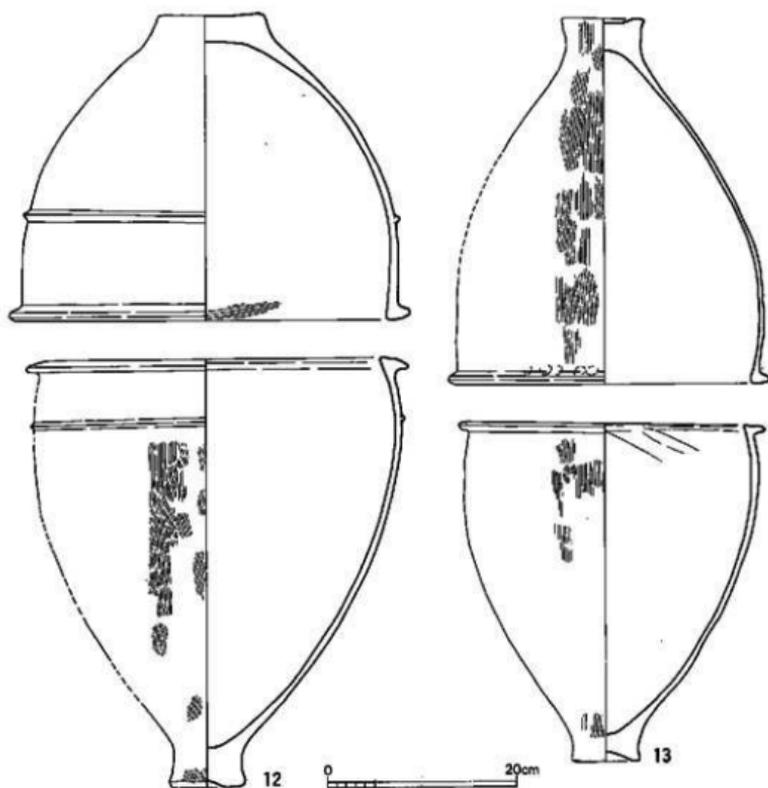
3号石蓋土壺墓の東に隣接し、当壺棺がそれを切っているようである。接口式の小児用壺棺墓であり、A群に属する。墓壕は楕円形を呈し、長軸0.86m、短軸0.58mを測る。壺棺の上には平石が2枚あり、標石が落ち込んだものであろう。壺棺はほぼ水平に埋置しており、接口箇所粘土目張りはみられない。主軸方位はN46°Wを示す。壺棺内からの遺物の出土はなかった。

上 壺 (図版41, 第41図) 器高31.9cm, 口径42.1cm, 底径11.0cmを測る鉢形の土器である。口縁部は突出度の弱い逆L字状を呈し、口縁部平坦面は外傾する。頸部から丸みを帯びて平底の厚い底部に移行する。器高の1/3の部位に断面三角形凸帯を1条貼付している。調整は口縁部ヨコナデ、内面板ナデによる。胎土に細砂を多く含み、雲母・角閃石粒もみられる。焼成は良好で、黄褐色を呈する。

下 壺 (図版41, 第41図) 器高45.4cm, 口径40.0cm, 底径8.0cmを測



第 40 图 12—15号穴墓实际测图 (1/30)



第 41 図 12・13号瓷棺実測図 (1/6)

る小型の甕である。口縁部は突出度の弱い逆L字状を呈し、口縁部平坦面は強く外傾する。胴部の張りは弱く、頸部からそのまま内窪みの高い底部に移行する。また、頸部のやや下位に断面三角形凸帯を1条貼付している。調整は口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ハケ目による。胎土に細砂を多く含み、雲母粒もみられる。焼成は良好で、茶褐色を呈する。また、外面には煤が遺存しており、日常容器の転用品と考えられる。(小田)

13号甕棺墓 (図版31-3, 第40図)

9号木棺墓・18号甕棺墓の南側に位置する小児用の甕棺墓。結晶片岩の塊石1個がまず発見されたので、木棺墓の存在することも想定しながら注意深く遺構検出を行ったが、地面が乾燥気味でなかなか明確にプランを把握しえず、一応長径1.30m、短径0.95mの不整形な落込みを検出したのは、塊石の下面より少し低くなった褐色土の地山が明るいい色調になる部分で、墓壇上部の様子については確認できなかった。塊石は落込みの南端に相当する部分の上であり、約10cmの深さに皿状に凹む落込みの南端寄り小児用の甕棺墓が埋置されているので、この塊石は甕棺墓の標石として機能していたものと考えたい。人頭大より大きい20~30cm角程の大きさで緑色片岩に比べるとやや脆い感じの石である。落込みの下面で検出できた掘り込みは長径0.70m、短径0.50m弱の楕円形プランで、墓壇底まで0.30~0.40mの深さを有す。斜面の高い側になる東側に横穴を穿って甕棺を挿入する接口式の甕棺で、主軸方位はN54°Eにとり、埋置角度は+14°を示す。上甕・下甕共に土圧で上半分は陥没しているが、目貼り粘土の痕跡はみとめられない。なお、標石と考える塊石は、墓壇内側に傾いていることと、甕棺の陥没状況からみて、本来は甕棺の上0.30~0.40mの高さに墓壇上縁があり、その南東隅部の上に標石を据えたのであろう。(小池)

上 甕 (図版41, 第41図) 器高38.8cm, 口径33.7cm, 底径8.7cmを測る小型の甕である。口縁部は肥厚する逆し字状を呈し、口縁部平坦面は外傾している。胴部の張り弱く、頸部よりそのまま内窪みの底部に移行する。調整は口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ハケ目による。また、口縁部外面に指頭疔痕がみられる。胎土に細砂を多く含み、雲母・角閃石粒もみられる。焼成は良好で、茶褐色を呈する。外面には煤が遺存しており、日常容器の転用品であろう。

下 甕 (図版41, 第41図) 器高35.8cm, 口径32.2cm, 底径7.2cmを測る小型の甕である。口縁部は逆し字状を呈し、口縁部平坦面は水平である。胴部に張りはなく、上底の底部に移行する。調整は口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ハケ目による。胎土に細砂を多く含み、雲母粒もみられる。焼成は良好で、黄褐色を呈する。また、外面には黒斑がみられる。(小田)

14号甕棺墓 (図版31-1・2, 第40図)

10号木棺墓と12号木棺墓の間に位置する小児用の甕棺墓で、2号火葬墓によって墓壇の東南部が失われている。墓壇は長辺1.10m、短辺0.60~0.70m+αの不整形長方形プランを呈する。墓壇内中央部には、長さ90cm、幅45cm、厚さ3~4cmの緑色片岩板石が、東に下がり気味とはいえほぼ水平に置かれており、あたかも石棺墓や石蓋土壇墓の蓋石のように感じさせる。

しかし、この蓋石を除去して姿を現すのは接口式の甕棺墓であった。墓壇は深さ30cm余り

で岩盤に達するが、岩盤を掘り進んでおり、西側に横穴を穿って壙棺を挿入させている。

壙棺は、主軸方位をN60°Eにとり、下壙底部が高い-9°に傾置されている。目貼り粘土は15cm幅前後で接口部を厚めに覆っているが、床面より7cm程上位までで、岩盤を掘り込んだ床面部分ではほとんどみられない。調査時に石棺蓋を想定して探査したボーリング痕が付いてしまったが、壙に穿孔はない。棺内外に遺物の出土はみられなかった。壙棺に陥没がみられることからして、蓋石の陥没も考えられる。(小池)

上 壙 (図版41, 第42図) 器高29.5cm, 復原口径42.1cm, 底径8.2cmを測る鉢形の土器である。口縁部は肥厚せず、逆L字状に外反するのみである。頸部から丸みを帯びて平底の底部に移行する。頸部のやや下位に断面三角形凸帯を1条貼付している。調整は口縁部ヨコナデ, 内外面ヘラミガキによる。また、口唇部はハケ目を施す。胎土に細砂を多く含み、雲母・角閃石粒もみられる。焼成は良好で、黄褐色を呈する。

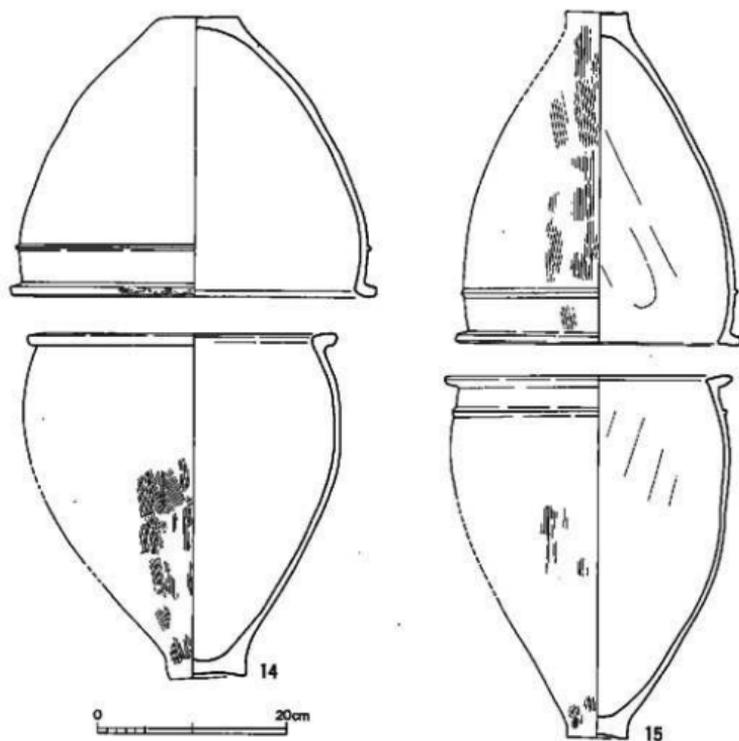
下 壙 (図版41, 第42図) 器高36.8cm, 口径32.6cm, 胴部最大径33.5cm, 底径8.0cmを測る小型の甕である。口縁部は肥厚する逆L字状を呈し、口縁部平坦面は内傾する。胴部はよく張っており、胴径が口径を上回る。底部は上底まではいかず、内側がやや窪み程度である。調整は口縁部ヨコナデ, 内面ナデ, 外面ハケ目による。胎土に細砂を多く含み、雲母・角閃石粒もみられる。焼成は良好で、茶褐色を呈する。また、外底部には黒斑がみられる。(小田)

15号壙棺墓 (図版32-3, 第40図)

墓地群西端部に位置し、4号壙棺墓の南側に隣接する小児用の壙棺墓。一辺0.70-0.80mの不整形プランの墓壇は、深さ0.35m程度残るが、墓壇の北側に横穴を穿って壙棺を挿入させている。壙棺は主軸方位をN35°Wにとり、-2°に傾置される接口式のもので、接口部には灰黄色を呈する目貼り粘土が厚く施されるものの下部には及ばない。上壙・下壙共に、土圧を受けて陥没している。棺内外からの遺物の出土はみられない。(小池)

上 壙 (図版42, 第42図) 器高34.6cm, 口径30.0cm, 底径7.4cmを測る小型の甕である。口縁部は逆L字状を呈し、口縁部平坦面は水平である。胴部の張りは弱く、内窓みの厚い底部に移行する。頸部のやや下位に断面三角形凸帯を1条貼付している。調整は口縁部ヨコナデ, 内面ナデ, 外面ハケ目による。胎土に細砂を多く含み、雲母・角閃石粒もみられる。焼成は良好で、黄褐色を呈する。また、胴下半部外面には黒斑がみられる。

下 壙 (図版42, 第42図) 器高38.0cm, 口径30.4cm, 底径6.5cmを測る小型の甕である。口縁部は逆L字状を呈し、口縁部平坦面は内傾する。胴部の張りは弱く、底部の締まりが悪いため下膨れの感を受ける。底部は上底を呈する。頸部のやや下位に断面三角形凸帯を1条貼付している。調整は口縁部ヨコナデ, 内面ナデ, 外面ハケ目による。胎土に細砂を多く含み、雲



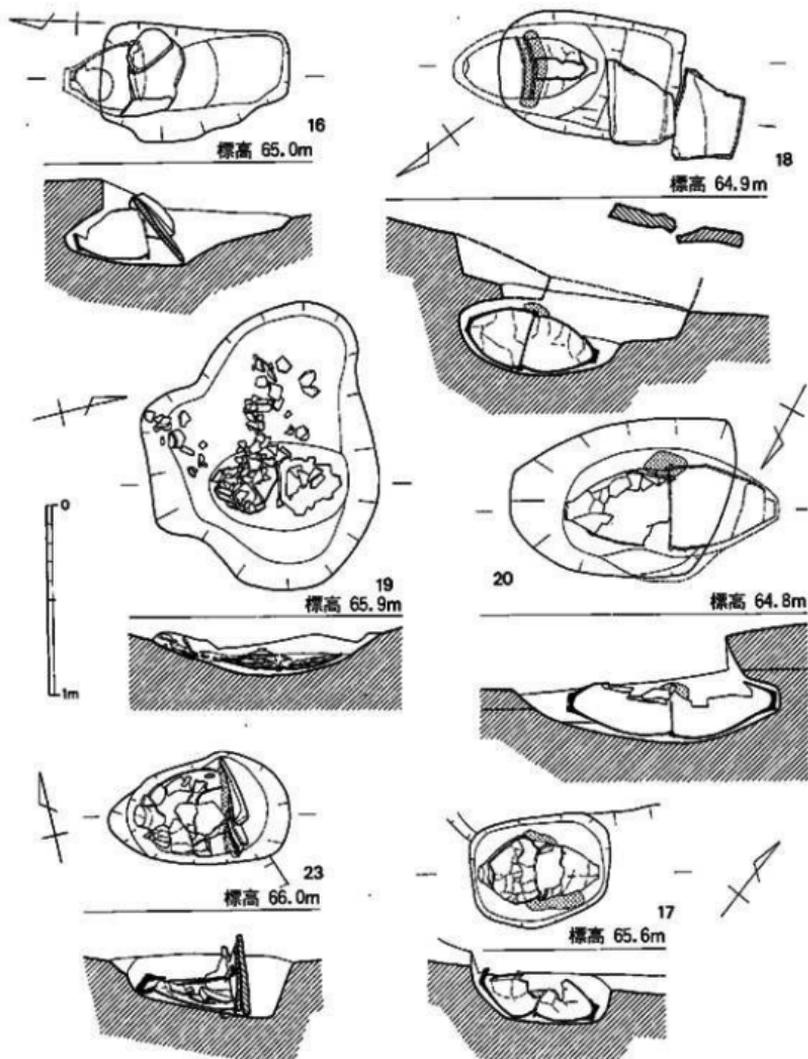
第 42 図 14・15号壺棺実測図 (1/6)

母・角閃石粒もみられる。焼成は良好で、暗茶褐色を呈する。

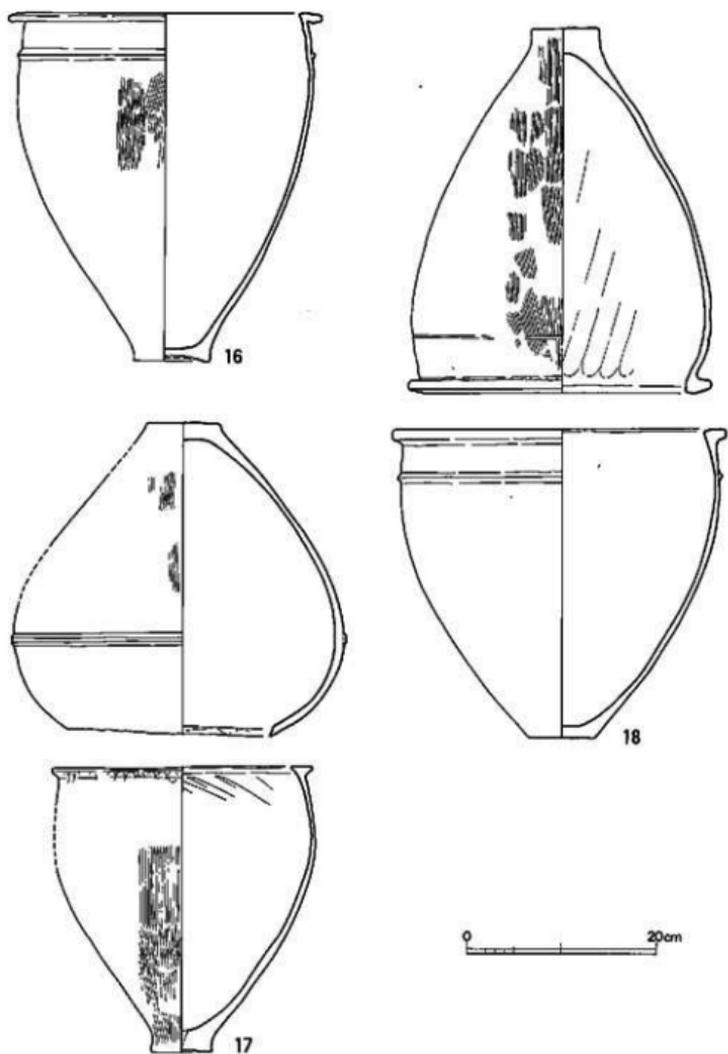
(小田)

16号壺棺墓 (図版33-1・2, 第43図)

6号木棺墓と8号木棺墓の中間, 11号壺棺墓の北側に隣接する小児用壺棺墓。長辺1.00m, 短辺0.35~0.50mの不整長方形プランを呈する墓壇は南半分に平坦面を有し, 北側に横穴が穿たれる。壺棺は, 石蓋を有する単棺で, 主軸方位N2°50'W, 傾斜角度+10°をとって横穴に挿入されている。蓋石は, 長さ45cm, 幅35cm, 厚さ3cm程度の扁平な緑色片岩で壺の口縁をほぼ覆い, その両脇に小振りな緑色片岩板石を1枚ずつ用いて蓋を完全なものにしている。現状



第 43 图 16-20·23号墓棺墓实测图 (1/30)



第 44 图 16~18号墓棺实测图 (1/6)

では甕と蓋石の間は床面で15cm程空いているが、目貼り粘土の痕跡はみられない。甕も土圧を受けて陥没を生じているが、蓋石も土圧で動いた可能性があろう。(小池)

甕 棺(図版43, 第44図) 器高36.6cm, 口径33.3cm, 胴部最大径31.4cm, 底径8.2cmを測る小型の甕である。口縁部は逆L字状を呈し、口縁部平坦面はやや外傾する。胴部には張りがみられ、締まりの悪い上底の底部に移行する。頸部のやや下位に断面三角形凸帯を1条貼付している。調整は口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ハケ目による。胎土に細砂を多く含み、雲母・角閃石粒もみられる。焼成は良好で、黄褐色を呈する。また、外面には煤が遺存しており、日常容器の転用品であろう。

17号甕棺墓(図版33-3, 第43図)

11号木棺墓と13号木棺墓との間で検出した接口式の小児用甕棺墓であり、2号火葬墓に切られる。検出面での墓壇掘方は隅丸方形を呈する。上甕の方が高くなっており、埋置角度は+19°を測る。下甕は小型の甕であるが、上甕は甕の口縁部を打ち欠いて使用している。接口箇所には粘土目張りがみられるが、一周していない。主軸方位はN52°Eを示す。甕棺内からの遺物の出土はなかった。

上 甕(図版42, 第44図) 残存器高33.0cm, 胴部最大径35.5cm, 底径7.0cmを測る甕であり、口縁部一頸部を打ち欠く。胴部最大径の部位に断面M字形凸帯を1条貼付しているが、凸帯が剝離した箇所では沈線が観察でき、凸帯を貼付する際の目印と考えられる。底部は平底である。調整は内面ナデ、外面ハケ目の後にヘラミガキを施す。胎土に細砂を多く含む。焼成は良好で、茶褐色を呈する。

下 甕(図版42, 第44図) 器高30.4cm, 口径27.5cm, 底径6.2cmを測る小型の甕である。口縁部は逆L字状と言うよりはT字状を呈し、口縁部平坦面は水平である。胴部の張りは弱く、内窪みの底部に移行する。調整は口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ハケ目による。また、口縁部外面に指頭圧痕が一固する。胎土に細砂を多く含み、雲母・角閃石粒もみられる。焼成は良好で、黄褐色を呈する。胴部外面には黒斑がみられる。(小田)

18号甕棺墓(図版34-1・2, 第43図)

7号木棺墓と9号木棺墓の間に位置する小児用の甕棺墓で、墓壇の上に石蓋を有す。石蓋は標高64.7~64.8m位に緑色片岩の扁平石を2枚並べたもの。30×40cm程度の大きさで7~10cm程度の厚さの石が用いられ、斜面の傾斜のためか西側の石が低くなっている。しかし、蓋石の下に墓壇プランをなかなか確認できず、0.40~0.50m下がった面でやっと検出した墓壇

は長さ0.90m、幅0.65mの不整長方形プランを呈するが、東側の方は横穴の陥没部分まで掘り進んでいるので本来は長さの短い隅丸方形に近いプランであっただろう。さきの蓋石は、墓壇の西側に偏って位置することになるが、墓壇上縁がさらに広がっていたとすれば、墓壇全体を覆えるようなものでなく、石蓋というよりは標石的な機能を有していたのであろうか。

甕棺は、墓壇北東側に穿たれた横穴に下甕が挿入される接口式の小児用棺で、主軸方位N36°E、傾斜角度15°に埋置される。接口部の目貼り粘土は、青灰白色粘土を幅10cm前後に巻いているが下面までは及ばない。棺内外からの遺物の出土はみられなかった。(小池)

上甕(図版42、第44図)器高38.2cm、口径32.0cm、底径7.2cmを測る小型の甕である。口縁部は肥厚する逆L字状を呈し、口縁部平坦面は外傾する。胴部でやや張り、平底の底部に移行する。頸部のやや下位にヘラ描き沈線を1条巡らす。調整は口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ハケ目による。胎土に細砂を多く含む。焼成は良好で、黄褐色を呈する。また、外面に黒斑がみられる。

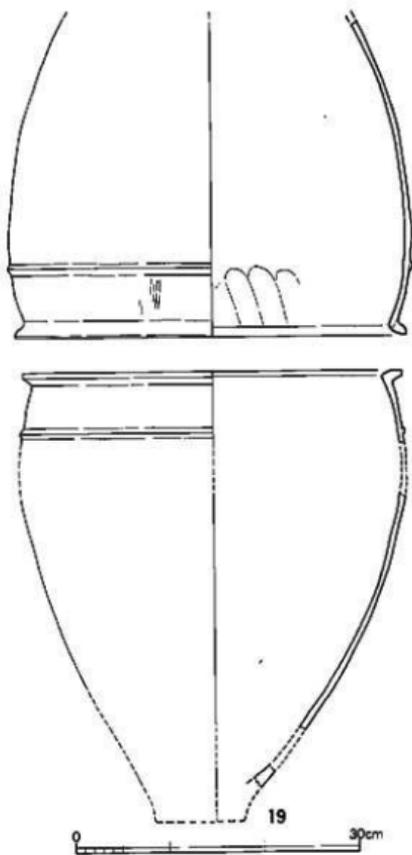
下甕(図版42、第44図)器高に比して口径が大きく、底部に締まりがない鉢形の土器であり、器高32.2cm、口径35.2cm、底径6.8cmを測る。口縁部は肥厚する逆L字状を呈し、口縁部平坦面は若干内傾する。胴部に張りはなく、丸みを持ちながら平底の薄い底部に移行する。頸部のやや下位に断面三角形凸帯を1条貼付する。調整は口縁部ヨコナデ、内外面ヘラミガキによる。胎土に細砂を多く含む。雲母・角閃石粒もみられる。焼成は良好で、灰黄褐色を呈する。また、外面に黒斑がみられる。

19号甕棺墓(図版34-3、第43図)

10号木棺墓の北西側に位置する接口式の小児用甕棺墓である。B群に属するものの埋葬方向は木棺墓群と直交する。当甕棺墓は破壊が著しく、墓壇は旧状を呈しておらず不整形をなす。甕棺は下半部が残るのみであり、何れが上甕か下甕か区別付け難いが、丘陵の高い方に下甕を持ってきている5・16号甕棺墓例からすると北側が下甕で南側が上甕になろう。

上甕(第45図)残存器高33.4cm、復原口径41.2cmを測る小型の甕である。口縁部は逆L字状を呈するが、肥厚しない。頸部のやや下位に断面三角形凸帯を1条貼付している。調整は口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ハケ目による。胎土に細砂を多く含む、角閃石粒もみられる。焼成は良好で、黄褐色を呈する。

下甕(図版43、第45図)小型の甕であるが、各部位は接合できず器高は不明。復原口径は40.0cmである。口縁部は逆L字状を呈し、口縁部平坦面は内傾する。頸部のやや下位に断面三角形凸帯を1条貼付している。磨滅顯著なため調整は不明。胎土に細砂を多く含む、雲母・角閃石粒もみられる。焼成は良好で、黄褐色を呈する。また、胴部外面に黒斑がみられる。



第 45 図 19号瓷棺実測図 (1/6)

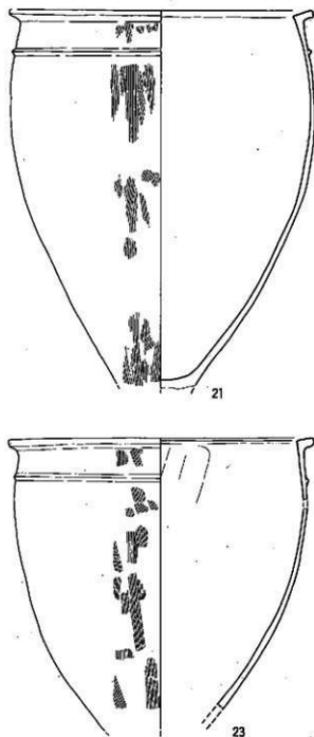
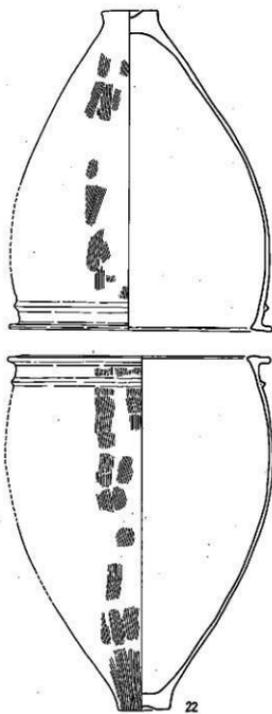
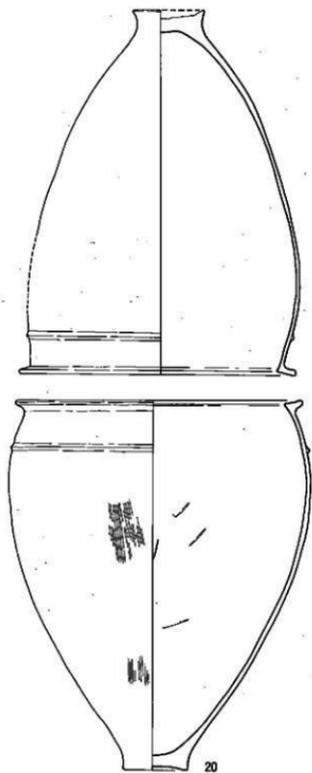
甕同様逆L字状を呈するが肥厚せず、口縁部平坦面は内傾する。胴部はよく張り、口径を上回る。頸部のやや下位に断面三角形凸帯を1条貼付している。口縁部ヨコナデ、内面板ナデ、外面ハケ目調整である。胎土に細砂を多く含み、雲母・角閃石粒もみられる。焼成は良好で、茶褐色を呈する。また、胴部外面に煤が遺存しており、日常容器の転用品であろう。(小田)

20号甕棺墓 (図版35-1, 第43図)

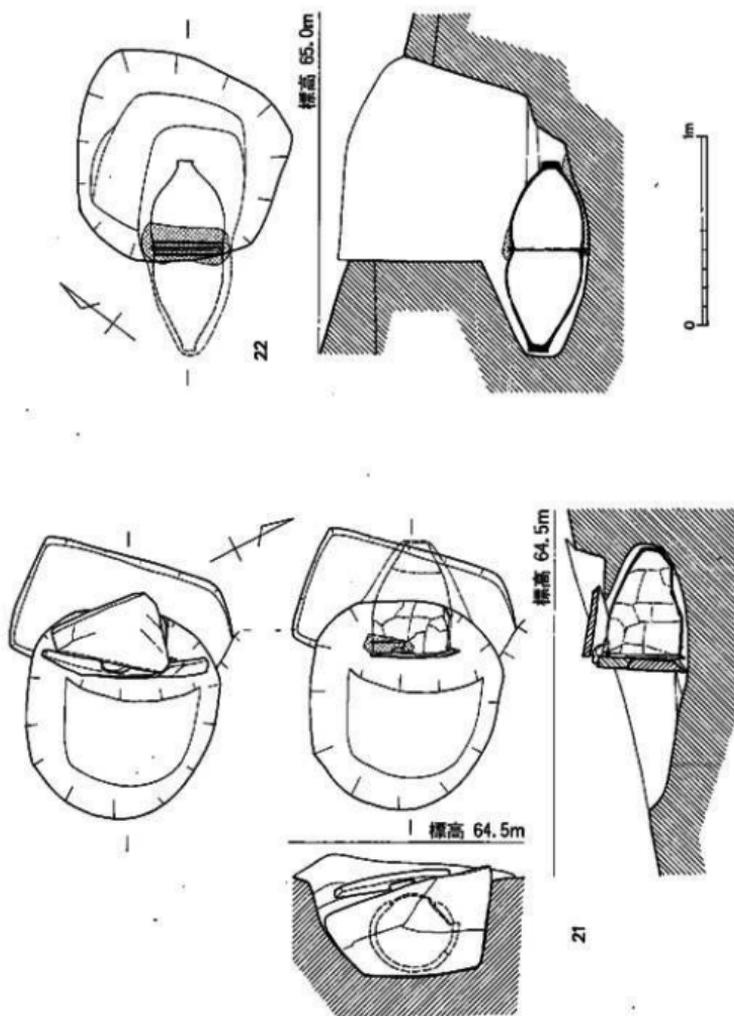
9号甕棺墓の西側に位置する接口式の成人用甕棺墓であり、B群に属する。墓壇は長軸1.22m、短軸0.83mを測る不整形の堅壇を岩盤まで掘り、さらに奥行き0.28mの横穴を掘り込み下甕を挿入している。甕棺はほぼ水平に設置しており、埋置角度は+1°を測る。接口箇所には粘土による目張りが見られる。主軸方位はN62°Eを示す。甕棺内からの遺物の出土はなかった。

上 甕 (図版43, 第46図) 器高53.8cm、口径40.6cm、底径10.5cmを測る中型の甕である。口縁部は逆L字状を呈するが肥厚せず、口縁部平坦面は内傾する。胴部上位は張っているが、胴下半部に締まりがないため弛れた感がある。頸部のやや下位に断面三角形凸帯を1条貼付している。磨滅顕著なため調整は不明。胎土に細砂を多く含む。焼成は良好で、黄褐色を呈する。

下 甕 (図版43, 第46図) 器高54.8cm、口径42.5cm、底径9.5cmを測る中型の甕である。口縁部は上



第 46 图 柿原 E·F 地区 20-23 号委实器图 (1/6)



第 47 图 21·22号墓柱基头剖面图 (1/30)

21号甕棺墓 (図版35-2・3, 36-1, 第47図)

墓地群東端に位置する甕棺墓で、特異な石蓋を有する。この甕棺墓でまず最初に検出したのは斜面の高い方にみられた墓墳上縁のラインと扁平な緑色片岩の蓋石であった。石棺墓や石蓋土墳墓の可能性も考慮しながら斜面の低い方の墓墳ラインを把握できないでいたところ、蓋石の下に直立する緑色片岩板石が現れたので、8号甕棺墓のような小児用甕棺墓の可能性も考えさせられた。斜面の下側の墓墳ラインは、かなり掘り下げてやっと検出しえるような状態で、最終的には若干の掘りすぎの部分もできたが、長径1.40m、短径1.15mの楕円形プランを呈する。本来はこれを上回る広さの墓墳で、横になる蓋石の部分に狭い平坦面も有していたと考えられる。この蓋石から墓墳底面まで0.50mの深さを測る。

甕棺は墓墳の西側に穿たれた横穴に挿入される単棺で、主軸方位N62°W、傾斜角度+3°に埋置されるが、甕底部は故意に打ち欠いて厚みを減じている。甕口縁を直接蓋く蓋石は長さ85cm、高さ40~50cm、厚さ6cm程度の緑色片岩の扁平石で、甕口縁部との接口部には目貼り粘土が塗られるもの、下半部にまで及ばない。この蓋石の上にわずかにひっかかるようにして、長さ60cm、幅15~40cm、厚さ3cm程度の緑色片岩の扁平石が甕の上半部を覆うかたちに横置きされている。なお、この2枚の板石は完全に接して蓋をなしているのではなく、間に小さな石を挟んで、上の石をより平らにさせている。棺内外からの遺物の出土はみられない。

(小池)

甕 槽 (図版44, 第46図) 残高56.1cm、口径45.5cmを測る中型の甕であり、底部を打ち欠く。口縁部は逆L字状を呈するが肥厚せず、口縁部平坦面は内傾する。胴部はあまり張らず、胴径と口径はほぼ等しい。頸部のやや下位に断面三角形凸帯を1条貼付している。口縁部ヨコナデ、内面板ナデ、外面ハケ目調整である。胎土に細砂を多く含み、雲母・角閃石粒もみられる。焼成は良好で、茶褐色を呈する。また、胴部外面に黒斑がみられる。

22号甕棺墓 (図版36-2, 第47図)

5号住居跡のすぐ西側に位置し、当甕棺墓が住居跡を切っている。接口式の小児用甕棺墓であり、B群に属する。墓墳は長軸1.13m、短軸1.07mを測る隅丸方形の堅墳を掘り、さらに奥行き0.5mの横穴を掘り込み下甕を挿入している。また、東側にはステップが付き、検出面からの深さは0.7mを測る。甕棺は上甕の方が下がっており、埋置角度は-4°を測る。接口箇所には粘土による目張りが見られる。また、上甕の下部にも粘土が見られるが、これは上甕を安定させるためのものと考えられる。主軸方位はN53°Eを示す。甕棺内からの遺物の出土はなかった。

上壺 (図版44, 第46図) 器高47.1cm, 口径38.7cm, 底径8.3cmを測る小型の壺である。口縁部は逆し字状を呈し, 口縁部平坦面は若干内傾する。胴部の張りは弱く, 内溜みの厚い底部に移行する。頸部のすぐ下に断面三角形凸帯を1条貼付している。調整は口縁部ヨコナデ, 内面ナデ, 外面ハケ目による。胎土に細砂を多く含み, 雲母・角閃石粒もみられる。焼成は良好で, 茶褐色を呈する。また, 胴下半部外面には黒斑がみられる。

下壺 (図版44, 第46図) 器高52.5cm, 口径39.2cm, 底径7.5cmを測る小型の壺である。口縁部は逆し字状を呈し, 口縁部平坦面はほぼ水平である。胴部はよく張っており, 内溜みの底部に移行する。上壺同様, 頸部のすぐ下に断面三角形凸帯を1条貼付している。調整は口縁部ヨコナデ, 内面ナデ, 外面ハケ目による。胎土に細砂を多く含み, 雲母・角閃石粒もみられる。焼成は良好で, 茶褐色を呈する。

23号壺墓基 (図版36-3, 37-1, 第43図)

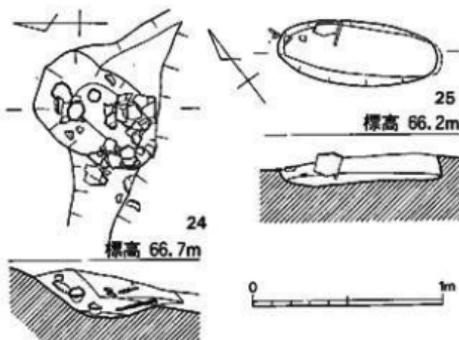
14号壺墓基の西側に位置し, 10号木棺墓を切っている。単棺の成人用壺墓基であり, 板石2枚で蓋をしており, さらに黄灰色粘土による目張りがみられた。墓基は楕円形を呈し, 長軸0.97m, 短軸0.6mを測る。壺墓基はほぼ水平に埋置している。主軸方位はN76°Wを示す。壺棺内からの遺物の出土はなかった。

壺 棺 (図版44, 第46図) 残高40.2cm, 口径45.3cmを測る中型の壺である。接合がうまくできなかったため底部を欠く。口縁部は肥厚する逆し字状を呈し, 口縁部平坦面は内傾する。頸部のやや下位に断面三角形凸帯を1条貼付している。調整は口縁部ヨコナデ, 内面ナデ, 外面ハケ目による。胎土に細砂を多く含み, 角閃石粒もみられる。焼成は良好で, 灰黄色を呈する。また, 胴部外面には黒斑がみられる。

24号壺墓基

(図版37-2, 第48図)

9号墳の西側5mに位置する。検出面での墓基は楕円形を呈し, 長軸0.73m, 短軸0.47mを測る。壺墓基は大破しているが, 胴部破片に断面三角形凸帯を貼付するものと断面M字形凸帯を貼付するもの



第48図 24・25号壺墓基実測図 (1/30)

の二者みられることから接口式の小児用甕棺墓であり、上甕か下甕かの何れかに蓋を使用したと考えられる。

甕棺 (第49図) 口縁部~胴部中位の破片である。底部は存在するもの大破しているため接合できなかった。鉢形の土器であり、口縁部は断面三角形を呈する。口縁部のやや下位に断面三角形凸帯を1条貼付している。調整は口縁部ヨコナデ、内面ナデで、外面にハケ目をみる。胎土に細砂を含む。焼成は良好で、灰黄色を呈する。胴部に断面M字形凸帯を貼付したとみられる迹は、図示できなかった。



第49図 24・25号甕棺実測図 (1/6)

25号甕棺墓 (図版37-3, 第48図)

9号墳の墳丘下部で検出した甕棺墓である。墓壁は長楕円形を呈し、長軸0.84m、短軸0.35mを測り、岩盤を削抜いている。甕棺は古墳築造の際破壊され、口縁部小片を残すのみであり、詳細は不明。

甕棺 (第49図) 口縁部一胴部中位の破片であり、残高13.6cm、復原口径30.0cmを測る。口縁部は肥厚する逆L字状を呈し、口縁部平坦面は外傾する。調整は口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ハケ目による。胎土に細砂を多く含む。焼成は良好で、黄褐色を呈する。また、外面には黒塗りを施した痕跡がある。

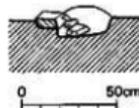
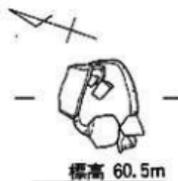
(小田)

7. その他の遺構と遺物

7号土坑 (図版12-1, 第50図)

F地区弥生時代墓地群の南西隅にある小土坑で、長径0.40m、短径0.35m、深さ0.15mを測る。坑内の縁の部分には、緑色片岩、結晶片岩の割石があり、坑内床面にも小割石がある。

埋土はやや暗い茶褐色土で、埋土の上部から弥生土器片が1点出



第50図
7号土坑実測図 (1/30)

土したが、遺構の性格については不明。

土器は弥生時代中期前半頃の壺口縁部破片であったが、整理作業中に紛失した。

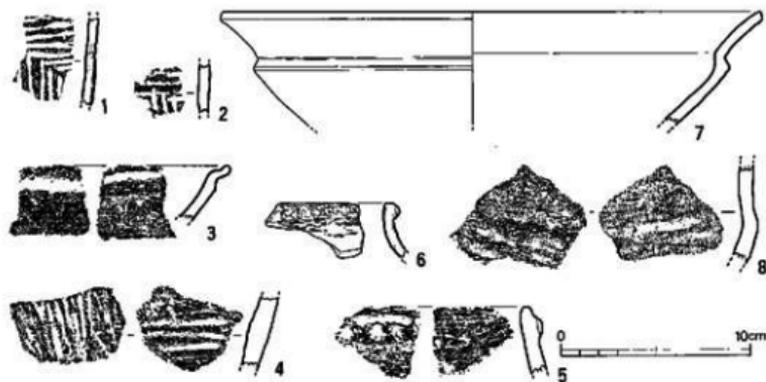
縄文土器 (図版45, 第51図)

1・2は4号墳の前方斜面, 3~5は1号住居跡の南部下層, 6は13号墳の固溝Ⅱ区からの出土資料, 7・8はE地区尾根先端の東斜面に相当する池内からの採集資料である。

1・2は、胎土に滑石粉末を含む曾畑式土器の破片で、同一個体であろう。外面に横方向と縦方向の短沈線が平行して並ぶ。前期に属す。

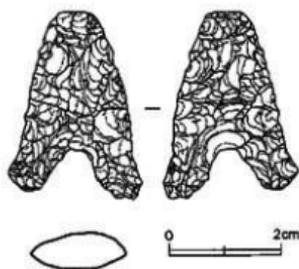
3・7は、黒色磨研の浅鉢形土器の口縁部破片。3は口縁部が屈曲というよりもこれに代わる内外面の浅い沈線がめぐるような形状をなしており、内外面共に横方向に磨研される。7はく字形に屈折して口縁部が外反する浅鉢で、屈折部外面にヘラ先による小さな段がみられる。口縁部は内外面共に横方向に磨研されるが、胴部以下の磨研の方向は不明。復原口径28.6cmの大きさ。胎土に長石・金雲母の細粒を含み、堅く焼成されている。2点共に晩期後半に属す。

8は、半精製の深鉢胴部破片で、わずかにくびれる胴上半部の外面は磨研されており、胴下半の外面には条痕が残る。内面は横方向の指先によるナデ痕が残る。胎土に長石・石英・金雲母粒を含み、やや堅めに焼成されている。一方、4は、粗製深鉢の胴部破片で、外面は縦方向、内面は横方向の条痕が残っている。胎土に砂礫を多く含む。



第51図 E・F地区出土縄文土器拓影 (1/3)

5・6は、刻み目突帯を有す要ないし深鉢の口縁部破片で、5は口唇部の下にめぐる突帯に指先による刻み目がある。胎土に砂礫が含まれている。6は口唇部外面に刻み目突帯がめぐる。5は晩期後半、6は晩期末-弥生草創期とされる夜白式土器である。

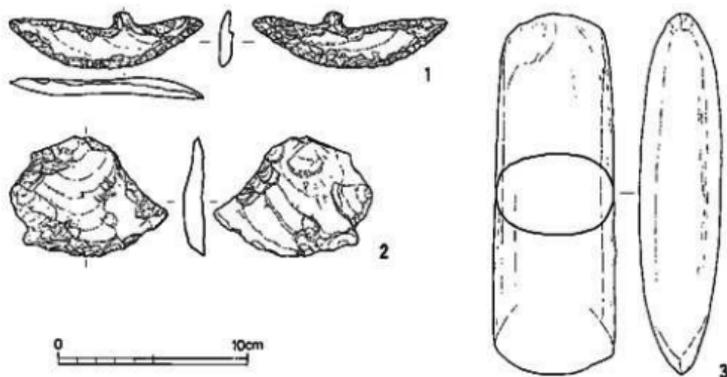


第52図
F地区出土異形局部磨製石器実測図 (1/1)

縄文時代の石器 (図版45, 第52・53図)

異形局部磨製石器 (第52図) 13号墳の北西方斜面の黄褐色土中から出土した。黒の縞が入る淡灰色のチャートを素材にしている。先端は丸みを持ち、胴部はさほど長くない。脚部はわずかに外方に広がる。長さ36.4mm, 胴部幅18.5mm, 脚部幅23.0mm, 最大厚6.5mm, 重さ4.2gを測る。この種の石器では、優美な形に整えられて全面に研磨の及ぶような例もあるが、この資料は、ややびつな形で、研磨の痕跡も剝離によって生じた稜にみられる程度であるものの、光沢がある。共存遺物はないが、縄文時代早期の所産であろう。

剛器類 (第53図1・2) 2点共に蘆池内からの採集資料であるが、1はD地区尾根の南斜面先端部、2はE地区尾根の東斜面先端部からの採集である。



第53図 周辺採集石器実測図 (1/3)

1は、安山岩製の楕型石匙の完形品で、長さ10.2cm、最大幅3.0cm、厚さ0.9cm、重さ22.2gを測る。横長切片を素材とし、打痕部分に調整刻離を加えて厚みを減じ、つまみ部を作っている。刃部側も両面から調整が加えられており、半径6.8cm前後の弧を描く。

2は、安山岩製の削器の完形品で、風化が進む。切片の先端部に調整刻離を加えて刃部にしている。端部が尖る側の側縁も調整刻離が加えられ刃部が形成されている。背の方の面には原面が一部残る。長さ6.3cm、幅8.4cm、最大厚1.0cm、重さ63.1gを測る。風化の進み方からは縄文時代でも古い時期の可能性があろう。

磨製石斧（第53図3）E地区尾根東斜面の先端部に相当する蓮池からの採集品。短冊形の大型磨製石斧で、長さ19.1cm、最大幅6.5cm、厚さ4.3cm、重さ918.5gを測る。輝石質安山岩を素材にしているが、風化が進む。無数の凹凸がみられるもの、両刃の刃部は丁寧に研磨された様子が窺える。頭部端には敲打痕がみとめられる。この石器も縄文時代の古い段階のものであろう。

（小池）

包含層等出土の弥生土器（図版45、第54図）

E・F地区の遺構及び出土遺物は既に紹介したが、包含層よりの出土土器や古墳の墳丘内等より出土した弥生土器について紹介する。個々の特徴は表2を参考にされたい。

（1）E地区

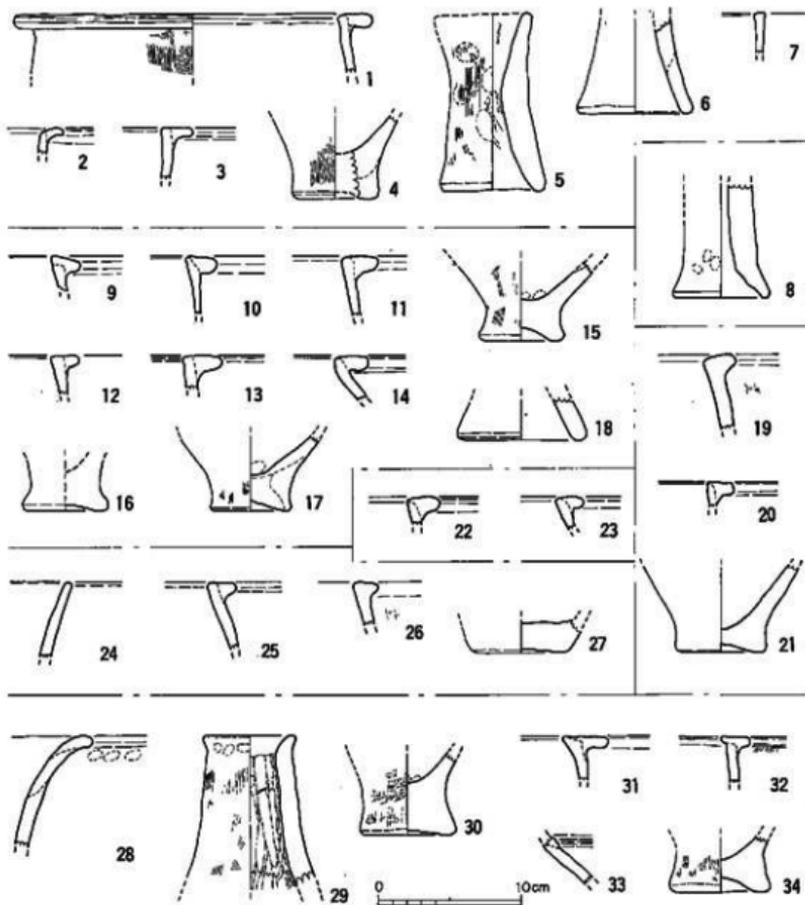
先ず1～7は8号墳東下及び10号墳北方の崖面より出土した土器である。10号墳東西断面土層図よりこの近辺は上方より多量の土砂が流入し堆積した状況が解せる。何らかの遺構が在して（在していた場合は畑造成等で喪失したと考えられる）この埋土品が流入したものなのか、10号墳の墳丘内に混入していた遺物が流入したのかが考えられる。これらの遺物は中期初頭～前葉に比定され、1号住居と略同時期である。

8は7号墳と2号石棺墓間より出土した。この近辺には遺構の痕跡すら認められなかった。

9～18は9号墳内と下隔及び周溝内より出土した土器である。9号墳下層には25号甕棺が在し、同古墳東南部周溝より東方にかけて最大長辺約5mの不整形な浅い落込みが在す。この浅い落込みには柱穴等の住居跡と判断される痕跡が全く検出されなかった。なお、19～21がこの落込み内よりの出土土器である。これらの状況より9～18は落込み内の埋土中品が古墳築造時に墳丘内等に混入したのであろう。土器は中期初頭頃に比定される。

22と23は9号墳近辺の西南斜面よりの出土土器である。上記と同じく9号墳墳丘内に混入していた可能性が大である。時期は中期初頭である。

24～27は10号墳北側上面より出土した。近くに約半分ほどを流出している1号住居が在するので、これらの土器は住居に所属するのかもしれない。時期も住居と略同じである。



第 54 図 E・F地区出土弥生土器実測図 (1/4)

(2) F地区

28-30は19号墳北側上面より出土した。近くに約半分程が流出している6号住居が在るので、これらの土器は住居に帰属するのかもしれない。時期も住居と略同じである。

31は13号墳周溝内より出土。近辺には該当する時期の遺構は皆無である。時期は中期前葉であろう。

32は10号夷棺墓付近より出土。この付近は壘棺墓・木棺墓・石蓋土墳墓が密集しているのでいずれに帰属するか判断し難い。時期は中期初頭に比定される。

33は15号墳玄室内より出土。この地点は7号住居を復原すると住居内に納まる。よって7号住居に伴った可能性は大である。また時期も同じと考えられる。

34は20号墳墓道内より出土した。7号住居より流出した可能性も考えられるが判断を下し難い。7号住居と同時期頃が妥当であろう。

周辺採集の弥生土器（図版45、第55・56図）

蓮池を池干した折に夥しい量の遺物を採集したが、その一部及び近隣の採集遺物も含めてここに掲載する。個々の弥生土器については包含層出土土器と同様に表3を参考にされたい。

1と2は蓮池北端の流入口周辺より採集した。1は前期末頃に比定できる。

2～22は蓮池北西部より採集した。中期初頭の土器が主流をなし、中期前葉の土器も一部含まれる。E地区より尾根が伸展していたのであろう。

23～32は蓮池南西部より採集した。中期初頭の土器が大半以上であるが、一部初頭でも古式の様相を有する土器も含まれている。今回の調査ではこの地点まで墓・住居が伸展すると推定されたが、採集品も略同時期であり尾根も続くことから可能性は高くなろう。

33は中池周辺柿畑よりの採集品であり、先に報告されているS地区西側にあたる。

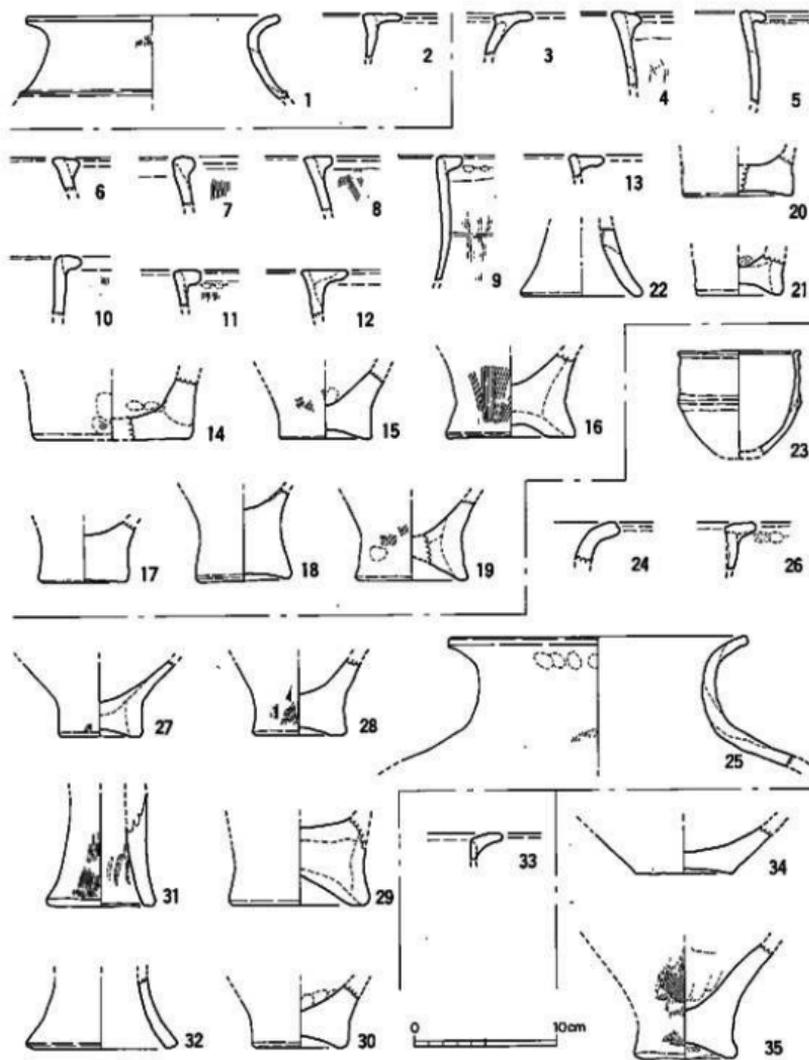
34～59は蓮池東岸よりの採集品であり、数量的にも最も多く採集された地点である。この近辺では古墳等も確認されており、E・F地区よりも恵まれた地理的条件を備えていること等から有数の遺跡であろうと推定される。採集品のほとんどが中期初頭に比定されるので、E・F地区の墓・住居等と関連を有すると推測される。（武田）

註1 栲原野田遺跡調査会 1976 栲原野田遺跡

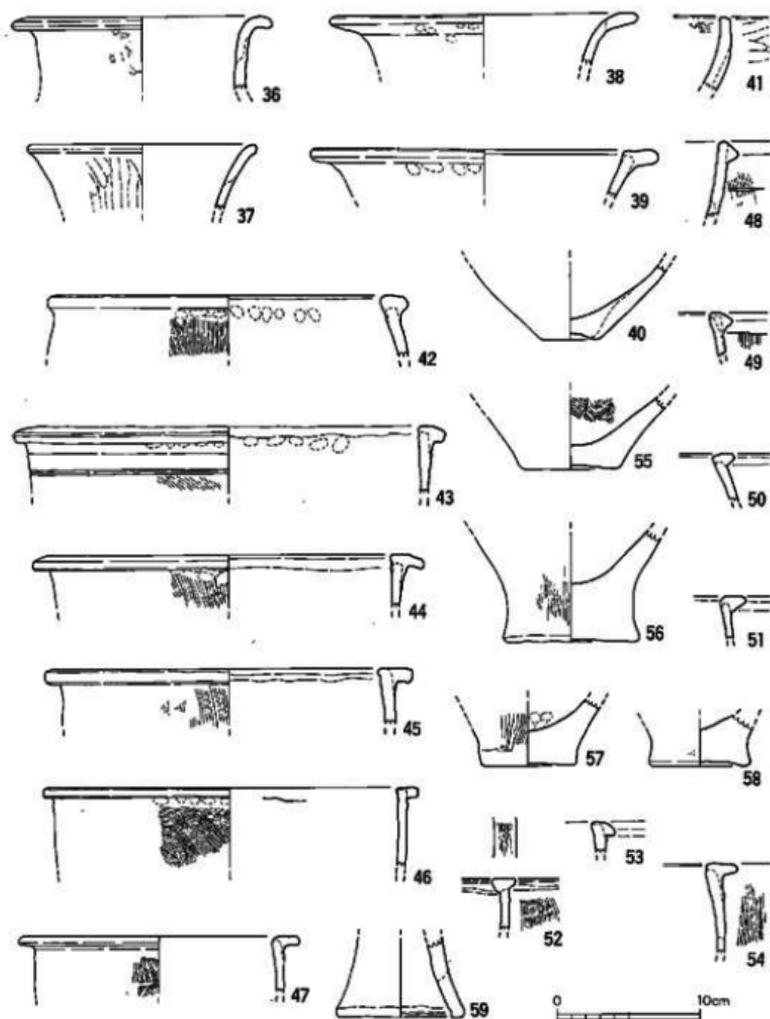
2 朝倉郡朝倉町に所在し、福岡県教育委員会が調査。現在整理中。

3 朝倉郡杷木町に所在し、福岡県教育委員会が調査。現在整理中。

4 甘木市 1982 甘木市史・上巻



第 55 图 周边探集弥生土器实例图① (1/4)



第 56 图 周边探集弥生土器实测图② (1/4)

表2 包含層出土土器観察表

番号	器種	法 量	調 査	胎 土	色 調	特 徴
1	甕	口径25.2cm	内-ナデ 外-ハケ目	細砂多く、角閃石含む	淡黄灰色	
2	甕		不明	粗砂多い	淡黄灰色	焼成甘い
3	甕		ナデ	粗砂多く、雲母含む	茶褐色	
4	甕	底径 6.1cm	内-ナデ 外-ハケ目	粗砂多い	茶褐色	
5	爵台	口径 6.8cm 底径 7.4cm	内-ナデ 外-ハケ目	細砂多い	茶褐色	指圧痕あり、略完形
6	爵台	底径 8.1cm	不明	細砂多い	黄褐色	底部外面は赤変
7	甕		不明	角閃石含む	黄褐色	
8	爵台	底径 6.8cm	ナデ	粗砂含む	赤褐色	指圧痕あり
9	甕		ナデ	粗砂含む	黄褐色	
10	甕		ナデ	粗砂多く、雲母含む	淡茶褐色	外面に黒斑あり
11	甕		ナデ	細砂少し含む	赤褐色	
12	甕		ナデ	細砂多い	赤褐色	焼成甘い
13	甕		ナデ	細砂多い	赤褐色	焼成甘い
14	甕		ナデ	粗砂多い	茶褐色	
15	甕	底径 6.0cm	内-ナデ 外-ハケ目	雲母・角閃石含む	赤褐色	外面に工具痕あり
16	甕	底径 6.0cm	ナデ	細砂多い	赤褐色	焼成やや甘い
17	甕	底径 5.6cm	内-ナデ 外-ハケ目	粗砂多い	茶褐色	指圧痕あり
18	爵台	底径 8.9cm	ナデ	細砂多い	赤褐色	焼成甘い
19	甕		内-ナデ 外-ハケ後ナデ	細砂多い	茶褐色	
20	甕		不明	細砂多い	赤褐色	焼成甘い
21	甕	底径 6.3cm	ナデ	粗砂多い	茶褐色	
22	甕		ナデ	細砂多い	黄褐色	
23	甕		ナデ	粗砂多い	淡茶褐色	
24	甕		ナデ	細砂多い	黄茶色	焼成やや甘い
25	甕		ナデ	粗砂多い	赤褐色	
26	甕		内-ナデ 外-ハケ後ナデ	良好	赤褐色	焼成やや甘い
27	甕	底径 5.9cm	ナデ	細砂多い	赤褐色	焼成やや甘い
28	甕		ナデ	角閃石含む	茶灰色	指圧痕あり
29	爵台	口径 6.5cm	内-ナデ 外-ハケ後ナデ	角閃石含む	茶褐色	指圧痕あり
30	甕	底径 6.8cm	内-ナデ 外-ハケ後ナデ	粗砂多く、角閃石含む	赤褐色	一部黒変する
31	甕		ナデ	雲母・角閃石含む	淡黄灰色	
32	甕		ナデ	雲母含む	淡茶褐色	外面にハケ痕かあり
33	甕		ナデ	角閃石含む	淡茶褐色	「M」字状凸帯?
34	甕	底径 7.0cm	内-ナデ 外-ハケ後ナデ	粗砂多く、角閃石含む	淡黄褐色	

表3 表探土器観察表

番号	器種	法 量	調 整	胎 土	色 調	特 徴
1	壺	口径17.4cm	ナデ 外一ハケ僅少	良好	黄茶色	三角凸帯隆付
2	壺		ナデ	粗砂多い	淡赤茶色	焼成甘い
3	壺		ナデ	良好	茶灰色	瓣先状口縁
4	壺		ナデ	粗砂多・雲母少し含む	茶褐色	ハケ目痕あり
5	壺		ナデ	粗砂僅かに含む	茶褐色	口縁下唇にハケ目
6	壺		ナデ	粗砂多く、雲母含む	茶灰色	
7	壺		内一ナデ 外一ハケ目	粗砂多い	黄褐色	
8	壺		内一ナデ 外一ハケ後ナデ	良好	黄茶色	
9	壺		内一不明 外一ハケ後ナデ	粗砂多い	淡黄白色	沈着1条、指圧痕あり
10	壺		内一ナデ 外一ハケ後ナデ	良好	茶灰色	
11	壺		内一ナデ 外一ハケ目	良好	黄赤色	指圧痕あり
12	壺		ナデ	細砂含む	赤褐色	
13	壺		ナデ	良好	茶褐色	焼成甘い
14	壺?	底径10.0cm	ナデ	粗砂多い	赤褐色	
15	壺	底径 6.4cm	内一ナデ 外一ハケ後ナデ	粗砂多い	淡赤褐色	指圧痕い
16	壺	底径 9.0cm	内一ナデ 外一ハケ目	粗砂多い	黄灰色	
17	壺	底径 6.2cm	ナデ	細砂多い	黄褐色	風化著しい
18	壺	底径 6.1cm	ナデ	細砂多い	赤褐色	
19	壺	底径 7.9cm	内一ナデ 外一ハケ後ナデ	粗砂多い	黄褐色	指圧痕あり
20	壺	底径 7.6cm	ナデ	粗砂多い	赤褐色	焼成甘い
21	壺	底径 6.1cm	ナデ	粗砂多い	茶褐色	指圧痕あり
22	器台	底径 8.6cm	ナデ	粗砂多い	黄灰色	
23	壺	口径 8.5cm	不明	雲母・角閃石含む	淡橙褐色	凸帯を有す
24	壺		不明	粗砂多い	灰白色	
25	壺	口径20.5cm	内一ナデ 外一ハケ後ナデ	細砂多い	淡赤褐色	指圧痕あり
26	壺		ナデ	良好	黄茶色	指圧痕あり
27	壺	底径 5.9cm	内一ナデ 外一ハケ後ナデ	雲母少し含む	茶褐色	
28	壺	底径 6.6cm	内一ナデ 外一ハケ後ナデ	粗砂やや多く含む	赤褐色	
29	壺	底径 8.7cm	ナデ	粗砂多い	赤褐色	
30	壺	底径 6.7cm	ナデ	細砂多い	茶灰色	指圧痕あり
31	器台	底径 7.7cm	内一ナデ 外一ハケ目	細砂多く、角閃石含む	淡茶灰色	ヘラ状工具痕あり
32	器台	底径 9.4cm	ナデ	良好	茶灰色	
33	壺		ナデ	粗砂やや多い	赤褐色	焼成やや甘い

番号	器種	法 登	調 整	胎 土	色 調	特 徴
34	壺	底径 3.8cm	ナデ	雲母少し含む	暗黄褐色	
35	壺	底径 7.2cm	内-ナデ 外-ハケ目	細砂多く、 雲母・角閃石を含む	淡赤褐色	内面にヘラ状工具痕あり
36	壺	口径18.2cm	内-ナデ 外-ハケ後ナデ	やや粗砂多い	茶褐色	
37	壺	口径16.1cm	内-ナデ 外-ヘラミガキ	微砂多く含む	暗茶褐色	
38	壺	口径21.6cm	ナデ	細砂多く、雲母含む	淡黄褐色	指圧痕あり
39	壺	口径24.4cm	ナデ	細砂多く、 雲母・角閃石を含む	淡黄灰色	指圧痕あり
40	壺	底径 3.9cm	ナデ	雲母少し含む	暗黄褐色	外面に黒斑あり
41	鉢		ヘラミガキ	細砂多い	黒灰色	
42	壺	口径25.2cm	内-ナデ 外-ハケ目	雲母・角閃石を含む	茶褐色	指圧痕あり
43	壺	口径30.2cm	内-ナデ 外-ハケ後ナデ	雲母含む	茶褐色	外面に一条の沈線、指 圧痕あり
44	壺	口径27.4cm	内-ナデ 外-ハケ目	雲母・角閃石を含む	茶褐色	指圧痕あり
45	壺	口径25.7cm	内-ナデ 外-ハケ目	細砂若干含む	淡赤褐色	
46	壺	口径26.5cm	内-ナデ 外-ハケ目	雲母含む	灰褐色	指圧痕あり
47	壺	口径18.9cm	内-ナデ 外-ハケ目	細砂多い	赤褐色	
48	鉢?		内-ナデ 外-ハケ目	粗砂多い	茶褐色	外面に一条の沈線あり
49	壺		内-ナデ 外-ハケ目	粗砂多い	茶褐色	
50	壺		ナデ	細砂多い	茶褐色	
51	壺		ナデ	細砂多い	淡茶褐色	
52	壺?		内-ナデ 外-ハケ目	角閃石を含む	茶灰色	上端面に粘土着附付
53	壺		不明	良好	淡黄灰色	口縁底部を下方に巻ける
54	壺		内-ナデ 外-ハケ目	細砂多く、雲母含む	黄褐色	
55	壺	底径 6.5cm	内-ハケ後ナデ 外-不明	角閃石を含む	赤褐色	
56	壺	底径 9.6cm	内-ナデ 外-ハケ後ナデ	細砂多い	茶褐色	
57	壺	底径 6.6cm	内-ナデ 外-ハケ目	細砂多い	暗黄灰色	
58	壺	底径 6.9cm	ナデ	粗砂多い	淡茶褐色	
59	器台	底径 8.9cm	内-ナデ 外-不明	細砂多く、雲母・角閃 石を含む	淡黄灰色	内面に凹凸あり

Ⅳ 古墳時代以降の遺構と遺物

柿原E・F地区では、古墳時代以降に属す遺構として、次の種類・員数を検出した。

	E地区	F地区	計
横穴式石室	10	12	22
石棺墓	3	1	4
火葬墓	1	4	5
その他	—	2	2

横穴式石室を主体部とする古墳は、E・F地区共に、岩盤の露出するような尾根の中央部よりも、むしろ風化土である赤褐色・黄褐色土のみられる斜面を中心として分布している。このことは、石棺墓についても言えることであり、火葬墓は尾根の先端部側の緩斜面および谷部の緩斜面に占地している。

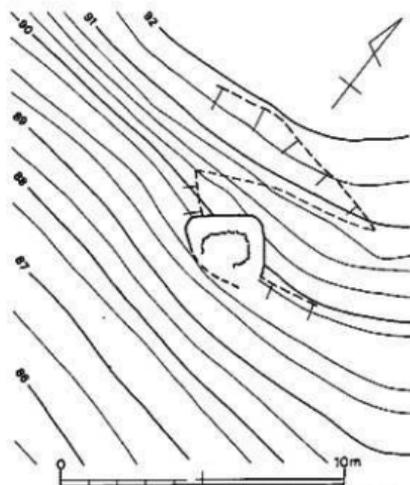
なお、便宜上遺構番号はE地区からF地区に通して付した。

1. 横穴式石室古墳

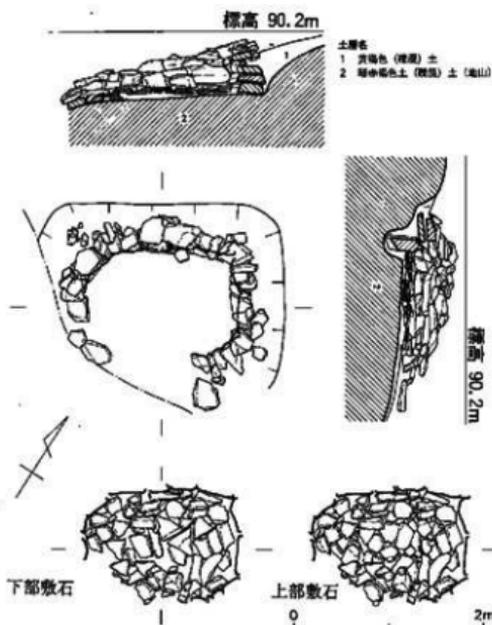
1号墳 (図版47, 第57・58図)

E地区尾根の西斜面寄りで、標高90m位に占地する。緑色片岩の岩盤からなる尾根には、風化した暗赤褐色土の部分が、所々に点在する。この土の部分は、岩盤の部分よりも掘削が容易なのであろう。1号墳は、暗赤褐色土のわずかに広がる部分に構築されている。しかし、後世の強い削平を受けて、墳丘は全く残らず、周溝のなごりの凹みと石室の一部が残される程度である。

主体部 (図版47-2・3, 第58図)



第57図 1号墳墳丘・地山壁形面実測図 (1/200)



第58図 1号墳石室実測図 (1/60)

中央に長さ20cm (石材の長さ40cm)、幅25cm、厚さ15cm程度の2枚の扁平石を並べて立てることによって鏡石とし、その両側は基底部から扁平石を小口積みで持ち送り、壁体としている。残存状況の良好な右側壁では55cm程度の高さに小口積みの壁体が残る。

玄室敷石は、扁平石を用いて全面に敷き詰められていたようだが、左袖石側は削平を受け、壁体の一部も、ズレを生じて本来の高さよりも若干下がっている。

石室内外からの遺物の出土は皆無である。

石室の構造からは、奥壁の鏡石が小型化し2枚の石を立てていることからして、7世紀の中頃以降を考慮しておきたい。

(小池)

2号墳 (図版48, 第59・60図)

E地区尾根の標高79.5m位に占地する古墳で、削平を受けて墳丘はほとんど残らない。

主体部の掘り方は、暗赤褐色土を、幅2.5m、長さ2.0m程度の方形状プランに掘り込むが、前面にあたる南側が削平されて明確ではない。この掘り方の中に、主軸方位N32°30'Wで南東方向に開口する横穴式石室が構築され、石室壁体の裏側は風化礫まじりの黄褐色土によって埋められている。

石室は、玄室の部分だけが残るものの、左側壁も大半を失い、両側の袖石も残らないが、残された壁体の状況からみて、横長になる胴張りのプランで、奥行き1.3m、幅1.6mを測る。奥壁の中

周溝は、主体部の後方で、尾根の高所側斜面を横切るようにして掘り込まれた部分だけが残る。幅1.4m前後で約4.0mの長さにわたるが、溝の深さは約0.25m、岩盤の露呈する溝底は標高80.5-80.7mを測る。溝内の埋土は、下部が風化礫混じりの黄褐色土、上部は暗黄褐色土だが、溝内からの遺物の出土はみられなかった。

主体部 (図版48-1・2, 第60図)

2号墳の主体部は、主軸方位N28°Wで東南方向に横穴式石室が開口していたであろう。

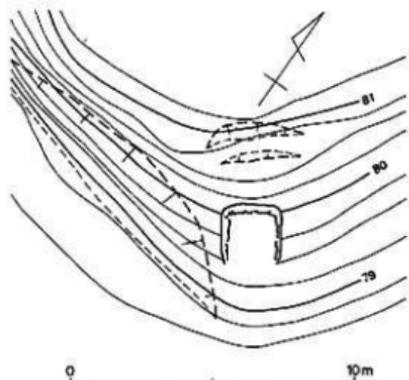
掘り方は、結晶片岩質の岩盤とその上に乗る風化土の黄褐色土から掘り込まれているが、岩盤の硬い部分にまで掘り込んで平坦面を得ており、幅2.0mの方形プランを成している。

石室は、遺存状況が悪く、玄室の基底部石と敷石を残すのみで、左右の側壁基底部石には旧状をとどめない部分もある。前面側は、袖石の抜き痕すらも残らない程に削平を受けている。

石室の平面プランは方形ないし長方形を呈し、残存全長は1.8m、玄室幅は1.9mを測る。基底部石は奥壁で4枚が立ち、左右両側壁は共に5枚残るが、全て緑泥片岩が用いられている。玄室敷石も全て緑泥片岩の扁平石が用いられている。床面の奥壁側は、幅0.7mで約5cm高く敷かれており、尻床というべき施設になっている。石室内外からの遺物の出土はみられなかった。

石室の構造は、前側を失うために詳らかでないが、基底部にやや小さな扁平石を立てる方形ないし長方形プランの玄室をもつことからして、7世紀の中頃以降を考えておきたい。

(小池)



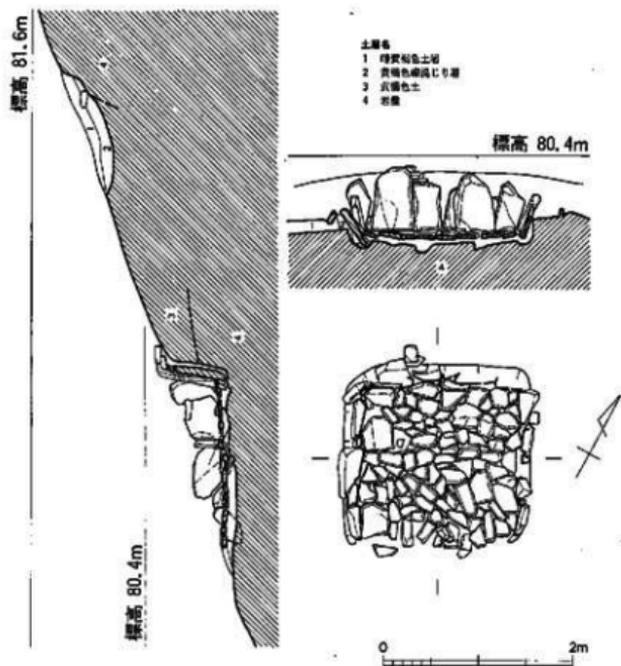
第59図 2号墳墳丘・地山地形断面実測図 (1/200)

3号墳

墳丘 (図版50-1, 第61図)

E・F地区の尾根に挟まれた谷の最奥部に位置する。開墾によって削平されて、調査前の状況では墳丘は確認出来なかった。表土除去後に僅かな盛土と周溝・石室の一部を検出した。

周溝は東側壁背面では石室中軸線より内側で2.3m、西側は削平されているが3.2m前後に推



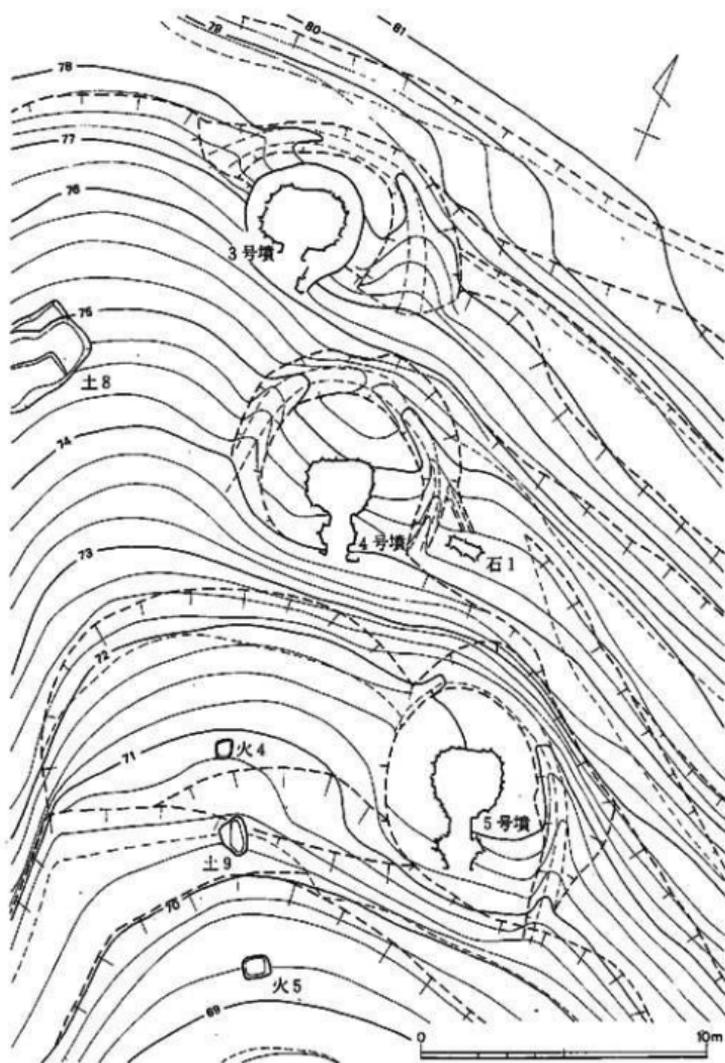
第 60 図 2号墳石室実測図 (1/60)

定され、従って東西径は6.2m前後に考えられる。奥壁背面では内側で2.3m、墓道側は削平されて判らなかつた。

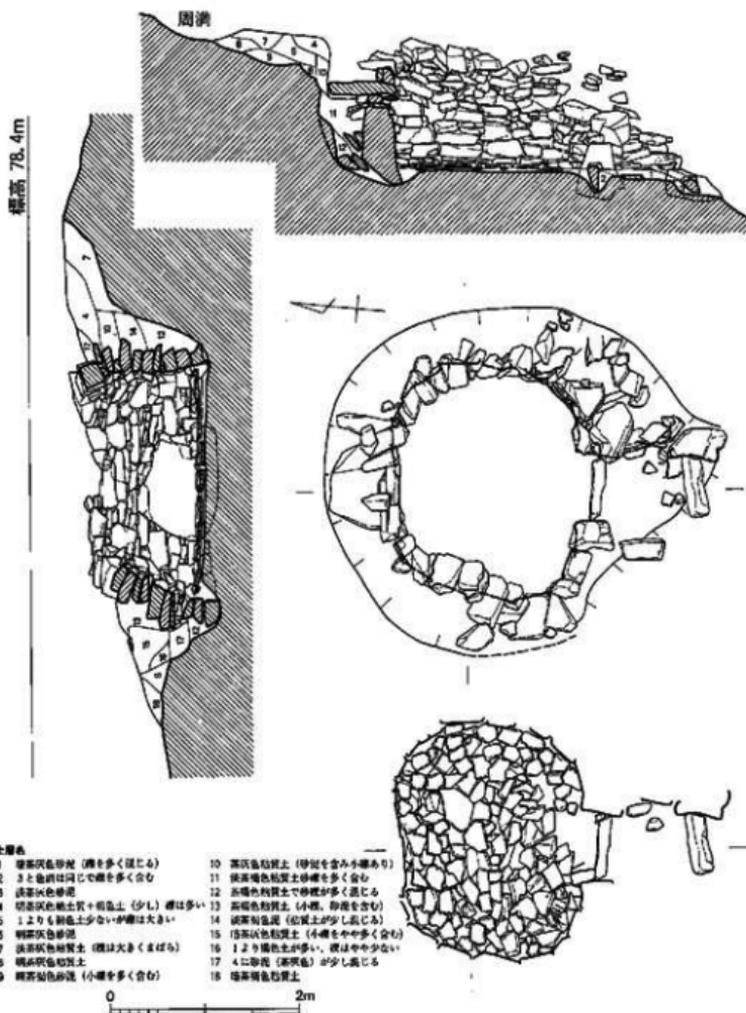
主体部 (図版49-1, 第62図)

羨道部および墓道は残っていないが、複室の横穴式石室であろう。主軸方位を $N5^{\circ}W$ にとり、南へ開口している。

玄室は、長さ1.8m、奥壁側幅1.5m、最大幅2.45m、玄門側幅1.8mを測り、横長の楕円プランを呈する。奥壁には鏡石として幅約120cm、高さ85cm、高さ35cmの石を床面より15cmほど掘り込んで立てて据え、両脇には厚さ10-20cm程度の板石を基底部より小口積みし、間隙には小板石を間詰めしている。側壁も同様の板石を用いて、基底部より持ち送り気味に小口積み



第 61 圖 3-5号墳墳丘・地山地形面実測圖 (1/200)



第 62 図 3号墳石室実測図 (1/60)

しているが、やや粗くて間隙が目立つ。玄門部袖石は厚手の板石を床面より30cm程度掘り込んで立てて据え、袖石間の床面には仕切石がある。仕切石は幅70cm、厚さ10cm、高さ30cmの板石で床面より20cm掘り込んで立てている。床面はほぼ全面に20cm×15cm前後の板石が敷かれている。

前室は残りが悪く詳細は分らないが、東側の奥壁側袖石は厚みのある石を横長に据えている。仕切石は幅65cm、厚さ20cm、高さ15cmを測る。2つの仕切石間が前室とは考えられず、削平された部分に前室があったものと推定される。(日高)

遺物 (図版49-2・3, 第63-65図)

須恵器杯身 (第64図) 玄室内敷石に接して出土した。高台を有さず、平坦な底部から口縁部



第 63 図 3号墳玄室遺物出土状況 (1/20)

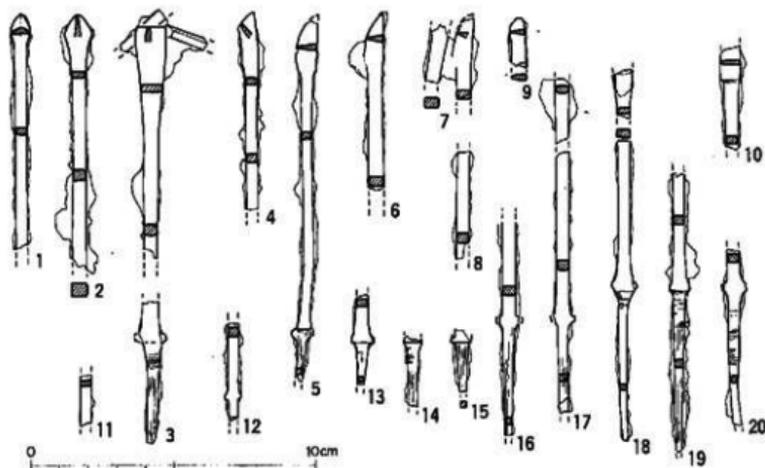


第 64 図
3号墳出土土器実測図 (1/3)

が直立気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。外面には回転ヘラケズリの痕跡が残り、ヘラ先でカキ取ったような1条沈線のヘラ記号が付されている。やや軟らかい焼成で、赤褐色ないし灰褐色を呈する。

鉄 鏃 (第65図) 支室内の左袖石付近から敷石に接して出土した (図版49-2, 第63図)。破片資料で20余点あるが、うまく接合しないため正確な数は把握しえない。

1は、片丸造棘施被斧箭式であろうが、基部側を欠き残存長8.3cm。2は、端刃斧箭式で、残存長8.9cmだが基部は寛被が付くであろう。3は、方頭の棘施被斧箭式であろうが、先端部に別個体の基部片が残着している。基部側の一部を失ったためうまく接合しないが、出土時の状況から長さ15cm前後で寛被部の破片につづく。4は、間無しの片刃箭式であろうか、残存長7.0cm。5・6は、両関片刃箭式の鏃で、残りの良いほうの5は棘部と寛被が基部に付く。先端・基部端を欠くが長さ12.8cm分残る。7-9の先端部破片では基部側の形状がはっきりしないが、片刃箭式の鏃である。また、10も先端を欠くが、両関片刃箭式の鏃であろうか。



第 65 図 3号墳出土鉄製品実測図 (1/2)

11~20は、基部側の破片で、先端部とうまく接合しえない。このうち12・16~20は筧被の境目に棘を有し、棘は両側縁に凸基が付く。13~15は軸部が緩やかに膨らみ、段に成る部分に篋被がつく。

鉄 滓 (図版49-3) 性質不明の小鉄塊が4点出土している。鉄鐵と同様な位置から出土したが、錆ぶくれだけとしては重畳感があり、一部には気泡もみられるので一応鉄滓に含めた。

これらの遺物では、須恵器杯身の特徴から7世紀前半代を考えることができる。石室の構造からすると、前室側を削平で失ってはっきりしないが、玄室が幅広い胴張りの平面形であること、斜面の占地で石室の前方にさほど余裕があるとは考えがたいことから、7世紀の初頭を測らないとみてよいだろう。(小池)

4号墳 (図版50-1・2, 第61・66図)

この古墳は、E地区とF地区の間の谷奥部に近い斜面の、標高74~75m位に占地している。柿畑の農道敷にすっぽりと埋まっていた、調査前の観察では全く古墳の存在は判らなかった。重機による表土剥ぎにより、玄室右奥部の壁体とそれにつづく列石を検出して、はじめて石室の存在が知りえたのである。玄室の陥没穴や、石室前面の斜面には、石室や列石を構成していたと思われる石材がかなり散在していたが、天井石などの大きな石は持ち出されたものと思われる。

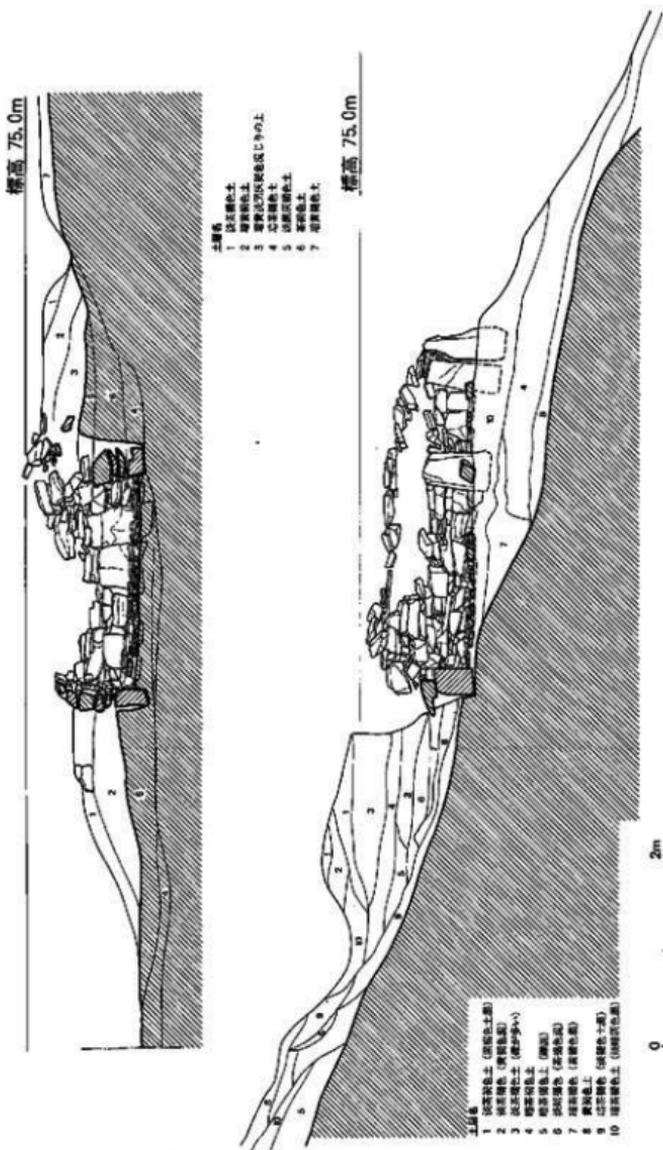
墳丘の規模は、高さ1m、周溝外径8.0~8.5m、周溝内径6.0~6.5m、周溝幅は1.3~1.6mとさほど大きくはない。周溝は馬蹄形にめぐるが、周溝底の最高所は標高75.25mを測る。

墳丘盛土は、旧表土の淡黒褐色ないし淡黒灰褐色土の上に、最も残存状況の良好な部分で1m残っており、一部岩盤まで達する石室の墓堀掘削時の排土を石室前面側に盛りあげて平出面をつくったものと思われる。しかし、周溝はこの岩盤に達していない部分が多い。

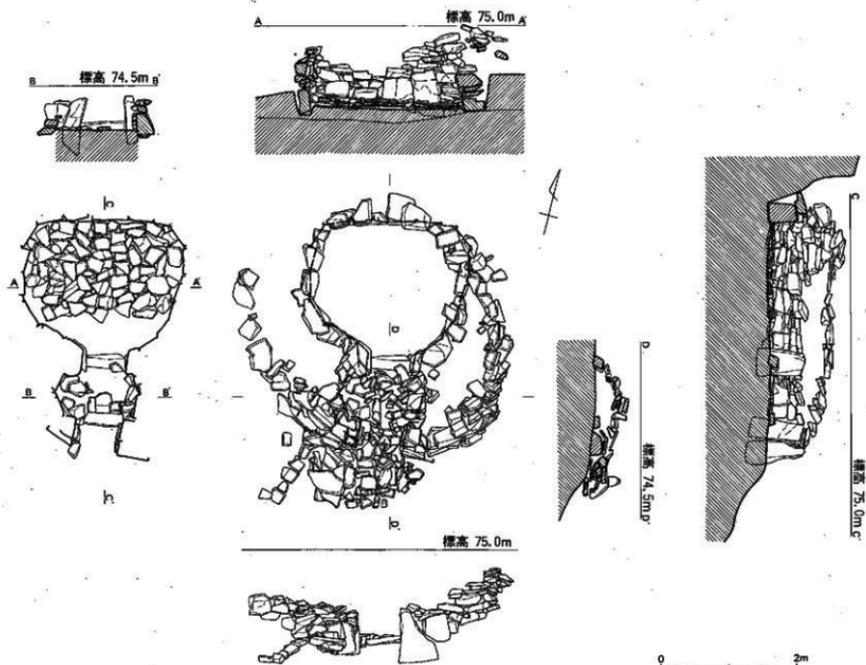
列石は、石室羨道部外端から連続して廻らされているが、全体のプランは石室の主軸に対して西側に振れ、東側は玄室壁体に繋がるものの西側では0.6~0.7mの隔たりがみられる。列石の外径は最大値で4.2m、高さ0.7mを測るが、墳丘を全周する構造にならない。墳丘前面側の墳丘盛土の崩壊防止にのみ配慮されたのであろうか。列石には緑色片岩の板石とやや脆い結晶片岩の塊石が用いられており、下部には緑色片岩の石材が多用されている。積み方では、前面の基底部はやや大きな石を腰石のように並べ、その上は小口積みが多用されている。あるいは前方からの視野を考慮してのことであろうか。

主体部 (図版51-1, 第67図)

この古墳の主体部は、主軸方位をN15°40'Wにとり、南南東方向に開口する複室構造の横穴



第 06 図 4 号墳墳丘土層断面図 (1/60)



第 67 图 柿原 E・F 地区 4 号墳石室実測图 (1/60)

式石室である。

石室は、全長3.5mを測る。石室の壁体には緑泥片岩の石材が用いられている。

女室は、長さ1.9m、最大幅2.3mで、奥壁側の幅1.9mに比して玄門側は玄門の幅にまで狭まる。平面形は蒲鉾形に近い三味線胴張りを呈する。奥壁は、大振りの石4枚をほぼ真直ぐに並び、小口積みの側壁と積み方は異なるが、右側壁の一番奥は大振りの石の延長のように真直ぐに配されていて、130°前後に接するのはその手前の基底部石からになる。

奥壁の基底部は、大振りの石材を並べて腰石にしているが、なかでも右側壁寄りの2枚は左側壁寄りの石に比べて高さも高いので、左側の腰石の上に小口積みで1・2段積み上げなければ右側の腰石の高さに見合わない。また普遍的な奥壁中央の鏡石に見立てることのできる大きな石は奥壁中央より右に寄っていることになるが、石室プランで女室の主軸と前室・羨道の主軸にズレがあり、やや左に振って開口する正面からの視野に関係があるのであろうか。なお、奥壁の上部は既に失われているものの、右側壁寄りでは1.0m程度の高さで7段の小口積みが残る。

右側壁は、基底部にそれほど大きな石を使用せずに、小口積みで積み上げられており、まず奥壁腰石の上面と軸石上面の高さにはほぼ揃うように、少し大きめの石も混ぜて積み上げられる。残りの良い奥壁寄りの部分では、この上に更に4・5段の小口積みが見られ、持ち送りに積まれている。左側壁は、基底部にやや大きめの石を用いている。これは、地山の傾斜に対して、左側を強固にという意識からであろうか。基底部より上の積み方は右側壁とほぼ同様な積み方である。

前室は、胴張りの平面プランで、女室の主軸に対して約6°西に屈折した主軸方向をとる。長さは、右側壁際0.7m、左側壁際0.6mを、幅は1.0m、中央部の最大幅1.2mを測る。前室の側壁も腰石状のやや大振りな石を基底部に並べているが、空隙には小振りの扁平石の石材で充填される部分もある。

左右の袖石は、長さ70～80cm、幅40cm、厚さ20～40cmの柱状になる塊石を用いており、そのうちの約1/3は床面下に潜るように据えられている。また、この袖石の間には、長さ65cm、幅・厚さ共に15～20cm前後の柱状の石をねかせて女室と前室の間の仕切石としている。前室の左右袖石も、奥壁腰石上面・女室の左右袖石上面と、ほぼ高さが揃うように柱状の塊石を用いて据付けられているが、斜面の傾斜に関連して、より床面下にしっかりと埋め込む部分を要するため、長めの石材が用いられている。前室の左右袖石間には、前室側に寄ってではあるが、長さ60cm、幅20cm、厚さ10cmの細長い石材をねかせて仕切石としているが、左側に生じた空間は別の小石で補われている。

羨道は、前室の左右袖石に接して玄門の石が据えられていて、その間に積石の部分がないので、この2石の並んだ長さのみが羨道と言える部分で極めて短い。長さ0.5m、幅0.7mの広さ

ということになる。

左右の羨門の石は、扁平な大振りの石を縦に据えており、この石の外側には墳丘を回るようにして積まれる列石がつづき、前面側に厚く、後方に至るほど薄めに小口積みで積まれる。

石室内床面の敷石は、玄室で顕著にみられるものの、前室ではあまりはっきりしていない。玄室内床面の敷石は、奥壁から1.4～1.5mの部分まで扁平石を用いて敷かれているが、それより前室寄りには敷石の痕跡すらも留めていない。

石室の閉塞石は、石室前面にせり出すように広がっているが、前室内の大半にまで及んでみられた。しかし、それぞれの石の間はかなり土砂を挟んでいることからして、前室部分に広がる石群は崩壊によって移動したのも含まれているものと思われる。一方、前面にせり出す石群にも崩壊に伴う移動は考えられるが、この方は土砂の量が少ないのでかなり旧状を留めているものと思われる。積み方には特に規則性がないものの、前室・羨道間の仕切石の部分から前面側に、主軸方向に平行する向きの石が下段では多い。

ところで、主体部前面の左側には、墳丘を回る列石の外にここから前面に並ぶ列石がみとめられた。左羨門石の内側から0.6mの位置、すなわち、左羨門石の左側に並ぶ扁平石の左端からN14°Eの方向をとって南南西へ1.1mの長さのにびる列石で、小振りの緑泥片岩の扁平石が1段並べられている。南端では西側にさらに1個の石が接しているの、あるいはL字形にのびていたのかも知れない。なお、前面右側ではこれに対応するような痕跡はみられなかった。

遺物

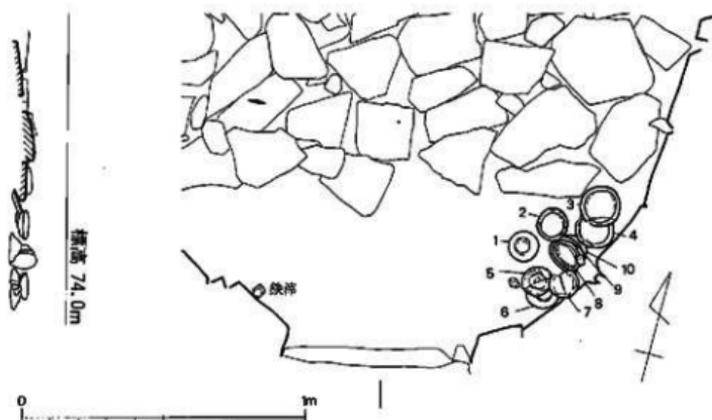
玄室内遺物出土状況（図版51-3、第68図）

4号墳の玄室では、敷石が玄室床面全体に敷きつめられるのではなく、奥壁から1.50mまでで幅2.20mの範囲だけで、屍床とも称すべき空間を作っている。この敷石部分では、左奥部から敷石の間に落ち込んだ状態で、耳環1点が出土し、敷石の中央よりやや東北寄りの敷石間から小鉄滓塊が出土した。一方、敷石のない空間では、右袖石寄りの側壁に近接し、床面に接した状態で、須恵器杯蓋5点、杯身5点と、鉄滓1点がまとまって発見された。このうち杯身3点は入れ子のように重なった状況であった。

玄室内床面一括出土土器（図版52、第69図）

須恵器杯蓋（1～3、8）杯蓋は5点出土した。1点は極めて醜く図示しえないが8に似たタイプの杯蓋である。1～3は、身受けのかえりを有す杯蓋で、つまみはつかない。身受けのかえりは端部より下に出る。天井部外面にはヘラ切り痕が残り、キ字形のヘラ記号が付されている。口径と器高は、それぞれ10.7・2.9cm、10.7・3.2cm、10.8・3.3cmの大きさで、いずれも砂粒を若干含む胎土で、堅緻に焼成されている。

8は、身受けのかえりを有す杯蓋で、つまみはつかない。身受けは端部とほぼ同じ高さにな



第68図 4号墳玄室遺物出土状況 (1/20)

る。口径13.8cm、器高2.2cmの大きさで、天井部は低平。細砂粒を胎土に含み、焼成が軟らかく土師器に似た明褐色を呈すが、回転ヘラケズリ痕の残る天井部の状況からして須恵器の生焼けの類であろう。

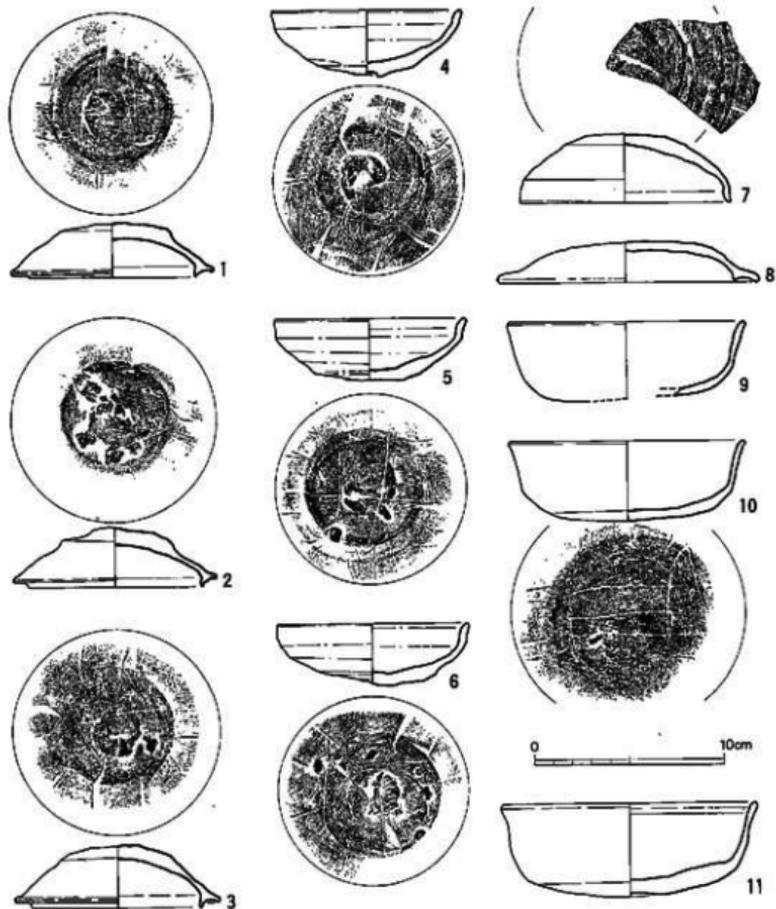
須恵器杯身(4-6, 9-10) 4-6は、丸みをもった体部の杯身で、口径10cm前後と小振りなもの。9-10は、底部が平らで体部が直立気味に立ち上がる杯身で、口径は12cmを上回る。法量などから、前者は1-3の杯蓋と、後者は8と図示しえなかった杯蓋とセットになるものと思われる。

4-6の杯身は、いずれも口縁部がヨコナデ調整、外底面にはヘラ切り痕が残りキ字形のヘラ記号が付される。ただ4はキ字形に更に2条のヘラ描き沈線が加わる。4-6の口径・器高は、それぞれ10.0・3.5cm, 10.1・3.3cm, 10.1・3.3cmの大きさで、堅緻に焼成されている。

9-10の杯身は、口縁部がヨコナデ調整、外底面はヘラ切り難しのあとナデが加わる。10では外底面に3条のヘラ描き沈線によるヘラ記号が付されている。2点共に軟らかい焼成で、淡茶褐色・灰褐色の色調を呈するが、須恵器の生焼けの類である。口径・器高は、それぞれ12.5・4.2cm, 12.5・4.3cmの大きさ。

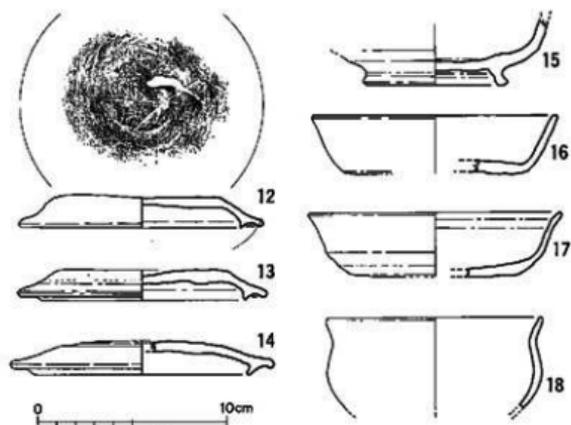
玄室内出土土器(図版52, 第69図)

須恵器杯蓋(7) 小破片からの復原だが、口径11.1cm、器高3.6cmの大きさ。身受けのかえりを有さないタイプの杯蓋で、天井部外面にヘラ記号の一部がみえる



第 69 図 4号墳出土土器実測図① (1/3)

土師器杯身(11) 底部が平らで体部が直立気味に立ち上がる杯身。口径13.5cm、器高4.9cmの大ききで、底部の器壁は厚めである。わずかに外反する口縁部の内面に1条の浅い沈線がある。胎土に大粒の粗い砂粒を若干含むが、やや良好な焼成で、淡い黒灰色を呈する。



第70図 4号噴出土器実測図② (1/3)

周溝内・墳丘前面出土土器 (図版52, 第70図)

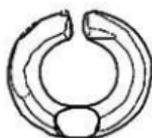
12・13・15は周溝Ⅱ区, 18は周溝Ⅰ区から出土し, 14・16・17は前面から出土した。

須恵器杯蓋 (12-14) 3点共に, 身受けのかえりを有す杯蓋で, つまみは付かないが, 天井部は低平である。12は身受けのかえりが口縁端部とほぼおなじ高さのもので, 13・14は口縁端部より下方に出る。12は口径12.9cm, 器高1.8cmの大きさで, ヘラ切り離し後のナデ調整が加わる天井部外面に単直線とヘラ先で短くカキ取ったようなヘラ記号が付されている。堅緻に焼成される。13は口径13.2cm, 器高1.6cm, 14は口径14.0cm, 器高1.8cmに復原できる。天井部外面はヘラ切り離し後に雑なナデが加わり, 14はヘラケズリ痕が残る。2点共に堅緻に焼成されている。

須恵器杯身 (15-17) 15は, 高台を有す杯身だが, 口縁部を欠く。体部下半は回転ヘラケズリされるが外底面はナデられている。16は, 復原口径13.0cm, 器高3.1cmの大きさ。ヘラ切り離しのあと未調整の外底面にヘラ記号の一部がみられるものの破片のため記号全体は不明。平坦な底部から口縁部が直線的に外へ開く。焼成は堅緻。17は復原口径13.4cm, 器高3.4cmの大きさで口縁部は外弯する。外底面はヘラ切り離しのあとナデ調整が加わる。焼成は堅緻。

土師器壺 (18) 復原口径11.4cm, 胴最大径11.4cm, 残存器高4.9cmの大きさで, 体部外半を欠く。精良な胎土で, 淡赤褐色に焼成されている。

装身具 (図版52, 第71図)



第71図
4号墳出土装身具実測図
(1/1)

耳環 銅地金銅張りの金環で、玄室内敷石間から出土した。長径24.8mm, 短径22.7mm, 断面8.0mm×5.7mmの楕円形を呈し、重量は12.0g。腐蝕が進むもの、残された金銅張りの部分は鮮やかな光沢を有している。

その他の遺物

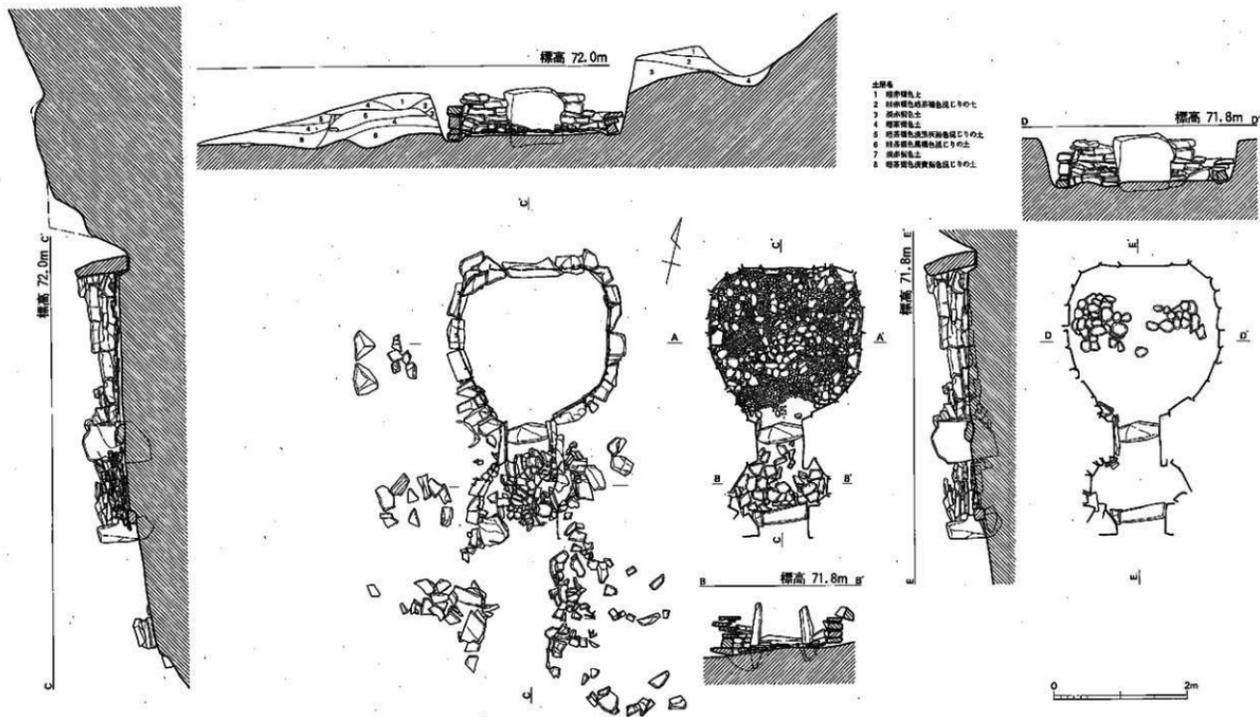
鉄滓 (図版52) 1は、一括出土須恵器に近接して出土した鉄滓で、長さ4.8cm, 幅3.8cm, 厚さ2.8cm, 重量65.5gの大きさ。2・3は、玄室内から出土した鉄滓で、長さ3cm前後と小さな塊である。

以上の出土遺物では、須恵器杯蓋(7)に6世紀後半~末の時期をみるが、1~3・4~6の須恵器杯蓋・杯身のセット、8と9・10のセットでは、杯蓋と杯身の逆転現象がみられ、高台をもつ杯身のみられないことからして、7世紀の前半を下ることのない時期が考えられる。周溝内出土土器には15の杯身など7世紀の後半に降りるものも含まれているが、この時期まで追葬があったのであろう。(小池)

5号墳 (図版53-1, 第61・72図)

E地区尾根の西斜面にあり、4号墳の南東側に隣接し、標高71.5m位に占地している。この古墳も4号墳と同様に農道敷に埋まっていた、調査前の観察ではよく解らなかったが、重機による表土剥ぎによって姿を現わしたものである。しかし、天井石などの大きな石が持ち出され、主体部はかなり陥没していた。

墳丘の規模は高さ1m前後、直径8m前後だが、周溝は歪つな馬蹄形にめぐる。岩盤の露出する周溝底の最高所は標高72.10m位である。墳丘盛土は、黒褐色土と暗茶褐色土のまじる旧表土の上に乗せられているが、最高で50cm程度の厚さしか残っていない。この墳丘を形成する盛土は、結晶片岩岩盤の風化した赤褐色粘性土や暗赤褐色土などが混じりあってみられる。主体部直交軸での墳丘盛土を観察すると、左側と右側で1m近い高低差があるものの、内径で6.3m, 外径で7.3mになる周溝がめぐる。この周溝の内側に一次的な低い墳丘盛土がなされており、次の段階では、周溝を埋めるようにして盛土が広がっている状況を窺い知れる。また墳丘内には、緑色片岩をはじめとする結晶片岩の石材が散在している。墳丘部に攪乱がかなり加わっていることにも一因があらうと思われるものの、列石といえるほどのまとまった部分は見られない。



第 72 図 特原 E・F 地区 5 号墳石室実測図 (1/60)

主体部 (図版54-1, 第72図)

この古墳の主体部は、主軸方位をN13°30'Wにとり、南南東方向に開口する複室構造の横穴式石室である。

主体部の掘り方は、北端部で岩盤にまで達しており、南部は旧表土の上に盛土を加えて床面の高さを調整している。

全長4.1mを測る石室の壁体は緑泥片岩の石材が用いられており、袖石と鏡石には大振りの石材が据えられている。

玄室は、長さ2.25m、最大幅2.25mで、奥壁側の幅2.2mに対して玄門側の幅は玄門幅まで狭まる。平面形は、奥行きのはほぼ真中ぐらいから手前が円形、奥が方形に近い形の三味線胴張りを呈す。奥壁は、中央に高さ85cm(床面からの高さ65cm)、幅80~90cm、厚さ15~25cmの扁平石を立てて鏡石とし、その両脇は小さな扁平石を小口積みしているが5~6段が残る。

玄室右側壁は遺存状況が悪く、基底部の石のみしか残らない部分もみられるが、左側壁は40~60cmの高さが残る。両側壁共に、奥壁と袖石の間は基底部から小口積みしている。ただ左側壁では、袖石に近い部分では基底部石が奥壁側より約20cm低くなっている。旧地形に沿った傾斜を有しながら積み上げられている。

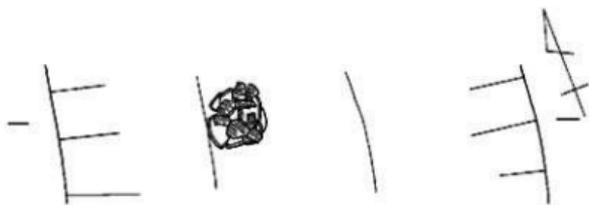
前室は、長さ0.65m、最大幅1.40mの胴張りのプランを有すが、玄室側が丸味をもって窄まるので、玄室と対照的なプランということになろう。側壁は基底部から小口積みの小さな扁平石が6~7段積み上げられているが、玄室に比して基底部はやや高い。

左右の袖石は、厚さ10~18cm、幅60cm・80cm、高さ100cm(床面からの高さ80cm・60cm)・80cmの扁平石を用いているが、65~70cmの間を距てて据えられている。そして、この間には、長さ70cm、幅30cm、厚さ15cmの石を置いて仕切石としている。また前室の左右袖石は、75cmの間を距てて据えられるが、左袖石は40cm四方で長さ85cmの柱状の石材を、右袖石は幅50cm、厚さ20cm、高さ80cmの扁平な石材が据えられており、玄門の仕切石よりやや細目の仕切石が渡されている。

石室内床面の敷石は、玄室と前室にみられるもの、玄室は円礫、前室は扁平な板石と顕著な差がみられる。玄室では、板石が若干混じるものの、下部は扁平な掌大の河原石、上部は玉砂利を主体にして敷きつめられている。なお玄門の付近には敷石の抜ける部分が少しある。

石室の閉塞は、前室前面に高さ40cm程度残っていたが、仕切石の部分から前面側に110cmの長さにわたって割石を中心に積み上げられている。

前室の袖石より前面は、石組墓蓋といえるほど丁寧に積まれた壁体ではないが、右側に石の集まる部分のがびており、左側では、石室前面から約1m空白部分を扶むが、前面に小口積みの部分が少しみられる。また、この付近から両側に墳丘をめぐる列石のあった可能性があるも



標高 72.0m



第 73 図 5号墳周溝遺物出土状況 (1/20)

この調査時には、明確に把握しえなかった。

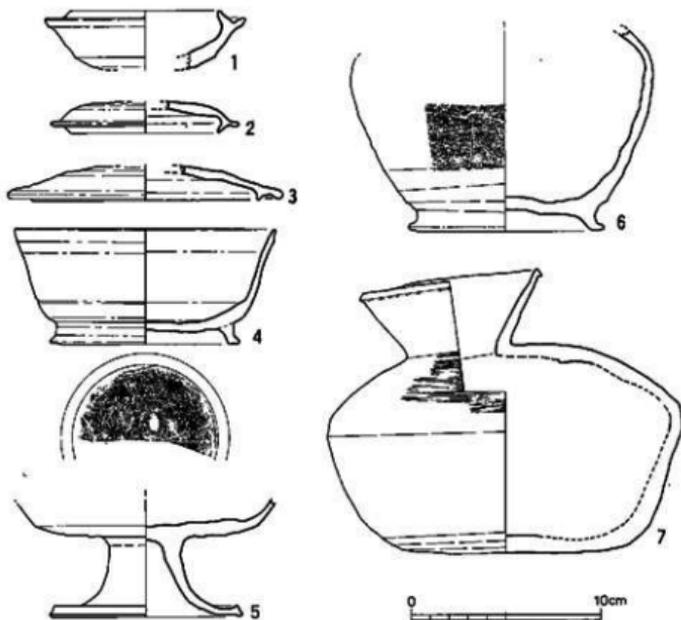
遺物

この古墳では、主体部からの遺物の出土は皆無である。遺物の出土は周溝内からのみであり、周溝Ⅲ区では周溝底より浮き、背後から転落して来たような状況で、須恵器杯蓋・杯身片などが出土している。周溝Ⅳ区では、周溝底に接して須恵器平瓶が出土した(第73図)。

周溝出土土器(図版54-2, 第74図)

須恵器杯蓋(2・3) 2点共に身受けのかえりを有すもので、破片資料のためつまみが付くか否かは不明。天井部外面は回転ヘラケズリされている。2は、復原口径10.0cm, 器高1.7cmの大きさと、平坦な天井部から口縁部が屈曲する。堅緻な焼成で、自然釉を被る。3は、復原口径14.6cm, 器高1.8cmの大きさと、天井部から口縁部にかけて直線的に移行する。かえり部は口縁端部よりさほど下に出ない。胎土に砂礫を若干含み、堅緻に焼成されている。

須恵器杯身(1・4) 1は、蓋受けのかえりを有す杯身で、復原口径10.6cm, 器高の現存



第74図 5号墳出土土器実測図 (1/3)

値3.1cmの大きさ。外底面は回転ヘラケズリされているが、器壁は厚めである。焼成がやや軟らかく、淡赤褐色を呈す。4は、高台を有す杯身で、復原口径13.9cm、器高6.1cm、高台部外径10.0cmの大きさ。回転ヘラケズリのあとナデ調整の加わる外底面には、ヘラ記号が付されているものの半欠資料のため記号全体は不明。堅緻に焼成されている。

須恵器高杯（5）杯部上半を欠くが、残存器高6.2cmのうち4.3cmが脚部の高さになる。裾部外径は10.2cmで、柱状部は3.8cmまで穿まる。杯外底部には回転ヘラケズリ痕が残る。比較的堅緻な焼成だが、紫褐色を呈す。

須恵器壺（6）長頸壺であろうが口頸部を欠く。残存器高10.5cmで、外径10.3cmの高台が付く。胴部最大径は16.0cmで、丸味をもって肩部が穿まる。体部下位にヘラケズリがみられるものの他は回転ナデ・ナデ調整されている。体部下半に×字形のヘラ記号が付される。胎土に砂粒を含むが、堅緻に焼成されている。

須恵器平瓶（7）器高14.5cm、胴部最大径18.8cmの大きさで、口縁部は直線的に開く。底

部にはヘラケズリ痕が残る、体部上半はカキ目がみられる。細砂粒を多く含むが堅緻に焼成されて黒灰色を呈す。

これらの須恵器では、周溝内埋土でも上位から出土した3-5の特徴からして7C後半代が妥当であろう。周溝底に接した平瓶には7C前半頃まで遡る可能性もある。いずれにしても周溝内のみの出土で、この古墳の築造年代等を示しえないが、杯の時期よりも平瓶の時期により近接した時期を考えるべきであろう。

石室の形態では、平面形で4号墳に近いが、鏡石を有す奥壁の存在から6世紀末-7世紀初頭頃の可能性がある。(小池)

6号墳

6号墳はE地区丘陵の南西斜面中腹(標高70m付近)に所在するが、特畑造成のため墳丘及び石室前面は削平されてしまっていて、地表面からの観察では当墳の存在は全く気付かなかった。

墳丘(図版55-1・2, 第75図)

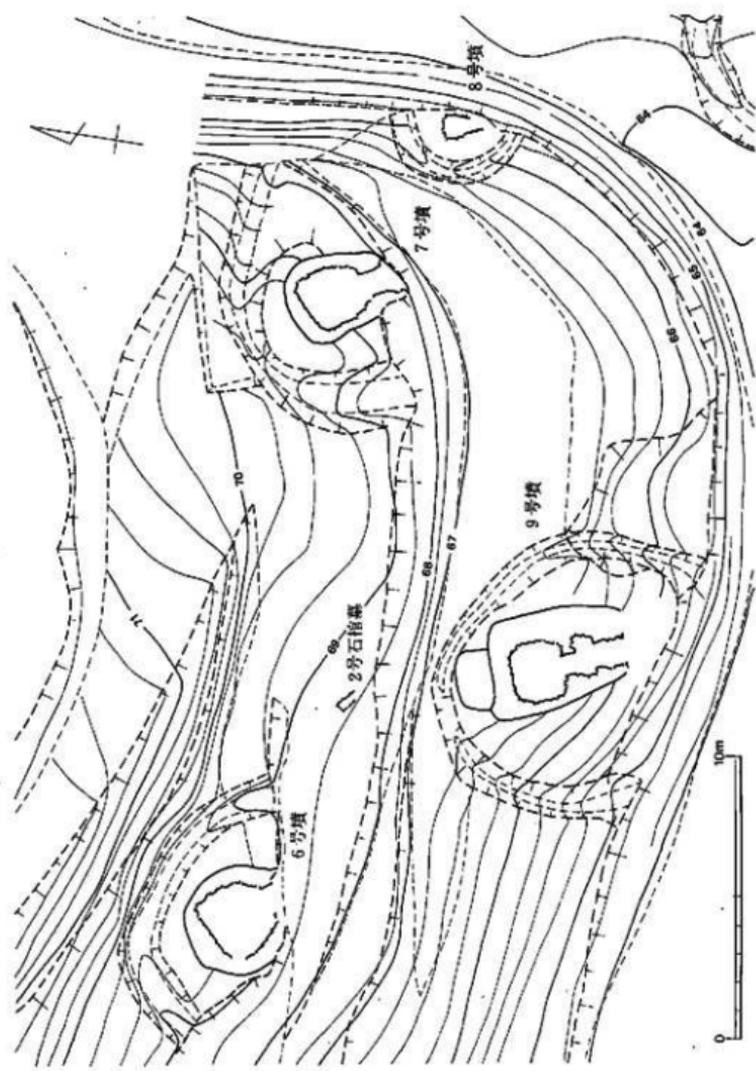
当墳は東から西へ下る斜面に築かれており、また、石室前面はカットされているため周溝及び石室の掘り方は斜面高位側にあたる奥壁と右側壁の裏側付近にしか見られなかった。周溝は幅1.3m、深さ0.4m、現存長約10mを測るが全周するものかどうかは不明である。石室の掘り方は、奥壁側で0.8m、右側壁側で1mの深さを有するが、左側壁側ではみられない。

主体部(図版55-2, 第76図)

当墳の主体部は前述したように石室前面がカットされていて遺存状況が悪いためはっきりしないが、現状では単室の両袖式横穴式石室といえよう。石室の主軸方位はN25°Wをとり、南南西に開口し、現存全長2.92mを測る。

玄室は平面巾着形をなし、長さは2.25m、最大幅は玄室中位よりやや奥壁寄りにあって2.55m、また、奥壁側の幅は2.22m、玄門側の幅は1mを測る。左右両側壁は胴張り状につくられるが、奥壁側ではより直線的となる。

奥壁中央には高さ0.76m、幅0.82m、厚さ0.1-0.15mの大きな板石を据えて鏡石とし、その上にやや小ぶりの板石を6-7段小口積みして奥壁としている。鏡石は内傾して据えられ、その上の石もわずかつつ内へせり出すように持ち送り気味に積まれている。奥壁の現存高は床面より1.16m高まで残っている。



第 75 图 6~9号墳墳丘・地山地形断面圖 (1/200)

側壁は右側壁で床面より高さ1.07mの12段が、左側壁では同じく1.02mの11段が残っているが、ともに玄門側の遺存状況は悪い。両側壁ともに最下段から板石の小口積みで、奥壁鏡石の高さまでは厚手の大きな石を使っているが、それより上部はやや小振りの石が使われている。左側壁は床面に近いところから持ち送るように積まれ内傾しているが、右側壁は逆に外へ開くように積まれている。

玄門部分の袖石は左壁のものが抜かれていて右壁のものしか残っていないが、それは長0.8m、幅0.45m、厚さ0.1mの板状のもので、縦長に据えて玄門の幅は框石の長さから0.7-0.8mが考えられる。

玄室床面に見られる敷石は上下2面あり、追葬に際して敷き直されたことが窺えるが、2面の間には間層を挟んでおらず、一次の敷石からさほど長くない時期に二次の敷石がなされたものと考えられる。一次の敷石は大きめの角礫が丁寧に敷かれているが、二次の敷石はやや小ぶりの角礫で雑な並べ方をしている。

玄室と羨道の間の玄門部分には長さ0.35m、幅0.75mと長さ0.2m、幅0.5mの大小2個の仕切石を据えて框石としている。

羨道部はほぼ全壊しているが、かろうじて右側壁にあたる板石1枚が玄門袖石跡に残存している。

これら石室の構築に使われた石材は、全て緑泥片岩である。

遺物

6号墳からの出土遺物は、玄室内二次床面上から土師器少片が1点と、一次床面敷石間より鉄スラグが1点出土したのみである。

当墳からは年代の判明する遺物の出土はなかったが、石室構造や周囲の古墳の状況からして7世紀中葉～後葉の時期に6号墳は造られたものと考えられる。(新原)

7号墳

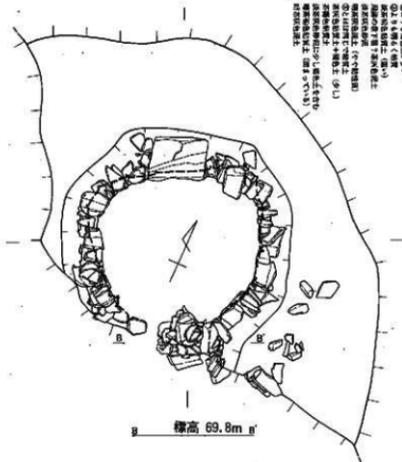
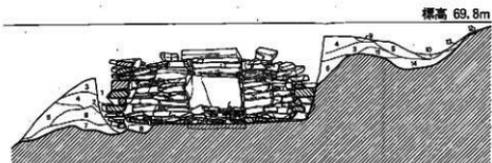
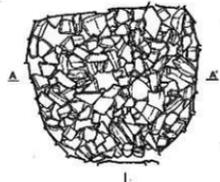
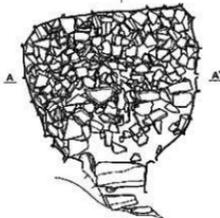
墳丘 (図版56-1, 第75図)

本墳は南北に伸びる舌状尾根上に築造され、6号墳より東南12mに位置する。前室部略中央より墓道にかけては畑造成により喪失し、玄室及び前室の一部も大半以上が削平を受け石材等を破壊し投棄した状況を呈していた。斯る状況下で墳丘の最大残存長は東西8m、南北5mを測る。

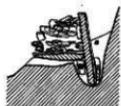
周溝もⅡ・Ⅲ区のみ残存すると考えられ、外径11m、内径7.6mが最大値となる。いかなる

本層名

- 1 河原色砂層に少し礫状土を含む
- 2 河原色礫土に礫状土の層
- 3 河原色礫土+礫土 (砂) 小礫や多く含む
- 4 河原色礫土
- 5 河原色礫土
- 6 ④に黄色や赤みや中礫質土
- 7 ④より少し粗い+中礫質土
- 8 河原色礫土
- 9 色相は④よりやや濃い
- 10 河原色礫土+河原色礫土
- 11 河原色礫土 (やや粗質)
- 12 河原色礫土
- 13 ④に礫状土で、小礫は少ない
- 14 礫状土礫状土に礫土少しを含む

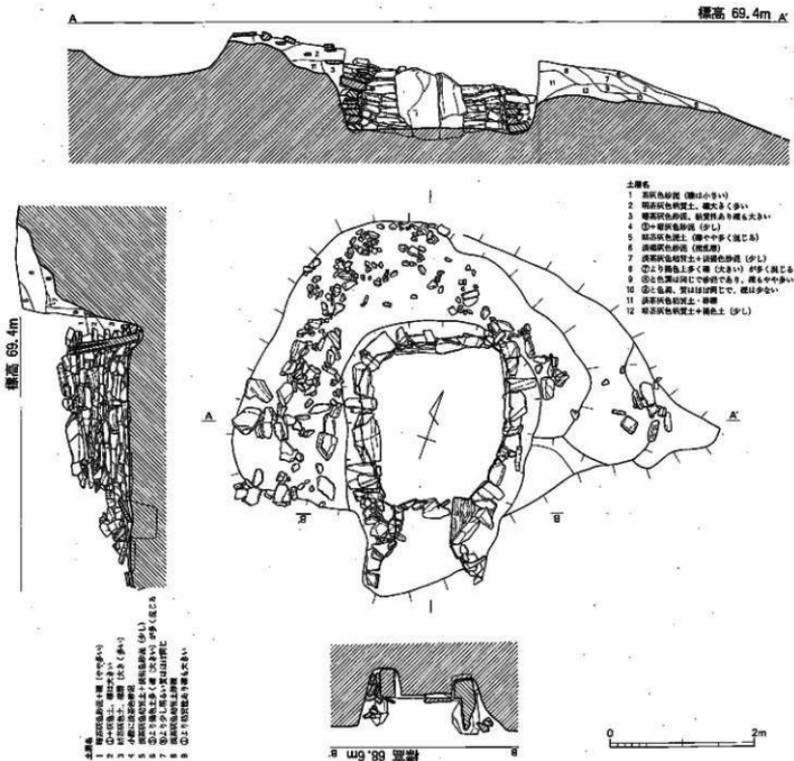


標高 69.8m



- 本層名
- 1 河原色砂層に少し礫状土を含む
 - 2 河原色礫土に礫状土の層
 - 3 河原色礫土+礫土 (砂) 小礫や多く含む
 - 4 河原色礫土
 - 5 河原色礫土
 - 6 ④に黄色や赤みや中礫質土
 - 7 ④より少し粗い+中礫質土
 - 8 河原色礫土
 - 9 色相は④よりやや濃い
 - 10 河原色礫土+河原色礫土
 - 11 河原色礫土 (やや粗質)
 - 12 河原色礫土
 - 13 ④に礫状土で、小礫は少ない
 - 14 礫状土礫状土に礫土少しを含む

第 76 図 柿原 E・F 地区 6 号墳石室実測図 (1/60)



第 77 図 穂原 E・F 地区 7 号墳石室実測図 (1/60)

形状を呈していたかはⅠ・Ⅳ区が不明な為全容は定かでない。

墳丘盛土も大部分削平されているが、岩盤面まで地山整形を行なった後盛土がなされている。残存最大高65cmを測る。玄室後方部の小石塊は地山整形時及び周溝掘削時に産出され盛土内に混入したものであろう。なお玄室奥壁付近より前室方にかけてはやや整然とした体で列石をなしているが内護列石と断定する迄には至っていない。

墳丘の規模は前述した理由で不明である。

主体部 (図版56・23, 第77図)

本主体部はN19°30'Wに主軸をとり略南に開口する。石室は複室の横穴式石室と推定され、残存長3.4mを測る。

掘り方は基底部の石に略沿って岩盤を削り抜いており、急勾配の立ち上がりをなしている。

石室の状況は玄室で鏡石上端面までが残存し、前室は略中央部迄の基底部しか在しない。玄門部の右袖石も上半部が欠損している。

玄室は長さ2.5m、奥壁際で1.7m、中央部で2.1m、玄門際で1.18mを測る若干膨張りの平面形態を呈す。

奥壁は厚さ13cm程の扁平な板石を縦長に立て、2枚組み合せ鏡石の体をなす。

両側壁は墓壇底を僅かに掘り下げ板石を据えている。その上に順次4枚の板石を垂直かつ水平に小口積みしている。これより上方は少しづつ内側にせり出すように持ち送っており、不整形かつ大きめの石材を使用している。奥壁の鏡石は僅かに内傾して設置されている。

玄門部の両袖石は深く掘り下げてしっかりと立石させている。2枚のみが結晶片岩を使用し、裏込めにも小石塊を十分に詰め込み安定させている。他の石材は緑泥片岩が主である。

玄室床面は完全に攪乱され旧態を止めていない。玄門部付近の3枚の板石が床石であったろうか。框石も在しなかった。

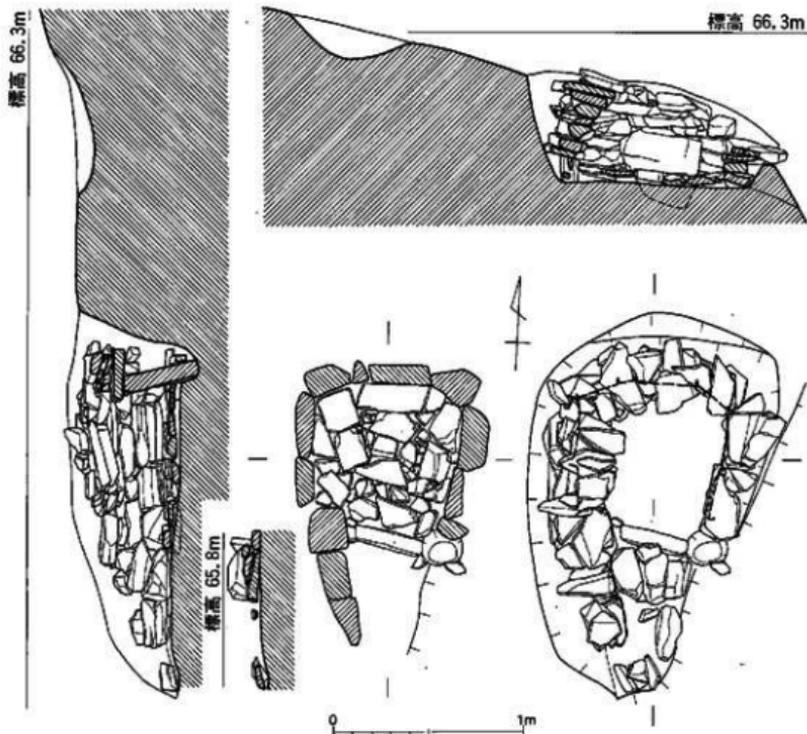
前室は大半を喪失して不明であるが最大幅1.3mを測り、基底部の石しか残していない。若干伸展する様相を呈している。

玄室内及び墳丘内より何ら遺物は出土しなかったし、石室の形状も不明な点が多く築造年代は差し控えたい。(武田)

8号墳 (図版57, 第78図)

E地区尾根の東側斜面に構築された小古墳。東南側は崖で失われているが、尾根の斜面に残された浅い周溝から、直径5m程度の規模をもつ円墳であったと推定される。

周溝は、幅0.6m前後で、断面U字形を呈し、深さ0.2-0.3m程度。埋土は、風化礫を含ま



第78図 8号墳石室突面図 (1/30)

ないや砂質の暗黄褐色土で、周溝掘削が岩盤にまで及んでいるため、周溝底には岩盤が露呈している。周溝底の高さは、最高所で標高66.3m、前面側では標高65.6mの高さになっているが、主体部内の床面敷石の面が標高65.6mであるので、主体部床面よりも周溝底の方が既ね高い。周溝で区画された内側の墳丘に相当する部分に盛土は全く残っていない。

主体部（図版57-2、第78図）

この古墳の主体部は、 $N 2^{\circ} 30' W$ に主軸をとり、南方向に開口する。単室の横穴式石室である。石室全長は1.4mを測る。

掘り方は、岩盤の風化礫がまじる暗黄褐色土の地山から幅1.3m、長さ1.9m以上の羽子板形に掘り込まれており、北西側の底面は岩盤を掘り込んでいます。

石室は、緑泥片岩の扁平石を用いて構築されているが、南東部の右袖石や羨道右側壁は全く残らない。比較的残りの良い部分は北西部の左側壁から奥壁にかけての部分で、高さ0.5~0.6m分が残る。

玄室は、左側壁で0.6m、右側壁で0.65m、主軸で0.7mの長さを有し、幅は奥壁で0.8m、支門側で0.7m。不整形な方形プランを呈す。

奥壁は、中央に高さ30cm（石材の高さ40cm）、幅40cm、厚さ10cmの扁平石を立てて鏡石とし、その両脇は基底部から平積みでわずかに内傾させている。鏡石の上にはやや広い扁平石で控え積みされて背後にも重心のかかるような配慮がされている。

左側壁は、奥壁寄りの基底部に幅30cm、高さ15cm、厚さ10cm程度の石を腰石状に据えているが、それ以外は扁平石を平積みして持ち送られている。右側壁は、基底部から扁平石で平積みされている。

袖石は、右袖石を失っているが、抜き表のみ確認できた。左袖石は、高さ、厚さ、幅共に20cm余りの大きさの塊石を据えている。両袖石間0.4mの玄門には、長さ37cm、幅9cm、厚さ5cmの細長い石をわたして仕切石としているが、主軸に対して13°程度右側が開くかたちに置かれている。

羨道は、長さ50cm分のみ3段程度平積みされているが、前面側に乗るように並べられる。

床面の敷石は、玄室にのみみられるが、扁平石を主にし、割石で空隙を充填している。全体に東南側が低めに傾いている。

閉塞石は、仕切石の前に、主軸方向に沿う方向に3つの石を並べており、約20cm分の高さが残っていた。

遺物の出土はみられず、時期の判断もし難いが、極めて小さな石室で、最終末期のものと考えてさしつかえないであろう。

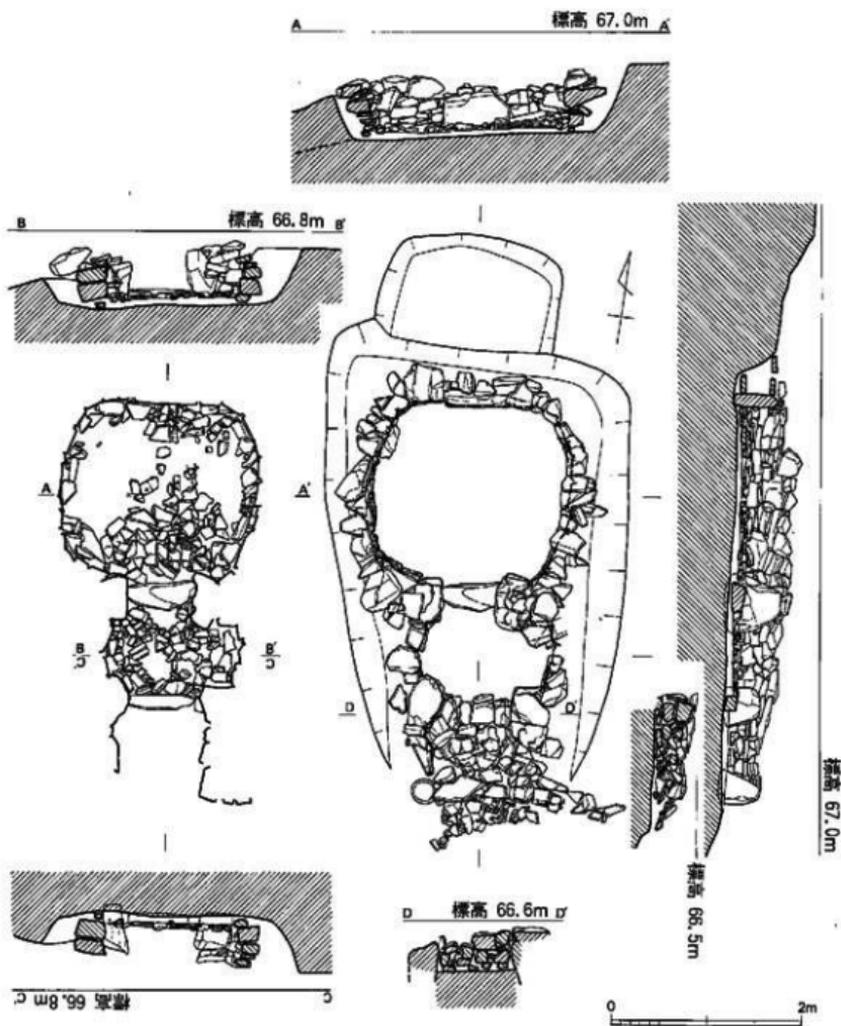
(小池)

9号墳 (図版58, 第75・79図)

当墳は、E区丘陵の標高66.0mを測る西側斜面に位置する。墳丘は、柿畑を開墾した際に削平され全く遺存しないが、丘陵側に残る周溝により外径10m程の円墳に復原可能である。周溝の幅は西側で1.2m、北側で0.6mを測る。

主体部 (図版58-1・2, 第79図)

本墳の埋葬施設は、複室の横穴式石室であり、南側（平野部）に開口する。主軸方位はN



第 79 圖 9号填石室実測圖 (1/60)

8°30'Wを示す。石室掘り方は長方形を呈し、岩盤まで掘り込んでいる。また、掘り方北側には長軸1.9m、短軸1.2m、深さ0.4mの段を設けているが、その意図は不明。

石室は破壊が著しく、天井部は存在せず、石材が玄室内に落ち込んでいた。石室全長は4.2mを測る。玄室は長さ1.8m、幅2.2mを測り、側壁が張った隅丸方形を呈する。天井部は存在しないもの、ドーム状を呈しよう。奥壁の中央に高さ0.5m、幅0.7m、厚さ0.15mの石を立てて鏡石としている。側壁は平石を小口積みしており、4～5段数える。床面は明赤褐色土を入れた後で平石による敷石を施している。敷石が側壁間に存在しないのは、盗掘の際に玄室が荒されたためであろう。前室は長さ0.6m、幅1.4mを測る。前室側壁は、玄室同様平石を小口積みしており、3～5段数える。前室床面には敷石を施しているが、玄室のそれよりは小ぶりの石を使用している。羨道部は長さ1.0m、幅0.85mを測り、閉塞していた。閉塞石は長さ20～30cm程の角礫を使用している。また、石材を全て除去したところ、玄門石のみ根石を施していた。

遺物 (図版59・60, 第80～83図)

玄室床面中央より耳環・鉄釘等が出土した。また、前室からは鉄釘・紡錘車、供獻土器として須恵器の杯身・杯蓋の数セットが出土した。

(小田)

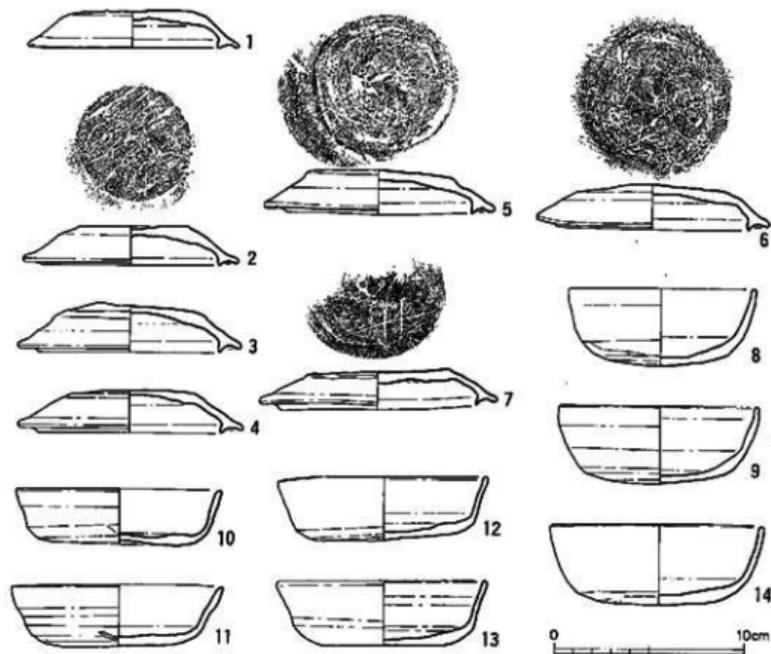
前室内出土土器

(図版59-2・第81図)

須恵器杯蓋(1～7)見受けのかえりを有す杯蓋で、天井部につまみが付かない。天井部外面は、ヘラ切り離しのあと雑にナデられており、平坦な天井部になっている。1は見受けのかえりが口縁端部と同じ高さで、かえりが下方に出ないが、2～7はかえりが口縁端部より下方に出る。いずれも整緻に焼成されている。1は、口径11.1cm、器高2.0cm。2は、口径11.4cm、器高2.1cm。天井部外面に板状圧痕³が付く。3は、口径11.8cm、器高2.5cmの大きさで天井部に焼きぶくれがある。



第80図 9号墳前室遺物出土状況 (1/20)



第 81 図 9 号墳出土土器実測図 (1/3)

4 は、口径11.9cm、器高2.3cmの大きさ。5・6 は天井部の端にキ字形のヘラ記号が付されている。5 は口径12.1cm、器高2.3cmで、6 は口径12.5cm、器高2.0cmの大きさ。7 は天井部端にV字形とこれに交差する蛇行気味の沈線が加わるヘラ記号が付されている。口径12.3cm、器高2.35cm。

須恵器杯身（8-14）高台の付かない杯身。8・9・14は、丸味をもった深めの体部で、口縁部が内弯気味に立ち上る。10-13は、浅めの体部で、平坦な底部から外反気味に口縁部が立ち上る。8・9の外底部は回転ヘラケズリ痕がみられ、14はヘラ先による不定方向のナデ痕が加わる。また10-13の外底部はヘラ切り離しのあと雑にナデられており、板目尻痕に似た状態になっている。いずれも堅緻に焼成されているが、14はやや茶褐色味のある色調を呈す。8は口径9.9cm、器高4.1cm。9は口径10.5cm、器高4.1cm。10は口径10.9cm、器高3.0cm。11は口径11.2cm、器高3.3cm。12は口径11.1cm、器高3.4cm。13は口径11.2cm、器高3.4cm。14

は口径11.3cm, 器高4.3cmを測る。

装身具 (図版60, 第82図)

耳環 (第82図) 玄室内床面に接して出土した。銅地金銀張りの金環で白金色の光沢を有す。大きく破損しているが、長径23mm前後, 短径22mm前後の大きさであろうか。断面形は6.4×8.2mmの楕円形を呈すが、厚さ1mmで空洞になっている。重量の現存値は2.9gを測る。

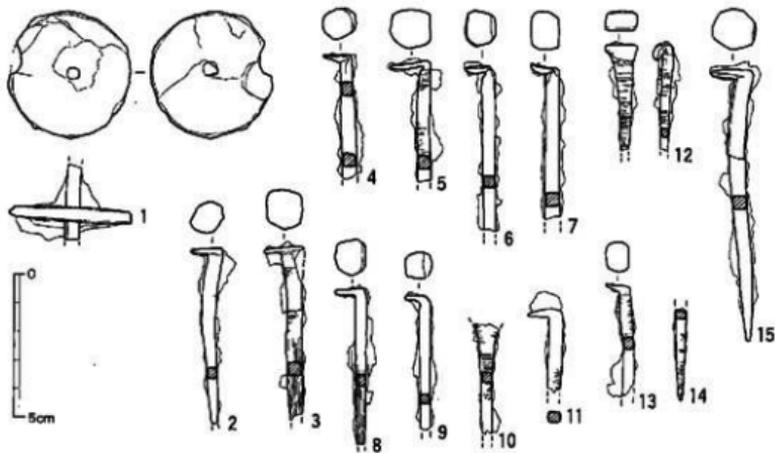


第82図 9号墳出土
装身具実測図 (1/1)

鉄製品 (図版60, 第83図)

紡錘車 (第83図1) 前室内の下部埋土から出土した。直径4.3cm, 厚さ0.5cmの円板の中央に共地の直径0.4~0.5cmの軸が付く。軸は円板に通したものが否か, 軸の両端の形状がどうかは不明。軸の一方は断面三角形に近い。重量は現存値26.0gを測る。

鉄釘 (第83図2~15) 玄室内及び前室内の埋土中から多量の鉄釘片が出土し, その総量は重量にして300gを越し, 頭部破片のみで25個体前後まで確認しえたが, 遺物整理時に混乱して量的な比較はしえない。図示しえる資料では完形に復原しえる例も稀だが, 2~11は玄室内から, 12~15は前室内から出土した資料である。体部は断面方形で先端は細まるが, 頭部はL字形に折り曲げて平坦面になっている。完形品の15は長さ9.6cmで, 0.5cm角の太さ, 頭部の広



第83図 9号墳出土鉄製品実測図 (1/2)

さ1.4×1.5cm, 厚さ0.3cmで重量11.5gを測る。木質の付着する例のうち3では、頭部から2.9cmまでが木目に直交し、それより先端は並行するが、14のように先端部で木目に直交する木質が残る例もある。

これらの遺物では、前室内に7セット分の杯蓋・杯身が一括出土しており、この土器は7世紀前半代に含まれるであろう。この古墳では、これ以外に土器類は破片すらも出土していないが、前室の閉塞石にかかるようにして出土していることから、この時期まで追葬があったと考えのが妥当であろう。鉄釘の出土が前室、玄室共にみられるので、鉄釘の普遍的な使用がこの時期に考えうる。(小池)

10号墳 (図版61・62, 第84図)

E地区尾根の東斜面先塙部寄りにある古墳で、標高62.8m～63.9m位に占地している。調査前の観察では古墳の存在が全く解らなかったが、表土剥ぎの結果、削平を受けた平坦面に石材の散乱と半円形に周溝が検出されて、存在を知りえたものである。

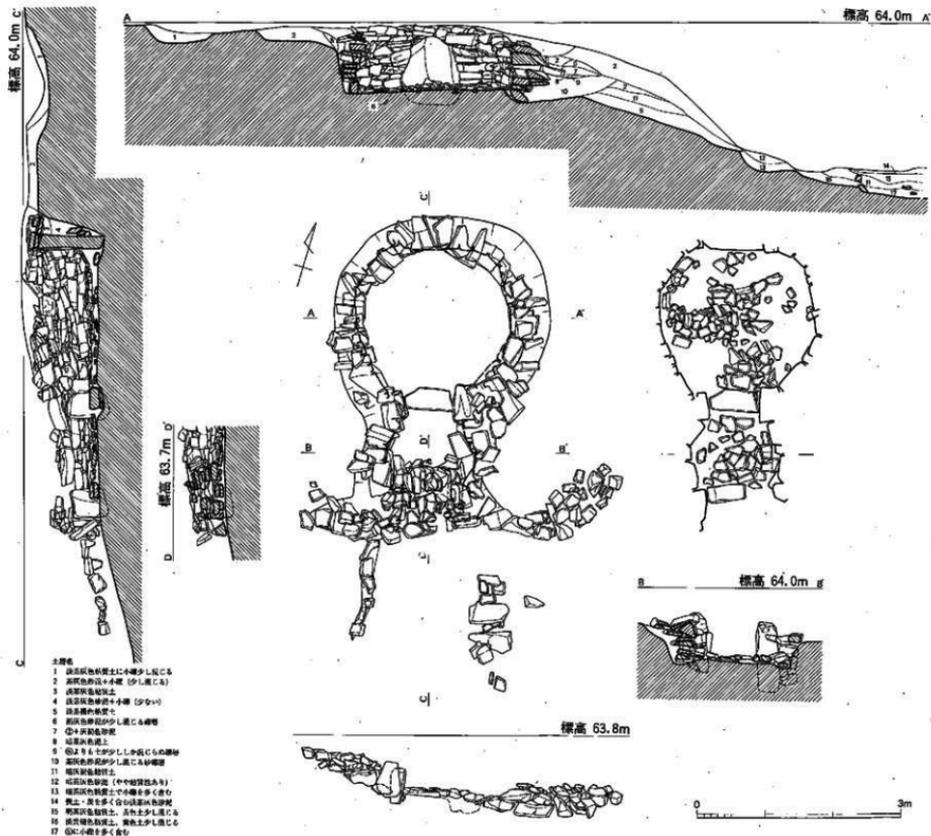


第84図 10号墳墳丘・地山整形面実測図 (1/200)

周溝の規模は、外径で12.0m余り、内径で10.0m前後の弧を描き、幅1.0m～1.6m、深さ0.2m～0.4m程度に残る。周溝底の最高所は標高63.8mを測る。しかし、主体部の中心から周溝の距離は、西側で3.3m、約2m低い東側で6.6mを測るので、主体部が高所の西側に偏って構築されていることになる。また、東側の墳丘裾部で石材の集積が一部検出され、列石かと考えられるが、掘土現場の都合で十分に調査し得なかった。但し、後述する石室前面に続く列石とは、高低差があり、別個のものである。

主体部 (図版62・63, 第85図)

この古墳の主体部は、主軸方位を



第 85 図 棒状 E・F 地区 10 号墳石室実測図 (1/60)

N16°Wにとり、南南東に向かって開口する複室構造の横穴式石室である。主体部の掘り方は、玄室部分が直径約3.2mの不整形を呈し、前室部分は幅1.9m～2.0mの溝状を呈す。赤褐色・黄褐色粘土の地山を掘り込み、奥壁付近で深さ1.0m程度を有すが、底面には岩盤が露呈する。

石室は、全長4.1mを測る。石室の壁体には、緑泥片岩の石材が多く用いられている。

玄室は、左側壁寄りの長さ2.1m、右側壁寄りの長さ2.0m、最大幅2.3m、玄門側での幅1.3mを測る胴張りプランを呈するが、右側壁は左側壁に比べて強い弧を描く。奥壁は、高さ80cm（石材の高さ100cm）、幅90cmの、砂岩にも似た砂質の緑泥片岩の、板石を据えて鏡石とし、その両脇は扁平石を基底部から小口積みして、持ち送りの壁体を成している。小口積みは8～9段で100cm程の高さだが、鏡石の上にも1～2段積まれている。左側壁は、基底部から小口積みされるが、部分的には、やや厚みのある扁平石を立てて腰石状の基底部をなしている所もある。また、前室寄りの壁体を構成する石材には、やや大きめの扁平石や、塊石が用いられていて、6～7段で90～100cmの高さを有す。右側壁は、左側壁と同様、前室寄りの壁体にやや大きめの石材が用いられるが、左側壁よりもその範囲が広めである。高さは、60～70cmが残る。左右の袖石には、砂岩系の緑泥片岩が用いられる。左袖石は、高さ40cm（石材の高さ60cm）、幅40cm、厚さ15～25cmの大きさで、右袖石は、高さ60cm（石材の高さ100cm）、幅55cm、厚さ30cmの大きさの石材が据えられている。右袖石が大きく、深く据えられるのは、地山の傾斜に対して強度を必要とするためであり、強固な根固めを施しているのも、このためであろう。扉石は、袖石間72cmぎりぎりに、長さ71cm、幅32cm、厚さ16cmの扁平石を据えている。

前室は、長さ1.0m、最大幅1.3mの広さで、胴張りのプランを呈する。側壁は、基底部から扁平石を小口積みするが、残りの良い左側壁では、袖石・前室袖石の高さと同じである床から40cm以上には大きめの石材が掛けられている。この高さで、石材の積み方の変化が確認できるが、玄室でも鏡石と袖石の高さで石材の積み方の変化がみられるので、一連の作業工程でのものと理解することができる。前室袖石は、右側を既に失うが、左側は高さ40cm（石材の高さ52cm）、幅43cm、厚さ15～20cmの緑泥片岩扁平石を据えている。右側の抜き跡は幅50cm、深さ20cmを測る。袖石間は0.7mで、長さ52cm、幅24cm、厚さ8cmの樞石が据えられている。

羨道は、前室袖石にすぐ接して羨門の石が据えられているので、無きに等しい。右の羨門の石は、既に抜き取られて無いが、抜き跡は幅40cm、厚さ12cm、深さ20cmを測る。左の羨門の石は高さ50cm、幅32cm、厚さ8cmの緑泥片岩板石が立てられている。羨門の石の外側に接して、前庭部側に、左側1.5m、右側は0.7mの間を以て1.7mの平積み石列があり、石組墓道のような構造になっている。また、羨門の石の外側から右側に2.2m、左側に1.1mの長さの列石が、左右に延びている。この列石は、扁平石・塊石で2～3段雑に小口積みされているが、周溝よりもかなり内側に位置する。

石室床面の敷石は、玄室では中央部に扁平石を用いた敷石が残るものの、四隅は攪乱のためか残らない。前室では扁平石を用いた敷石が大半を覆う。

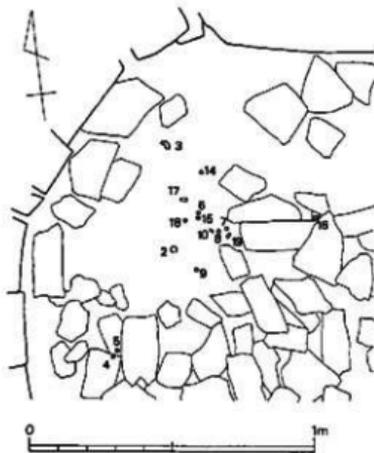
閉塞は、前室袖石の前面から前室の前側半分にかけて、長さ1.1m、高さ0.5m分が残る。整然とした積み方ではないが、割石を主軸方向に平行するように置くものが多い。

遺物 (図版64・65、第86-88図)

墓道・前庭部出土土器 (図版65、第87図)

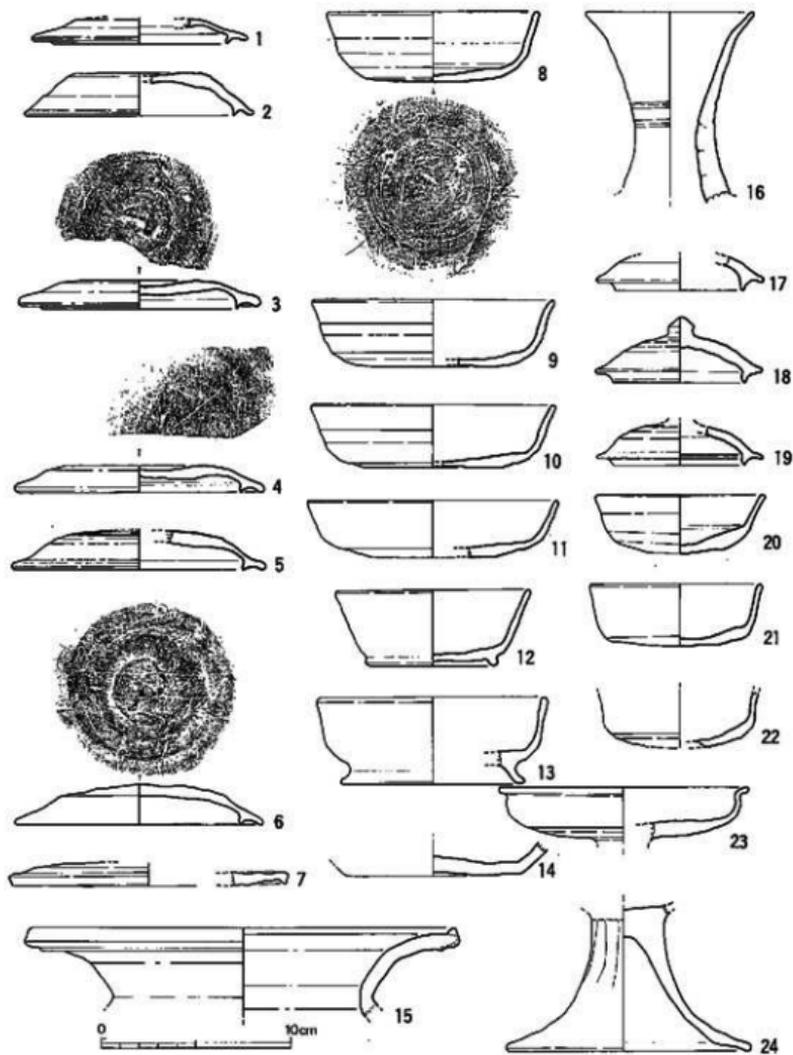
須恵器杯蓋 (1~7) 身受けのかえりを有するもの(1~6)と、鳥嘴状口縁で身を受けるもの(7)がある。1・2・7は小破片からの復原だが、2~4・6では天井部につまみが付かない。天井部内面の調整は多方向のナデが加えられているが、1・5・7の天井部外面には回転ヘラケズリ痕がみられ、2~4・6では天井部外面はヘラ切離しのあとナデが加わっている。

1は、復原口径11.4cm、かえりの径9.2cm、器高1.3cmで、かえりは口縁端部より少し下に出る。2は、復原口径12.6cm、かえりの径10.0cm、器高2.3cmで、天井部がやや高く平坦。かえりは口縁端部より少し下に出る。やや陥没気味の天井部外面に×字形のヘラ記号が付されている。4は、復原口径13.2cm、かえりの径10.7cm、器高1.45cm。かえり部は口縁端部とはほぼ同じ高さである。やや陥没気味の天井部外面に単直線のヘラ記号が付されている。5は、復原口径13.4cm、かえりの径11.0cm、器高2.1cm。6は、口径13.1cm、かえりの径10.7cm、器高2.25cmで、かえりと口縁部はほぼ同じ高さ。天井部外面に3条と2条の平行線の交差するヘラ記号が付されている。7は、復原口径14.8cm、焼け歪みを生じている。天井部を欠くが、平坦なつまみの付く杯蓋であろう。杯蓋では、6のみ焼成が軟らかく茶褐色を呈するが、他は堅緻に焼成されている。



第86図 10号墳玄室遺物出土状況 (1/20)

須恵器杯身 (8-13) 8-11は高台の付かない杯身で、焼成は堅緻。8はやや深めで丸みのある体部をもつが、9-11は浅めの体部で底部は平坦。8は、口径11.2cm、器高3.75cm、内底面は多方向ナデ調整、外底面は回転ヘラケズリされており#字形のヘラ記号が付される。9-11は内底面が多方向ナデ調整、外底面はヘラ切離しのあ



第 87 圖 10号墳出土土器実測圖 (1/3)

と雑にナダられている。9は、復原口径12.8cm、器高3.5cm。10は、復原口径12.8cm、器高3.3cmで、外底面に単直線のヘラ記号の一部があるものの破片のため全体の形は不明。11は復原口径13.1cm、器高3.0cmの大きさ。

12・13は、高台を有する杯身。焼成は堅緻。12は、口径10.2cm、器高4.0cm、高台径7.0cmの大きさ。内底面は多方向ナダ調整、外底面はヘラ切離しのあとナダが加わっている。13は、復原口径12.2cm、器高4.6cm、高台径9.07cmの大きさで、底部を欠く。

土師器高杯(24) 杯部を欠き、残存器高7.7cm、裾部径12.9cmの大きさ。中空の柱状部から裾部が広がり、裾端部は踏張り気味にまとまる。柱状部外面は縦方向、内面は横方向にヘラケズリされている。

周溝Ⅲ・Ⅳ区出土土器

須惠器壺(14・16) 16は、長頸壺の口頸部で体部との接合面で剥けている。口径8.9cm、口頸部の高さ9.6cmで、中ほどは直径4.3cmまで窄まり、沈線が2条めぐる。口縁部は外反する。焼成は堅緻で黒灰色を呈する。

14は、壺ないしは平瓶の底部破片。外底面はヘラ切離しのあと雑にナダられ、底部外面はヘラケズリされている。

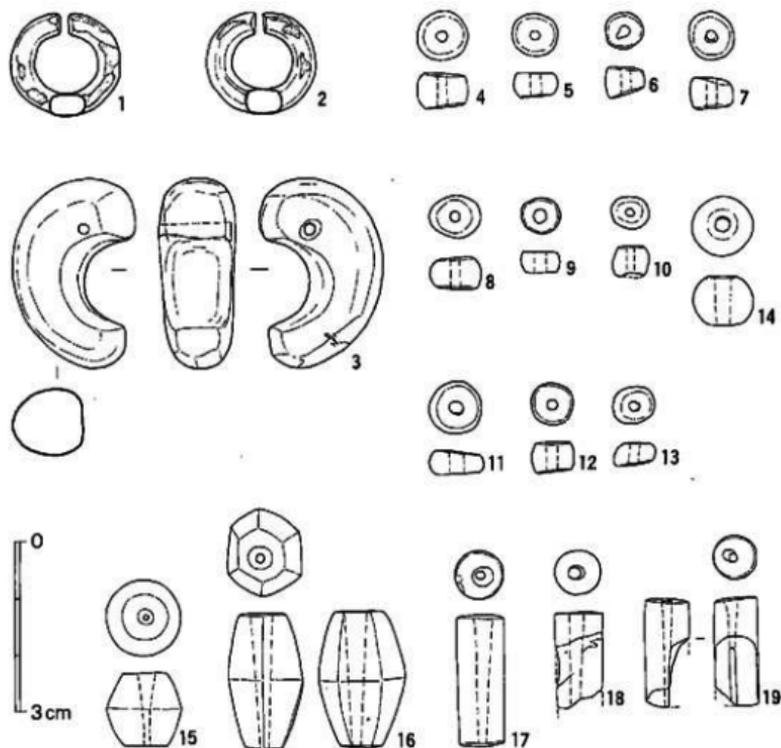
須惠器壺(15) 復原口径23.0cmの大きさ。口縁端部は上方へつまみ出したように立上り、口縁直下に低い凸帯が1条めぐる。砂粒をわずかに含む胎土で、焼成は良好。灰色ないし黒色を呈している。

須惠器杯蓋(17-19) 身受けのかえりを有する杯蓋で、18は宝珠形のつまみが付く。17は、破片資料のため器形がはっきりしないが、口径8.9cm、天井部はやや厚く、外面に回転ヘラケズリ痕がみられる。18は、口径8.8cm、器高3.5cm、かえりの径7.0cm、かえりの高さ0.5cm。天井部外面は回転ヘラケズリされ、直径1.3cm、高さ1.1cmのつまみが付く。19は、口径8.8cm、かえりの径7.0cm、天井部はやや丸みもち、外面に回転ヘラケズリ痕とつまみの刺げた痕がある。18と同様なつまみが付くのであろう。

須惠器杯身(20-22) 口径9cm前後の、高台をもたない杯身。外底面はヘラ切離しのあと未調整のまま、平坦な底面から直線的ないしは外反気味に口縁部が立上る。20は、やや厚めの底部を有し、丸みのある体部になる。口径9.0cm、器高3.1cmの大きさ。21は、口径9.0cm、器高3.1cmの大きさ。22は、外底面にヘラ切離しの際に残った突起があたかも低いつまみかのように見える。

須惠器高杯(23) 高杯杯部破片で、復原口径は13.4cm、杯部の高さ2.8cmの大きさ。丸みをもってふくらむ体部から、わずかにくびれて口縁部は外反する。杯部外底面は回転ヘラケズリのあとヨコナダされている。焼成は堅緻。

装身具(図版65, 第88図, 表4)



第 88 図 10号墳出土土鉄身具実測図 (1/1)

玄室内の左奥部から、耳環 2 点、勾玉 1 点、小玉 10 点、丸玉 1 点、切子玉 2 点、管玉 3 点が出土した。

耳環 (1・2) 2 点共に銅地金鋼張りの金環。法量が同規模なので対であろう。1 は、長径 19.4mm、短径 17.9mm、断面 6.6mm×3.9+αmm の楕円形で、重量は 5.6g。風化が進んでいるものの、残された表面は白銅色で光沢を保っている。2 は、長径 19.0mm、短径 17.9mm、断面 6.6mm×4.0mm の楕円形で、重量は 5.6g。風化が進んでおり、表面は全く残っていない。

勾玉 (3) 乳白色地で、卵黄色・緑色の斑点が入る硬玉質の勾玉。長さ 32.2mm、厚さ 12.5mm、幅 21.3mm、重さ 14.5g を測る。孔は片面から主に穿たれていて一方が 3.5mm 以上、

他方が2mmの孔径を測る。

背面は半径17mm前後、腹面は7mm前後の弧を描く、ずんぐりとした感じのもので、よく研磨されており、光沢を有している。

ガラス小玉(4~13)10点出土し、色調の濃淡はあるがコバルトブルーの色調を呈する。外径6mm前後から9mm前後の大きさ、厚さ3.8~6.4mmの大きさのものである。素材のガラスを巻きつけて作られたもので、6・7の孔の部分に巻つけ斑の棘状突起がみられる。

水晶製切子玉(15・16)

15は、鼓頭円錐形を二つ合

せたような、外形円形のもので、算盤玉に形状が似るので算盤玉と称されるもの。重量3.1gを測る。16は、鼓頭六角錐を二つ合せたような外形が六角形に近いもの。長さが24.1mmと長めで側面観は霽玉に似る。重量6.7gを測る。

管玉(17~19)17は、暗めの濃緑色を呈す碧玉製で、外径が8.3~8.5mmの端から、7.9~8.2mmと細めになる端に向かって穿孔されている。重量は2.9gを測る。18は、風化が進み、手に触れるだけで表面が剥げ落ちるような凝灰岩質(グリーンタフ)製の管玉。図示した資料の他に接合しない小破片が2点ある。風化の進み方や、外径などからみて同一個体と思われるが、もし同一個体とすれば長さ26~27mmの大きさであろう。19は、明るめの濃緑色でうす緑の縞の入る碧玉製管玉。一方の端は平坦でなく、また中途まで半截したように欠けがみられる。孔も半分中途から外に姿を現している。しかし、欠損面は丁寧に研磨されており、角も研磨が加えられているので、欠損後も再使用したのであろう。重量1.8gを測る。

これらの出土遺物のうち、墓道・周溝などから出土した土器類の示す年代は7世紀前半から末頃の幅をもっている。一方、石室内からは装身具のみ出土していて、玉類は6世紀代を考へ

表4 10号墳支室出土玉類計測表

(単位mm)

No.	種類	径	厚さ	孔径	質	色調
4	小玉	8.7~9.1	6.4	1.8	ガラス	コバルトブルー
5	*	7.4~7.7	4.4	1.7	*	*
6	*	6.6~7.0	5.4	1.9	*	*
7	*	7.8~8.4	5.7	1.7	*	*
8	*	7.7~8.8	5.5	1.8	*	淡いコバルトブルー
9	*	6.3~7.0	3.8	2.2	*	コバルトブルー
10	*	5.9~5.4	5.1	1.6	*	*
11	*	9.0~9.3	4.4	2.2	*	*
12	*	7.4~7.8	5.5	2.1	*	*
13	*	6.7~7.0	4.0	1.5	*	暗いコバルトブルー
14	丸玉	10.4	8.6	2.5	*	うすい緑
15	算盤玉	13.2~13.5	12.9	1.0~2.5	水晶	透明
16	切子玉	13.6~15.3	24.1	1.1~3.8	*	*
17	管玉	8.3~8.5	23.2	1.5~3.5	碧玉	濃い緑
18	*	7.9~8.0	16.5	1.5~2.5	グリーンタフ	緑
19	*	7.7~7.8	19.2	1.2~2.3	碧玉	淡い緑

たい遺物である。土器が石室外からの出土であるので追葬期を示すものとして、玉頸の時期を初葬段階と考えることも可能だが、装身具類の伝世もある程度考慮する必要がある。

石室の構造では、羨道部が極めて短く、玄室のプランも円形に近いので、6世紀に含めることはできない。また、前庭部に列石を有することなどは柿原H地区2号墳と構造的に近いが、奥壁の鏡石が1枚の石であること、前室部が一応考えられる構造であることなどは、その石室より古い様相と考えたい。H2号墳は7世紀中頃とされているが、その時期をさほど遅らない頃の築造年代を考えるべきであろう。

(小池)

11号墳 (図版67, 第89図)

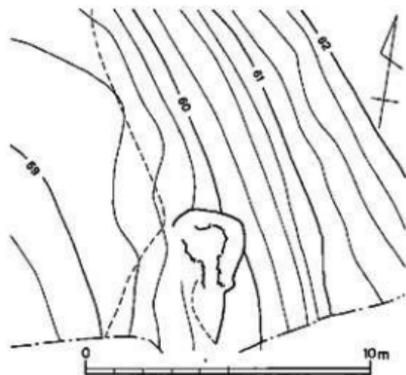
当墳は、F区丘陵の標高60.0mを測る西側斜面に位置する。墳丘及び周溝は、柿畑を開墾した際に掘削され全く遺存しない。石室の規模からみて、径5m程の円墳であったか。

主体部 (図版67-2, 第90図)

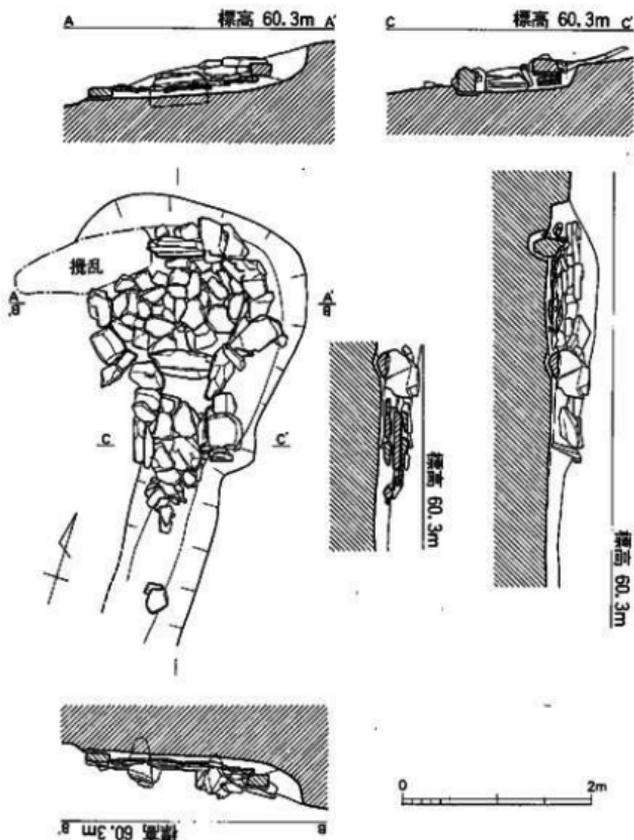
本墳の埋葬施設は、単室の横穴式石室であり、南東方向(平野部)に開口する。主軸方位はN18°Wを示す。石室掘り方は杓文字形を呈する。石室は破壊が著しく、天井部は存在しない。また、奥壁西側には攪乱坑があり、玄室を破壊している。石室全長は2.15mを測る。玄室は長さ1.1m、幅1.4mを測り、奥壁は直線状であるが、側壁が弧を描くため半円形を呈する。奥壁の中央に高さ0.4m、幅0.5m、厚さ0.2mの石を立てて鏡石としている。側壁は平石を小口積みしており、東壁側で4段数える。鏡石と玄門石のみを立てており、他の石は小口積みによる。玄室床面は敷石を施している。羨道部は長さ0.9m、幅0.55mを測り、閉塞していた。閉塞石は長さ30-40cm程の角礫を使用している。

墓道は幅0.95mを測り、羨道部から南側に延びているが、墓道端は調査区外に当たるため詳細は不明。

(小田)



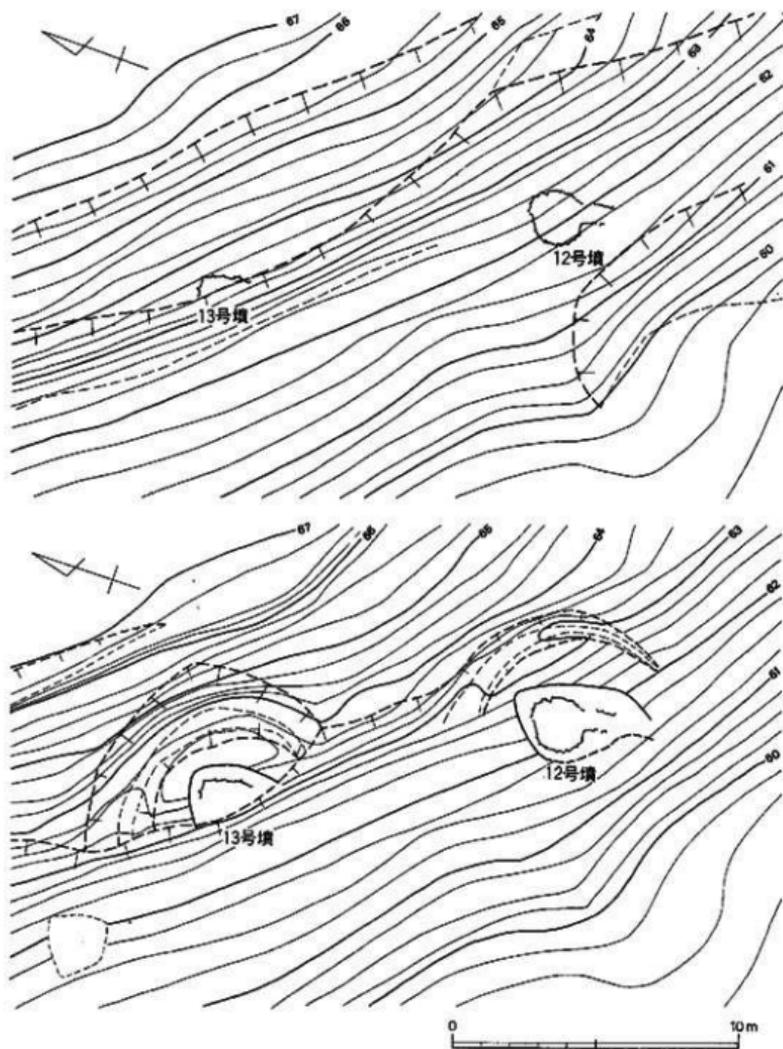
第89図 11号墳墳丘・地山
整形面実測図 (1/200)



第 90 図 11号墳石室実測図 (1/60)

12号墳 (図版67-3, 第91図)

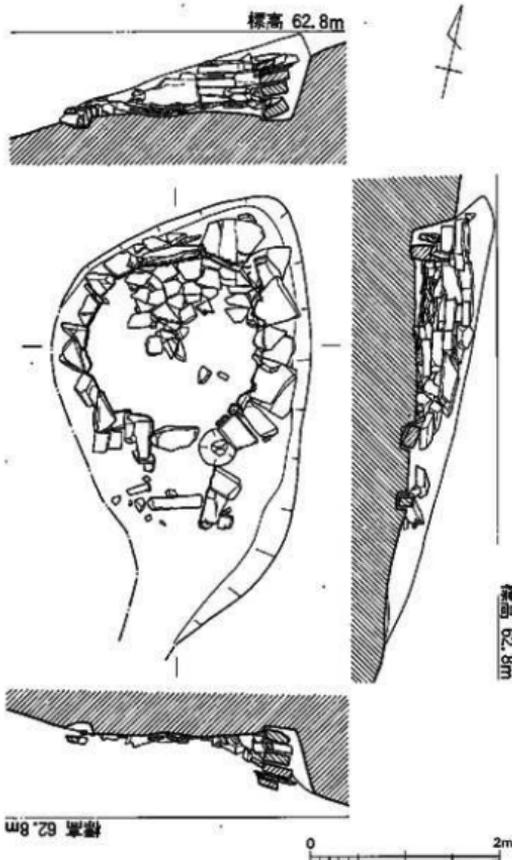
当墳は、F区丘陵の標高62.0mを測る西側斜面に位置し、11号墳とは12m離れている。墳丘は、柿畑を開墾した際に掘削され全く遺存していないが、石室東側に残存する周溝により径8mの円墳に復原できる。



第 91 图 12·13号墳墳丘・地山整形面实测图 (1/200)

主体部 (図版67-3, 第92図)

当墳の埋葬施設は、単室の横穴式石室であり、南東方向(平野側)に開口する。主軸方位はN12°30'Wを示す。石室掘り方は不整長方形を呈し、岩盤まで掘り込んでいる。石室全長は2.



第92図 12号墳石室実測図 (1/60)

9mを測る。玄室は側壁の張りが著しく、円形を呈する。玄室長1.8m、幅1.9mを測る。奥壁の中央に高さ0.55m、幅0.6m、厚さ0.18mの石を立てて鏡石としている。側壁は平石を小口積みしており、東壁側で3-5段数える。西壁側は残りが悪く、腰石のみであった。鏡石と玄門石のみを立てており、他の石は小口積みによる。また、右玄門石は抜き取られて存在しない。玄室床面は敷石を施しているが、奥壁よりに敷石を残すのみであった。羨道部は長さ0.9m、幅0.6mを測る。羨道部は閉塞していたと考えられるが、閉塞石は遠存していなかった。

遺物 (図版68-1, 第93図)

遺物は周溝北側の埴土中より土師器の甌一個体分が飛散した状態で出土している。(小田)

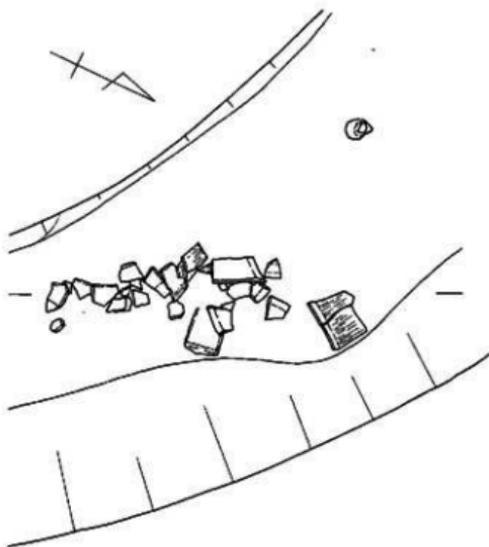
周溝出土土器 (図版68-2,

第94図)

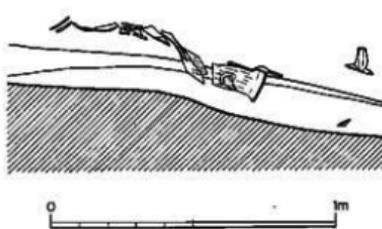
土師器甕 (第94図) 口径27.2cm, 器高30.1cm, 底径14.8cmの大きさ, 底部孔の内径は13.8cmを測る。胴部外面は粗めのやや雑な縦方向のハケ目, 胴部内面は縦方向のヘラケズリ, 頸部付近の内面は横方向のヘラケズリで調整されている。また, 口縁部の内外面と体部下端の内外縁はヨコナデ調整が加えられている。把手は, 胴部の中ほどより上寄りに対で付されているが, 牛角状に上に反る。把手の外面はヘラケズリとナデ調整で仕上げられている。胎土には細砂粒・褐色粒を含み, 良好な焼成で, 淡褐色を呈している。

出土遺物は, 周溝内の土師器甕のみであり, 細かな時期の判断はし難い。

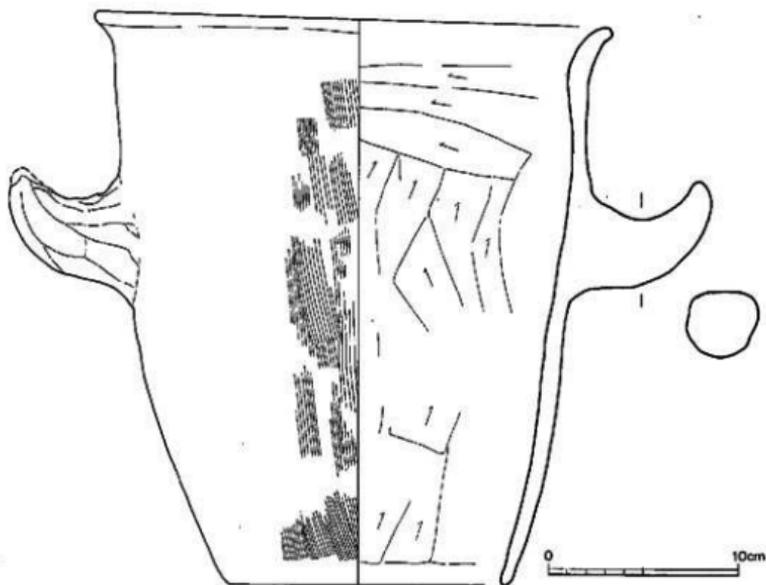
石室も, 全面側を失っているもので, 全体の構造がはっきりしないが, 玄室の平面プランは円形に近く, 前室が省略化されてきているので, 9・10号墳よりも後出する可能性があろう。(小池)



標高 63.4m



第93図 12号墳周溝遺物出土状況 (1/20)



第 94 図 12号墳出土土器実測図 (1/3)

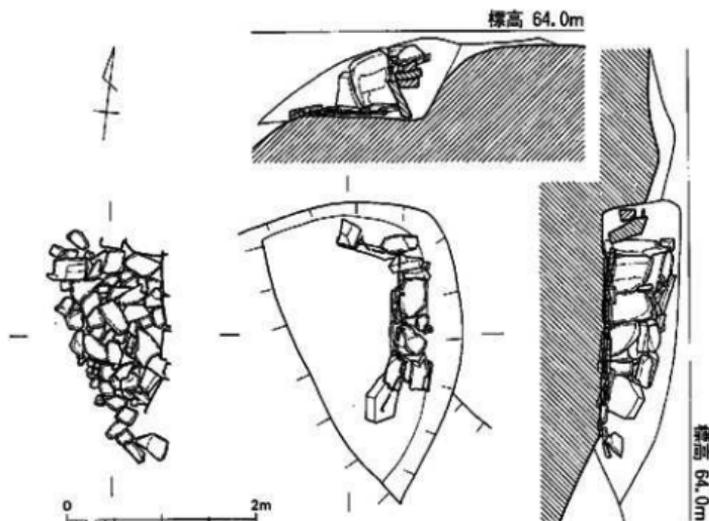
13号墳

F地区尾根の西側斜面にある古墳で、12号墳北方の標高63m位に占地するが、12号墳と同様に西側は削られて、主体部・墳丘の大半を失う。また、後述する21号墳は、12号墳・13号墳に近接した東側、尾根のやや高い部分に占地していて、この3基の古墳の前後関係などを検討しなければならないが、周溝・墓道などの切り合い関係は全く不明である。

墳丘 (図版68-3, 第91図)

全体に南西側を大きく削り取られているため、墳丘の規模などは明確ではない。しかし、地山鑿形の段階で、岩盤にまで至る周溝の掘り込みを施しており、この周溝の底面の状況では、直径8m前後の墳丘規模を有していた可能性がある。

なお、わずかに残る墳丘では、岩盤とその風化した黄褐色土は、地山のそれに比してわずかに色調が暗い程度で、明確に区別しえない状況であった。



第95図 13号墳石室実測図 (1/60)

主体部 (図版68-3, 第95図)

この古墳の主体部は、玄室の北側半分が残るのみで、石室の構造はそれほど詳らかでない。一応、横穴式石室の玄室部分が残ったもので、主軸方位は $N7^{\circ}10'W$ と考えておきたい。

石室掘り方は、結晶片岩の風化した黄褐色土から掘り込まれていて、0.50~0.70mの深さを有すが、奥壁側での幅1.60m以上、右側壁側の長さ2.80m以上の規模という以外不明である。

残された石室の壁体では、全て緑泥片岩の扁平石が用いられている。右側壁は、長さ1.65m分、腰石状に並べられた扁平石5枚が残る。残りのよい部分では、高さ0.70m分が残り、腰石の上に扁平石が2~3段小口積みされている。扁平石を縦長に据える腰石の並べ方は、羨道側の石が内側に入り加減に据えられているので、玄室の平面プランは綱張りになっていた可能性がある。奥壁は、2枚の扁平石を縦長に据えて腰石としているが、右側から2番目の、すなわち削平された側の石は削平時に割られて小さくなっているものの、厚さからみて他の腰石よりも広めの扁平石であった可能性が高い。奥壁の幅は0.65m、高さは0.60mの残存値を測るが、右側壁寄りの石は高さ60cm (石材の高さ70cm) を有している。

床面は、長さ2.0m、幅1.2mの残存値を測る。緑泥片岩 (一部にやや脆い結晶片岩も混じる

が)の割石で敷石されている。敷石の配置は、整然と並べられたようなものではない。削平された崖面での敷石下をみると、奥壁側に奥壁腰石が抜取られて出来たと思われる擾乱があり、右側壁の羨道寄りの部分にみられる擾乱がある以外に、腰石の抜き痕と思われる落込みはない。従って、奥壁側の床面幅は、現存値の1.20mよりも更に広がるものと考えうる。

遺物

出土状況

石室内では、転落石の土砂が混在して埋まっていた、土器類の出土は皆無であったが、敷石直上の、奥壁から60~70cm、右側壁から50~60cmの範囲で、勾玉2点と、耳環1点が出土した。また、敷石下の、奥壁から90~110cm、右側壁から60~70cmの位置で、耳環・小玉・管玉各1点が出土した。敷石下の遺物は、敷石の扁平石の真下に出土した小玉の例があるものの、耳環・管玉は石の端の方の下、すなわち石の隙間に近い敷石下からの出土であり、小玉がより転がり易い性質を有していることを考え合せれば、敷石の完全に密着しない空間から石の真下まで動き得たと推定しうる。

墳丘部分からは、弥生土器の高杯柱状部破片が出土した。周溝内からは弥生土器の甕口縁部破片・高杯裾部破片、夜臼式土器甕破片が出土した。いずれも混入したものであろう。

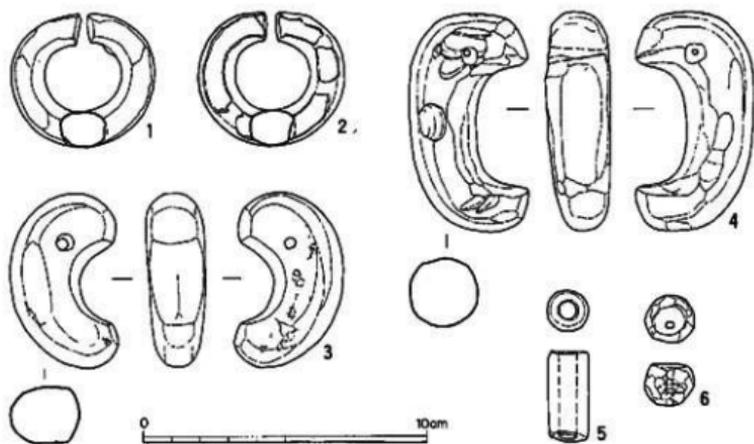
装身具 (図版68-4, 第96図)

耳環 (1・2) 2点共に、銅地金銅張りの金環で、1は石室敷石上から、2は敷石下から出土したが、法量が同規模なので対であろう。1は、長径25.3mm、短径23.4mm、断面8.1mm×6.2mmの楕円形。14.7gを測る。2は腐蝕が進んで銅地が赤く露呈している。長径25.5mm、短径23.5mm、断面7.9mm×6.2mmの楕円形。16.3gである。

勾玉 (3・4) 石室内から2点出土した。3は、半透明白地に緑色の斑点状の縞の入る硬玉製の勾玉で、長さ30.5mm、厚さ10.4mm、重さ10.0gを測る。よく研磨されて光沢を有している。孔は片面で3mm。他面で2mm弱に両面から穿たれている。背面は半径16mm程度、腹面は半径7mm程度の弧を描いて、肉厚の頭部と、やや細くなる尾部をつなぐが、長さ14mmの腹部は中央付近にわずかな稜を有している。

4は、うす茶色を呈す珪質岩 (チャートの類であろうか) を素材とする勾玉で、長さ38.4mm、厚さ11.3mm、重さ10.8gを測る。孔は主に一方から穿たれ、孔径は片面で3mmにも及ぶが他面は1mmにも満たない。細い方の孔端は穿孔時の剝離を生じているが、研磨を加えて滑らかにしている。背面・腹面共に丸みをもった断面形を呈し、長さ23.0mmの弧を描かない腹部を介して、鉤状に頭部・尾部が曲がるので、全体の形はコ字形を呈する。よく研磨されて光沢をもつが、ところどころに剝離面が残っている。

管玉 (5) 石室内敷石下から1点出土した。濃い青緑色を呈すガラス管玉で、気泡を生じ



第96図 13号墳出土装身具実測図 (1/1)

ているが、透明度も残る。長さ15.9mm、直径7.1mm、孔径3.2~3.3mm、重さ1.1gを測る。

小玉(6)石室内敷石下から1点出土した。透明度のある橙色を呈す赤瑪瑙製の小玉で、小さな剝離痕が多数あって、稜を生じているが、磨かれて滑らかになっている。長さ7.1mm、外径8.6~8.7mm、孔径1.3mm、重さ0.4gを測る。

この古墳も、装身具のみの出土で、玉類から6世紀代を考えたくなるが、10号墳例同様7世紀代にまで伝世された可能性があろう。(小池)

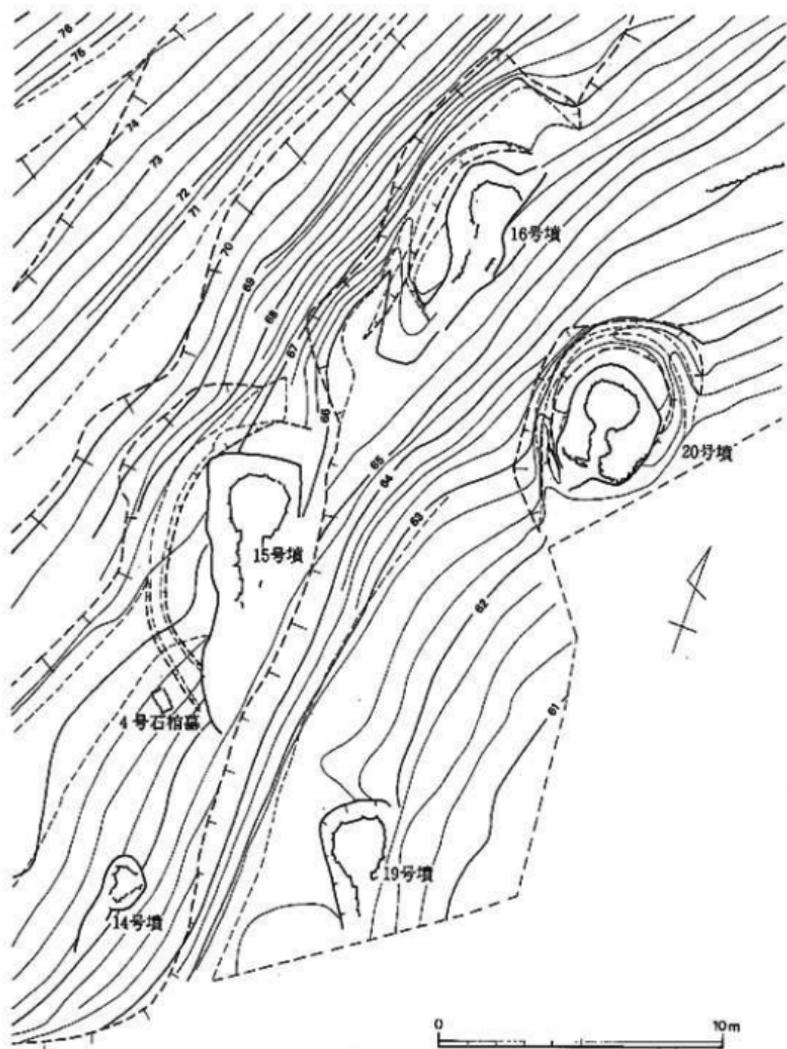
14号墳 (図版70-1, 第97図)

F地区尾根の東斜面、標高65m位に占地する古墳で、削平を受けているため、墳丘・周溝については不明である。

主体部 (図版70-2・3, 第98図)

この古墳の主体部は、主軸方位をN19°Eにとる、全長1.2mの小石室で単室の横穴式石室である。

主体部の掘り方は、黄褐色土を掘り込んでいるが、長さ1.9m、幅1.4mの不正形プランで、西側の残存状況の良い部分で0.50m程度の深さが残り、他は浅い。主体部掘り方の南側に、素



第 97 图 14-16·19·20号墳丘・地山整形面实测图 (1/200)

掘り墓道の掘り方がつづくものの、この部分は弥生時代の堅穴住居跡と重複している。調査時に、住居跡埋土の部分まで誤って掘り過ごしていた可能性もある。

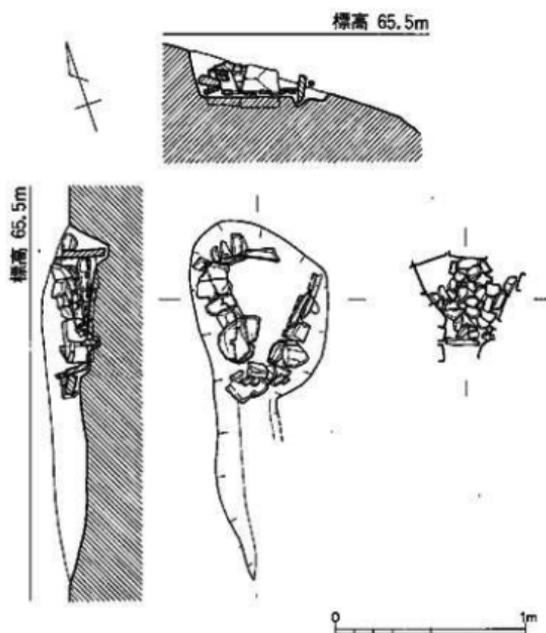
石室の遺存状況は、0.30～0.40mの高さを残す程度で、石材は全て緑泥片岩が用いられている。玄室は奥幅1.10m、前幅0.40m、玄室長は右側壁で0.70m、左側壁で0.60mを測る。左右の袖石の位置は主軸方向からするとかなりズレを生じる。玄室の床面には、小振りの緑泥片岩割石を並べた敷石があるものの、両側壁と奥壁とが接する隅の部分では敷石を欠く。

奥壁は、右側の1枚を失うが、3枚の扁平石を並べて腰石状にしていたと考えられる。鏡石に相当する中央の石は高さ30cm（石材の高さ45cm）を有し、両脇の石は160～170°に接して据えられているので、内弯する奥壁になっている。左右の側壁は、この奥壁の両脇の石と80°前後に接する。

左側壁は、腰石状の低い基底部石を高さ10cm（石材の高さ20cm）程度に、3枚横長に据えて、その上に3～4段の扁平石を小口積みする。これに対し右側壁は、腰石状に高さ20cm（石材の高さ30cm）程度と高めめに3枚が据えられている。

袖石は、左右共に高さ30cm、幅25cm程度の側壁腰石より大振りの石を据えている。仕切り石は、主軸線上の奥壁から90cmの位置に、床面を10cm程掘り下げて、長さ35cm、幅20cm、厚さ7cmの扁平石を、右袖石の玄室側端と左袖石の羨道側端をつなぐように、据えられている。

羨道は、左右両側壁共に1枚の扁平石を立てて、その上に扁平石が小口積みされているだけで、羨道長は20



第 98 図 14号墳石室実測図 (1/30)

cm強と短い。

閉塞は、羨道の前面に、高さ40cm、幅30cm弱の扁平石を立掛け、その外側に大振りの割石などで押えて補強としている。

遺物 (図版70-4, 第99図)

遺物出土状況

石室内からの遺物出土は皆無だが、閉塞石の補強の部分から、須恵器杯身1点と、鉄滓1点が出土した。掘り方の中からは弥生土器片数点が出土したが、5号住居跡埋土からの混入品であろう。また、遺構検出時に、石室掘り方付近で出土した須恵器杯蓋片1点もこの古墳に関連するものとして取扱う。

須恵器杯蓋 (1) 復原口径13.2cmの大ききの退化した鳥嘴状口縁をもつ杯蓋。天井部中央を欠くが、天井部は低平。

須恵器杯身 (2) 口径12.8cm、器高4.7cm。高台はやや高めで、外方へ踏張り気味の形をとる。外底面はヘラ切り縫しのあとナデ、内底面は多方向ナデ調整される。焼成はやや軟質で、灰白色を呈す。

鉄滓 大人の親指第一関節位の大きさで、重量14.0gを測る。気泡があるものの重量感がある。

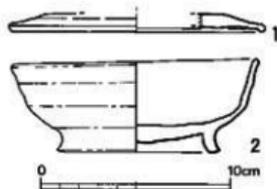
石室は、極小型の横穴式石室で、終末期の石室といえるが、出土遺物のうち、須恵器杯蓋は8世紀代、杯身は7世紀末頃の特徴を有している。

(小池)

15号墳 (図版71, 第97図)

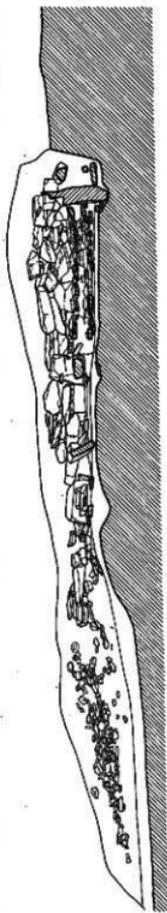
F地区尾根の東斜面、標高66m位に占地する古墳で、東側半分は斜面の削平によって失う。斜面の上側では、標高68.5m位あたりから周溝の掘り込みがみられ、岩盤の露呈する周溝底面は標高66.2mの高さである。周溝の平面形では、直径10m以上の円弧をなすが、残される石室との間は3m程度に接していて、石室床面の高さが周溝底面よりも低い位置にある。墳丘の旧状については余り知る手掛りがないものの、傾斜のきつい、かなり窮屈な部分に占地した古墳であったろう。

なお、周溝I区の南側に近接して石棺墓が1基占地しているが、その前後関係については、

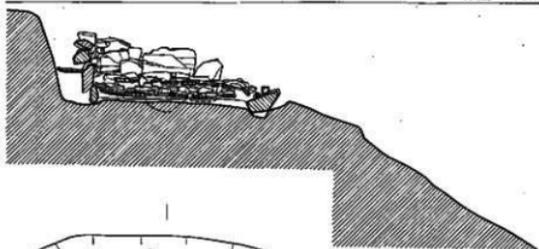


第99図 14号墳出土土器実測図 (1/3)

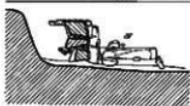
标高 66.5m



标高 66.5m



标高 66.1m



0 3m

第100图 柿原E·F地区15号墳石室実測図 (1/60)

調査時に確認しえなかった。

主体部（図版71-2，第100図）

この古墳の主体部は、主軸方位をN11°Wにとる複室構造の横穴式石室で、石室全長5.7mを測る。

石室掘り方は、結晶片岩の風化した黄褐色土から掘り込まれていて、奥壁側の上面幅3.30m、下面幅3.0mの広さで、最も残りの良い部分は深さ1.2mを測る。ただ、奥壁側から約3mのあたりからは幅がやや狭まるようで、下面幅2m程度であろう。掘り方の床面は、赤色粘土の部分が多いものの、北西隅部ではその下の岩盤が露呈している。

石室は、右側半分を欠くが、壁体には全て緑泥片岩の石材が用いられている。しかし、必ずしも扁平に揃った石材でなく、やや厚みのある石材も多用されており、中にはやや脆い感じの黒色片岩に近い石材も若干含まれている。

玄室は、中軸線上での長さ2.0mで、最大幅は2.0mを若干上まわる可能性がある。玄門側での幅は1.2mを測る。平面形は、三味線胴張りというよりは、むしろ円形に近い。奥壁では、中央に幅50～70cm、高さ80cm以上、厚さ20cm程度の扁平石を縦長に据えて鏡石としている。鏡石の両脇には、幅30～40cm程度の、鏡石よりは小振りの扁平石を縦長に並べて据えて腰石状の基底部をなしている。鏡石の両脇の石は、鏡石の面よりもやや内側に入り込むように並べられていて、奥壁の平面は、直径2.1m前後の円弧をなす。なお、断面図での左側壁の腰石は、偶然に石の端部に玄室直交軸が相当したため、小さな石のように見えるが、実際は厚さ約27cmの石である。また、右側壁の腰石は、削平を受けた折に転倒した状況のままである。

玄室床面の敷石は、標高65.50m位を上面として扁平な割石で敷きつめられているが、屍床を意識する等の、規則的な敷き方はみられない。この敷石を除去すると、その下に約15cmの厚さの埋土を挟んで、標高65.30m位の、もう一つの敷石が現れた。このもう一つの敷石も、扁平な割石で敷かれているが、左側壁から奥壁にかけての壁際はやや高めに敷かれ、玄室内全面に敷きつめられるのではなく部分的に欠落する部分もみられる。

前室は、長さ1.1mで、右側壁側は基底部石の抜き痕すらも残らないため、幅は不明。ただし、左側壁の状況からして、さほど胴張りにならず、最も広くなる部分で、約20cm広がる程度であろう。

前室の床面には敷石がみられず、玄室の上部敷石の高さに相当する床面の確認をしないまま掘り下げてしまったので、玄室との間の仕切石の露呈した段階の、風化礫片と砂を含んでやや硬くなった面を床面として把握したが、これは玄室の下部敷石の高さに対応する可能性が高い。一方、前室の中央部に長さ35cm、幅60cm、厚さ10cm程度の扁平石が斜めに横たわっている。床面にさほど入り込まないことからみて、本来の蓋石ではなく、あるいは上部床面に伴って前

室の中途に、前室、羨道を仕切る樞石として機能することがあったのかも知れない。この際の前室の長さは0.8~1.0mになろう。

前室左側壁は、基底部から小口積みされ、3段で約60cmの高さが残るが、羨道部側は基底部の石が浮き上って据えられているなどやや乱れがある。前室の軸石は左側のみ残るが、長さ50cm、幅35cm、高さ30cm程度の塊石が据えられている。また、羨道部は、扁平石が3段程度小口積みされるが、良好な残り方でない。

閉塞は、推定幅60cm前後の前門の部分に積まれていたようだが、左側壁寄りにわずかに残る程度である。

素掘り墓道では、後世の削平によって右側を失っているもので、本来の状況はわからないが、墓道の左側には、石室内から掻き出したものであろうか、多数の土器片と石塊が多量に集積しており、長さ2.5m、幅1mの範囲にわたる。

遺物 (図版72~74, 第101~109図)

遺物出土状況 (図版72, 第101図)

上部敷石の面からの出土を一応上部床面出土と区別するが、玄門樞石付近から須恵器高台付杯身片が2点、前室の左側壁際からも須恵器高台付杯身片が1点出土している。また、玄室内敷石で、奥壁鏡石の左側2つの目の、側壁との中間になる部分の隙に接して敷かれていた扁平石は線刻文様を有していた。

下部敷石の面からの出土は、下部床面出土としたが、奥壁から35cm中央寄りに耳環1点と、中軸線上の奥壁から90cmの玄室中央部に耳環1点が出土した。また、この2点の耳環の中間から須恵器片1点、左軸石より30cm奥側で鉄滓、40cm奥側から刀子1点などが出土した。

なお、前述したように、墓道から多くの土器片などが出土しており、周溝Ⅰ区でも、須恵器杯身片、土師器壺・甕片などが出土している。

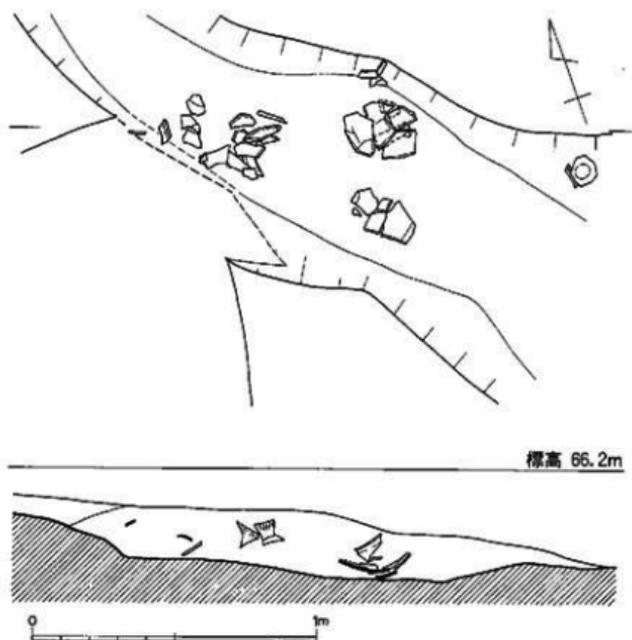
上部床面出土土器 (第102図1・2)

須恵器杯身(1・2)1は、高台を有さない杯身で、小破片から復原した。口縁部は上外方へ伸び端部は丸い。体部外面の下半に回転ヘラケズリがある他は回転ナデ調整される。胎土に砂粒を若干含むが、堅緻に焼成されて明灰色を呈す。

2は、高台を有す杯身で、口縁部の立ちあがりはずかに内弯する。口径14.7cm、器高5.1cm、高台径9.1cmの大きさ。やや軟質の焼成で、淡黄灰色を呈す。

玄室内下部床面出土土器 (第102図3・4)

須恵器蓋(3)半欠資料で、復原口径8.8cm、器高3.2cmの大きさ。体部には1条の沈線がめぐり、口縁部はわずかに外反する。天井部外面はヘラ切り磨しのあと未調整で残るが、回転ヘラケズリ、他は回転ナデ調整されている。天井部外面には、ヘラ先による細沈線が数条まと



第101図 15号墳周溝遺物出土状況 (1/20)

まったヘラ記号が付されている。

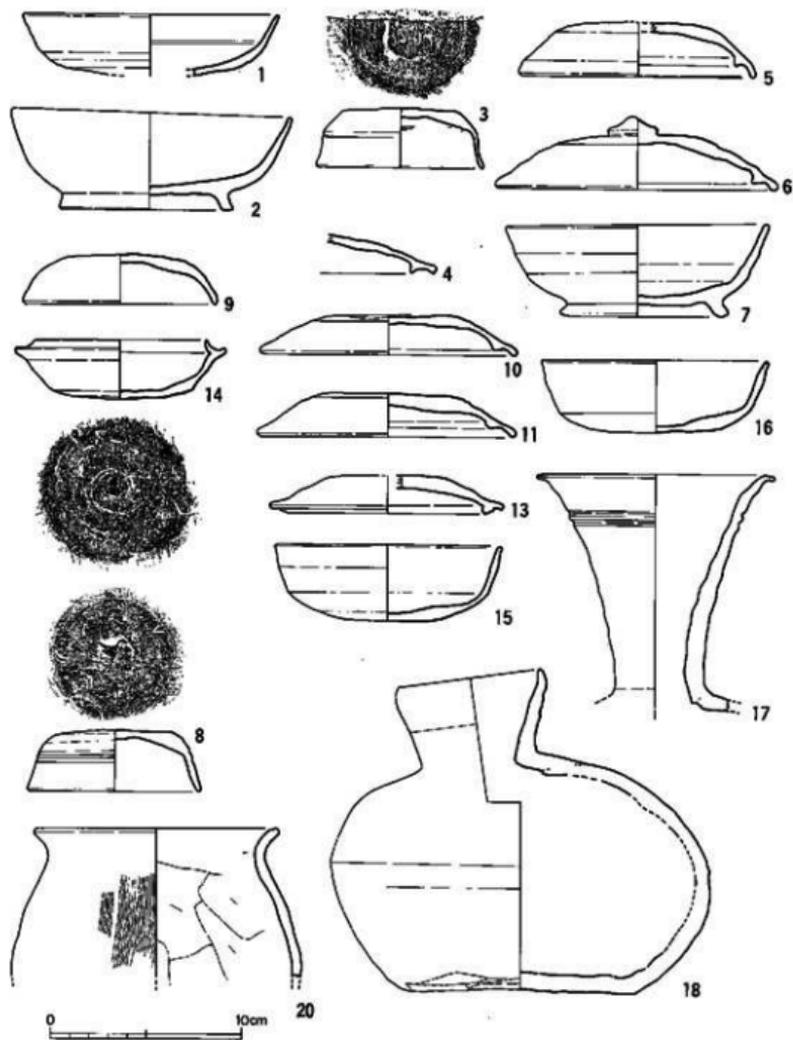
須恵器杯蓋 (4) 身受けのかえりを有す杯蓋だが、小破片のため外径すらも不明。天井部外面はヘラケズリされる。胎土に砂粒が含むが、堅緻に焼成され暗青灰色を呈す。

前室内埋土出土土器 (第102図5-7)

須恵器杯蓋 (5・6) 5は、身受けのかえりを有す杯蓋だが、つまみは付かないものと思われる。天井部外面はヘラ切り離しのあとナデ、内面は多方向ナデ調整されている。口径12.4cm、器高2.9cmの大きさで、かえりは口縁端部よりかなり内側にある。胎土に砂粒を多く含む、軟質の焼成で淡灰褐色を呈す。

6は、身受けのかえりとつまみを有す杯蓋。口径14.8cm、器高3.8cmの大きさで、つまみは直径2.6cm、高さ1.1cmのやや扁平な宝珠形。かえりは、口縁端部より高い位置にある。内面に比して外面の焼成がやや甘い。

須恵器杯身 (7) 高台を有す杯身で、口径13.7cm、器高4.9cm、高台外径8.8cmの大きさ。



第102图 15号出土土器实测图① (1/3)

外底面はヘラ切り離しのあと未調整、内底面は多方向ナデ調整される。やや軟質の焼成で、淡灰色ないし黄灰色の色調を呈す。法量的には6の杯蓋と対応する。

墓道出土土器（第102・103図）

須恵器蓋（8）完形資料で、口径9.1cm、器高3.3cmの大きさ。体部外面に2条の沈線がめぐり、端部は直線的にのびる。天井部外面は、ヘラ切り離しのあと未調整で、細沈線の数条まとまるヘラ記号が付される。大粒の砂粒をわずかに含み、暗青灰色を呈す堅緻な焼成である。

須恵器杯蓋（9～11・13）9は、身受けのかえりを有さない杯蓋で、端部はわずかに内弯気味にのびる。口縁部の一部を欠くが、復原口径10.2cm、器高2.6cmの大きさ。天井部外面にヘラ記号らしい細い沈線状の痕跡がみられるもの、焼成が軟く、調整度も不明。色調は赤褐色。

10・11は、身受けのかえりを有す杯蓋で、つまみが見つからないもの。身受けのかえりは、口縁端部より高い位置にある。天井部外面には、ヘラ切り離しのあと不定方向にヘラケズリされている。10は、口径13.5cm、器高2.1cmの大きさで、茶褐色に焼成される。11は、口径13.5cm、器高2.2cmの大きさで、淡赤褐色に焼成されている。

12は、身受けのかえりを有す杯蓋で、つまみがつくもの。この資料ではつまみを欠損している。身受けのかえりは端部とほぼ同じ高さである。口径15.4cm、身受けかえりの径13.3cm、残存器高2.6cmの大きさ。淡青灰色に、堅緻に焼成されている。

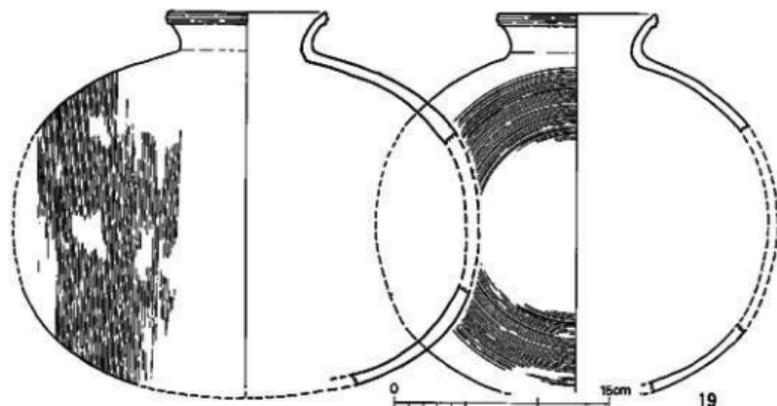
13は、身受けのかえりを有す杯蓋で、つまみはつかないものと思われる。身受けのかえりは端部よりも下に出る。口径12.2cm、器高2.0cmかえりの径10.3cmで、蓋の外側の高さは1.8cm。焼成は軟かく赤褐色を呈す。

須恵器杯身（14～16）14は、蓋受けのかえりを有す杯身で、口径9.1cm、受け部外径11.0cm、器高3.1cm、口縁部の立ち上りの高さ0.5cm。ヘラケズリされる外底面にはN字形の小さなヘラ記号が付されている。やや軟質の焼成で外面淡茶灰色、内面赤褐色を呈す。法量的には9の杯蓋と対応する。

15・16は、高台を有さず、蓋受けのかえりも有さない杯身で、底部はやや丸味をもち、口縁部は直線的に立ち上る。15の外底面は不整方向にヘラでナデられ、16の外底面はヘラケズリされている。15は、復原口径11.8cm、器高4.0cm、焼成が軟かく外面は淡茶褐色、内面は暗褐色を呈す。16は、口径11.9cm、器高3.8cm、良好な焼成で淡青灰色を呈す。

須恵器壺（17）長頸壺で、胴部以下を欠く。口縁部は外反し、口縁部下に2条の沈線がめぐる。口径12.5cm、口頸部の高さ11.5cmの大きさ。堅緻な焼成で、黒灰色を呈す。

須恵器平瓶（18）胴下半と口頸部が直接接合しないが、各部分の破片を総合して復原した。復原口径7.9cm、復原最大径19.8cm、口頸部の高さ4.3cm、復原器高17.0cmの大きさ。口縁部下に浅い沈線が2条めぐる。胴部最大径の位置から上は回転ナデ調整、下半は回転ヘラケズリ、底部は手持ちヘラケズリされる。焼成は良好で淡青灰色を呈す。



第103図 15号墳出土土器実測図② (1/4)

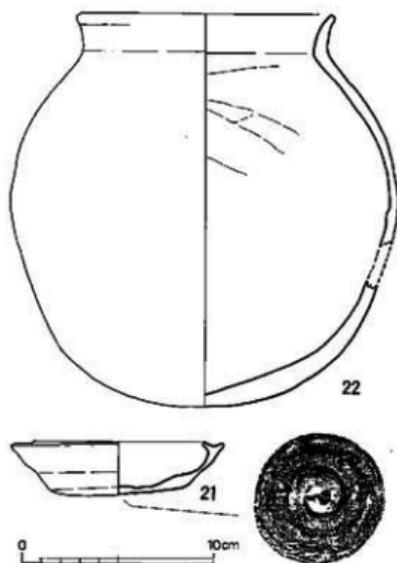
須恵器横瓶 (19) 口径11.3cm, 復原胴部径28.0cm, 復原胴部長径32.4cm, 復原器高27.1cmの大きさ。口縁部外面には2条の沈線がめぐる。胴部外面はカキ目調整, 内面は同心円当て具痕が残る。堅緻な焼成で, 外面黒灰色で, 内面暗紫灰色を呈す。

土師器甕 (20) 復原口径12.9cmの中形甕で, 胴下半を欠く。外反する口縁部はさほど肥厚しない。焼成良好で淡茶褐色を呈す。

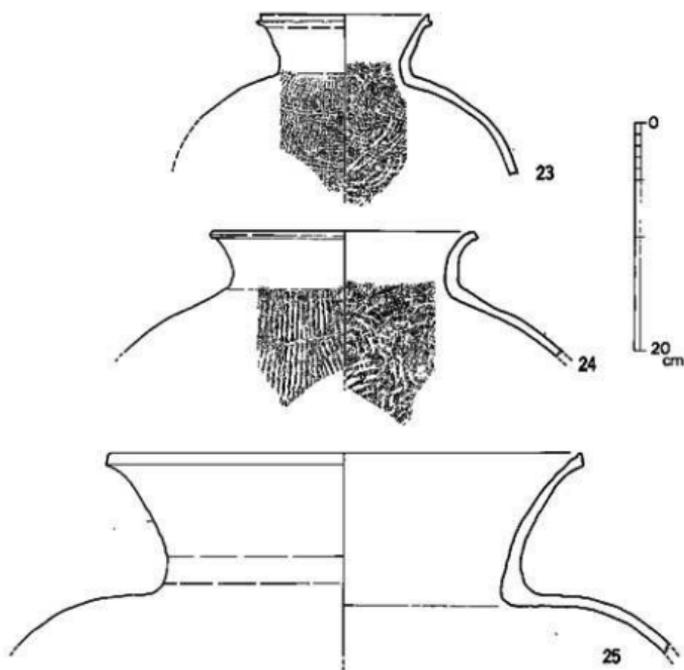
周溝内出土土器 (第104図)

須恵器杯身 (21) 蓋受けのかえりを有す杯身で, 口径8.8cm, 受け部外径11.2cm, 器高2.9cm, 口縁部の立ち上り高0.2cmの大きさ。外底面にヘラ記号がある。良好な焼成で暗灰色を呈す。

土師器壺 (22) 球形の胴部に短く外反



第104図 15号墳出土土器実測図③ (1/3)



第105図 15号墳出土土器実測図④ (1/5)

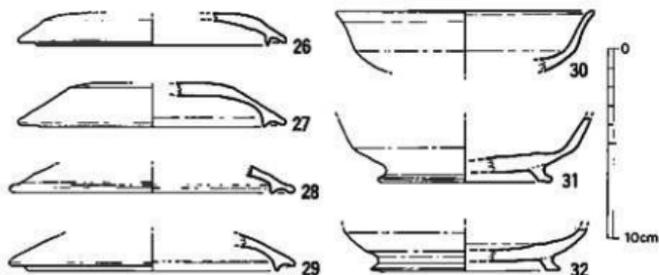
する口縁部が付く。復原口径13.6cm、器高20.7cm、復原胴部最大径20.3cmの大きさ。胴部内面にはヘラケズリの痕跡が残る。ややあまい焼成で赤褐色を呈す。

15号墳前方出土土器 (第105・106図)

墓道の土器集積部分より約4m南側から、まとめて出土した土器類で、須恵器壺の破片が大半を占める。

須恵器壺 (23) 口径14.6cmの大きさと、頸部から口縁部が短く外反し、口唇部外面にはつまみ出したような凸帯がめぐる。胴部外面は細かな平行タタキ目のあとをナゲており、内面には同心円当て具痕が残る。焼成は堅緻で灰色を呈す。

須恵器壺 (24・25) 24は口径23.5cmの大きさ。口縁部は短く外反するが、口唇部は丸味をもっておさまる。胴部外面は太めの平行タタキ目、内面は同心円当て具痕が残る。焼成は堅緻で、青灰色ないし暗青灰色を呈す。25は口径41.8cmの大きさの大形のもの。胴部・底部付近



第106図 15号墳出土土器実測図⑤ (1/3)

の破片も多数出土しているがうまく接合しない。口縁部は長めに外反し、口唇部はつまみ上げたように立ち上る。胴部外面は平行タタキ目、内面には同心円当てで具痕が残る。胎土に砂粒を多く含み、堅緻な焼成で、黒灰色を呈している。

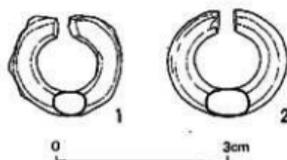
須恵器杯蓋 (26~29) いずれも見受けのかえりを有す杯蓋で、天井部を欠くためつまみの有無は不明。26のかえりは鋭く突出する。27は復原口径14.2cm、器高2.3cm、かえりの口径11.8cmを測る。

須恵器杯身 (30~32) 30は底部を失うが復原口径13.6cm、残存器高3.1cmで、口径に比して深さが浅めの体部をもつ。31・32は高台を有す底部破片で、高台は外方に反る。

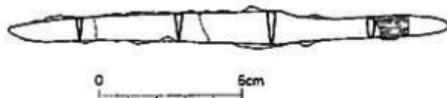
装身具 (図版74, 第107図)

耳環 (1・2) 2点共に上部の敷石を外したあとの下部敷石直上から出土し、一対かと思われるが、1はかなり風化が進む。1は、既に銅地のみになり、緑錆で膨れ上がった部分もみられる。現状では、長径20.0mm、短径18.0mm、重さ2.9g、断面は4.2mm×5.8mmの楕円形を呈す。2は、銅地金銅張りであり白色を呈す金環。長径21.3mm、短径19.0mm、重さ9.0g、断面は4.7mm×7.7mmの楕円形を呈す。

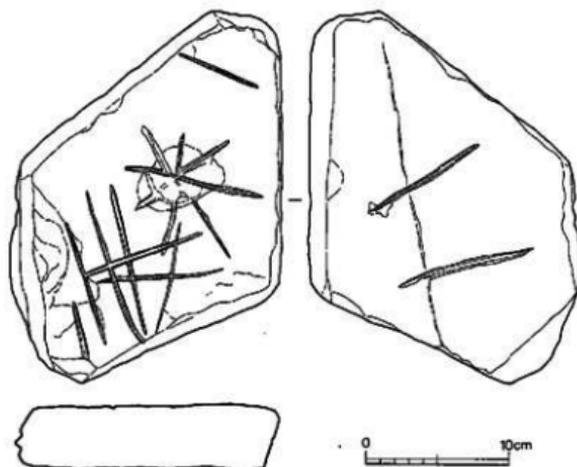
鉄製品 (図版74, 第108図)



第107図 15号墳出土装身具実測図 (1/1)



第108図 15号墳出土鉄製品実測図 (1/2)



第109図 15号墳出土線刻石実測図 (1/4)

鉄刀子(3) 下部敷石の下から出土した。長さ15.5cm、刃部長9.5cm、刃幅1.2cm、刃部幅1.0cm、背の厚さ0.2~0.3cm。折損していて、接合する際に先端から3cmの処でわずかに刃部側が内に入り気味に接合したため、内反りの刃部のようにみえるが、本来は背が真直ぐであった可能性が高い。茎部は、間から緩やかな曲線を描いて窄まり、幅0.7~0.8程度だが、端部は丸くおさまる。なお茎部の一部には木質が遺存する。重量は12.5gを測る。

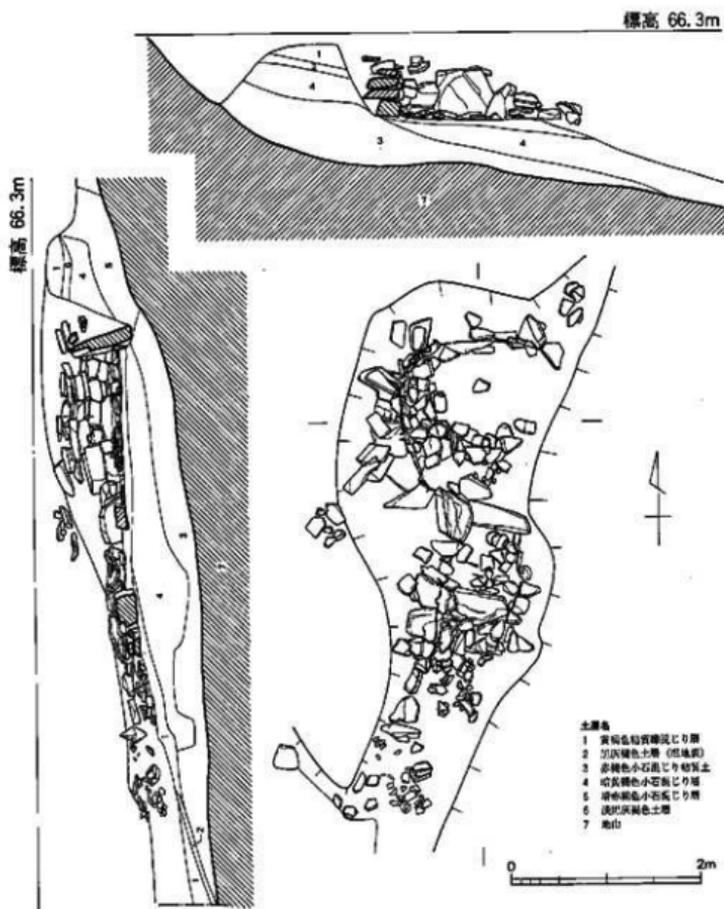
鉄 滓 (図版74) 玄室内の下部敷石の下から1点出土した。2cm立方程度の大きさで、重量13.2gを測るが、錆ぶくれを生じている。

その他の遺物 (図版74, 第109図)

線刻を有す石 玄室内鏡石左側の奥壁腰石に接した、上部敷石を構成していた扁平石の一つ。長さ28.5cm、幅20.0cmの菱形で、厚さ4.5cmの結晶片岩扁平石。両平坦面に、太さ5mm程度、深さ3mm程度の線刻がある。一方の面は井字状に交差する長さ10cm程度の直線の集まりと、米印状に交差する線刻が刻まれる。もう一方の面では、2条の線刻が6~8cmの距離をおいて八字形に広がる。

15号墳出土土器のうち、一部の須恵器杯・杯身は6世紀末から7世紀初頭頃に含まれるが、大半は7世紀に含まれ、7世紀後半にまで下るものもある。石室のプランは、玄室が円形に近くなっていて、前室も退化に向っている。また玄室に2枚の敷石があり、初葬時から追葬の段

附に時期幅を当然考えなければならない。墓道に掻き出したように堆積する土器の中にも6世紀末から7世紀初頭頃の土器があるので、一応この時期の初葬と7世紀後半までの追葬を考慮しておきたい。
(小池)



第110図 16号墳石室実測図 (1/60)

16号墳

墳丘 (図版75-1, 第97図)

丘陵の尾根線上より東側の斜面に位置する。調査前の状況では墳丘などは確認出来なかったが、僅に羨道部付近の等高線に変化があった。

周溝は西側壁背面では石室中軸線より2.2mで周溝内面になる。奥壁背面から東側壁背面にかけては削平されて分からなかった。

主体部 (図版75-2, 第110図)

石室の東側は間壁によって削平されているが、単室の横穴式石室である。主軸方位をN0°Eにとり、南に開口している。

玄室は、長さ1.7m、奥壁側の幅85cm、最大幅1.6m前後を測り、楕円形のプランを呈する。奥壁には鏡石として幅約85cm、高さ約65cm、厚さ約15cmの石を立てて据え、両脇には幅30cm、厚さ10~20cm程度の板石を基底部より小口積みしている。西側壁も同様の板石を基底部より小口積みしている。西側玄門部袖石は大きめの板石を立てて据え、内底面には仕切石を置いている。現況では袖石は内側に倒れ、仕切石も東側に移動していた。床面敷石は多くを失っているが、5cm程度の埋土上に15cm前後の板石を敷き詰めていたようである。

羨道は、長さ2.3m、幅約70cmで両壁とも残りが悪い。奥壁より2.65mに仕切石があり、複室構造の石室を思わせるが、両壁は小ぶりの板石を小口積みしており、袖石とは考えにくく、敢て複室としなかった。床面には残りは悪いが敷石が施されていた。 (日高)

遺物

遺物出土状況 (図版76-1, 第111, 112図)

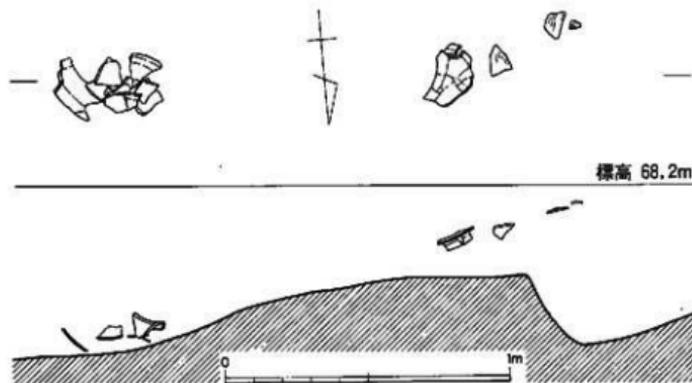
石室内では、玄室からの遺物の出土が皆無で、羨道から須恵器杯蓋・杯身が3セット分と、鉄鍔2本が出土している。ただし床面に整然と置かれては無く、蓋と身の対応もはっきりしない。

墓道では、右側半分を削平で失ってはいるが左前面に相当する部分から須恵器杯蓋などが若干まとめて出土している。

周溝では、Ⅱ区からⅢ区にかけて、土師器甕が2個体分出土したが、1個体は火を受けて脆く、図示しえない破片である。なお、この土器は一方で17号墳墓道の方向にも相当する位置から出土しているが、墓道よりも低い位置で、周溝が17号墳のそれを切っている可能性が高いのでこの古墳の方に一応含めた。

出土土器 (図版76-2, 第113図)

須恵器杯蓋 (1-3) 鳥嘴状の口縁部と、天井部に扁平な宝珠形つまみをもつ。いずれも焼



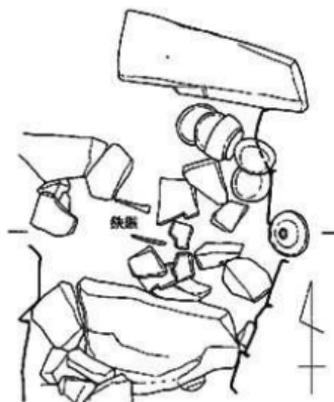
第111図 16号墳周溝遺物出土状況 (1/20)

成堅緻な完形品である。1は、天井部が低く、平坦で広め。口縁端部はやや外反している。口径15.9cm、器高2.4cm、天井部外面はヘラケズリ調整され、L字形のヘラ記号が付されている。2は、口径15.5cm、器高3.3cm、天井部は平坦だが、1に比して狭い。ヘラケズリ調整の天井部外面にV字形のヘラ記号が付されている。3は、口径15.5cm、器高2.9cmの大きさで、天井部はやや丸味をもっている。

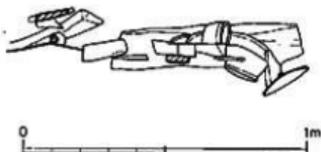
須恵器杯身(4-6) 高台を有す底部から、口縁部が直線的に立ち上り、深みのある体部を有している。いずれも、焼成堅緻な完形品で、1-3の杯蓋とセットになる。外底面はヘラ切り離しのあとナデられ、内底面は多方向ナデ調整されている。4は、口径14.7cm、器高5.9cm、高台外径10.5cm。5は、口径13.9cm、器高5.8cm、高台径11.0cmで、焼け歪みを生じている。6は、口径13.9cm、器高5.9cm、高台外径10.1cmの大きさ。

墓道出土土器(図版77, 第114図)

須恵器杯蓋(7-15) 7-11は、天井部につまみを有す杯蓋で、7-9は身受けのかえりを有すが、10は鳥嘴状の口縁部で身を受けるもの。7は、復原口径14.0cm、器高3.5cm、かえりの径11.5cm。天井部は丸味をもち、つまみは直径2.6cm、高さ1.1cmで断面逆梯形を呈す。焼成が軟く灰褐色を呈しており、器面調整は不明。8は、口径16.5cm、器高3.1cm、かえりの径13.7cmで、焼け歪みがある。天井部外面は平坦で回転ヘラケズリ、内面は多方向のナデ調整がみられる。焼成は堅緻。9は、復原口径15.4cm、天井部のつまみを欠くが残存器高2.4cm、かえりの径13.3cm。天井部はやや丸味をもつ。焼成は堅緻で淡青灰色を呈す。10は、復原口径15.8cm、器高2.1cm、低平な天井部は陥没気味で、つまみは直径3.0cm、高さ0.4cm。



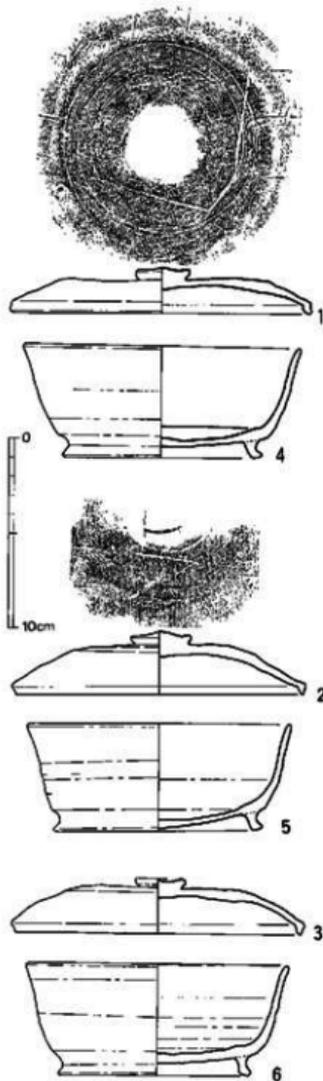
標高 66.7m



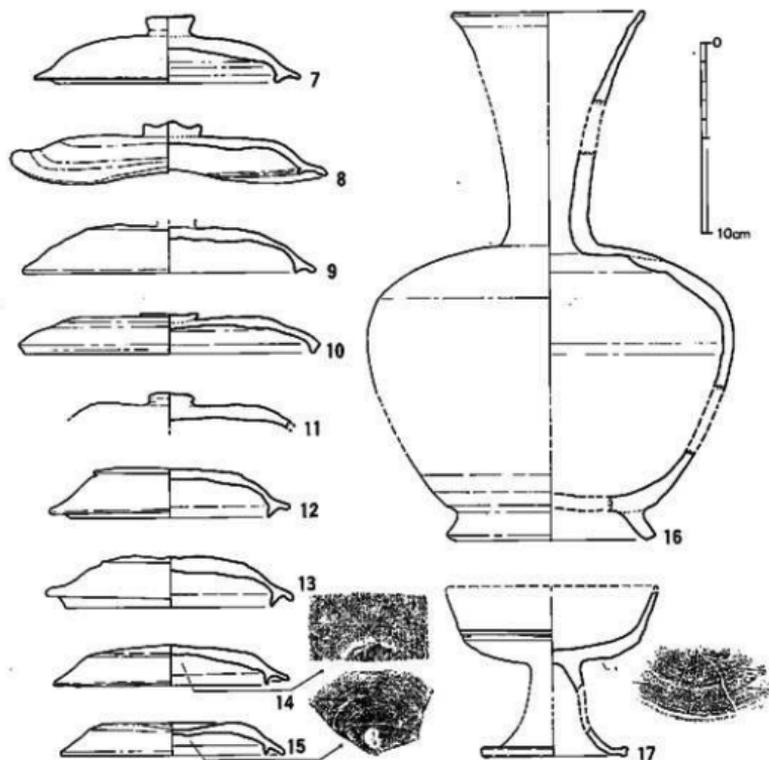
第112図 16号墳前室遺物出土状況 (1/20)

天井部外面は回転ヘラケズリ痕がみられる。焼成は堅緻。11は、天井部のみの破片で、焼成軟質のため風化が進み器面調整は不明。つまみは直径2.4cm、高さ0.7cmで、宝珠形というよりむしろ低い円筒形になっている。

12~15は、身受けのかえりをもつ杯蓋で、天井部外面につまみを有さないもの。口径が13cm以下の小形品。12は、口径12.7cm、器高2.6cm、かえりの径10.4cm。天井部外面はへ

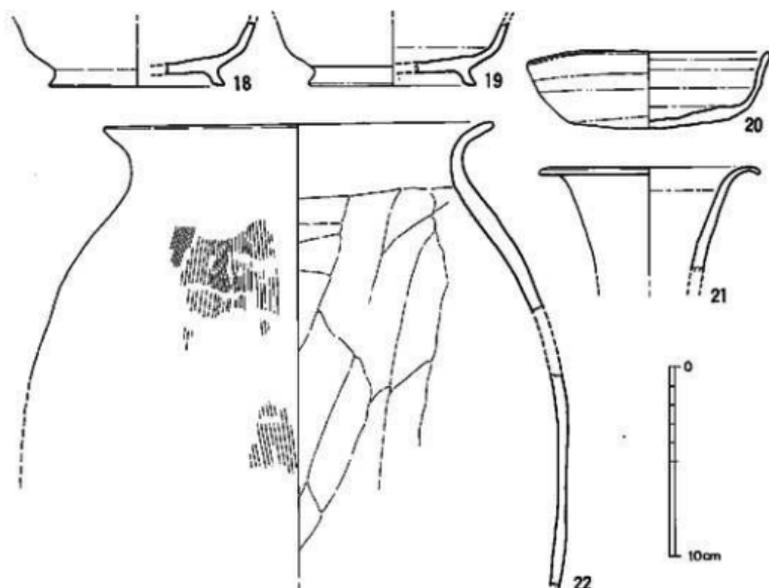


第113図 16号墳出土土器実測図① (1/3)



第114図 16号墳出土土器実測図② (1/3)

ラ切り離しのあとナデられ、内面は多方向ナデ調整されている。13は、口径13.0cm、器高2.7cm、かえりの径10.8cm。天井部外面はヘラ切り離しのあとナデ、内面は多方向ナデ調整されている。12・13共に、かえり部先端が口縁部より下方に出る。焼成は良好。14は、口径12.4cm、器高2.1cm、かえりの径10.0cm、天井部外面はヘラ切り離しのあとナデられ、多方向ナデの内面には細い単沈線のヘラ記号が付されている。焼成は堅緻、かえり部先端と口縁部がほぼ同じ高さである。15は、復原口径11.8cm、器高1.8cm、かえりの径9.9cm。陥没する天井部外面はヘラ切り離しのあとナデられ、多方向ナデの内面には単沈線のヘラ記号が付されている。焼成は堅緻。口縁部とかえり部先端はほぼ同じ高さ。



第115図 16号墳出土土器実測図③ (1/3)

須恵器長頸壺 (16) 各部分の破片から推定して復原したが、推定器高27.8cm、胴部最大径19.2cm、口径9.8cm、高台外径11.0cm、高台高1.5cmの大きさ。頸部と胴下半に欠失部分があるので、若干器形の変る可能性も否めない。口縁部は細い頸部からゆるやかに広がり、口唇部は丸味をもっておさまる。頸部から肩部にかけては大きく広がり、胴部は丸味をもつ。外面の調整は、底部付近に回転ヘラケズリ痕を残す以外は回転ヨコナデで仕上げられる。焼成は良好で淡灰色ないし淡茶灰色を呈す。

須恵器高杯 (17) 口縁端部と柱状部の一部を欠く。口径は11.2cm前後、器高は9.1cm前後であろう。杯部は4cm程の高さで、回転ナデ調整される外開きの口縁部と、ヘラケズリされる底部の境目付近に2条の浅い沈線がめぐる。柱状部はさほどふくらまず、裾部は外へ開いて踏ん張るように広がる。裾部は回転ナデ調整されている。杯部外底面に川字形のヘラ記号が付されている。やや軟質な焼成で、黄色味を帯びた灰色を呈す。

周溝出土土器

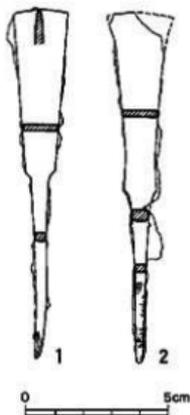
須恵器杯身 (18~20) 18・19は、高台を有す杯身で、口縁部を欠く。外底面はヘラ切り離しのあとナデ調整、内底面は多方向ナデ調整される。焼成は堅緻。20は、高台を有さない杯身で、

口径11.9cm, 器高4.1cm, 平坦な底部から直立気味に口縁部が立ち上るものの, 片口のように歪みを生じている。外底面はヘラ切り離しのあと雑なナデ, 内底面は多方向ナデ調整されている。焼成は堅緻。

須恵器壺 (21) 長頸壺の口縁部破片で, 頸部からゆるやかに開き, 口縁端部は外弯する。復原口径11.6cmの大きさ。

土師器甕 (22) 口径20.6cm, 残存器高24.6cm。外弯する短い口縁部はさほど厚くない。長胴気味で, 胴部最大径28.7cmの大きさ。胴部外面は縦方向のハケ目調整, 胴部内面は頸部までヘラケズリされる。胎土に砂粒・赤褐色粒を若干含み, 良好な焼成で色調は茶褐色を呈す。

鉄製品



第116図 16号墳出土
鉄製品実測図 (1/2)

鉄 鏃 (第116図) 前室から2点出土した。1は方頭細根斧箭式の鏃で, 長さ12.3cm。頭部は長さ5.9cm, 厚さ2.0~2.5mm, 先端側の幅1.9cm, 基部側の幅1.0cm。基部は最大幅0.6cmからゆるやかに細まり, 端部に筈被の木質がわずかに残る。重量は10.5gを測る。2も, 方頭細根斧箭式の鏃で, 長さ12.3cmだが, 1とは若干形が異なる。先端部に欠損があるものの, 備縁がゆるやかな曲線を描いて掬形に広がる頭部は, 長さ6.4cm, 厚さ0.25mm, 先端側の幅2.0cm以上, 基部側の幅1.1cm。基部では, 頭部側から1.0cmの処に棘が付き, 棘の部分では厚さ4mm, 幅7mmを測る。基部端から3.3cmの処まで筈被の木質が残る。重量は13.1gの現存値を測る。

前室出土の須恵器杯蓋・身は7世紀末頃から8世紀にかかる時期の特徴を有し, この時期まで追葬されたと考えさせる。墓道出土の須恵器杯蓋や, 高杯には7世紀中頃まで遡りうるものもあるので, この時期あたりに初葬年代を考えてもよいだろう。

17号墳

F地区尾根の東斜面, 標高64~67.5m位に占地する古墳で, 6号墳の北東方向に位置する。主体部の大半を失うほどに削平されるが, 斜面の下位に列石が残る。

墳 丘 (図版78-1, 第117図)

段々畑の削平で, 主体部の掘り方もわずかに残る程度だが, この削平は墳丘も大きく削り

去ってしまっているの
で、墳丘規模を知る手掛りは、
斜面の上側に残る周溝と、
斜面の下側で検出された列
石だけである。

周溝は、緩やかな弧を描
いて掘削されているが、急
傾斜の斜面で、かつ掘削し
てもすぐに岩盤にぶつかり
掘削が容易でないことに起
因するのであろう。主体部
掘り方の床面より、高い位
置に周溝底がある。一方、
列石は標高63.6~64.0cm
位に並び、周溝と列石の距
離は平面で12mを測る。墳
丘の区画としては高低差を
有すことになるが、みかけ
の墳丘規模は13~14mに近
い値になるであろう。そし

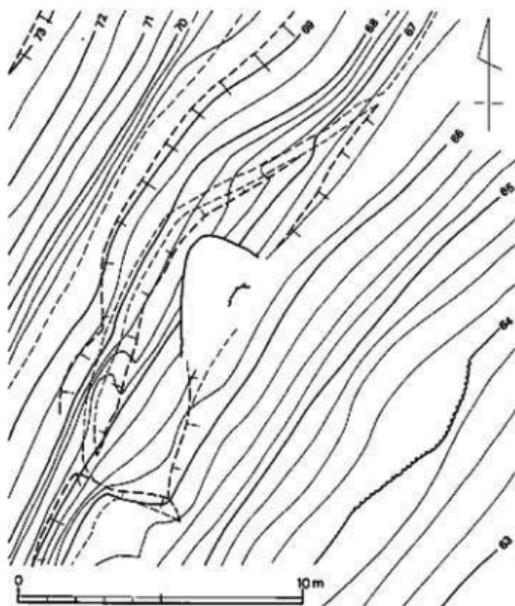
て、主体部はみかけの墳丘の上方に偏って構築される。

墳丘を構成する盛土については、列石の内側に堆積する茶褐色土、黄褐色土がわずかに残る程度で、それ以外の部分では削平のため不明である。

列石 (図版78-2, 第118図)

列石は、標高63.6m~64m位に、7.9mの長さにわたって検出されたが、緑泥片岩・結晶片岩の塊石を用いている。列石の北半では、基底の石のみ残るが、大振りの塊石が多く用いられ、石は横長に並べられている。これに対し南半では、やや小さめの板石状の割石が多用され、横長に並べられる基底石の上に、小口積みで2段程度残っている。列石の南端側は古墳の正面側に相当し、意識的に、面を揃える丁寧な積み方になっている。また、列石の下方には列石から崩落したと思われる石材がかなり散乱しているので、列石は現状よりも高く積み上げられていたと考えられる。

列石の基底石の下には、暗黒灰褐色の粘性土が広がっており、列石内側では、この上に黄褐色粘質土、茶褐色粘質土が乗る。列石の外側にも同様な堆積がみられる。列石下方に散乱する



第117図 17号墳丘・地山整形面実測図 (1/200)

崩落石の存在を考慮すれば、列石外側の土は、列石内側の土砂の流出による再堆積土である可能性が高いといえよう。

主体部 (図版78-3, 第119図)

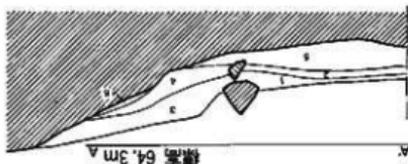
暗茶褐色土の地山を切り込んだ主体部の掘り方は、その北西部のみ残るが、隅の下面では岩壁にまで達し、深さ約1 m、西辺5 m、北辺2 mの範囲を測る。

主体部の石室構造は不明だが、周辺の古墳の例からして、横穴式石室であろう。壁体は、基底石が3個並ぶのみで、揃う面はわずかに弧を描くので、玄室の奥壁と左側壁の接する隅部であろう。なお、奥壁側の東端にある小さな石は根固めのための石であろう。その他には、奥壁を構成する基底部石や補石の抜き痕すらも検出しえなかった。そして、主体部掘り方内では遺物の出土は皆無であった。

遺物

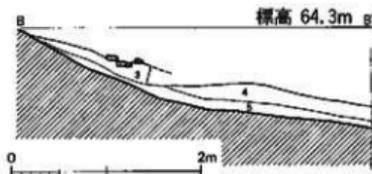
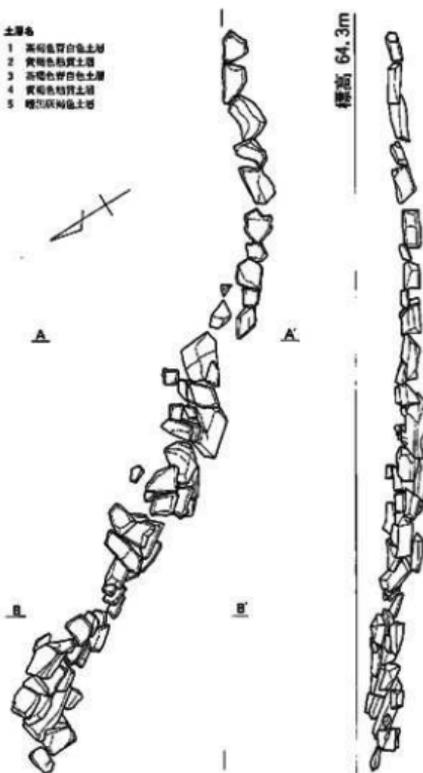
遺物出土状況

掘溝Ⅰ区で、土器器片が若干出土している。火を受けており風化の進んだ胴部破片であり、図示しえない。

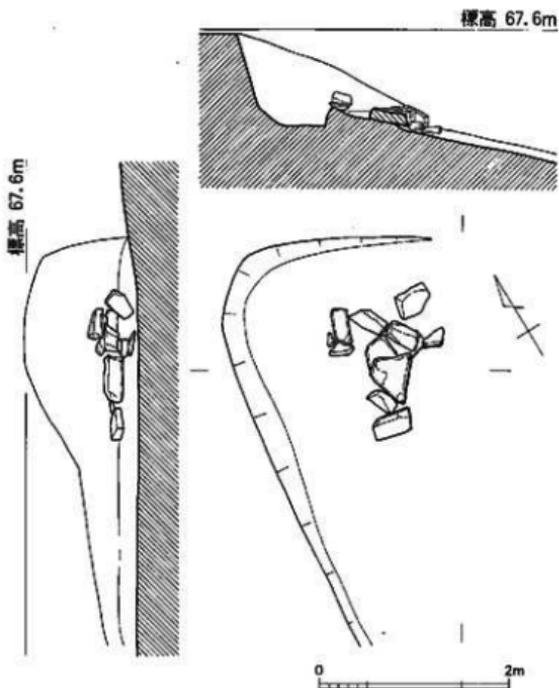


土層名

- 1 基河集層白色土層
- 2 黄褐色粘質土層
- 3 高砂色砂白色土層
- 4 黄褐色粘質土層
- 5 暗褐色褐色土層



第118図 17号墳列石実測図 (1/60)



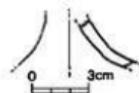
第119図 17号墳石窠実測図 (1/60)

列石の外側では、焼成の軟かい須恵器高杯柱状部破片が出土した。その他にも混入と思われる弥生土器の甕底部，器台片（いずれも弥生中期のもの）の出土もみられた。

出土土器（第120図）

須恵器高杯 柱状部破片で，裾部は広がるが，端部の形状は不明。

胎土は精良だが，焼成は軟かく，灰白色を呈す。



第120図 17号墳出土
土器実測図 (1/3)

18号墳（図版79，第121図）

E地区尾根との間が迫るF地区東斜面奥部の標高70m位に占地する古墳で，農道造成によっ

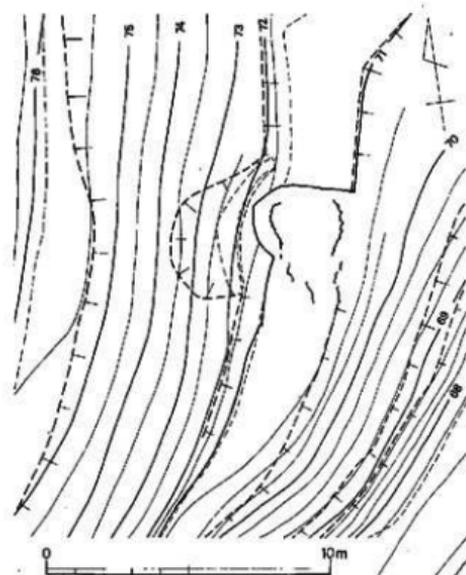
て大きく破壊されている。農道の両側斜面に、墳丘のなごりすらもみられないほど削平を受け、表土や攪乱土を除去しなければ、古墳の存在が知りえない状況であった。攪乱土などの除去により、周溝は農道の上の斜面に検出されたが、周溝底は標高70.5mで、約2m上から周溝の掘削がみられ、三日月形に残る。農道で平坦に削られた部分は幅2.5m程度で、農道の下斜面も削平が進んでいて墳丘・周溝を検出しえない。

主体部（図版79-2、第122図）

この古墳の主体部は、複室構造の横穴式石室で、現状では、農道造成とそれに伴う排水溝の掘削によって、主体部は二分されている。

主体部の掘り方は、玄室左側壁全体の部分にのみ残るが、長さ2.5mの部分で弧を描き、最も残存状況の良い部分で深さ0.7cmを測る。

石室は、農道で二分されているが、上部では玄室と前室の左側壁の一部が残るものの、袖石は既不在。下部では、玄室と前室の右側壁の一部と、閉塞石を含めて羨道部分が残るもの

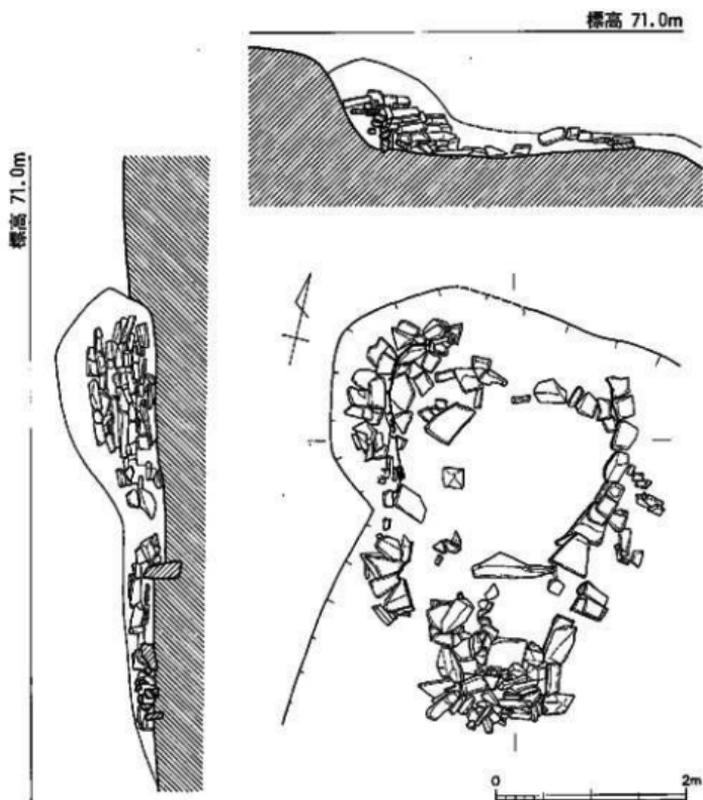


第121図 18号墳墳丘・地山整形面実測図 (1/200)

の袖石はない。また、奥壁は全く残らないが、全長4.0mを測り、主軸方位はN13°Wである。しかし、左右の側壁の配置には歪みが顕著にみられる。これは、おそらく農道造成によって地すべり的な現象が生じて、石室の左前側半分が30cm程度せり出したことによるものであろう。

現状から、石室の右前側半分を30cm北西方向に移動すれば、歪みはほとんどなくなり、全長3.8mを測る。胴張りプランの複室構造横穴式石室になる。壁体には全て緑泥片岩の扁平な石材が用いられている。

玄室では、左側壁が遺存状況良好である。腰石状の基底部石は5～6石を横長に並べ、その上に乗る小口積みの板石は5-



第122図 18号墳石室実測図 (1/60)

6段残るものの、持ち送りについてははっきりしない。一方、右側壁は基底部の石が6個並ぶだけの残り方である。また、奥壁は、左側壁につづく小口積みの壁体が若干残るものの、奥壁の部分がちょうど排水溝の擾乱になっていて、鏡石があったとしても抜き痕すらも不明である。現状で玄室部分の長さ2.2m、幅2.4mを測るが、本来は長さ2.1m、幅2.1m前後と推定している。

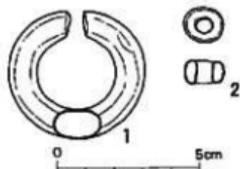
前室は、長さ0.6m、幅1.8mの広さだが、おそらく、幅は1.6m前後であったであろう。左側壁は、基底部から小口積みされて、胴張りプランに面が揃えられているものの、袖石の抜き取りなどで乱れがある。玄室の樞石は、長さ90cm、幅30～50cm、厚さ15cm程の板石を床面に30

～40cm埋め込んで据えられている。

羨道は、長さ0.6～0.7m、幅0.9mの広さで、前室との間には、長さ50cm、幅30cm、厚さ15cm程の扁平石を据え、その両脇にやや小振りの割石を平らに並べて仕切りとしている。

閉塞は、片手でも持てる程度の小さな石材を集めているが、さほど整然とした積み方ではない。わずかに右側壁寄り、主軸に直交する方向にややまとまる程度である。

床面の敷石は、玄室奥側半分にのみ残るが、かなり攪乱されている。前室には当初から敷石がなかったようである。



第123図 18号墳出土装身具
実測図 (1/1)

遺物

遺物出土状況

前室部分の埋土中から、土師器小形甕片が出土し、玄室に近い部分の埋土中からは須恵器の平蓋か提瓶かと思われる同心円カキ目のある小破片が出土したものの、図示しえるほどの資料ではない。また、玄室内敷石の間からは、耳環と小玉各1点が出土した。

装身具類 (図版79-3, 第123図)

耳環 (1) 玄室内左奥部敷石の間から出土した。銅地

金銅張りの金環で、重量6.4g、長径23.7mm、短径22.4mm、断面5.3×8.0mmの楕円形。

ガラス小玉 (2) 耳環よりも約40cm東側の玄室敷石間から出土した。明るいコバルトブルーの色調を呈す。外径6.1～6.6mm、厚さ4.0mm、孔径2.2～2.6mm、重さ0.2g。 (小池)

19号墳

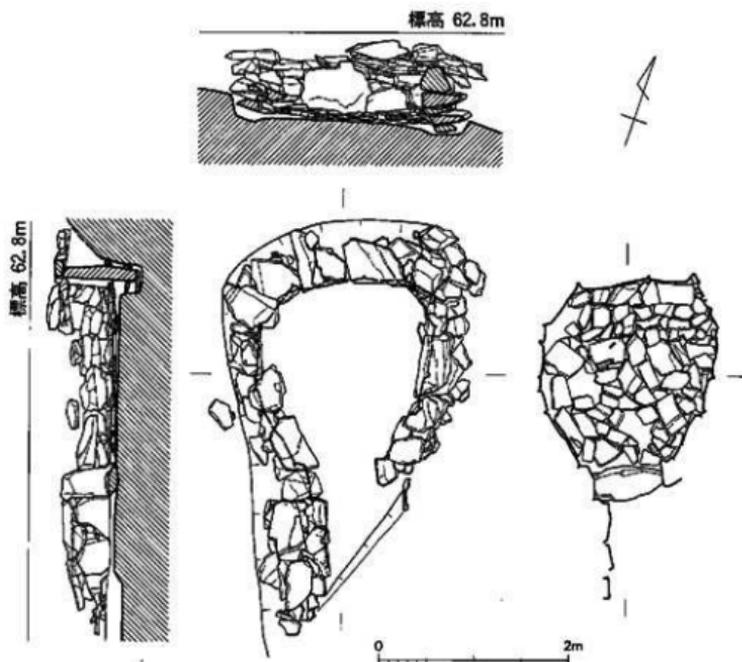
墳丘 (図版80-1, 第97図)

丘陵の尾根線上よりやや東側斜面に位置する。墳丘は閉塞によって完全に削平され詳細は判からなかった。

主体部 (図版80-2, 第124図)

14号墳東側に位置し、石室は玄室内と羨道の一部を残し削平されているが、単室の横穴式石室であろう。主軸方位をN20°Wにとり、ほぼ南に開口している。

玄室は、長さ1.95m、奥壁側幅1.2m、最大幅1.8mで楕円形プランを呈する。奥壁は幅70cm、高さ80cm、厚さ約15cmの鏡石と幅45cm、高さ50cm、厚さ約15cmの板石を立てて据え、その脇より板石を小口積みしている。側壁は両壁とも残存状態が悪いが、1～2段目は小ぶりな板



第124図 19号墳石室実測図 (1/60)

石を用い、3段目あたりから幅広で厚みのある板石を用いて小口積みしている。玄門袖石は幅40cm、高さ約60cm、厚さ約40cmの石を立てている。玄室と羨道部は長さ70cm、幅35cm、厚さ約10cmの石で仕切られている。床面敷石は40cm×20cm程、20cm×10cm程の大小の板石を用いている。

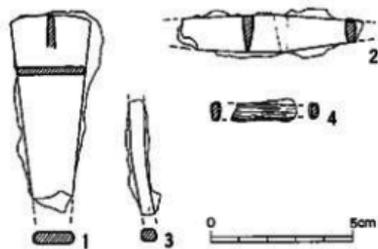
羨道部は僅かに西側壁の一部が残っている。玄門部袖石から手前2石は立てており、2段目より板石を小口積みしている。

(日高)

遺物 (図版80-3, 第125図)

鉄 鏃 (1) 玄室内敷石直上から出土した。方頭斧管式鏃の頭部破片。現存長6.9cm、先端部の幅2.9cm、厚さ2.6mm。折損部では幅1.4cm、厚さ4.0mmを測る。

鉄刀子 (2) 玄室内敷石直上から出土した。刃部側先端、基部側先端部共に破損しており、全



第125図 19号墳出土鉄製品実測図 (1/2)

片かと思われるが、2の刀子片と直接接合せず、厚さ3mmと2の基部側の厚さ4mmよりも厚みが少ない。(小池)

体の形状は不明。現存長6.5cmで、刃部はそのうち3.5cmを占める。刃部の最大幅は1.3cmで背の厚さ4mm、基部は錆のためはっきりしない。

その他の鉄製品(3・4)いずれも玄室内敷石直上から出土した破片資料で、3は鉄製の基部破片であろうが、1の鉄鍔頭部破片と直接接合しない。長さ4.0cm、幅5mm、厚さ4mm。4は木質の残る小破片で、長さ2.3cm、刀子の基部

20号墳

16号墳の南東5mに位置し、南北に伸びる舌状尾根の東斜面下方に築造されている。調査前において墳丘の高まりは確認されず、急勾配の斜面であり相当量の土砂の流入があったと考えられ、墳丘が完全に埋没していた。なお東南部周溝は喪失している。

墳丘 (図版81-1, 第97図)

地山整形は自然地形を生かし、ある程度平坦になっている。この地山整形面の東周溝近くに浅い落ち込みと集石が認められた。一方周溝は馬蹄形を呈し、外径8.8×6.5mと内径5×3.8mを計測する。

墳丘盛土は石室を築造しつつ裏込め・控えの盛土を行ったと考えられる。土層図の裏込め土の観察は充分留意していたが、盛土と基本的には大差なく順次行なわれたと思われるが、その差異を識別することは出来なかった。

本墳の前面には列石が在する。左側は羨門石の前方に結晶片石の板石を2枚立てて、この裏側よりは無造作に積み上げている。他方も羨門石の前方に同じ石材の2枚の板石が若干重なり、縦長に立石している。これらの東側は若干盛土を行った後に板石を整然と積み上げて玄門部東方まで伸展している。列石の石材は緑泥片岩を用いている。

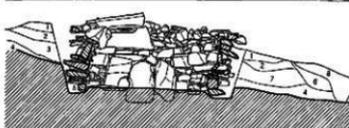
主体部 (図版81・82-1, 第126図)

本墳は単室の横穴式石室で、主軸方位N4°30'Eをなし、南に開口している。石室の掘り方

土層表

- 1 淡灰黄色粘質土 (砂礫多(含む))
- 2 黄褐色粘質土 (砂礫多(含む))
- 3 ①+②境界面上砂礫層(多)
- 4 ①より下部に砂礫層(多)
- 5 淡灰黄色粘質土+硬質粘質物土 (砂礫)
- 6 淡灰黄色粘質土 (砂礫中多)
- 7 ①より下部に砂礫層(多)
- 8 黄褐色粘質土 (黄褐色粘質物土)

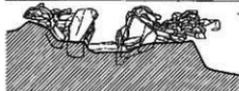
標高 63.5m A



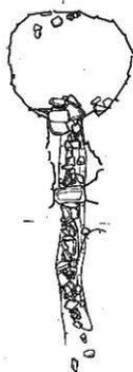
土層表

- 1 淡灰黄色粘質土 (砂礫多(含む))
- 2 黄褐色粘質土 (砂礫多(含む))
- 3 ①より下部に砂礫層(多)
- 4 ①+②境界面上砂礫層(多)
- 5 ①より下部に砂礫層(多)
- 6 淡灰黄色粘質土 (砂礫中多)
- 7 黄褐色粘質土+硬質粘質物土 (砂礫)
- 8 色黒く砂で粘質土
- 9 淡灰黄色粘質土+硬質粘質物土 (砂礫)
- 10 黄褐色粘質土
- 11 ①+②境界面上

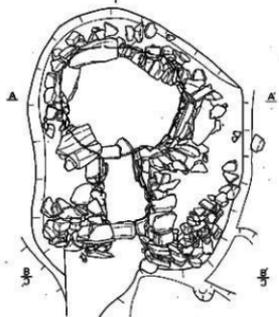
標高 63.0m B



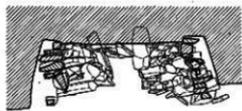
標高 62.6m



標高 62.4m

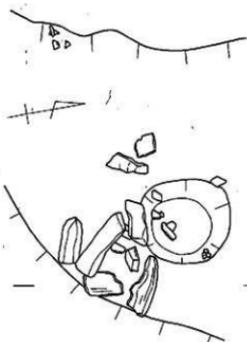


標高 63.0m C

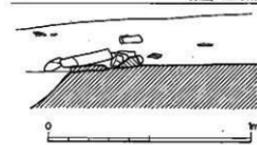


標高 63.0m

標高 63.0m



標高 62.3m



第127図 20号墳墳丘下紫石遺構実測図 (1/20)

第126図 柿原E・F地区20号墳石室実測図 (1/60)

は地山より最大50cm程掘り下げ、基底部のみ一段深く掘られている。石室は全長3.8mを測る。

玄室は全長1.6m、幅1.8mを測り、やや不整形な凹形の平面形態を呈す。奥壁には安山岩系の石材でやや厚手の板石3枚を縦長に立てて鏡石となす。これらの両側は厚手の板石を基底部に据え、上方は鏡石上端面まで略垂直に小口積みしている。側壁も鏡石と支門石の上端面までは垂直に積み上げている。東側が若干外斜しているのは石室陥没時等の後世に壊れたものと考えられる。鏡石の上方には厚手で幅広の大石が用いられているが、これはやや内斜する勾配を有する持ち送りを安定させているのかもしれない。残存する最大壁高は1.1mを測るが、持ち送りの勾配から天井部は若干高くなると推定される。床面は板石が敷かれていたと考えられるが僅かに在するのみである。追葬時等に擾乱されたものであろうか。

玄門部は砂岩質のやや角張る巨石を袖石としている。両袖石は床面上方略同じ高さに据えられていた。樞石は2枚の板石で簡略化している。

羨道部は玄室中軸線より僅かに東寄りとなる。西側壁は玄門石と羨門石に面を合わせているが、東側壁は若干張り出し気味となり、前室を意識したのであろうか。石積みは、玄室と略同様の積み上げがなされている。

羨門部も玄門部と同じ様相を呈し、羨門石は安山岩質の石材を用いている。仕切り石は羨門石間にぴったりと納まっている。

閉塞状況は羨道部中程より仕切り石外方45cmまで丁寧に積み上げている。最大高55cmを測る。

石室に使用されている石材は緑泥片岩が主であった。

本石室には柿原古墳群の中でも顔を見ない暗渠が施されている。玄室中央の南方50cmより始まり羨道部を経て、仕切り石外方2.3mまで伸展している。全長約3.8mが確認され、最大幅40cmを有する盲暗渠である。最大深長15cmで断面「U」字状を呈する掘り方を有し、その中に小さな板石を多量に埋め込んでいる。

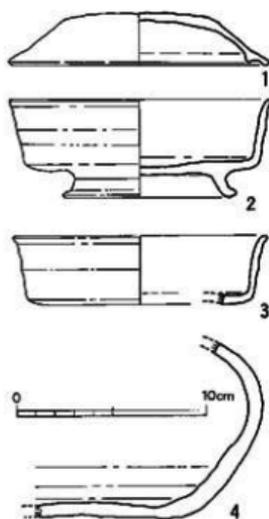
遺物は石室内から全く出土していない。墓道・暗渠内及び周溝内から須恵器が出土した。

下層集石遺構 (第127図)

墳丘盛土を剥ぎ取った後に、東玄門石東方約2mの位置で検出した。十数片の小石塊がまとまった体をなし、多量の炭化物を含む落ち込みが認められたので遺構であると判断した。旧地形及び本墳の地山整形等から推察すると、この遺構は地山整形時に在したと考えられる。祭祀行為に付随したと思われるが、性格を判断する遺物は何ら出土していない。(武田)

遺物 (図版82-2, 第128図)

須恵器杯蓋(1) 墓道中央の暗渠内から出土した。身受けのかえりをもつが、天井部つまみを有さない杯蓋。かえりは口縁端部より少し上に隠れる。口径13.8cm、器高2.8cmの大



第128図 20号墳出土土器実測図 (1/3)

れている。焼成はやや軟質で紫褐色を呈す。周溝Ⅰ区から出土した。

これらの土器のうち、須恵器杯蓋・身は7世紀後半の特徴を有している。(小池)

21号墳

墳丘 (図版83-1, 第129図)

丘陵の尾根線上よりやや西側に位置する。墳丘は開墾による削平を受け、調査前では確認できなかった。表土除去後に周溝と石室の一部を検出した。

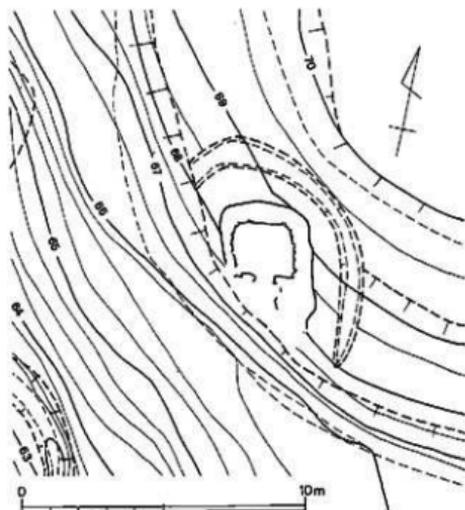
石室は斜面の堆積土を掘り込ん

きさ。器面風化のため調整痕は不明。軟質の焼成で黄灰色を呈す。

須恵器杯身(2・3) 2は墓道から、3は墓道中央の暗渠上部から出土した。2は、高めの高台を有す杯身。平坦な底部から体部が直立気味に立ち上り、口縁部はわずかに外反する。全体に回転ナデ調整されるが、内底面に多方向のナデ痕が残る。口径13.8cm、器高5.2cmで、高台は外径9.2cm、高さ1.4cm。堅緻な焼成で、青灰色ないし黒色を呈す。

3は、底面を欠くので、2と同じような高台が付くのか付かないのか不明。杯部の形状は酷似する。口径13.4cm、杯部の高さ3.6cm。堅緻に焼成される。

須恵器平瓶(4) 肩部から底部にかけての破片で、径の復原はし難い。体部上半の外表面はカキ目調整。体部下半は手持ちヘラケズリ、外底面はナデつけ調整さ

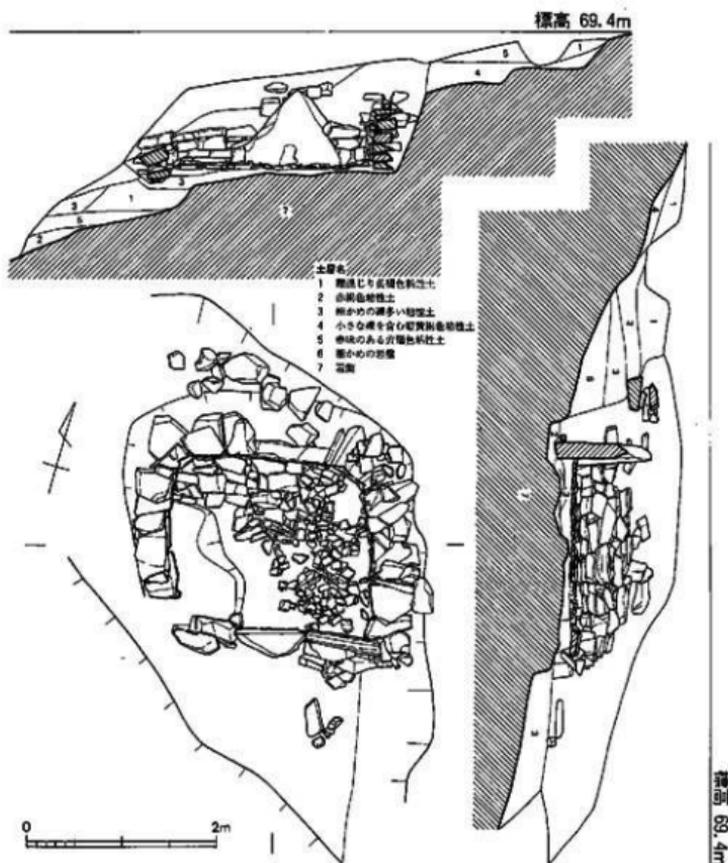


第129図 21号墳墳丘・地山整形実測図 (1/200)

で造られている。墳丘の盛土部分は残っていなかった。

周溝は奥壁背面では石室中軸線より内側で幅2.6m、底面は石室床面より70cm高い。東側壁背面では内側まで2.6m、底面は石室床面より1.05m高い。従って、周溝内の水は東側壁面背面より両側に流れる。

主体部 (図版83-2, 第130図)

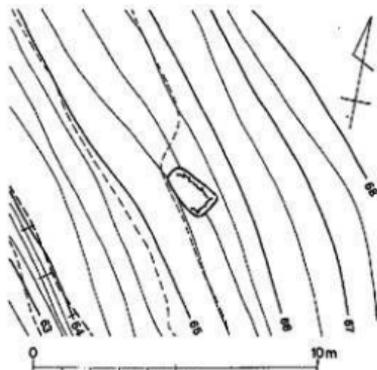


第130図 21号墳石室実測図 (1/60)

羨道および墓道は残っていないが、単室の両袖式横穴式石室であろう。主軸方位をN17°Wにとり、ほぼ南に開口している。

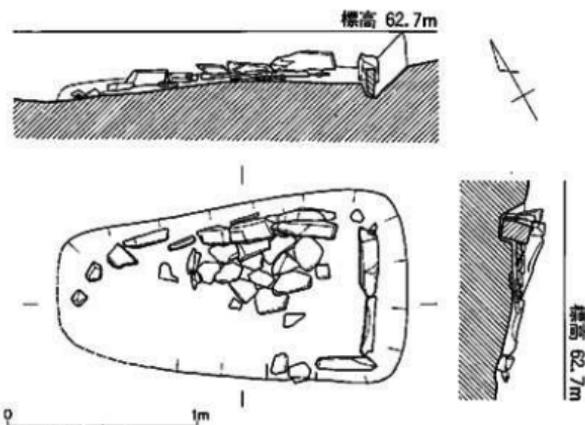
玄室は長さ1.8m、奥壁側幅1.6m、中央幅2.15mを測り、コーナ部が丸味を帯びた横位の長方形を呈す。奥壁はほぼ中央部に鏡石として、幅1.15m程、高さ1m程、厚さ18cm程の三角形の石を立てて据え、両脇には幅25cm前後、厚さ10cm前後の板石を基底部より小口積みしている。側壁は基底部の石材に比べて3～4段目の石材は厚く、不定形のものを用いている。袖石は同側とも壁材よりもやや大ぶりの板石を仕切石と平行に横長に立てて据えている。仕切石は三角形の板石を寝せて置いている。床面の敷石は5cm程度の厚土整地上にあり、西側部は奥壁側しか残っていないが、30cm前後の板石を用い、東側は15cm前後の小ぶりの板石が敷かれている。

(日高)



第131図 22号墳墳丘・地山整形面実測図 (1/200)

22号墳 (図版83-3, 第131図)



第132図 22号墳石室実測図 (1/30)

当墳は、F区丘陵の標高65.5cmを測る西側斜面の最奥部に位置する。墳丘及び周溝は柿畑を開墾した際の掘削により遺存していないが、墳形は円形を呈するか。

主体部 (図版83-3, 第132図)

当墳は遺存状態が極めて悪く、腰石と敷石が残るのみであった。石室は北西方向(谷部)に開口する小型単室の横穴式石室であろう。石室掘り方は羽子板状を呈し、奥壁側での幅1.0m、長さは2.0m程か。遺存状態が悪いため詳細は不明であるが、石室の規模からみて8号墳と同形態を呈するものであろう。遺物の出土はなかった。(小田)

2. 石 棺 墓

E地区尾根の東斜面に1基、西斜面に2基、F地区尾根の東斜面に1基が占地する。

1号石棺墓 (図版84, 第133図)

4号墳の東方、5号墳の北方に隣接する標高74.2-74.5mの緩斜面に位置する。農道敷の下から検出されたが、周溝等については確認できなかった。

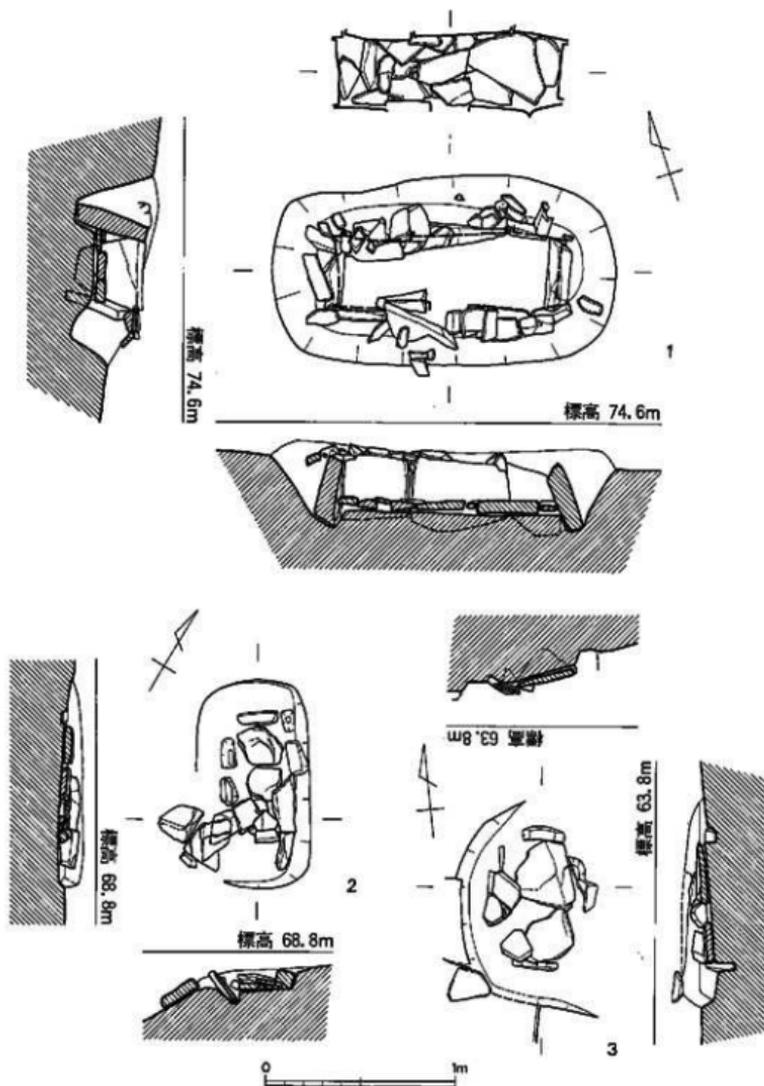
主体部

主軸をN71°Wにとり、東南東を頭位にする石棺墓で、緑色片岩板石を用いている。

主体部掘り方は、長さ1.82m、幅1.00m、深さ0.35mで、黄褐色粘土を掘り込んでいて、下部は岩盤を掘り込んでいる。

石棺内法は、長さ1.16m、最大幅は東側にあり0.40m、最小幅0.31m、残存高は0.25mを測る。両側壁共に、斜面の低い側である南側に倒れているが、後世の削平時に力が加わって倒れたものであろう。石棺上半の残りは悪いが、板石の小口積みで南側壁に残されているので、石棺系の竪穴式石室の範疇に入るものであろう。両小口は床面を約10cm掘り込んで、高さ35cm程度の板石を縦に据える。両側壁も床面を約10cm掘り込んで、小口石を両側から挟み込むように、板石を立て並べて据えている。北側側壁は広めの石3枚でおおむね棺内の長さになるが、両端にできたわずかな隙間に細長い板石を立てて補っている。南側側壁は、北側に比して幅の狭い板石を5枚立て並べているが、中程の1枚は重ねて立てられていて、削平でかなり南側に倒れてしまっている。

石棺内床面には、板石による敷石がほぼ全面にみられ、東側の方に広めの板石が用いられて



第133圖 1—3号石棺墓実測圖 (1/30)

いる。棺内では、副葬品、遺骨、赤色顔料の痕跡はみられなかった。

2号石棺墓（図版85-1、第133図）

6号墳の東南方、9号墳北方の標高68.6～68.7mに位置する。やや緩傾斜になる斜面に占地しているが、段々畑の削平などで周溝等については不明。

主体部

主軸をN31°Wにとり、頭位は北西側であろう。緑色片岩の板石が散在しており、削平でかなり破壊されている。

主体部掘り方は、長さ1.10m、幅0.60m、深さの最高値0.12mに黄褐色粘土を掘り込んでいり。南側は掘り方の境目もよく判らないが、石材の散乱もみられる。掘り方床面に石材抜き痕の残る部分もあるが、残らない部分もある。

石棺内法は、幅0.24～0.27mで、長さは0.75mを上回らない規模が考えられる。北側の小口には幅20cm、厚さ6cmの抜き痕が深さ4cm程度残る。南側の小口は抜き痕も不明である。東側側壁は、さほど高くない扁平石が2枚南側に残り、北側は2枚分の抜き痕が確認できた。断面図に図示する東側側壁の石は倒れた状態で検出されたが、復原すると、床面より約10cmの高さを有していたことになる。一方、西側側壁は2枚の扁平石が残り、抜き痕1枚分を検出したが、扁平石は約20cmの高さがある。棺内床面には扁平石による敷石がみられ、長軸方向に0.62m分残る。

棺内外からの遺物の出土はなく、赤色顔料の痕跡もみとめられなかった。

3号石棺墓（図版85-2、第133図）

10号墳周溝の北に隣接する。標高63.5～63.6mの緩斜面に位置する石棺墓だが、上部は大きく削平を受けており、周溝等の施設、10号墳との前後関係は不明。

主体部

主軸をN6°30'Eにとり、頭位は北側であろう。緑色片岩の板石・割石が散在している。

主体部掘り方は、長さ1.05m、幅0.75mまで確認できるが、東側は削平で不明。赤褐色粘土の床面には、石材の抜き痕が4ヶ所で検出された。

西側側壁に残された石材と4ヶ所の石材抜き痕から、石室内法は、長さ0.65m、幅0.45mの広さが考えられる。北側の小口には幅22cm、厚さ5～6cm、深さ6cmの抜き痕があり、南側

の小口には幅24cm, 厚さ3cm, 深さ10cmの抜き痕がある。東側隔壁の抜き痕は1ヶ所のみで、深さ10cm近く掘り込まれているが、削平で他の部分是不明。西側隔壁は、高さ15cm程度の薄い板石を用いているが、東に大きく傾いている。抜き痕の状況からみても余り掘り込まれず、高さも10cm前後であろう。

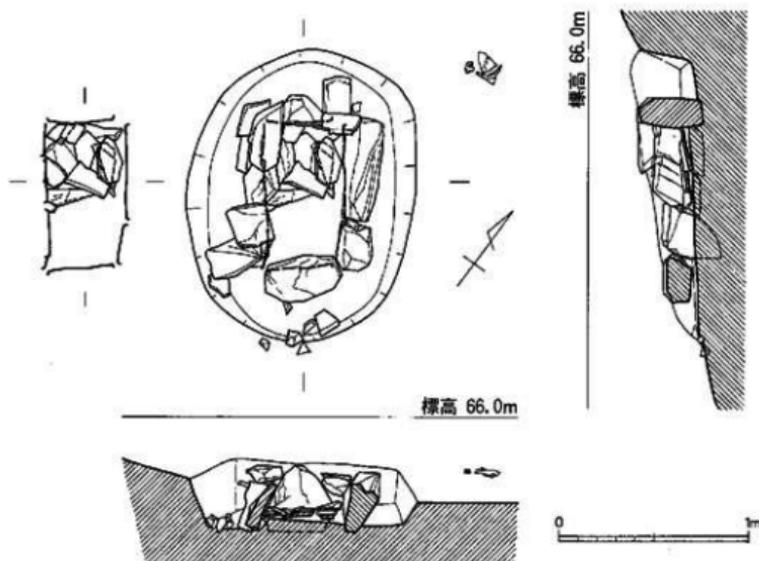
棺内床面は、2枚の扁平石で敷石しているが、北側の石が広めで、南側の石より5cm程度高く敷かれる。棺内外からの遺物の出土はなく、赤色顔料の痕跡もみられなかった。

4号石棺墓 (図版86-1・2, 第134図)

F地区尾根の東斜面で、15号墳の南側に隣接する。標高65.4~65.9mの緩斜面に占地する。周溝等については不明で、15号墳周溝との前後関係も不明。

主体部

主軸をN36°Wにとり、頭位を北西側におく緑色片岩の石材を用いた石棺墓である。



第134図 4号石棺墓実測図 (1/30)

主体部掘り方は、直径1.55m、短径1.20mの楕円形プランで、深さの最大値0.35mを測る。石棺内法は、長さ0.76m、北小口での幅0.42m、南小口での幅0.36m、残存高0.26mを測る。両側壁共に、東側に倒れ気味だが、西側側壁は高さ25-30cm、幅20-25cm、厚さ5-10cmの扁平石を3枚立てて並べ、その上に小口積みの扁平石が一段乗っている。東側側壁は、西側側壁に比して幅広く、厚みも15cm程と厚めの石を用いて2枚で済ませている。北側小口は、高さ、幅共に35cmで三角形に近く、厚さ15cm程の石を据え、南側小口は、高さ14cm、幅40cm、厚さ22cmの石を据える。小口と両側壁は端が接するように配置されており、挟み込む形とは異なる。また、両側壁と北側小口の石が床面を掘り込んで据えられているのに対して、南側小口の石は、掘り込みがみられず石も衰えた状態に据えられていること、北側小口の石が横穴式石室奥壁の鏡石に多く見られる三角形の形であることからして、横穴式石室に近い石棺蓋といえよう。

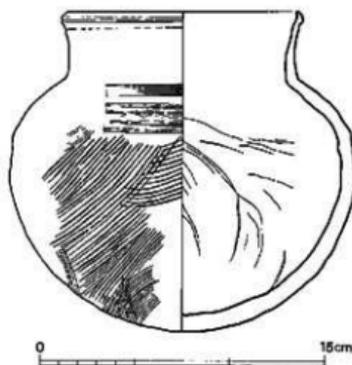
棺内床面には、北半にのみ扁平石を用いた敷石がみられる。残る敷石の南端部が、面をなしていないので、南半部に敷石の無いのは攪乱によるものであろう。

棺内には、赤色顔料等の痕跡はない。棺内流入土の中には土師器小片が、また北小口石と東側壁石の接する外側の埋土の上部から土師器片が出土した。このほか、主体部掘り方の北側0.3mの位置から須恵器壺が出土している。このうち主体部内出土の土器は図示しえる程の資料ではないが、壺の胴部破片であろう。

墓壙北方出土土器

(図版86-3, 第135図)

須恵器壺 口径12.8cm、器高17.1cm、胴最大径18.2cmの大きさの壺で、口縁部は直立気味にわずかに外反して立ち上り、口縁端部外面に低い三角凸帯がめぐる。口器端部は上方へつまみ上げたように内傾気味に尖る。胴部外面は平行タタキ目、肩部外面にカキ目調整がみられる。胴部内面は、タタキによる皺かヘラケズリのあとナデを加えたものであろうか、調整手法は判断し難い。堅緻な焼成で、黒灰色を呈す。(小池)



第135図 4号石棺墓基礎外出土土器実測図 (1/3)

3. 火葬墓

1号火葬墓

(図版87-1, 第136図)

10号墳周溝西南端より西方2mに位置する。この付近は畑造成により削平されているが、本火葬墓は上部を喪失しているものの旧態が推定出来る。長軸方位は $N73^{\circ}30'E$ である。

平面形態は上・下端共に長方形を呈し、上端部で長辺0.88m、短辺0.72mを測る。壁面は略垂直な立ち上りをなし、壁高0.21mを測る。壁面より2～6cmまで熱を受け赤変している。

埋土は凹レンズ状を呈し、最下層には3～10cmの炭化物が堆積している。

床面は略水平に造られている。壁面と比較すれば赤変は若干鈍化しているものの、充分熱を受け赤変しているのが認められた。

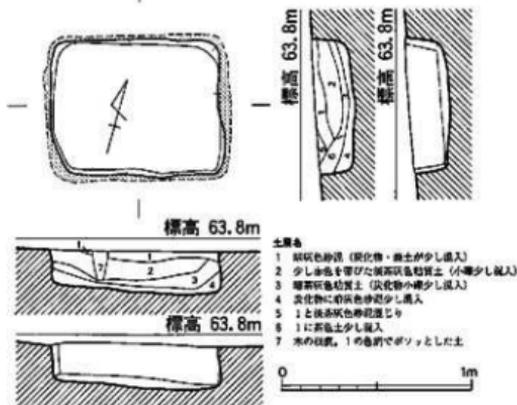
これらより火葬墓と判断されるが、骨片は全く認められなかった。

何ら遺物は出土していないので、本遺構の時期は判定出来ない。

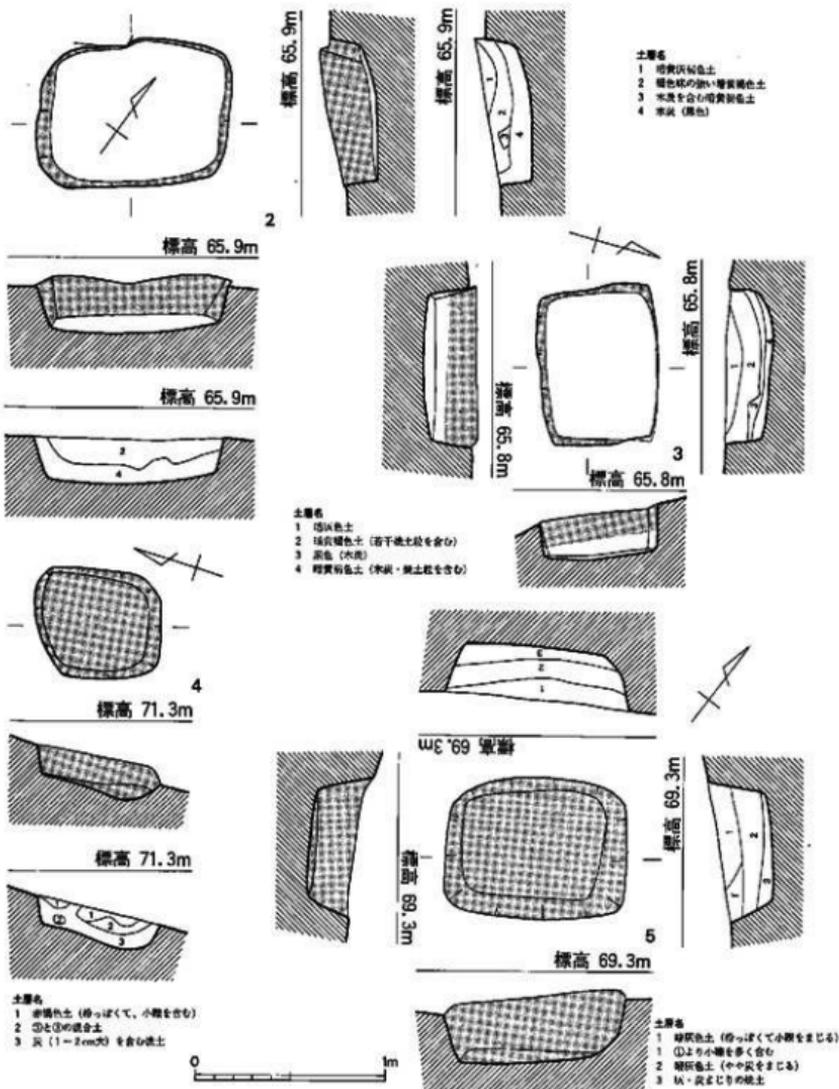
(武田)

2号火葬墓 (図版87-2, 第137図)

F地区尾根線上で、先端部寄りの緩斜面に占地し、標高65.8mの高さに位置している。平面は隅丸長方形を呈し、主軸方位は $N54^{\circ}E$ にとる。長径1.01m、短径0.77m、深さ0.25mを測り、底面は風状に凹み西側が深くなる。坑内には炭混じりの暗黄褐色土が堆積し、下部は炭が10cm程の厚みで堆積している。周壁・底面ともに焼けているが、周壁の上半部が強く焼けている。出土遺物はない。



第136図 1号火葬墓実測図 (1/30)



第137図 2～5号火葬墓平面図 (1/30)

3号火葬墓 (図版87-3, 第137図)

F地区尾根線上で、先端部寄りの緩斜面に占地し、2号火葬墓の南西約2mの、標高65.7mの高さに位置している。平面は隅丸長方形を呈し、主軸方位はN74°15'Eにとる。長径0.82m、短径0.62m、深さ0.25mを測り、底面は南側がわずかに深い。坑内には炭混じりの暗黄褐色土が堆積し、下部は炭・焼土が多めに堆積している。周壁、底面ともに焼けているが、周壁の上半部が強く焼け、特に北側の壁が良く焼けている。出土遺物はない。(小池)

4号火葬墓 (第137図)

当火葬墓は、E・F区丘陵谷部のややフラットになった標高71mを測る高所に掘られている。平面形は長軸0.65m、短軸0.56mを測る隅丸方形を呈し、深さは0.19mを測る。埋土下位は灰・炭混じりの焼土層で、側壁と底面は加熱により赤変していた。土坑内からの遺物の出土はない。埋土中及び底面から骨片は検出しておらず、火葬墓とするには疑問が残る。主軸方位はN19°Wを示す。

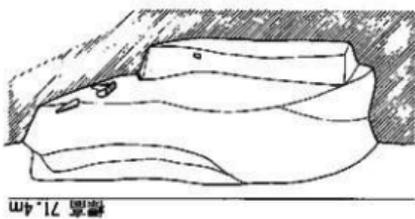
5号火葬墓 (第137図)

当火葬墓は、E・F区丘陵谷部のややフラットになった標高69mを測る高所に掘られている。平面形は長軸0.95m、短軸0.75mを測る隅丸方形を呈し、深さは0.3mを測る。埋土下位は灰・炭混じりの焼土層で、側壁と底面は加熱により赤変していた。土坑内からの遺物の出土はない。4号墓同様火葬墓としたが、埋土中及び底面から骨片は検出していない。主軸方位はN52°Eを示す。(小田)

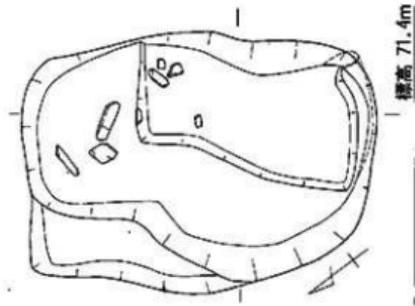
4. その他の遺構と遺物

8号土坑 (第138図)

E・F区丘陵谷部の標高74.5mを測る斜面に位置する。平面形は不整長方形を呈し、2段に掘り込んでいる。上面での長軸3.78m、短軸2.79mを測り、下面での長軸2.35m、短軸1.05m、下面までの深さは1.5mを測る。埋土中位には板石(柿原石)の流入がみられた。遺物は埋土中より須恵器片数点が出土したのみであり、当土坑の性格については不詳。

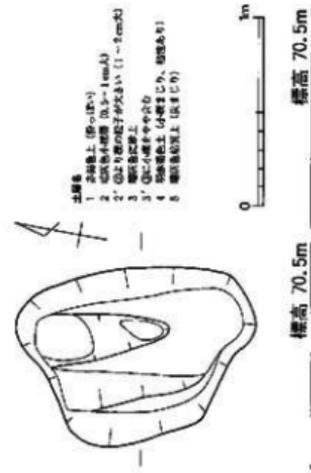


標高 71.4m



標高 71.4m

- 土器名
- 1 赤褐色土、横、灰がまじり、磨り合い
 - 2 ②よりも層を多く含む
 - 3 ②に同じ、灰石が混入している
 - 4 赤褐色土、②よりも磨りあはくなく、小層多し
 - 5 ②に同じ
 - 6 ②に同じ、層の入りまじりが小さい
 - 7 灰赤土層
 - 8 灰赤土層 (磨り合い、灰まじり)
 - 9 磨り赤土 (灰まじり、磨り合い)
 - 10 磨り赤土 (小層まじり)
 - 11 磨り赤土 (②に③の混入多し、小層まじり)
 - 12 ②よりも磨りあはく、灰層もこい



標高 70.5m

標高 70.5m

- 土器名
- 1 赤褐色土、横、灰まじり
 - 2 赤褐色土、横、灰まじり (10cm × 1cm)
 - 3 ②よりも層の入りまじりが小さい (10cm × 1cm)
 - 3' 磨り赤土層上
 - 3'' ②よりも層の入りまじり
 - 4 赤褐色土 (小層まじり、磨りあり)
 - 5 磨り赤土層上 (灰まじり)



第139図 9号土坑実測図 (1/30)

第138図 8号土坑実測図 (1/40)

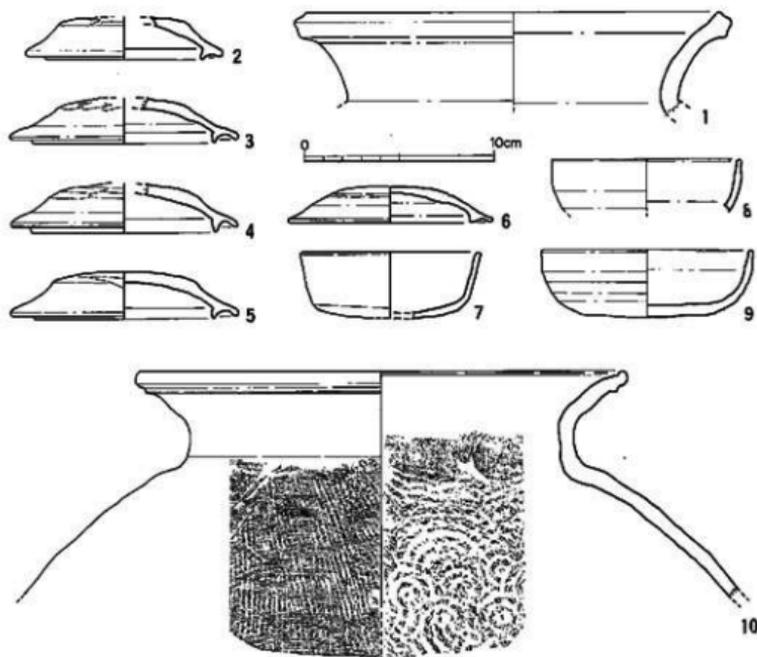
9号土坑 (第139図)

4号火葬墓と5号火葬墓との中間に位置する。平面形は不整形を呈し、長軸1.26m、短軸0.9m、深さ0.5mを測る。底面にはピットが2個ある。埋土は全体的に砂っぽく、雨水により一度に埋没したような印象を受ける。遺物の出土はなく、当土坑の性格・時期ともに不詳。

(小田)

E地区包含層出土土器 (図版88-1, 第140図)

1-9は、尾根南西部の緩斜面にある2-4号住居跡上面の落ち込みから出土した資料で、10は、7号墳の前方6m、8号墳の周溝外3mの位置から出土した資料。



第140図 E地区包含層出土土器実測図 (1/3)

須恵器甕(1・10) 1は、復原口径23.0cmの口縁部破片で、口唇部外面に低い三角凸帯が付けられている。10は、口径25.9cm、残存器高12.0cmの大きさ。短く直立気味な頸部から口縁部が外反し、つまみあげたように伸びて丸みをもつ口唇部は、外面の直下に段状の低い凸帯がめぐる。胴部外面に細かなタタキ目がみられ、横方面のカキ目調整が加わる。内面は同心円あて具痕がみられる。

須恵器杯蓋(2-6) 身受けのかえりを有し、天井部につまみをもたないもので、口縁部外径は10.4cm~12.0cm、器高1.9~2.6cmの大きさ。2-5は、かえり部が口縁部より下に出るもので、やや平坦な天井部をもつ。6は、かえり部と口縁部が同じ高さで、丸みをもつ天井部外面には2条沈線のヘラ記号がある。いずれも焼成は良好である。

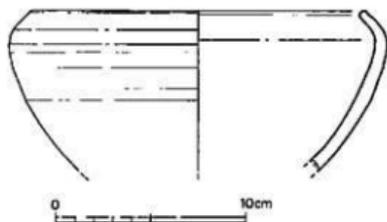
須恵器杯身(7-9) 高台をもたない杯身で、7・8に比して9は口径が大きい。7は、口径9.3cm、器高3.6cmの大きさで、口縁部は直線的に立ち上がる。焼成は良好で暗茶褐色を呈する。9は、口径11.2cm、器高3.7cmの大きさで口縁部は内弯ぎみに立ち上がる。焼成は、やや悪く茶灰色を呈している。

これらの土器は、7世紀前半頃のものであろう。

F地区包含層出土土器

(第141図)

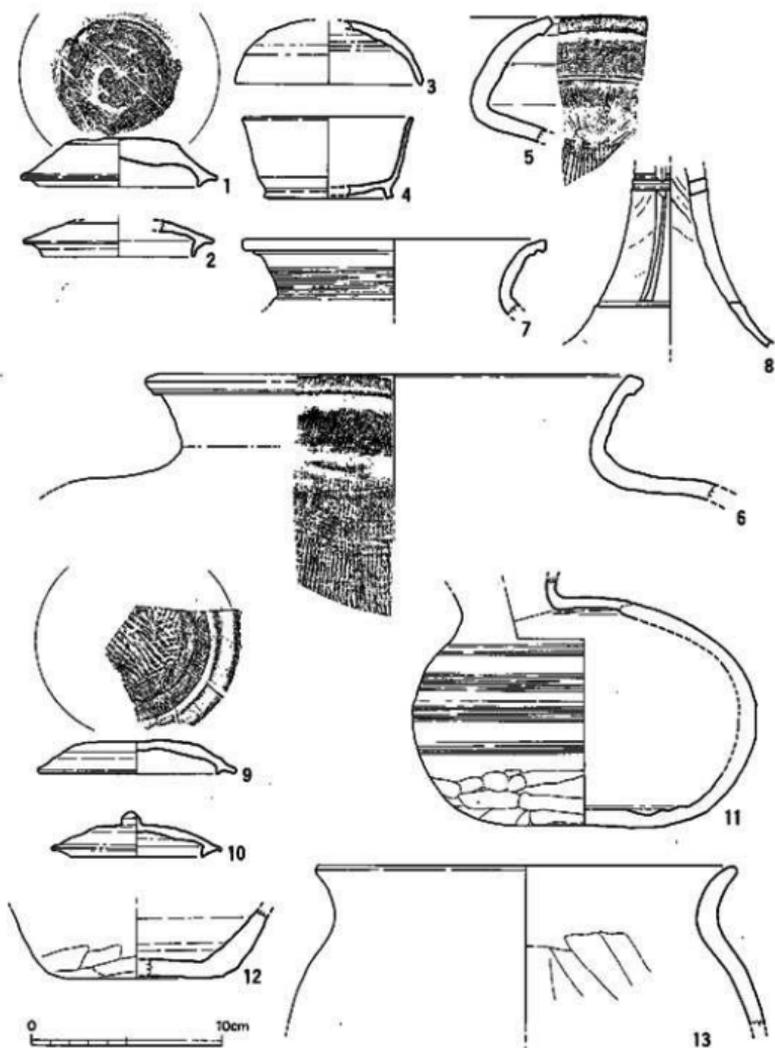
須恵器鉢 F地区尾根先端寄りの緩斜面で、4号墳の南西約10mの位置にある、尾根道状の溝部分から出土した。鉄鉢形の土器で、口縁部は内弯し、口唇部は丸みをもっておさまる。復原口径17.9cm、胴最大径20.0cm、残存器高8.5cmの大きさ。外面の体部上半はヘラケズリ、それ以外の部分はヨコナデ調整されている。胎土は砂粒をわずかに含むが精良で、焼成は堅緻。暗灰色を呈する。



第141図 F地区包含層出土土器実測図(1/3)

周辺採集土器(図版88-1, 第142図)

1-8は、E地区先端部のブドウ畑および蓮池で採集した資料で、このうち7は、D地区側の斜面に続く蓮池の中で採集した。9-13は、F地区先端部の蓮池で採集した資料である。なお、このなかには、中村勝氏の採集資料で氏から寄託されたものを含む。



第142图 周边采集土器实测图(1/3)

須恵器杯蓋（1-3・9・10）1・2・9・10は身受けのかえりを有するもので、3はかえりを有さない杯蓋。1は口径10.3cm、器高2.6cm、かえり部径8.4cm。かえり部は口縁部より下に出る。天井部外面はヘラ切り離しのあとナデ調整されており、×字形のヘラ記号が付される。2は、復原口径10.0cm、かえり部径7.9cm。天井部を欠くが、かえり部は口縁端部より下に長めに出る。3は、口径9.9cm、器高3.4cmの大きさ。天井部外面はヘラケズリ調整されている。9は、復原口径10.5cm、器高1.8cm、かえり部径8.3cm。扁平な体部で、平坦な天井部外面にはタタキ目のような庄痕がみられる。10は、小さな宝珠形つまみが付く杯蓋で、口径9.0cm、器高2.4cm、かえり部径7.0cmの完形品。かえり部が肉厚で、身受けの部分が外側に寄る。

須恵器杯身（4）高台を有す杯身で、復原口径9.0cm、器高4.3cm、高台外径6.8cmの大きさ。平坦な底部から口縁部は直立気味に立ち上がり、口縁端部がわずかに外反する。焼成堅緻で灰色を呈する。

須恵器甕（5-7）いずれも口頸部の破片資料で、5は口径を判断しえない。5は、平行タタキ目のみられる体部から、頸部がく字形に屈折して、口縁部が外反する。口縁端部は面取りされ、直下の外面に段状の凸帯が巡る。また、口縁部の中程に巡る一条のヘラ沈線との間には波状文が充填されている。内面はヨコナデ調整されており、残る体部ではあて具痕は消されている。6は、復原口径26.2cmの大きさ。肩の張る器形の甕であろう。肥厚する口唇部上面は平坦にされて、外面の直ぐ下につまみ出したような凸帯が巡る。体部外面は平行タタキ目とこれに直交するカキ目がみられる。体部内面は同心円あて具痕が残る。また頸部外面は平行タタキ目のあとヨコナデ調整が加わっている。焼成は堅緻で淡灰色を呈する。7は、復原口径16.0cmの大きさ。口縁部外面に2条の三角凸帯が巡る。頸部にはカキ目調整がみられる。8は、高杯の柱状部破片だが、3ヶ所に2段の透かしが切込まれ、上段と下段透かしの間に2条と、下段の透かしの下に1条の沈線が巡る。柱状部内面にはシボリ痕がみられる。堅緻な焼成で、灰色を呈する。

須恵器平瓶（11・12）11は口縁部を欠くが、残存器高13.2cm、体部の高さ12.3cm、胴最大径18.1cmの大きさ。胴部外面はカキ目調整と同転ナデ調整が施され、底部外面は手持ちヘラケズリされている。焼成は堅緻で淡い灰色を呈する。12は、平瓶の底部破片であろう。底部外面は手持ちヘラケズリ、外外面はナデ調整されている。

土師器甕（13）復原口径22.2cmの大きさ。口縁部は、緩やかに外反するが、さほど肥厚しない。胴部外面はナデ調整、内面はヘラケズリされている。焼成は良好で赤褐色を呈する。

これらの土器では、3・5などに6世紀後半～末頃の様相をみることができるが、大半は7世紀に下降するものであろう。

（小池）

V おわりに

1. 生活遺構について

個別の説明で不明な点及び言及出来なかった所を補ってみたい。大概には竪穴住居に関してと陥し穴状遺構について述べることにするが、周辺採集遺物にも若干触れてみた。

(1) 竪穴住居について

本遺跡では建て替え住居を含めて8棟検出したが、住居の営まれた時期は中期初頭より中期前葉の古いところである。該当する時期の竪穴住居は画一的な形態を有しているとは言い難い一面を有している。また竪穴部に関しても平面形態が方形プランを呈すると推定されるのが主であるが、7号住居のみが唯一円形プランを呈すると推定される。この外にも柱穴配置や、竪穴住居の立地条件及び竪穴住居の構造等に問題点を残している。これら問題点を論及する前に若干時期を遡る竪穴住居について考えてみる。

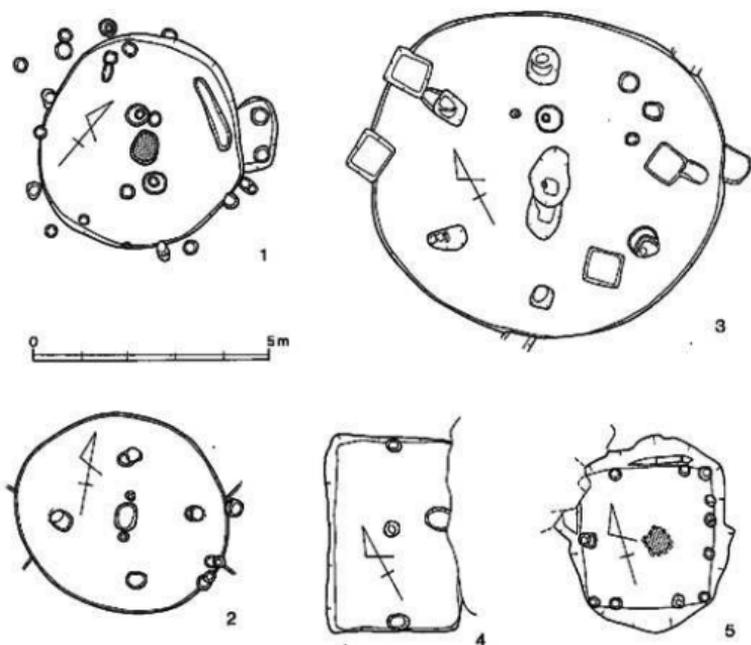
(i) 弥生前期の竪穴住居について

この時期の竪穴住居は資料不足であるが、近年報告例も増加しつつあり、第143図を代表例として図示したものである。

1は合田遺跡3号住居跡(註1)で、所謂松菊単型住居と考えられる例であり、時期は板付I—II(古)期に比定されている。主柱穴は2本で、壁周辺に10数本の支柱穴を配置している。炉址は中央部に位置する。同様のタイプは今川遺跡3号住居跡(註2)等が挙げられる。

2は有田・小田部遺跡8号住居跡(註3)である。1の発展したタイプと推定される。中央土壌を挟んで2本の棟支え柱が在し、土壌を中心とする円周上に4本の柱穴が菱形を呈して配置されている。出土遺物が僅かなため正確な時期は比定されていないが、前期の古い所に位置づけられている。類例として下稗田遺跡(註4)が挙げられる。同遺跡では前期末頃に同タイプが在するが、時期を同じくして3タイプや2本の棟支え柱のみの住居も確認されている。

3は三沢栗原遺跡8号住居跡(註5)である。主柱穴は6本で構成され、中央土壌を中心とする円周上に規則正しく配置されている。炉址は検出されていない。時期は前期後葉—末に比定されている。後出する中期の典型的な円形住居とは棟支え柱を有しない点など若干の差異を有するけれども、その祖形として位置づけられよう。類例としては三雲遺跡(註6)、若干時期が下り中期初頭に比定される牟田々遺跡(註7)が挙げられる。



第143図 弥生前期における竪穴住居形態 (1/120)

以上の3タイプが前期における円形住居の変遷として把握されよう。この3タイプと後述する方形プランの竪穴住居が混在し、朝鮮系無文土器を多数出土した横隈銅倉遺跡(註8)について若干触れることにする。3タイプは明確なもので2棟在し、時期は前期後半～末である。該当する時期に方形住居が数棟在していたと推定される。なお3タイプを切り、前期末～中期初頭頃の2と3が融合したと考えられる略典型的な円形住居も検出されている。以上より同遺跡では竪穴住居の形態上の変遷が顕著に現れている。

4と5は惣利東遺跡Ⅲ区1・2号住居跡(註9)である。両者共に平面形態は方形を呈する。柱穴の配置は4が短辺中央に3個が直線上に並び、5は周壁に沿って12個(1個欠落)を配している。5の中央には炉址が存在する。時期を明確に示す遺物が出土していないが略前期～中期初頭に比定されている。なお同遺跡には四隅に柱穴を配する住居跡も検出されており、5のタ

イブの変形とも考えられる。時期は前期末に比定できる。5の類例としては野黒坂遺跡46号住居跡(註10)が挙げられ、時期は前期後半に比定される。このタイプで前期後半を遡る例は報告されていないが、若干時期が遡る可能性(註11)も秘め検討していきたい。

以上、前期における竪穴住居の形態上の相違を大雑把にとりまとめた。ここで若干まとめると、1と2の円形タイプは祖形を松菊里遺跡(註12)に求められる。3は2と方形タイプの融和と解されなくもないが、地域や細部にわたる検討が必要であり今後の課題としたい。現段階では前期後半頃に小郡市周辺まで到達しているが、大陸文化の影響を受けている横隈築倉遺跡は特に留意しなければなるまい。

一方の方形タイプ4と5は縄文晩期の石碕曲り田遺跡(註13)との関連も考えねばなるまいが、時期的に間断するので今後の資料増加が待たれる。このタイプは現段階では野黒坂遺跡46号住居が最も古く前期後半であるが、この種の祖形や時期及び所有する文化等の検討もなされなければなるまい。

(8) 当遺跡の竪穴住居について

甘木市周辺では中期初頭～前葉までが方形プランの竪穴住居が主流をなす。下原遺跡(註14)・小田集落遺跡(註15)と本遺跡の三ヶ所で確認されている。以下当遺跡の検討に入る。

当遺跡では1～6号住居跡(1号住居は、建て替えられている)が方形プランを呈し、7号住居跡が円形プランを呈すると推定される。1～4号住居の平面形態は5を祖形に求められよう。その内で最も残存状態良好な4号住居は壁際の柱穴配置が5と略同じ形態をなすと考えられる。このことと炉址の位置より推定すると壁際の支柱穴は11～12本が壁に沿って在したであろう。これら支柱穴の内側に在する4本の柱穴は棟支え柱を構成すると考えられ、5の発展したタイプとなるのではなからうか。この4号住居よりも先行するであろう1号住居は棟支え柱が在しないことより5と全く同タイプと考えられる。1号と4号住居の僅かな時期差で住居形態が変化するのには当遺跡の地理的条件に起因すると思われる。

当遺跡の住居は前述した如く急斜面の尾根中腹に営まれている。調査時にもやや激しい降雨で遺構内に多量の土砂が流入した。これより推し測ると、当遺跡の住居には充分な流入土・降雨対策が施されていたと考えられる。検出されてはいないが、周堤・周溝が在しないと降雨時に生活することも不可能と思われる。このことは支柱穴が竪穴部壁際に位置することとも合致し得る。竪穴部壁際でも最低人の背丈は必要(もし人の背丈よりも低い場合は住居内の居住空間が狭くなり、竪穴式住居での居住空間の拡大化が発展するとの考えと逆行する)であり、上方より吹き降す垂木は支柱で支え、周堤まで伸展する竪穴式住居が考えられる。これは明らかに居住空間の拡大化に連がり、また強固な主柱が必要とならう。1号住居より4号住居への変遷も上記の理由で納得出来よう。

周堤(周堤が在しない場合は周溝上まで上層が伸展していたであろう)と周溝及び出入口に

ついて若干考えてみたい。当遺跡の地形より判断して周堤・周溝は斜面高方を重要視して設けられ、これに付随して開口部が出入口に相当するであろう。必然的に出入口は南側に設置されるのが最善である。なお古墳の周溝と同様な形態とも想定され、円形もしくは馬蹄形の周堤・周溝が考えられる。

5・6号住居は大半以上を流出しているが、類例を求めるならば合の原遺跡1号住居跡(註16)が挙げられる。2棟は4のタイプと考えられ、殊に6号は略同タイプの可能性を有す。これら2棟の竪穴部は4号住居と比較すると約半分程であるが、柱穴が竪穴部外にも在ること及び前述した上屋の構造より同様と言えないまでも相当な居住空間が想定されよう。なお6号住居で確認した壁体は周堤及び周溝で防止出来なかつた流入土・雨水を防ぐ二次的防弊策であるのか、大竹遺跡(註17)で検出された腰壁用の壁体であるのかを考えられる。

7号住居は殆どが流出、攪乱を受けているが、当地方でも古い時期の竪穴部が円形プランを呈する住居と考えられる。3のタイプなどを祖形とするのかは判断し難い。

以上、当遺跡の問題点をまとめてみた。

(ii) まとめ

前期の住居形態の変遷を経て小郡市周辺では、井上北内原遺跡(註18)等に中期初頭期で完成されつつある円形住居が認められる。より内陸部にあたる当遺跡では土着性の色調を色濃く残す4と5のタイプを祖形とする住居をもって集落を構成している。このことは甕棺・木棺墓等の墓制にも顕著に現れている。しかし4号住居の如く自発的?に発展した住居が在することも見逃せない。

5・6号住居は竪穴部の規模が小さいけれども、前期の系譜を受け継ぐ1戸の竪穴式住居と認定せねばなるまい。柱配置や上屋構造等については今後の課題となろう。

最後に当集落は中期初頭に営み始められたが、同時期は所謂集落の分村期に当たり、斯る立地条件の悪い場所に築造した時代背景や往時の人々の苦心が偲ばれる。また、図示した竪穴住居の形態上の変化や分布状況等を今後も注意深く観察していかなければなるまい。

(2) 周辺採集遺物について

採集遺物で注目したいのは蓮池周辺である。西側はE及びF地区の尾根が伸展していたと考えられ、E・F地区の集落が伸びていた事を窺わせる。E地区先端部には中期初頭の土器が大半以上を占めるが、一部には中期前葉の古い時期に下る土器も含まれる。若干の住居が在していたと推定されるが、この地域は墓域とも重なり合うと考えられる。

F地区先端部には中期初頭の土器を採集したが一部に初頭期でも古相の土器も含まれている。これらの土器より若干の住居が在すると推し測れるが、E地区よりも僅かに古期の遺構が在っ

たであろう。

蓮池東側には北端より中程にかけて多量の土器を採集した。時期は中期初頭が主であり、前期末と初頭期でも新相の土器も含まれる。

これら採集土器とE・F地区の住居群より推測すると、中期初頭の古相期に集落がE・F地区と蓮池東側で初現する。これら三地点で2棟以上(5・6号住居は共存した可能性は薄いと思われる)の住居が建て替え及び遷地して営まれ続けて、中期前葉の古相期に当集落は終焉する。

(3) 陥し穴状遺構について

県内における陥し穴遺構は小田和利氏が小郡正尻遺跡(註19)で資料作成している。その後塔ノ上遺跡(註20)で小田氏が規定するIタイプとIIタイプに類似するが小穴を有しない陥し穴状遺構が計7基検出されている。

(i) 陥し穴状遺構の配置について

県内の主な遺跡での配置について検討する。

下原遺跡(註21)では、長軸が直交し略直線上に3～10m間隔を有し、調査区内を略南北に2列平行して検出している。域内に小穴を有しないタイプを抽出してみると、9・12・15と16号土壌の6基が3～5m間隔で若干蛇行しつつも略同長軸方位を有して並列をなくしている。このことより同遺跡では5～6基を1単位として4グループ以上が在したと推定される。

同様な例として立野遺跡(註22)が挙げられる。1～5号土壌が8～11m間隔で、長軸方位と直交する直線上に並ぶ。9～14号土壌は若干蛇行しつつも同様に在す。同遺跡C地区(註23)でも同様であり、立野遺跡では5～6基が1単位をなすと言えるのであろう。

前出の塔ノ上遺跡でも調査範囲を考慮するならば、略10m間隔を有して長軸方位と直交する直線上に数基並んでいると推定される。3単位程が考えられそうである。

これらの様に県内においては5～6基を1単位とし、長軸方位と直交した略直線上に配置された陥し穴が考慮されるであろう。

(ii) 域内の小穴について

4号土壌で確認された小穴内の杭状痕について考えてみる。この種の痕跡は関東以北では多く認められ、従来の杭だけではなく更に追加した杭を確認した事例(註24)も報告されている。当遺跡においては、他に1～3号土壌で確認されているが、4号土壌では小穴内に4本もの杭状痕が在した。これはより強力な殺傷力を必要としたからであろうか。これらより小穴は杭を埋め固定するためのものと断定される。しかし3号土壌においては小穴外にも杭状痕が確認されているが、これは追加するために打ち込まれた可能性が強いであろう。

当遺跡では小穴内の杭状痕のみ確認したに止まった。最近の研究(註25)によるとこの埋設

されていたものは「棒状のもの」ではなく「逆茂木」であると論じられているが、これを追及する上では現在の調査法だけでなく、縦スライス調査法も必要であると感じられた。

(iii) 当遺跡の陥し穴遺構の配置について

F地区に隣接するS地区(註26)で長軸方位を略北にする陥し穴遺構が検出されている。この遺構に最も近い6号土壌でさえ約80m程隔っている。今回報告分と直接関連するとは思えないが、この種の遺構が広範囲に分布していると言えるであろう。

F地区の5基のうち2-5号は長軸方位が等高線に沿って在す。県内における他の遺跡での遺構配置を考慮するならば、上記の5基が1単位を構成するのではなく、3号と4号及び5号と6号が同じグループに属すと考えるべきであろう。また流出・削平等も考慮するならば、数基で1単位を構成したと推定される。

E地区の1号は単独で在するが、上記の理由等で他が喪失したものであろう。なお1号の壁面に認められた掘り込みは陥し穴の上端に陰蔽物を支えるための受け部をなしていたと考えられる。

(4) おわり

(1)~(3)を述べてきたが資料不足や認識不足のため独断した箇所も在するが、何かの機会で補足することにした。

最後に、本文執筆中に(1)で不可欠な資料が在することが判明したので追加する。横張塚遺跡1号住居(註27)である。平面形態は略円形を呈し、中央土壌を挟み2個の柱穴が在しその外側に4本の柱穴が方形に配置されている。本文で言うところの2と3タイプを折衷した形態を有する。時期も前期後半に比定されており、2から3へと移行する過渡期のタイプとも考えられる。

(武田光正)

註1 赤村教育委員会 1985 合田遺跡 赤村文化財調査報告書 第1集

註2 津屋崎町教育委員会 1981 今川遺跡 津屋崎町文化財調査報告書 第4集

註3 福岡市教育委員会 1984 有田・小田部第5集 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第110集

註4 下稗田遺跡調査指導員会 1985 下稗田遺跡

註5 小郡市教育委員会 1983 三沢栗原遺跡Ⅰ・Ⅱ 小郡市文化財調査報告書 第15集

註6 福岡県教育委員会 1980 三雲遺跡Ⅰ 福岡県文化財調査報告書 第58集 同書において馬場弘徳氏が前期段階より中期中葉にかけて壑穴住居の変遷を詳細に検討されている。

註7 小郡市教育委員会 1977 牟田々遺跡

註8 小郡市教育委員会 1985 横張鍋倉遺跡 小郡市文化財調査報告書 第26集

註9 春日市教育委員会 1983 春日地区遺跡群Ⅱ 春日市文化財調査報告書 第14集

註10 福岡県教育委員会 1970 野黒坂遺跡 福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第1集

- 註11 福岡県教育委員会が1986～1987年にかけて調査した朝倉郡杷木町に所在する「畑田遺跡」において前期中半頃と推定される住居跡が検出されているが、現在整理中であり断定する迄には至っていない。
- 註12 大韓民国国立中央博物館 1979 松湖里Ⅰ 国立博物館古蹟調査報告 第11冊
- 註13 福岡県教育委員会 1983 石崎曲り田遺跡Ⅰ 今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第8集
- 註14 福岡県教育委員会 1983 下原遺跡 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-2-
- 註15 甘木市教育委員会 1974 小田集落遺跡 甘木市文化財調査報告 第2集
- 註16 福岡県教育委員会 1986 合の原遺跡 筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第1集
- 註17 三輪町教育委員会 1985 大竹遺跡 三輪町文化財調査報告書 第4集
- 註18 小郡市教育委員会 1984 井上北内原遺跡 小郡市文化財調査報告書 第20集
- 註19 福岡県教育委員会 1986 小郡正尻遺跡 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-7-
- 註20 福岡県教育委員会 1987 塔ノ上遺跡 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-9-
- 註21 註14と同じ
- 註22 福岡県教育委員会 1984 立野遺跡(2) 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-5-
- 註23 福岡県教育委員会 1986 立野遺跡C地区 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-8-
- 註24 菊地実 1987 縄文時代の隆し穴調査法と派生する諸問題 研究紀要-4-財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 註25 註24と同じ
- 註26 福岡県教育委員会 1984 柿原古墳群Ⅰ 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-4-
- 註27 小郡市教育委員会 1985 横隈狐塚遺跡Ⅱ 小郡市文化財調査報告書 第27集

2. 弥生時代の墓制について

(1) はじめに

柿原遺跡では、弥生時代中期初頭～前半を主体とする墳墓（44基）を検出した。その内訳は甕棺墓25基、木棺墓14基、石蓋土塚墓4基、石棺墓1基である。丘陵南側は農道にカットされているため墓域の全容はつかめないが、総数は100基に及ぶものかと思われる。木棺墓は二列に埋葬され、その間に甕棺墓が存在する。甕棺墓は接口式の小児棺が大半で、成人棺は少ない。これら、柿原遺跡の弥生時代墳墓の問題について検討したい。

(2) 墳墓の時期

柿原遺跡の甕棺は、その器形から5類に分けることが可能である。以下、各類ごとに説明を加える。

1類：1号甕棺墓上甕の口縁部は、「く」字状に外弯する。胴部の張りは弱く、口径が胴径を凌いでいる。底部は厚い平底をなす。器形的には、弥生前期末の形状を呈しながらも、口唇部にはキザミがみられず、新しい様相が窺える。また、口縁部が肥厚する逆L字状を呈する甕とセットをなすことから、中期初頭でも最も古い所に置けよう。

2類：8号甕棺墓上甕は器高35cmを測り、口縁部は肥厚する逆L字状を呈する。底部は3類甕ほど締まらず、外底面が窪む程度である。また、凸帯や沈線等の文様は施していない。10・14・17号甕棺墓下甕も同様な形状を呈する。

3類：9号甕棺墓上甕は器高40cm前後を測り、口縁部は内側に低く傾斜する逆L字状を呈する。胴部はやや張り、よく締まった高い上底の底部に移行する。また、頭部のやや下位に断面三角形凸帯を1条貼付する。以上の諸点は、城ノ越式土器に通用のものであり、中期初頭に位置付けられる。同様の形状を呈するものに5号甕棺墓下甕が挙げられる。また、凸帯ではなく沈線を施している9号甕棺墓下甕、凸帯は貼付していない13号甕棺墓上下甕も同時期に置けよう。

4類：12号甕棺墓下甕は、口縁部の断面が三角形を呈する。胴部はやや張りをみせ、高い上底の底部に移行する。頭部のやや下位に断面三角形凸帯を貼付する。所謂「亀ノ甲」タイプの甕で、中期初頭に置ける。

5類：4号甕棺墓上下甕の口縁部は逆L字状を呈するが、胴部の張りは3類甕ほど顕著ではない。また、底部も3類甕ほど高い上底ではなく、それよりも後出するものと考えられ、中期前葉に置ける。同様の器形を呈するものに7号甕棺墓上甕・15号甕棺墓上下甕、やや大型の

20・22号甕棺墓上下甕が挙げられる。また、底部が薄く、締まりの悪い16号甕棺墓単甕は4号甕棺墓上下甕よりも後出するものと考えられる。

以上、器形から5類に分けたが、時間的には中期初頭から前半までで納まる。甕棺墓どうしの切合いは殆どなく、僅かに13号甕棺墓が18号甕棺墓を切っているが、同類の甕で時間的に大差はないものと思われる。

木棺墓の時期については、棺内からの出土遺物に乏しく時期決定に事欠くが、10号木棺墓は14・23号甕棺墓に切られることから、下限は弥生中期初頭に置く。また、B群においては木棺墓と甕棺墓が整然とした配列を呈することから、甕棺墓と相前後する時期に埋葬されたものと考えられる。

また、石蓋土壊墓も甕棺墓と並列して存することから、甕棺墓と大差ない時期の所産と考えられる。

(3) 墳墓の配列

丘陵の南側が農道によりカットされているため墳墓群の全容は判明しないが、ここで墳墓の配列について考えてみたい。

墳墓群は主軸を北西-南東方向にとり、丘陵に対して平行に配される1～3・12号甕棺墓と1・2号木棺墓を中心とするA群及び主軸を北東-南西方向にとり、丘陵に直交して配される木棺墓の一群とそれを繞う様に配される甕棺墓を中心としたB群から構成される。

A群は甕棺墓6基、木棺墓2基、石蓋土壊墓3基から成る。墳墓の殆どが北西-南東方向に主軸をとっているが、4号甕棺墓のみ主軸を異にする。1号石蓋土壊墓-2号木棺墓-2号石蓋土壊墓-12号甕棺墓は直線的に配される。また、1号木棺墓・2号石蓋土壊墓の間に切合う事無く2号甕棺墓が存在し得るのは、前以て目印となる外部施設を構築していたためかと思われる(註1)。A群の墳墓は、中期初頭を主体とする時期の所産で、3～5号甕棺墓は1・2・12号甕棺墓より若干後出する。

B群は甕棺墓17基、木棺墓12基、石蓋土壊墓1基、石棺墓1基から成る。墳墓の殆どが北東-南西方向に主軸をとっているが、5・16・19号甕棺墓は北-南方向に、21号甕棺墓は北西-南東方向に主軸をとる。10号木棺墓は中期初頭の14・23号甕棺墓に切られるものの、7号木棺墓と8号木棺墓の間に11・13・18号甕棺墓が、8・9号木棺墓と10・11号木棺墓との間に6・10号甕棺墓が列をなして存することから、木棺墓と甕棺墓は共存すると考えられる。ただ、13・14号木棺墓に切られる12号木棺墓は、前期末に上る可能性がある。B群の墳墓は、A群同様中期初頭を主体とする時期の所産であるが、中期前半まで墳墓が造営される。また、丘陵の東側にゆくに從って新しくなっていく傾向がある。

丘陵の南側がカットされているため詳細は不明であるが、現状で木棺墓を二列に埋葬した可能性が高く、木棺墓間に小児用甕棺墓が軸を同じくして存在する。

二列埋葬形態を呈する遺跡には、夜須町吹田遺跡（註2）・筑紫野市永岡遺跡（註3）・春日市門田遺跡（註4）・甘木市栗山遺跡（註5）・行橋市前田山遺跡（註6）・佐賀市六本黒木遺跡（註7）等が挙げられる。

吹田遺跡では、昭和38年に28基の甕棺墓と1基の土壙墓が調査された。墳墓の配列は成人用甕棺墓（中期中頃）を東西方向に二列埋葬（北系列、南系列）していた。二列になった理由として、北系列と南系列との間に道路（墓道？）があり、その両側に埋葬したためであろうとしている。また、墓標らしきものが存在したことと小児棺が成人棺に接して埋葬されている点を指摘されている。

永岡遺跡では、甕棺墓53基、土壙墓4基が調査された。墳墓の配列は成人用甕棺墓（中期前半頃）を南北方向に二列埋葬し、東西両側の竅穴群とそれを連結する溝によって墓域を規定している。小児棺には規則性はみられないが、殆どの小児棺が成人棺と重複させて埋葬している。このことについて浜田氏は、「小児用甕棺はさきに埋葬された成人用棺と血縁的なつながりがあり、成人埋葬の規則性を無視し、子供は親の傍らに葬るという意識のもとに埋葬したものと考えられる」としている。

門田遺跡門田地区では、甕棺墓68基、木棺墓1基、石蓋土壙墓1基、土壙墓1基、石棺墓5基が調査され、59・65号甕棺墓からはゴホウラ製の貝輪が出土した。墳墓群は、東西方向に二列埋葬される成人用甕棺墓（中期前葉～中葉）を中心とする一群とその東側にあり二列埋葬を呈しない甕棺墓（中期後葉～後期）の一群、及び石棺墓・甕棺墓から成る一群で構成される。小児用甕棺墓の埋葬については、二列埋葬を呈する一群においては永岡遺跡同様の埋葬形態を成すが、二列埋葬を呈しない一群においては埋葬方向等不規則である。また、佐々木氏は列間を墓道と解釈されている。

六本黒木遺跡では、甕棺墓21基、石蓋土壙墓2基、石棺墓1基が調査された。墳墓群は、調査区の東端にあって南北方向に二列埋葬される成人用甕棺墓（中期前半）を中心とする一群と調査区の西にある一群（後期後半）から成る。

以上は、成人用甕棺墓を中心として二列埋葬形態を呈する遺跡であるが、甕棺墓以外の墳墓が二列埋葬形態を呈する遺跡に前田山遺跡が挙げられる。

前田山遺跡では、甕棺墓49基、土壙墓174基（木棺墓を含む）、石蓋土壙墓11基、土器蓋土壙墓1基、石棺墓11基が調査された。1-2地区の土壙墓（目張り用の粘土がみられるものは木蓋土壙墓と考えられる）は、丘陵頂部に北東-南西方向に配列されており、列間は余り空いていないが二列埋葬形態を呈するものと考えられる。

二列埋葬になった理由として、列間を道（墓道）とする考えがあるが、墓所において強い規

制の下に逐次墳墓を造営していったため、結果的に二列埋葬形態を呈するようになったと考えられ、集落における血縁の集団を中心とした共同墓地としての性格が色濃くみられる。また、中期前半～中頃までは二列埋葬形態を呈するが、後期になるとそれは崩壊する。門田遺跡門田地区、佐賀県神埼町四本黒木遺跡（註8）はその好例である。四本黒木遺跡では、前期後半から中期前半に埋葬された甕棺墓は、列埋葬形態をなしているが、中期中頃に埋葬された甕棺墓は成人棺2～3基と小児棺3～7基で小群が構成され、一家族墓と考えられている。また、列埋葬形態が崩壊した理由として、「集団の拡大と安定により行われた分家活動の結果」として

(4) おわりに

当遺跡の甕棺墓は、接口式の小児棺が主体を占め、人骨は遺存していなかったが、棺の規模から成人棺と考えられるのは11・19～23号甕棺墓の僅か6基に過ぎず、成人用大型甕棺はみられない。ただ、木棺墓と甕棺墓は二列埋葬を呈し、時期的に近接するものであるから木棺墓の一部を成人棺とみなすことは可能である。

中期初頭の成人用大型甕棺は、市域では栗山遺跡・久保島遺跡（註9）で散見する程度で、当地における中期初頭の墳墓の主流は未だ木棺墓・土槨墓・石壺土槨墓にあったものと考えられる。

（小田和利）

註1 甕棺墓・木棺墓に限らず穴を掘った場合、土砂が排出するのは当然のことである。甕棺墓・木棺墓・石（木）蓋土槨墓・石棺墓の場合は、遺体を埋葬するに足る空間を土器・石・木でもって確保する事にある。墓塚を掘って排出した土砂を埋めもどすと甕棺・石棺の体積分だけ土砂が余り、残余した土砂でもって土まんじゅう（墓標）が築かれた事は想像するに難くない。また、密集した墳墓群にあって墳墓どうしが切合わずに配列するのは、土まんじゅうという墓標的な外部施設が存在した筈にならう。

註2 福岡県教育委員会 1977 福岡南バイパス関係縄文文化財調査報告 第5集

註3 福岡県教育委員会 1978 山陽新幹線関係縄文文化財調査報告 第6集

註4 福岡県立朝倉高等学校史学部 1969 埋もれていた朝倉文化

註5 甘木市教育委員会 1982 栗山遺跡 甘木市文化財調査報告 第12集

註6 行橋市教育委員会 1987 前田山遺跡 行橋市文化財調査報告書 第19集

註7 佐賀県教育委員会 1980 九州横断自動車道関係縄文文化財調査報告書（1）

註8 神埼町教育委員会 1980 四本黒木遺跡 神埼町文化財調査報告書 第6集

註9 甘木市史編纂委員会 1982 甘木市史上巻

表5 弥生時代墳墓一覽表

〔木棺墓〕

項目 番号	墓 塚 (cm)			屍 床 (cm)			小口石間 の距離		石 材		長軸方位	小口石 の高差差	墓 塚 の型	棺 の タイプ	備 考
	長軸	短軸	深さ	長軸	短軸	深さ	北	南	側壁	標石					
1	220	71	63	162	30	15	190	○	○		N-35°-W	+1	I	A	5号土壌を切る。 14・23号燕棺墓に 切られる。 2号火葬墓、14号 燕棺墓に切られる。 12号を切り、14号 に切られる。 12・13号を切る。
2	108	69	22	71	25	18					N-24°-W		II		
3	154+*	65	30	109	30	14	129+*		○	○	N-59°-E		I	A	
4	175+*	110+*	49	148	38	27					N-39°-E		III		
5	168+*	91	33	98	33	23	118+*	○	○		N-38°30'-E	+21	I	B	
6	171	105	44	119	32	19	152	○	○		N-72°-E	+9	I	A	
7	179	100	69	167	43		167	○	○	○	N-56°-E	+3	II	A	
8	195	111	59	107	30	21	131	○	○		N-56°30'-E	+4	I	A	
9	117	71	20	86	29	16	108	○	○		N-57°30'-E	+3	I	A	
10	220	127	37	136	34	20	178	○	○	○?	N-61°-E	+15	I	A	
11	196	92+*	43	118	36	22	165			○?	N-56°-E		III	C?	
12	96+*	81+*	26	75+*	35						N-78°-W		III		
13	201	143	72	123	35	21	151	○	○		N-63°-E	+12	I	A	
14	197	96	41	136	33	15?	160	○	○		N-41°-E	+11	I	A	

※ 11号の小口石間の距離は粘土外側下面間を計測した。

※ 石材の項で1号は(東)→(北)、(西)→(南)に代した。

※ 小口石間の高差差は北(南)側小口石を基本とする。単位はcm。

〔石蓋土槨墓〕

(単位m) は現在値)

番号	墓 塚			下 部 墓 塚			主軸方位	蓋石	標高	備 考
	長軸	短軸	深さ	長軸	短軸	深さ				
1	0.85	0.60	0.05	0.55	0.30	0.20	N46° W	3枚	61.55m	13号墓棺墓と一部重複
2	1.25	0.20	0.20	0.85	0.20	0.30	N37° 20' W	6枚	61.4 m	
3	(0.85)	0.70	0.05	0.55	0.30	0.13	N44° 30' W	(2枚)	61.1 m	
4	(0.75)	0.80	0.10	0.55	0.30	0.15	N71° 10' E	(1枚)	65.6 m	

〔石棺墓〕

墓 塚			棺 内 法			主軸方位	蓋石	標高	備 考
長軸	短軸	深さ	長軸	短軸	深さ				
(1.40)	(0.85)	(0.60)	0.52	0.33	0.25	N51° E	1枚	63.00m	

〔甕棺墓〕

番号	形 式	上蓋+下蓋	棺内法	類別	主軸方位	埋没傾斜角	標高	群	備 考
1	接口式	蓋+蓋	0.64cm	小児棺	N34° W	+10°	60.81m	A 群	下蓋に穿孔あり。
2	◆	◆	* 0.5 cm	◆	N60° W		61.47m	◆	
3	◆	◆	* 0.75cm	◆	N43° W	* +16°	60.64m	◆	上蓋側に蓋石あり。 下蓋に穿孔あり。
4	◆	◆	0.78cm	◆	N48° E	-11°	60.18m	◆	
5	◆	◆	* 0.65cm	◆	N10° E	* -15°	63.71m	B 群	
6	◆	◆	◆	◆	N54° E		64.85m	◆	大破している。
7	◆	◆	* 0.8 cm	◆	N59° E	* - 8°	64.59m	◆	
8	◆	◆	* 0.55cm	◆	N67° E	* - 5°	64.62m	◆	側方に立石あり。
9	◆	◆	0.69cm	◆	N61° E	* 0°	64.43m	◆	
10	◆	蓋+蓋	* 0.6 cm	◆	N56° E	* - 1°	65.23m	◆	
11	◆	蓋+蓋	0.93cm	成人棺?	N63° E	- 6°	64.31m	◆	標石(2枚)あり。
12	◆	鉢+蓋	* 0.7 cm	小児棺	N46° W	* - 5°	60.73m	A 群	標石(2枚)あり。
13	◆	蓋+蓋	0.67cm	◆	N54° E	+14°	64.12m	B 群	標石あり。
14	◆	鉢+蓋	0.63cm	◆	N60° E	- 9°	65.33m	◆	標石(1枚)あり。
15	◆	蓋+蓋	0.68cm	◆	N35° W	- 2°	60.13m	A 群	
16	単 棺	蓋	0.39cm	◆	N3° W	+10°	64.50m	B 群	蓋石(3枚)あり。
17	接口式	蓋+蓋	0.59cm	◆	N52° E	+19°	65.22m	◆	
18	◆	蓋+鉢	0.66cm	◆	N36° E	-15°	63.98m	◆	標石(2枚)あり。
19	◆	蓋+蓋	◆	成人棺	N13° E		65.62m	◆	大破している。
20	◆	◆	1.04cm	◆	N62° E	+ 1°	64.14m	◆	
21	単 棺	蓋	0.56cm	◆	N62° W	+ 3°	63.82m	◆	蓋石(2枚)あり。
22	接口式	蓋+蓋	0.94cm	◆	N53° E	- 4°	63.60m	◆	
23	単 棺	蓋	* 0.5 cm	成人棺?	N76° W		65.48m	◆	蓋石(2枚)あり。
24	接口式?	蓋+蓋?	◆	小児棺?	◆		66.40m	◆	大破している。
25	?	蓋+蓋	◆	◆?	N47° W		65.92m	◆	大破している。

(* は復原値)

3. 古墳について

柿原E・F地区では、横穴式石室古墳22基を調査したが、残存状況の悪い例が多く、平面プランのわかるものは斜面でも麓部に近い古墳のみ5基に過ぎず、特にF地区での残存状況が悪い。

柿原地区の横穴式石室の平面プランを中心とした分類・企画性については、既に平嶋文博氏によって見通しが立てられている(註1)ので、ここでは、とりあえずこれに沿って各古墳を見てみることにしよう。

各古墳の分類と年代

柿原E・F地区では、平嶋氏の分類によるI類～III類の石室は全く無く、IV類の石室に平面形が似るものの規模は小さい。従ってV類～VIII類に分類されることになろうが、極めて小さな石室もある。

1・3号墳は、谷奥部の斜面に占地しているが、VI B類に含めうるものである。ただ斜面の上位にある1号墳の石室は小さめで横長タイプのもので、下位にある3号墳はむしろ複室構造のVA類をすづまりにさせたようなプランである。1号墳に遺物の出土は無いが、3号墳玄室内出土の須恵器から7世紀前半の年代が与えられる。

2号墳・21号墳は方形プランである。2号墳は基底部に板石が立ち並ぶものでVI類に含まれるが、VA類に分類される横長方形の石室に比して縦長でありVIII類であろうか。21号墳はVA類であるが、奥壁にやや大きめの鏡石が立つ。どちらも遺物の出土が無いので時期の特定をしないが、VA類に分類されているI地区20号墳は7世紀前葉にあてられている。

4～7・18～20号墳は、最大幅が奥壁側に寄る扇張りの玄室をもち、VB類になろうが、19・20号墳以外は前室が明確に造られている。4号墳玄室内出土の土器は7世紀前葉のものであり、5号墳周溝出土土器は7世紀前葉から7世紀後半のもの、20号墳墓道出土の土器は7世紀後半に属す。20号墳の石室狭道には前室のなごりともみれる張出しを右側壁にもっている。従って7世紀の後半頃に前室の省略化があったものと考えられる。

前室の省略化は、15・16号墳にもみられるが、15・16号墳は、玄室プランが円形に近く、この点からみればVA類に近いと言える。16号墳の狭道部から出土した須恵器からは7世紀末頃の年代が与えられるが、墓道出土の須恵器には7世紀中頃ののものもある。また、15号墳の墓道から出土した須恵器では7世紀初頭から後半までの幅をもっている。従ってVA類からの前室の省略化は、VB類からのそれよりも遅るのかも知れない。

9・10号墳は、玄室が円形ないし隅丸方形に近いもので明確な前室をもち、VA類に分類される。VB類に分類した4号墳もこれにやや近いと替えよう。9号墳の前室からは7世紀前半の須恵器が出土しており、10号墳の墓道部分からは7世紀前半から末頃の須恵器が出土している。一方、4号墳・10号墳は前庭部に列石を有しているが、このような例は、H地区2号墳にもあり、7世紀中頃とされている。4号墳・10号墳は、奥壁に1枚の鏡石をもつなど、やや構造的にH地区2号墳よりも古いものとみれるが、4号墳の例からして7世紀前葉の時期が考えられる。

8・14・22号墳は、極小型の石室で終末期石室と言えるが、14号墳の墓道出土の須恵器は7世紀末頃のもので、上面出土の須恵器は8世紀に入る。11号墳は、VB類に分類されようが、小型の部類にも入りうるような規模の石室である。7世紀後半以降の時期であろう。

石室の企画性・使用尺の推定

柿原G～I地区の古墳及び柿原周辺古墳での石室の企画性について、平嶋氏は、

①羽子板状を呈する石室や、③方形・横長方形を呈する石室の石室各部の比率による企画には、ほぼ共通性が認められる。ただ、②の胴張り石室ではいくらかみられる程度である。次に、使用尺の推定作業からは、①の石室に一定の尺を主に用いて構築されたことが判明した。一方、③の石室は類例が少ない点が問題ではあるが、各個に使用尺の食い違いが認められる。

として、①羽子板状を呈する石室では、1尺約25cmの尺度が使用され、約23cm・26cmを1尺とする尺度も5世紀代～6世紀中葉に併存使用されていたこと；②の胴張り石室では、約23cm・26cmを1尺とする尺度が6世紀末に、そのあとは1尺30cmによる尺度が用いられるが、7世紀初頭には約27cmの尺もあること。7世紀代の③方形・横長方形を呈する石室では、方形を呈する石室は約30cmの尺が、横長方形を呈する石室に約24・25・30cmの尺が用いられていることを指摘している。

今回の、柿原E・F地区古墳の石室でも平面図をもとにして同様の操作で、企画性・使用尺の推定を試みてみた。その結果については概ね表5に示すとおりである。

柿原E・F地区では、終末期の小石室を除いて、羽子板状を呈する石室はない。1号墳は横長の胴張り石室、2号墳・21号墳は方形を呈する石室、3号墳～7号墳・9号墳～13号墳・15号墳～20号墳は胴張り石室である。各古墳共に石室各部の計画値を求め、かつ1/20縮尺の方眼を透視して適合する尺を求めたが、この際には奥壁・袖石の位置と玄室最大幅・玄門幅に特に方眼が重なるように注意した。ただし、13号墳・17号墳・18号墳・22号墳は残存状況が極めて悪いので省略した。

表7 石室各部計測値と各所の比率・鑑定尺度

1号墳	石室各部計測値と各所の比率・鑑定尺度											石室各部計測値と各所の比率・鑑定尺度							
	石室全長	玄室幅	玄室長	玄室幅	玄室長	玄室幅	玄室長	玄室幅	玄室長	玄室幅	玄室長	玄室幅	玄室長	玄室幅	玄室長	玄室幅	玄室長		
2	363	7	166-168	6													7:3		
3	462-470	7															24		
5	384	9	182	7	68-70	200											26 : 1:3		
6	345	15	222	10	190	208	67-68	3	122	56	61-70	3	70	3	22	2:10	3:3	3:4	1:2
9	492	17.5	227	10.5	228	10	54-58	3	140	4	60-70	5	54	20	22	2:10	2:1	2:1	3:5
9			288	16	225	6.3												20:17	
7			290	8	220	6.2													16:17
8	340	6	77	3	72	3	60	200											
9	413	18	266	9	284	8	67-68	3	140	6	64	200	70	200	22	2:3	2:1	2:2	3:3
10	413	12	226	10	200	9	70	3	120-125	3	104	6.5	68	3	22	2:10	20:9	10:9	2:1
11	210	8	140	6	104	6.5	50	3											2:1
12	290	11	180	120	162	7	50	3											2:1
13																			
14	145	6.5	110	3	100	7	33-40	1.5											3:7
15	416	18	222	9	262	9	66	3											2:1
16	370	16	160	7	150-160	7	68	3											2:1
17																			
18																			
19	382	14.5	182	8	160-166	8	72	3											2:1
20	310	12	160	7	156	6	50	2	68	3	60	200							2:1
21			212	7	170-178	6	72	200											2:1

残存状況は良くないが、方形・横長方形石室として2・21号墳がある。2号墳の玄室幅は24cmの7尺に相当する。21号墳は30cm尺で、玄室幅が7尺に近い数値、玄室長が6尺に近い数値、玄室幅は2尺強の数値であるが、25cm尺でもそれぞれ8・7・3尺にあてはめることが可能である。先の指摘での使用尺とは特に矛盾はない。

一方、胴張り石室の例では、3・6・7・12・20号墳に26cm尺があてはまり、4・5・9～11・15・16・19号墳に23cm尺があてはまる。しかし、27cm・30cm尺を単位にしてみると、うまくあてはまらない。先の指摘では、6世紀末には23cm・26cm尺が、それ以降には30cm尺が使用されるとされているが、確実に7世紀代になると考える9～11号墳などは23cm尺である。30cm尺は出現していなかったことになろう。21号墳の例も30cm尺ではなく25cm尺の可能性が高くなろう。すなわち、柿原E・F地区に古墳を築造した集団においては7世紀においても、6世紀代に用いられた尺が引継ぎ用いられていたと考えられる。終末期の小石室である8・14号墳でも23cm尺があてはまるので、この地区だけをみれば、石室築造に30cm尺の波及はなかったことになろう。

石室各所の比率をみれば、玄室幅と玄室長が1:3（ないしはそれに近い）の比率になるものが多くみられる。石室全長と玄室の長さでは2:1（ないしはそれに近い）の比率がみられる。玄室の幅と長さは1:1を中心に、尺にして1尺の差のあるものが多く、1・3・14号墳

のように2尺の差のあるものもある。ただし石室の遺存状況が悪いために、各所の比率が定形化したものを抽出するに至っていない。しかし、9号墳と10号墳の石室をみると、石室全長は同じで玄門幅も近似した数値で、玄室の幅・長さはそれぞれ1尺ずつの違いがある。また、他の石室をみても幅と長さが1尺違いの例は結構あるので、10尺を限度として臨機応変に設計されている可能性を考えておきたい。ただし、計測数値の取扱いをはじめ、尺の推定では誤差も結構あるので、数字の遊びという感をまぬがれない。石室構築の際の要とする部位に考えられるものとして奥壁鏡石・両袖石の深く据付けられていることがある。企画性の問題ではこれに留意する必要がある。調査時に余裕がなくこれについて十分に検討できなかったが、今後余裕ができればこれについても考えていきたい。

なお、5号墳・10号墳では、前庭部に列石があり、さらに墳丘を巡る列石をも有している。また、17号墳には墳裾を巡る列石がある。17号墳の例は、柿原G～I地区でいわれている内護列石とは、性格を異にするものであり外護列石と称すべきものであろう。前庭部列石はD・L地区に良好な例がある。

柿原遺跡群では、D地区・L地区でも古墳群を調査し、今後順次報告する予定である。古墳をめぐる諸問題は、これらの古墳を含めて考える必要がある。ここでは多くを触れないことにして、その機会に譲ることにしたい。

(小池史哲)

註1 平嶋文博 1986 横穴式石室の種類と変遷・石室の企画について 九州横断自動車道関係遺跡調査文化財調査報告6 所収

圖 版



柿原遺跡周辺航空写真（パシフィック航業撮影）



1



2

1 柿原遺跡E・F地区全景(東から)

2 柿原遺跡E・F地区全景(南から)

1

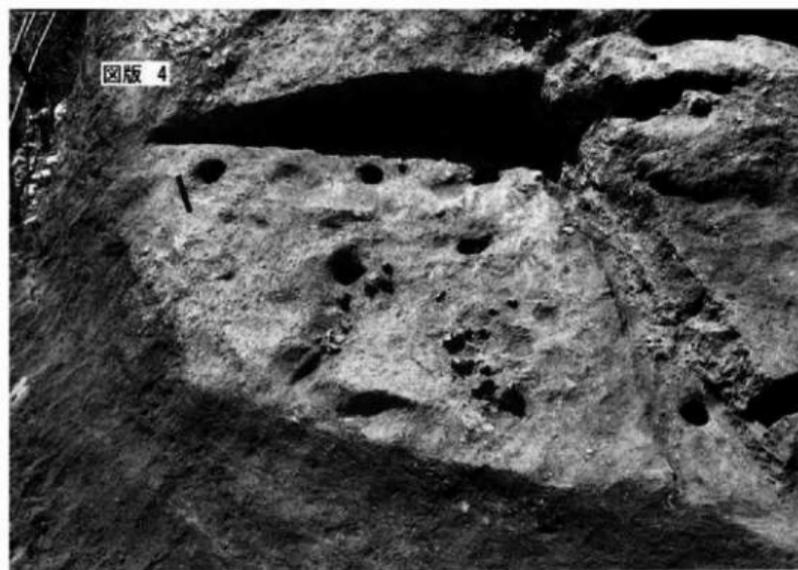


2

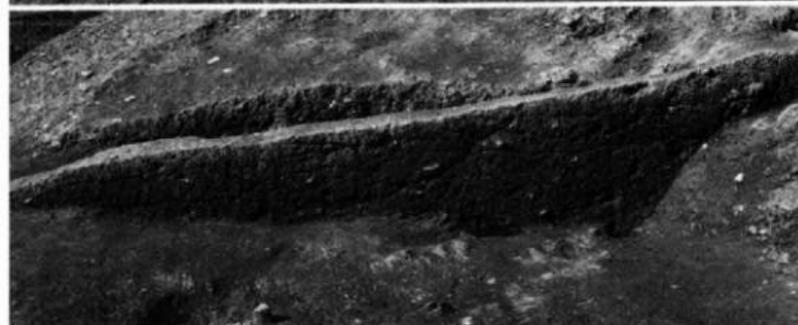


1 調査開始時のE地区 (F地区から)

2 調査開始時のF地区 (E地区から)



1



2



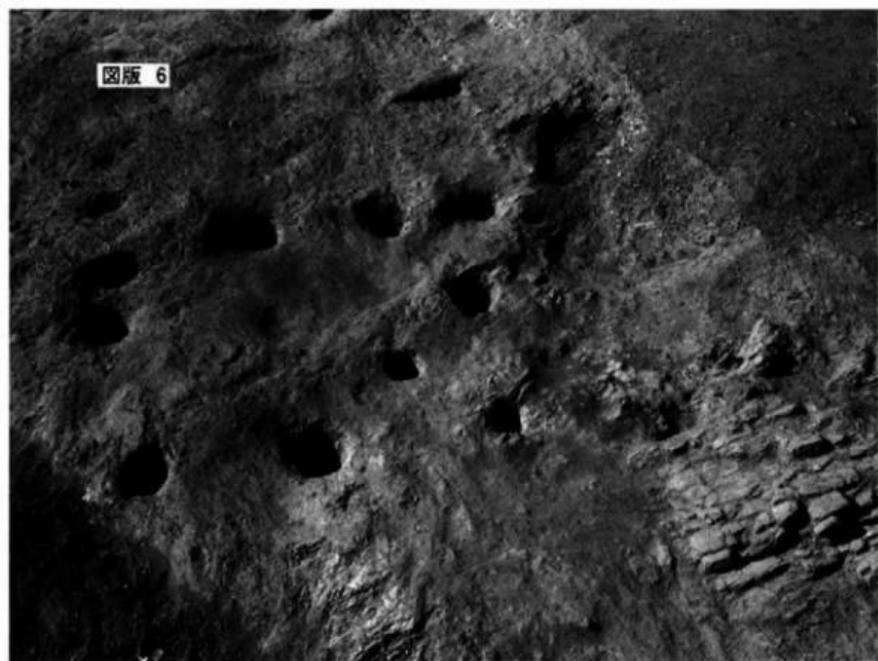
3

1 2 3
完掘後の1号住居跡（東から）
1号住居跡埋土堆積状況
1号住居跡（東から）



1 2~4号住居跡 (北西から)

2 2・3号住居跡 (南西から)



1



2

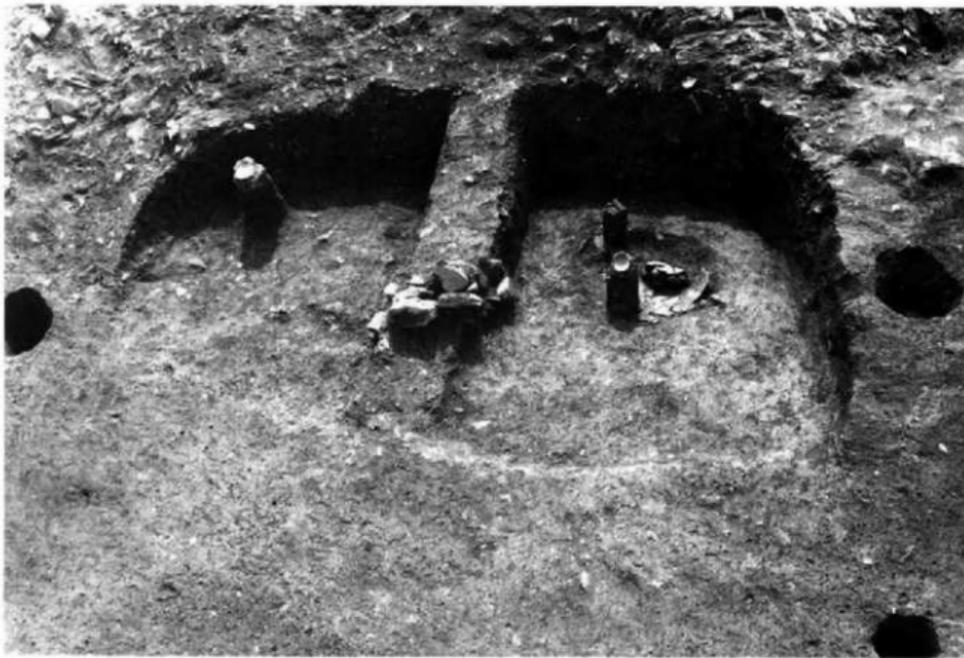
1 2号住居跡 (南東から)

2 4号住居跡 (南西から)

1



2

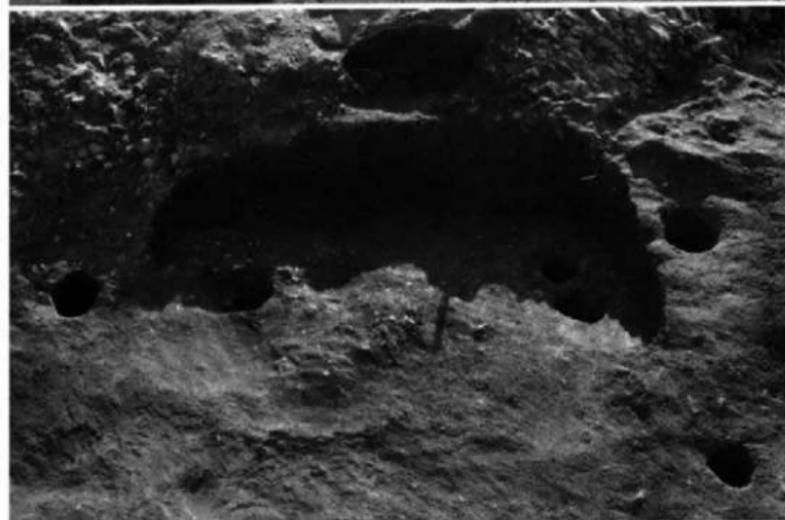


1 5号住居跡 (東から)

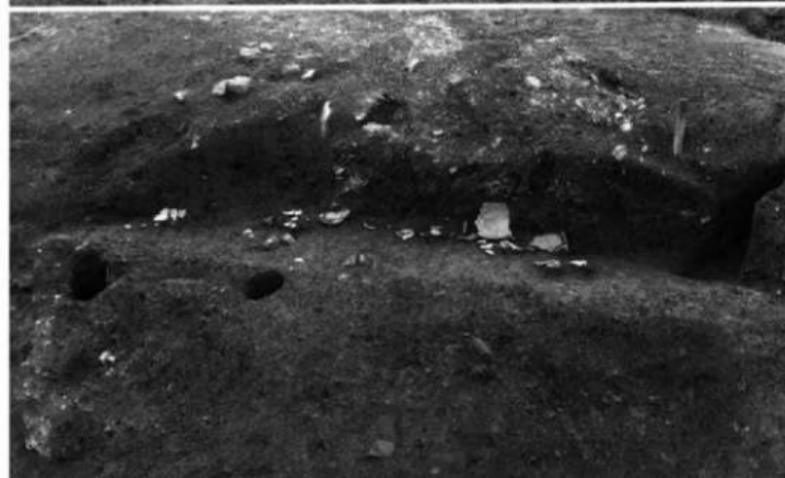
2 6号住居跡 (東から)



1

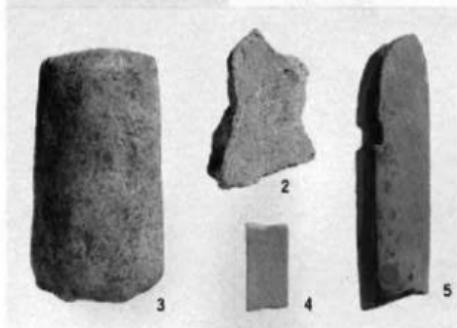
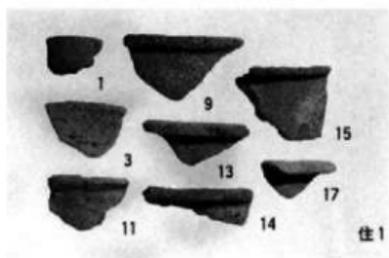


2



3

- 1 6号住居跡埋土
堆積状況
- 2 完掘後の6号住
居跡(東から)
- 3 7号住居跡
(東から)



1～7号住居跡出土遺物



- 1 2号土坑 (西から)
- 2 3号土坑 (東から)
- 3 3号土坑のビット



1



2

- 1 4号土坑（南西から）
- 2 4号土坑のピット
- 3 5号土坑（南西から）



3



1



- 1 7号土坑 (西から)
- 2 弥生時代墓地群 (西から)

2

1



2



1 弥生時代墓地群西端部（北から）

2 弥生時代墓地群西端部（南から）



- 1 1号木棺墓 (南東から)
- 2 1号木棺墓 (南西から)

1



2

1



2

1 2号木棺墓 (南西から)

2 3号木棺墓 (南東から)



3



1 4号木棺墓 (南西から)

2 4号木棺墓 (北西から)

3 4号木棺墓出土土器

1



1



2

1 5号木棺墓 (北西から)

2 6号木棺墓 (北西から)



1



2

1 7号木棺墓（北西から）

2 8号木棺墓（北西から）

1

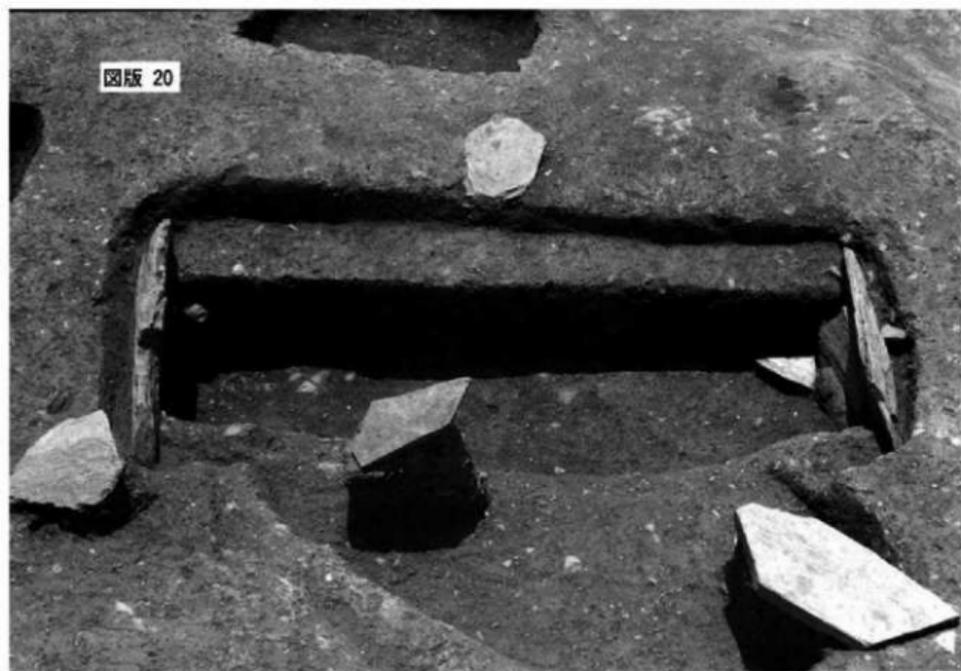


2



1 9号木棺墓と標石（北西から）

2 9号木棺墓（北西から）



1



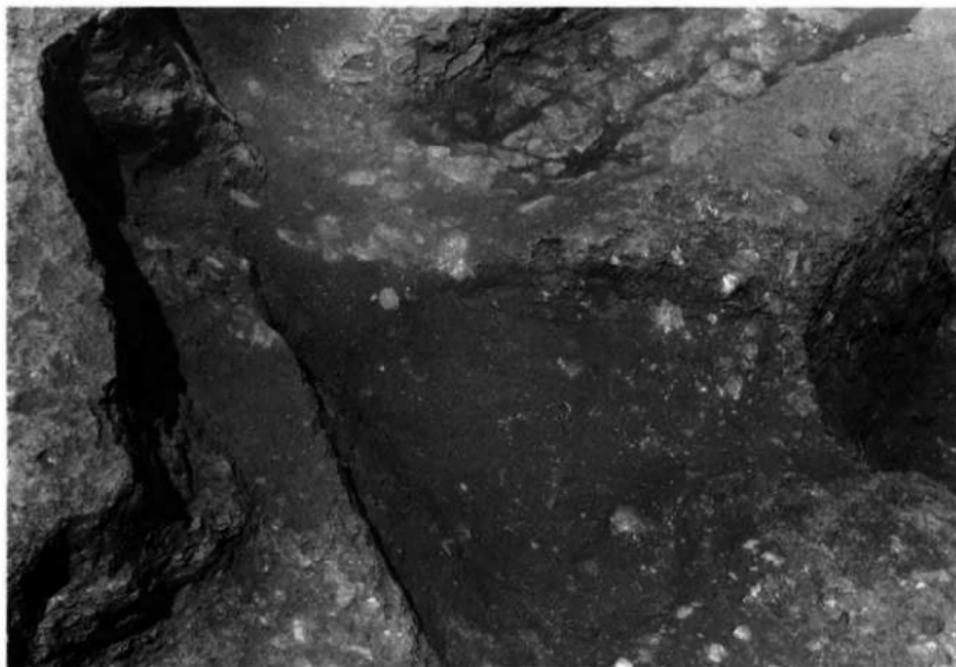
2

1 10号木棺墓 (北西から)

2 10号木棺墓墓壁 (北西から)



1



2

1 11号木棺墓 (南東から)

2 12号木棺墓 (南から)



1



2

1 13号木棺墓 (南東から) 2 13号木棺墓墓壇 (南東から)



1 14号木棺墓（北西から）

2 14号木棺墓墓域（北西から）



1

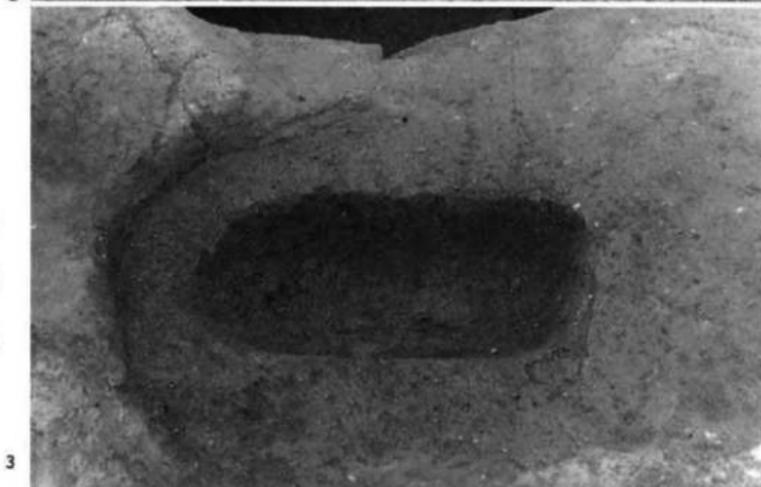
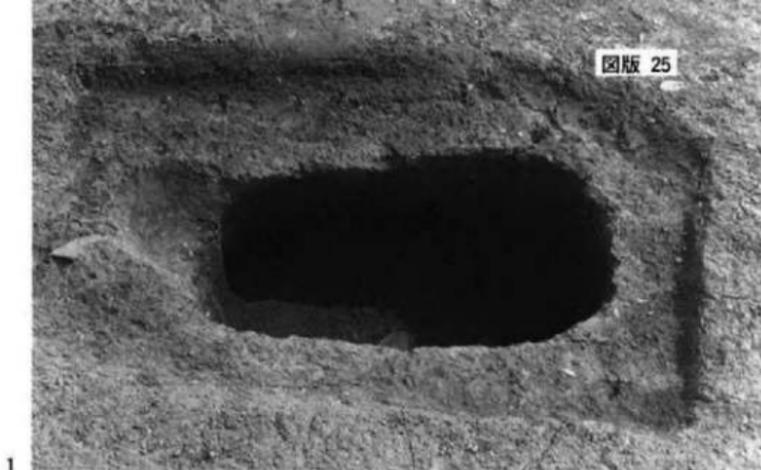


2

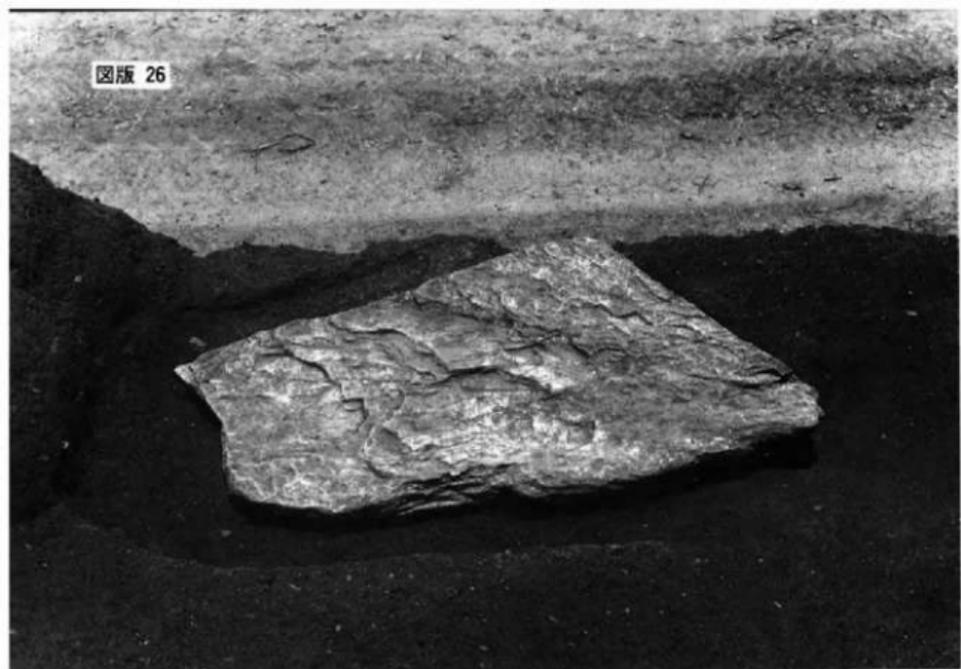


3

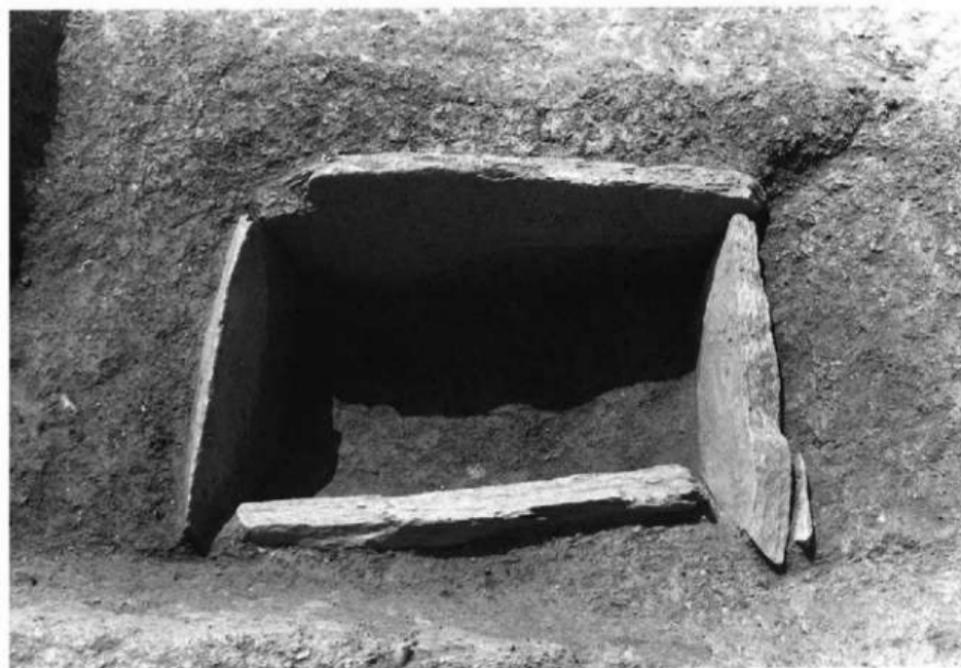
- 1 1号石蓋土墳墓
(北東から)
- 2 2号石蓋土墳墓
(北東から)
- 3 3号石蓋土墳墓
(北東から)



- 1 1号石蓋土壇墓墓壇
(北東から)
- 2 2号石蓋土壇墓墓壇
(北東から)
- 3 3号石蓋土壇墓墓壇
(南西から)



1



2

1 石棺墓蓋石（北西から） 2 蓋石除去後の石棺墓（北西から）

1



2



3



- 1 1号壺棺墓
(南西から)
- 2 2号壺棺墓
(南西から)
- 3 3号壺棺墓
(南西から)



1



2



3

- 1 4号甕棺墓
(北西から)
- 2 5号甕棺墓
(西から)
- 3 6号甕棺墓
(南東から)

1



2



- 1 7～9号甕棺墓
(南東から)
- 2 7号甕棺墓
(南東から)
- 3 8号甕棺墓
(南東から)

3





1



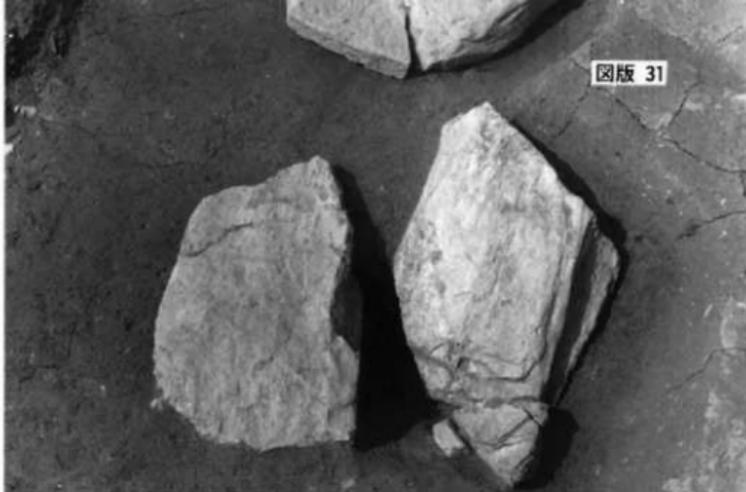
2



3

- 1 9号甕棺墓
(南東から)
- 2 10号甕棺墓
(南東から)
- 3 11号甕棺墓
(北西から)

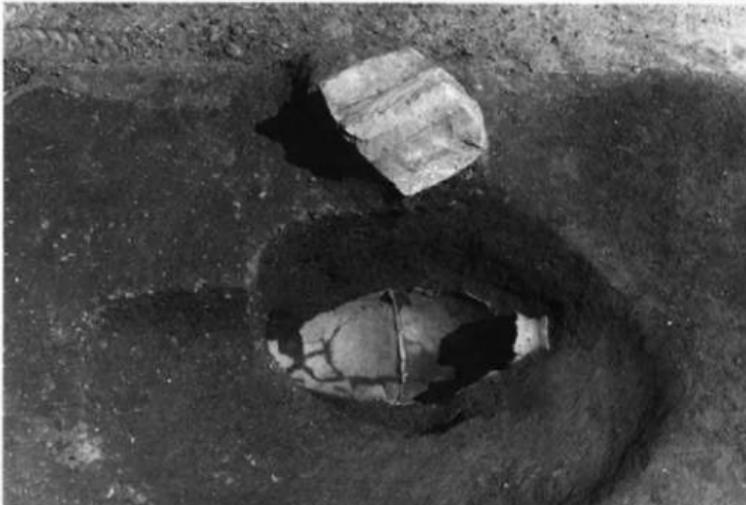
1



2



3



- 1 12号甕棺墓
覆石（北東から）
- 2 12号甕棺墓
（北東から）
- 3 13号甕棺墓と標石



1



2



3

- 1 14号甕棺墓覆石
(南東から)
- 2 14号甕棺墓
(南東から)
- 3 15号甕棺墓
(南西から)



- 1 16号墓棺墓
蓋石（東から）
- 2 蓋石除去後の
16号墓棺墓
（東から）
- 3 17号墓棺墓
（北西から）



1



2



3

- 1 18号妻棺墓標石
(北西から)
- 2 18号妻棺墓
(南東から)
- 3 19号妻棺墓
(西から)



1



2



3

- 1 20号甕棺墓（南から）
- 2 21号甕棺墓
覆石と蓋石（南東から）
- 3 覆石除去後の21号
甕棺墓（北東から）



1



2

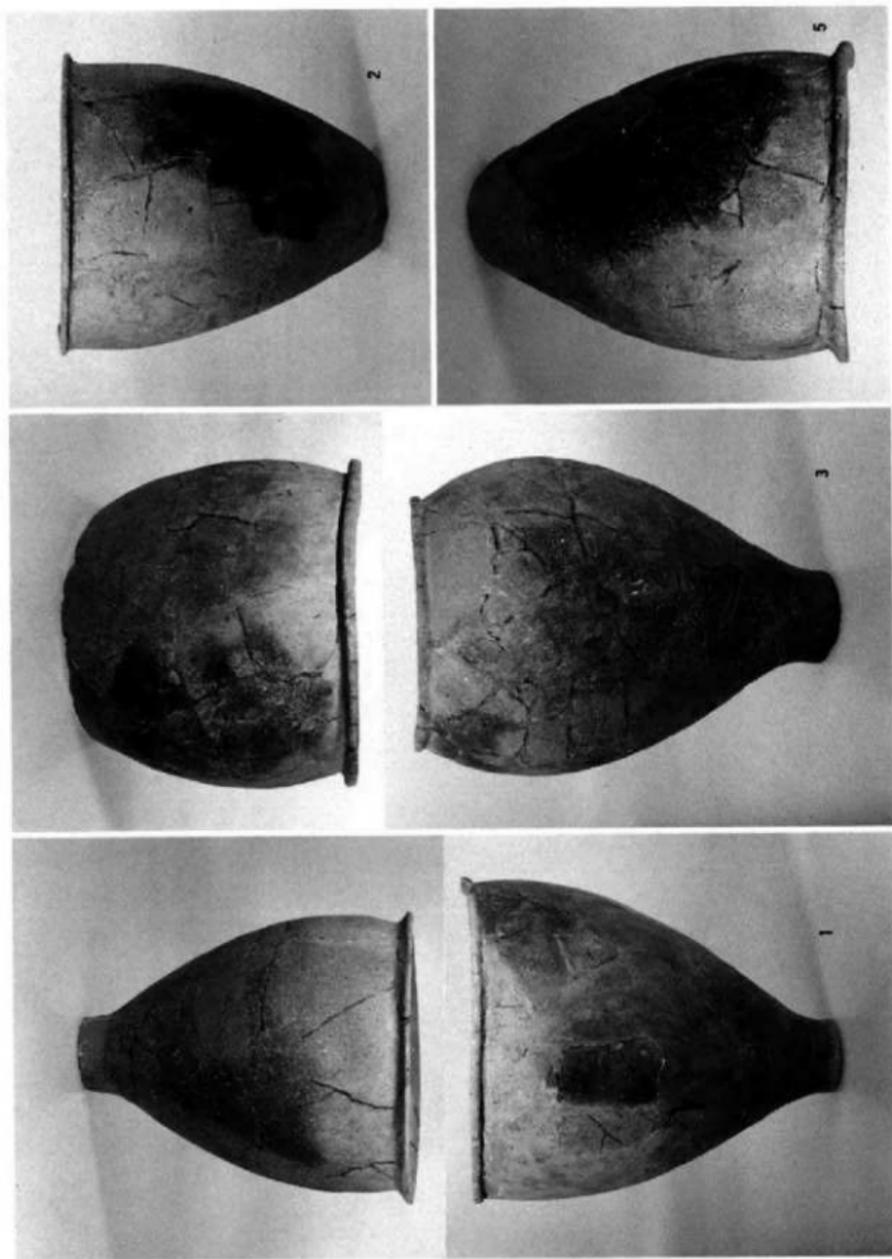


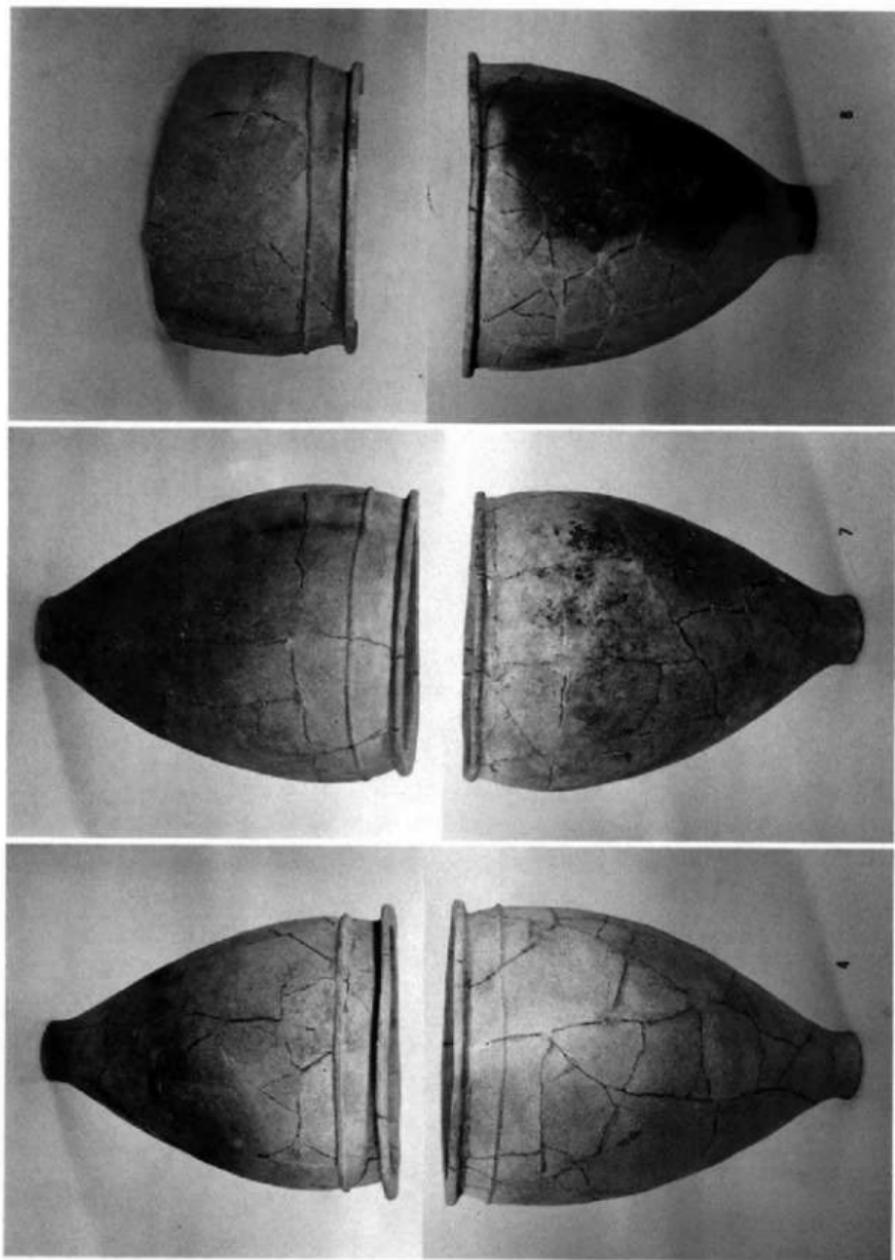
3

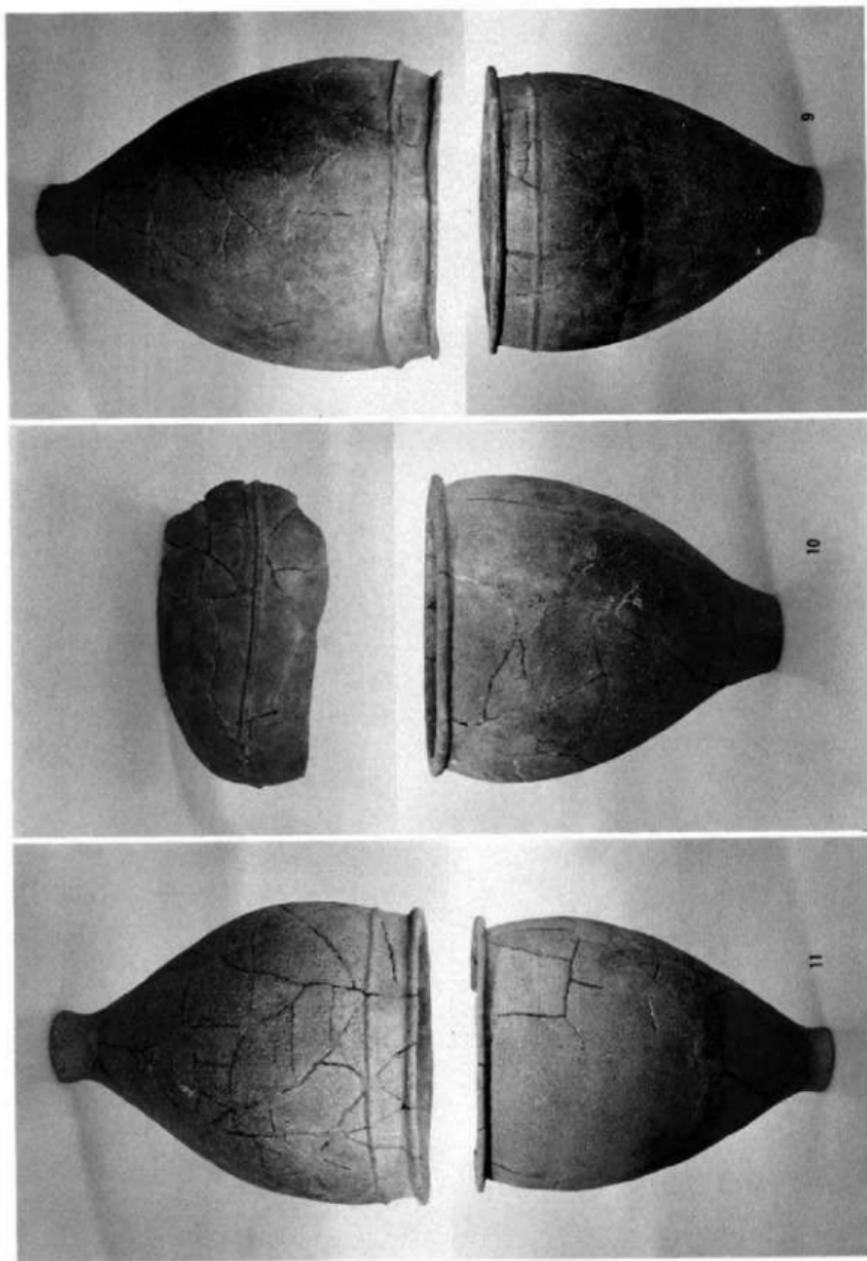
- 1 蓋石除去後の
21号妻棺墓
(南東から)
- 2 22号妻棺墓
(北西から)
- 3 23号妻棺墓
(東から)

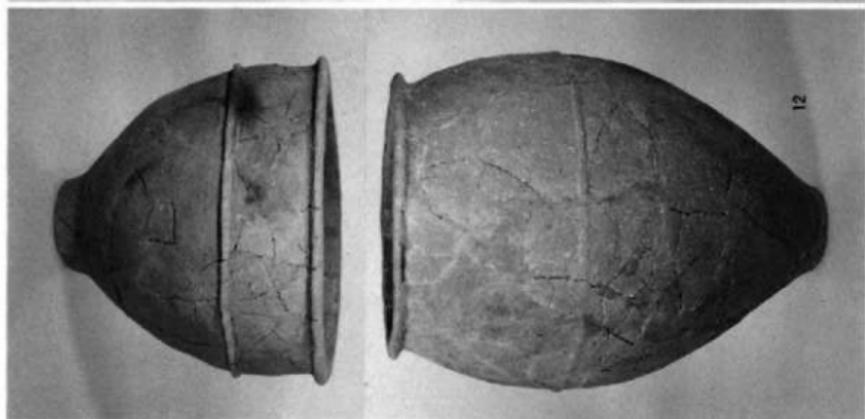
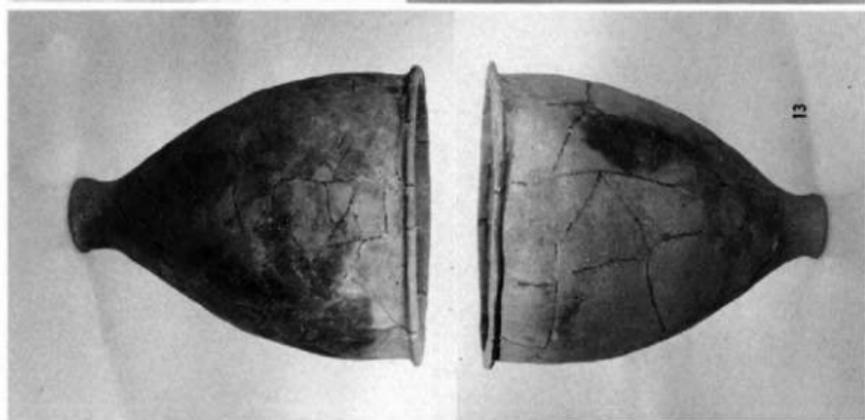
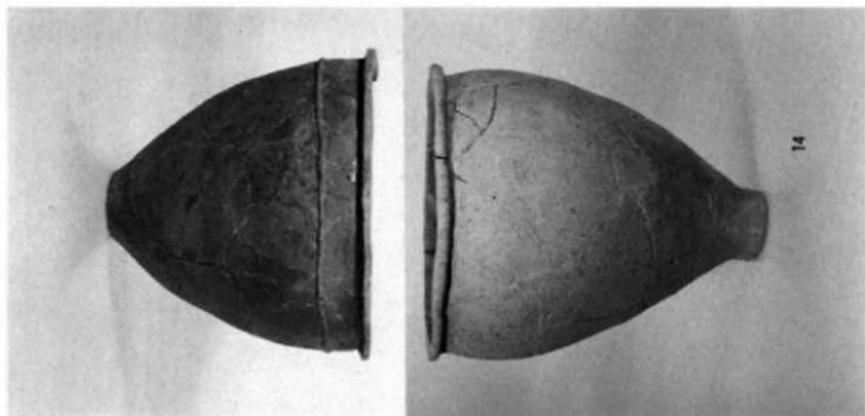


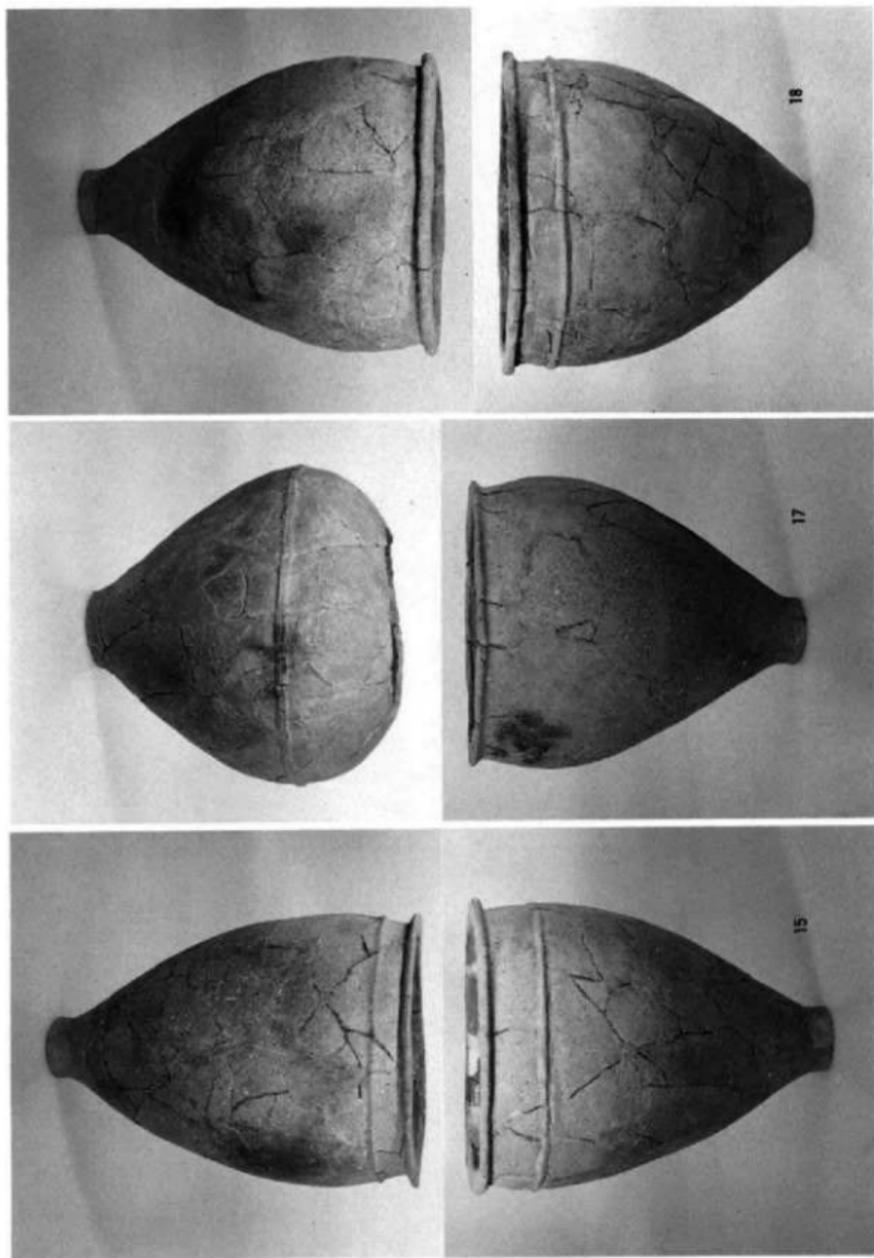
- 1 23号壘棺墓
（南から）
- 2 24号壘棺墓
（南から）
- 3 25号壘棺墓
（南西から）





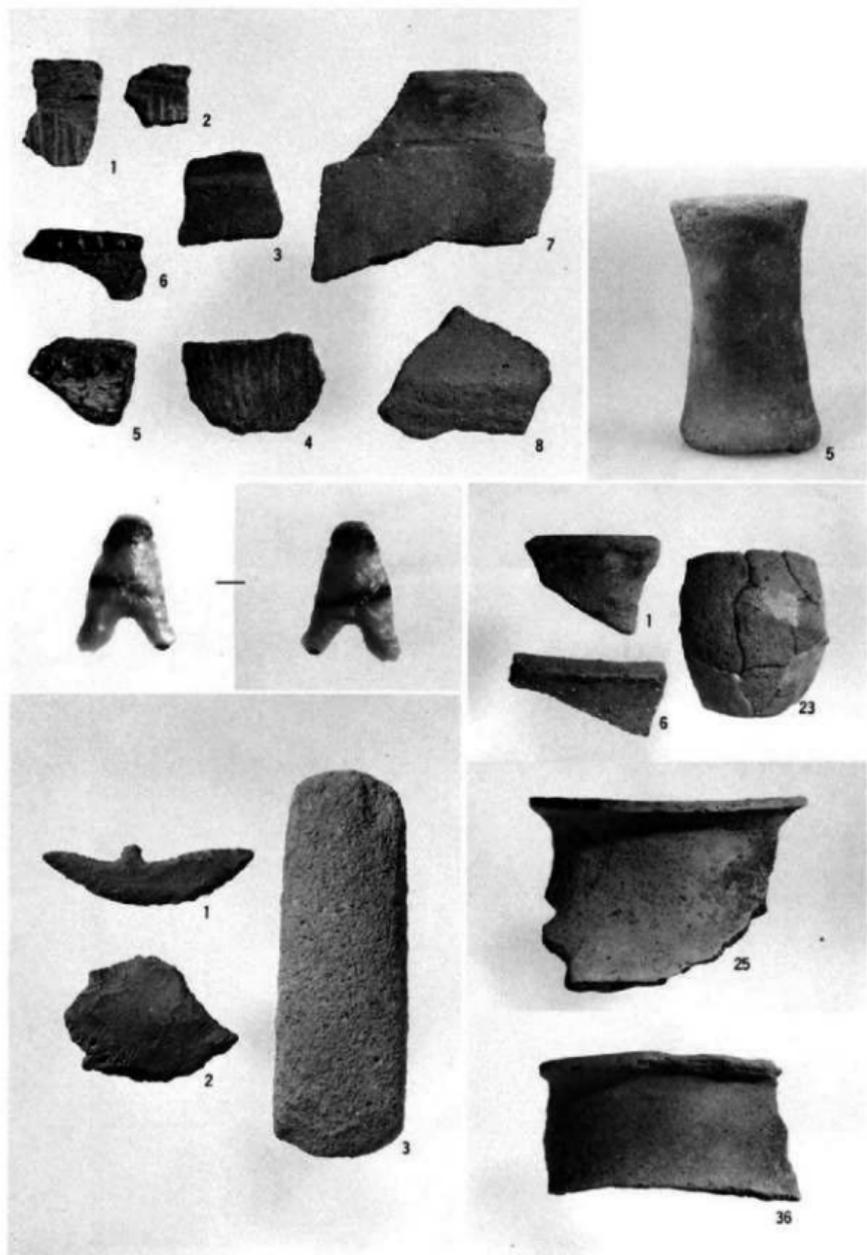












その他の縄文・弥生土器、石器



1

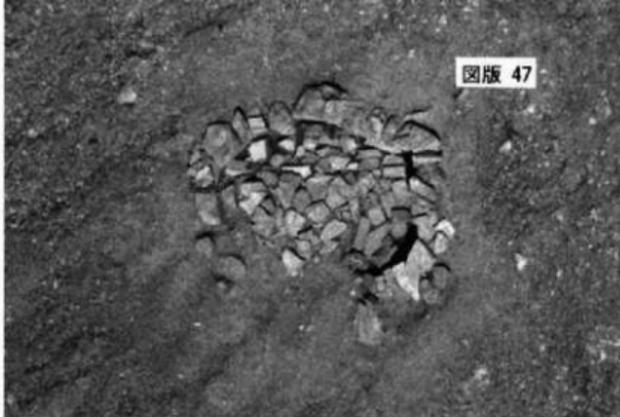


2

1 柿原E地区古墳群全景 (南東から)

2 柿原E地区古墳群全景 (南から)

1 1号墳全景空中写真



2 1号墳石室(東から)



3 1号墳石室(南から)





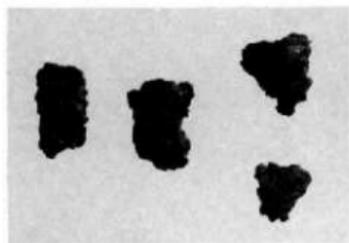
- 1 2号墳全景 (南から)
- 2 2号墳女室 (東から)



1



2



3



1 3号墳石室（南から）

2 3号墳玄室内遺物出土状況

3 3号墳出土遺物

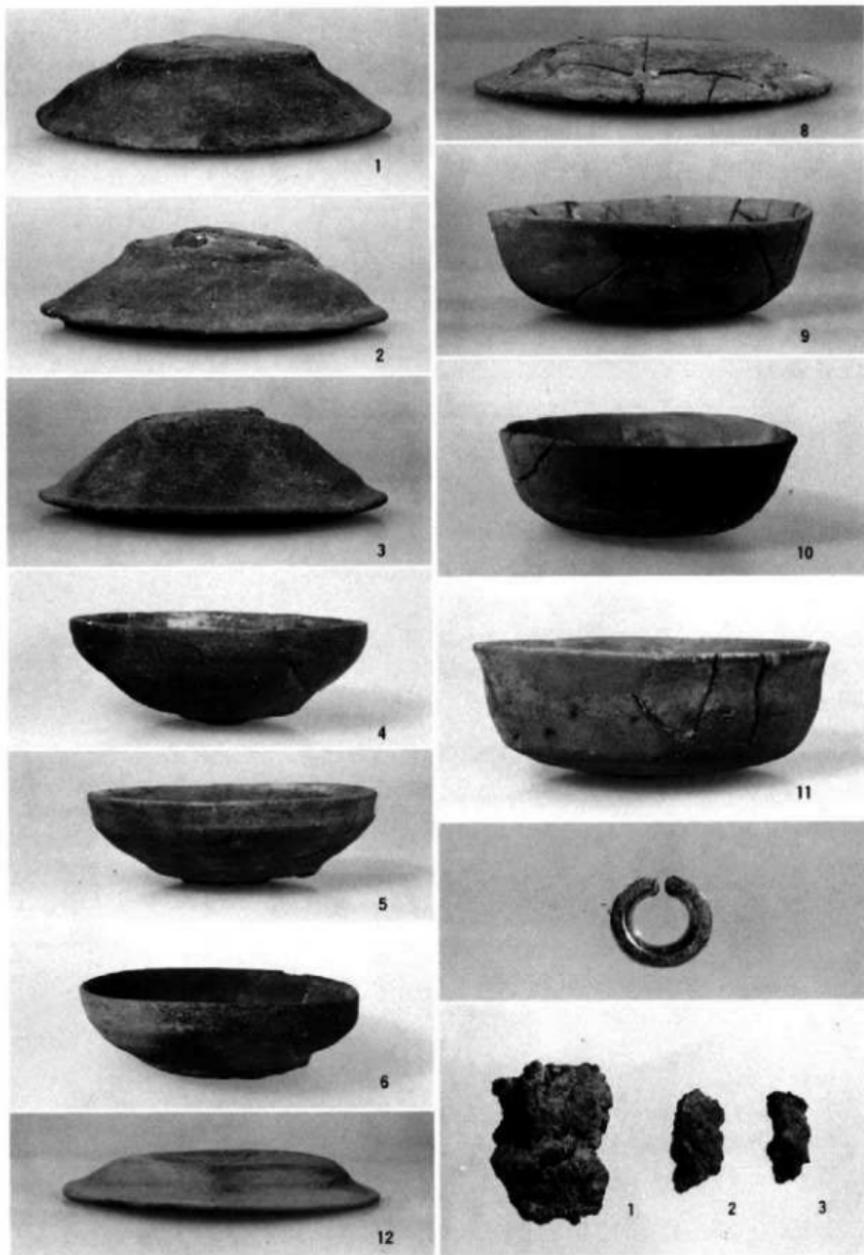


1 3-5号墳全景空中写真 2 4号墳全景(南から)



- 1 4号墳石室（南から）
- 2 4号墳石室閉塞状況（西から）
- 3 4号墳女室内遺物出土状況





4号墳出土土器・装身具・鉄滓



1



- 1 5号墳全景空中写真
- 2 5号墳石室閉塞状況（南から）

2



1



1



4



5



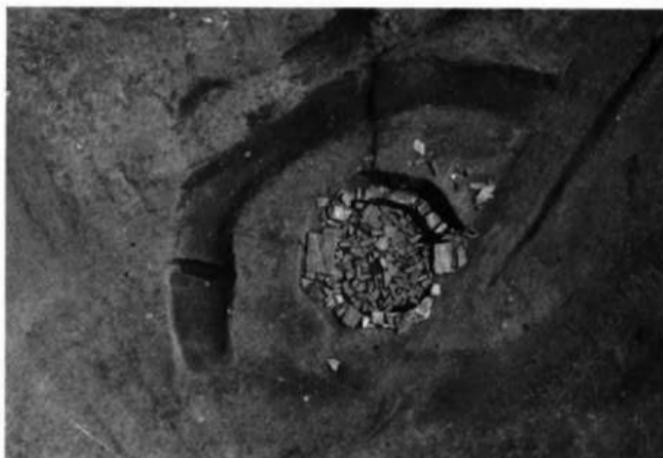
6



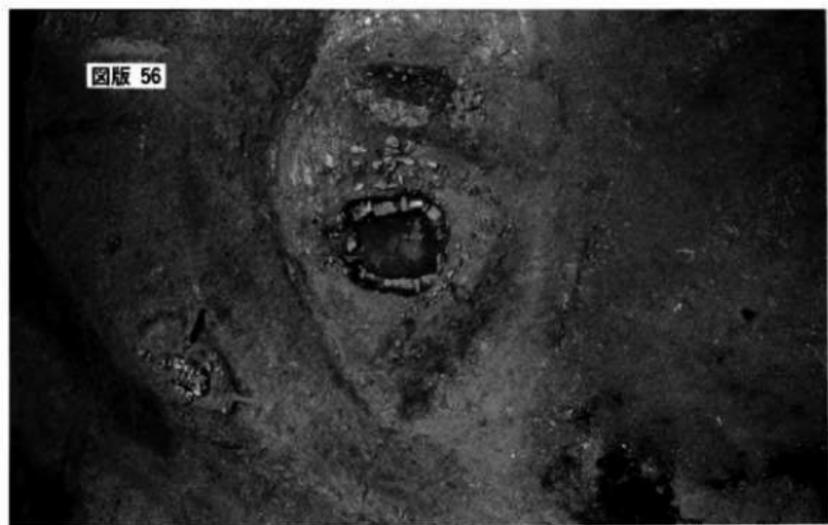
7

2

1 5号墳石室（西から） 2 5号墳周溝出土土器



- 1 6・9号墳空中写真
 2 6号墳全景空中写真
 3 6号墳石室閉塞状況
 (南東から)



1



2



3

- 1 7号墳全景空中写真
- 2 7号墳石室（南から）
- 3 7号墳主体部掘り方（南から）



1



2



3

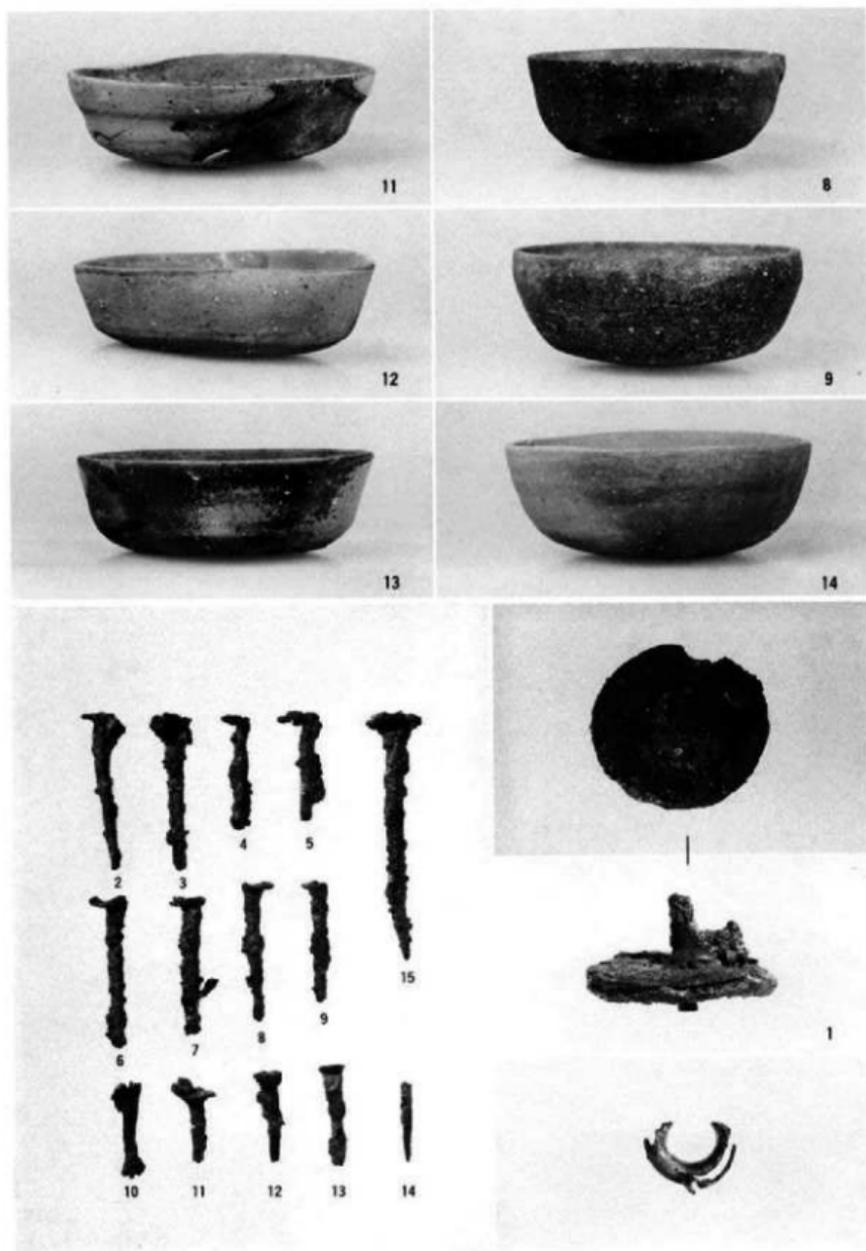
- 1 8号墳全景 (南から)
 2 8号墳石室 (南から)
 3 9号墳全景空中写真



- 1 9号墳全景 (南から)
- 2 9号墳石室 (南から)



1 9号墳前室遺物出土状況 2 前室出土土器①



9号墳前室出土土器②, 玄室出土鉄製品・装身具



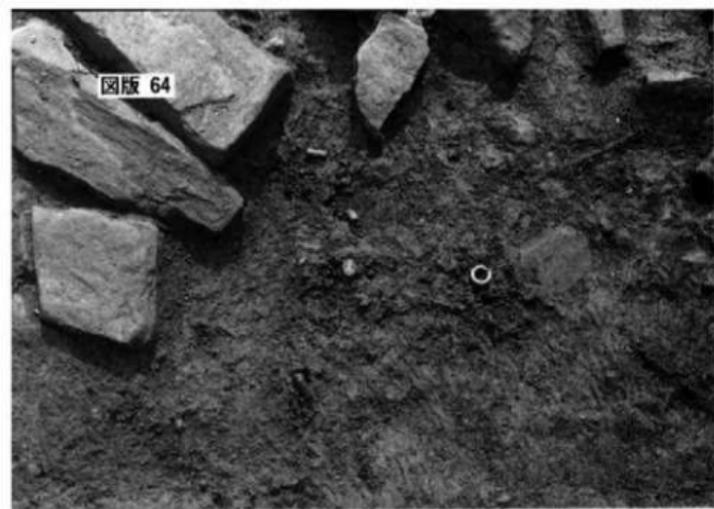
1 10号墳全景空中写真 2 10号墳全景 (南から)



1 10号墳全景 (東から) 2 10号墳石室 (南から)



- 1 10号墳石室閉塞状況
(西から)
- 2 10号墳石室閉塞状況
(北から)
- 3 10号墳石室奥壁
(南から)



1

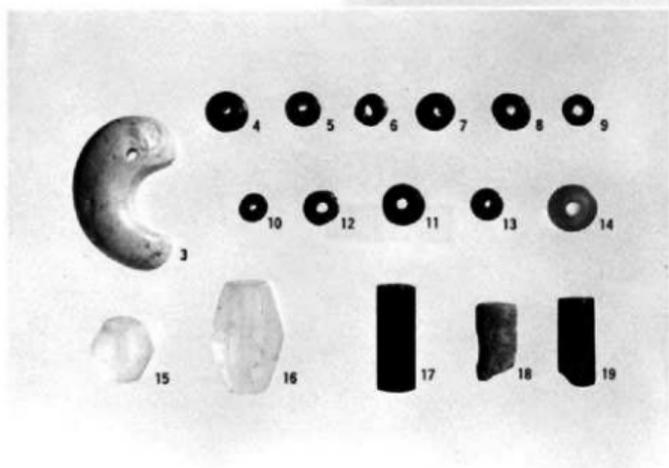
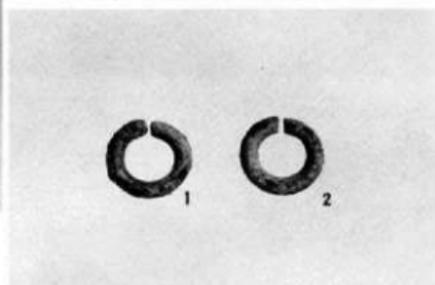


2



3

- 1 10号墳玄室内床面遺物出土状況
- 2 10号墳玄室内床面遺物出土状況
- 3 墓道遺物出土状況



10号墳出土土器・装身具



1 F地区西斜面11～13号墳(南西から)

2 F地区東斜面14～20号墳(南から)

1



2



- 1 11号墳全景
(南から)
- 2 11号墳石室
(西から)
- 3 12号墳全景
(南から)

3





2

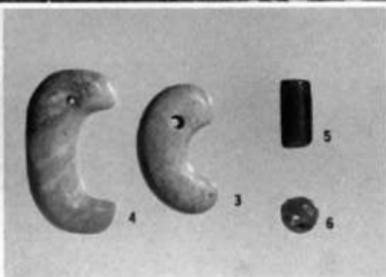


3



1

2



4

5

6

4

1 12号墳周溝遺物出土状況 2 12号墳周溝出土土器
3 13号墳全景(南から) 4 13号墳女室出土装身具

1



2



1 F地区東斜面14～16・19号墳（東南から）

2 F地区東斜面14～16・19号墳（南から）



1



2



4

1 14号墳全景(南から)

2 14号墳石室(西から)

3 14号墳石室閉塞状況
(北から)

4 14号墳墓道出土土器

3

1



2



1 15号墳全景 (南から)

2 15号墳石室 (東から)



1

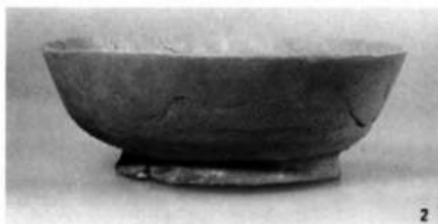


2



3

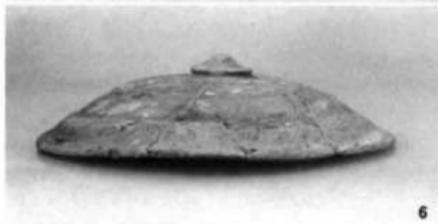
- 1 15号墳墓道遺物出土狀況
- 2 15号墳墓道遺物出土狀況
- 3 15号墳墓道前方遺物
出土狀況



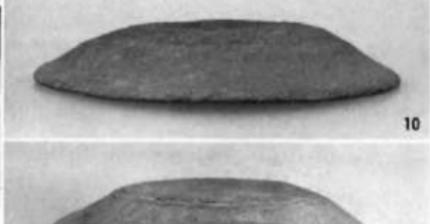
2



3



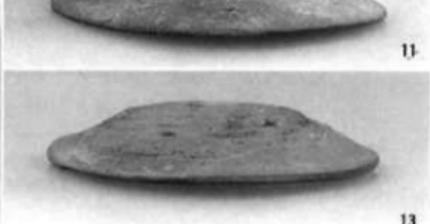
6



10



7

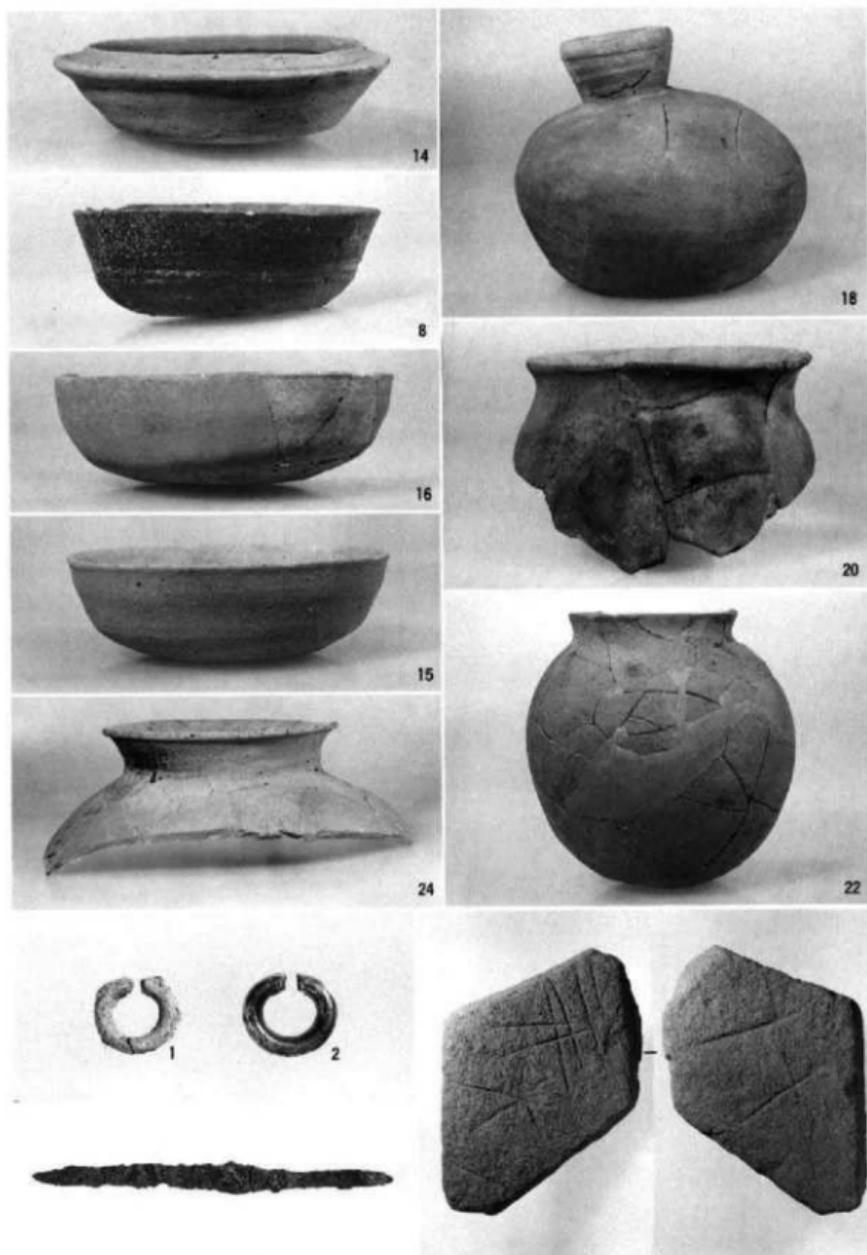


11



13

1 15号墳玄室下部床面 (南から) 2 15号墳出土土器①



15号墳出土土器②・装身具・鉄製品・線刻石

1



2



1 16号墳全景（東から） 2 16号墳石室（東から）



1



2



1



3



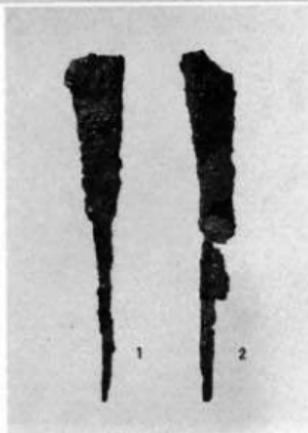
6



4



5



1

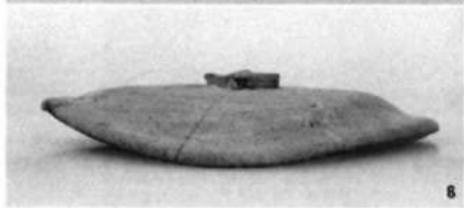
2

2

1 16号墳前室遺物出土状況 2 16号墳前室出土土器・鉄製品



7



8



9



10



12



13



14



16



17



20



22



1



2



3

1 17号墳全景（東から） 2 17号墳列石とその転落石 3 17号墳石室（南東から）

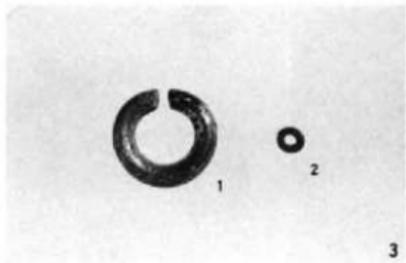


1

2



3



1 18号墳全景 (南から)

2 18号墳石室 (南から)

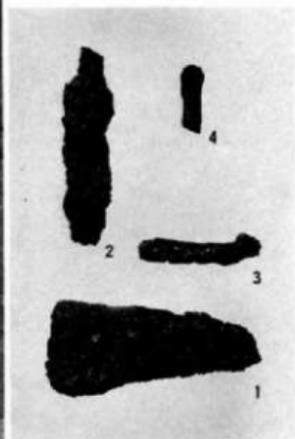
3 18号墳出土装身具



1



2



3

1 19号墳全景 (南から)

2 19号墳石室 (南から)

3 19号墳出土鉄製品



1 20号墳全景（南から）
 2 20号墳石室閉塞状況（南・東から）
 3 20号墳石室と墓道（南から）



1

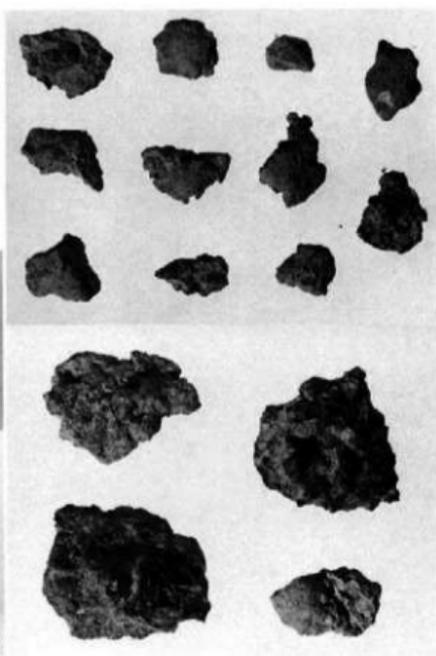


1



2

2



1 20号墳石室前面 2 20号墳出土遺物

1



2



- 1 21号墳全景
(南から)
- 2 21号墳石室
(南から)
- 3 22号墳石室
(西から)

3





1

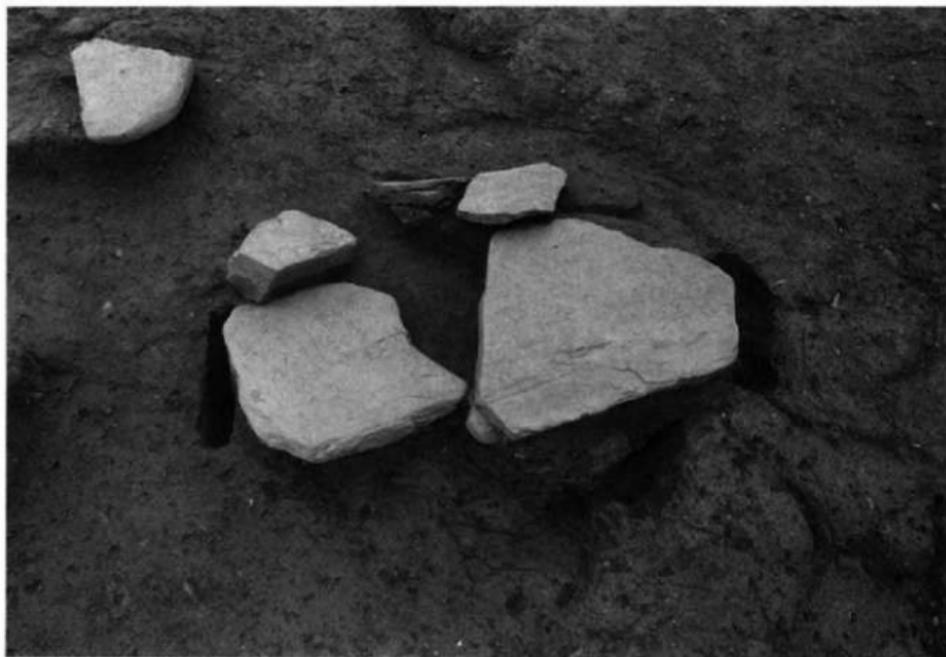


2

1 1号石棺墓 (西から) 2 1号石棺墓 (南から)



1



2

1 2号石棺墓（西から） 2 3号石棺墓（東から）



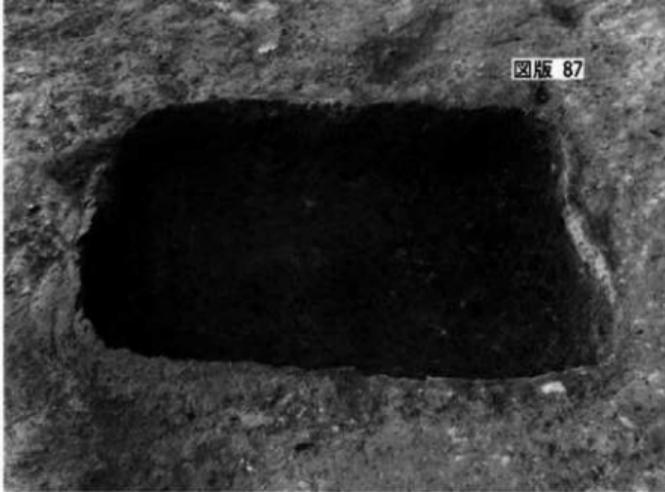
1



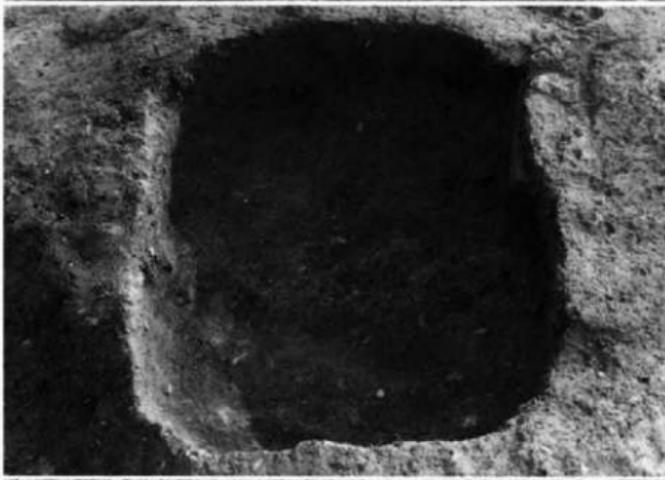
3

- 1 4号石棺墓（南西から）
- 2 4号石棺墓（南東から）
- 3 4号石棺墓墓域外出土土器

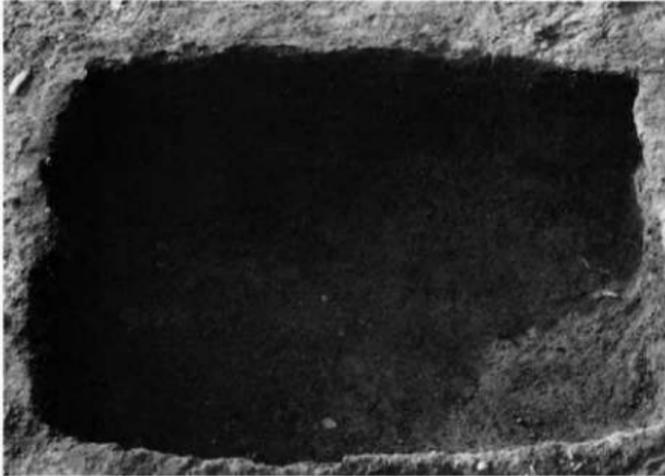
1



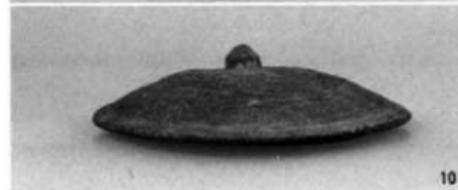
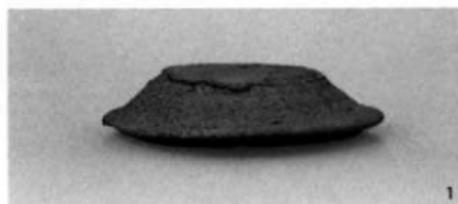
2



3

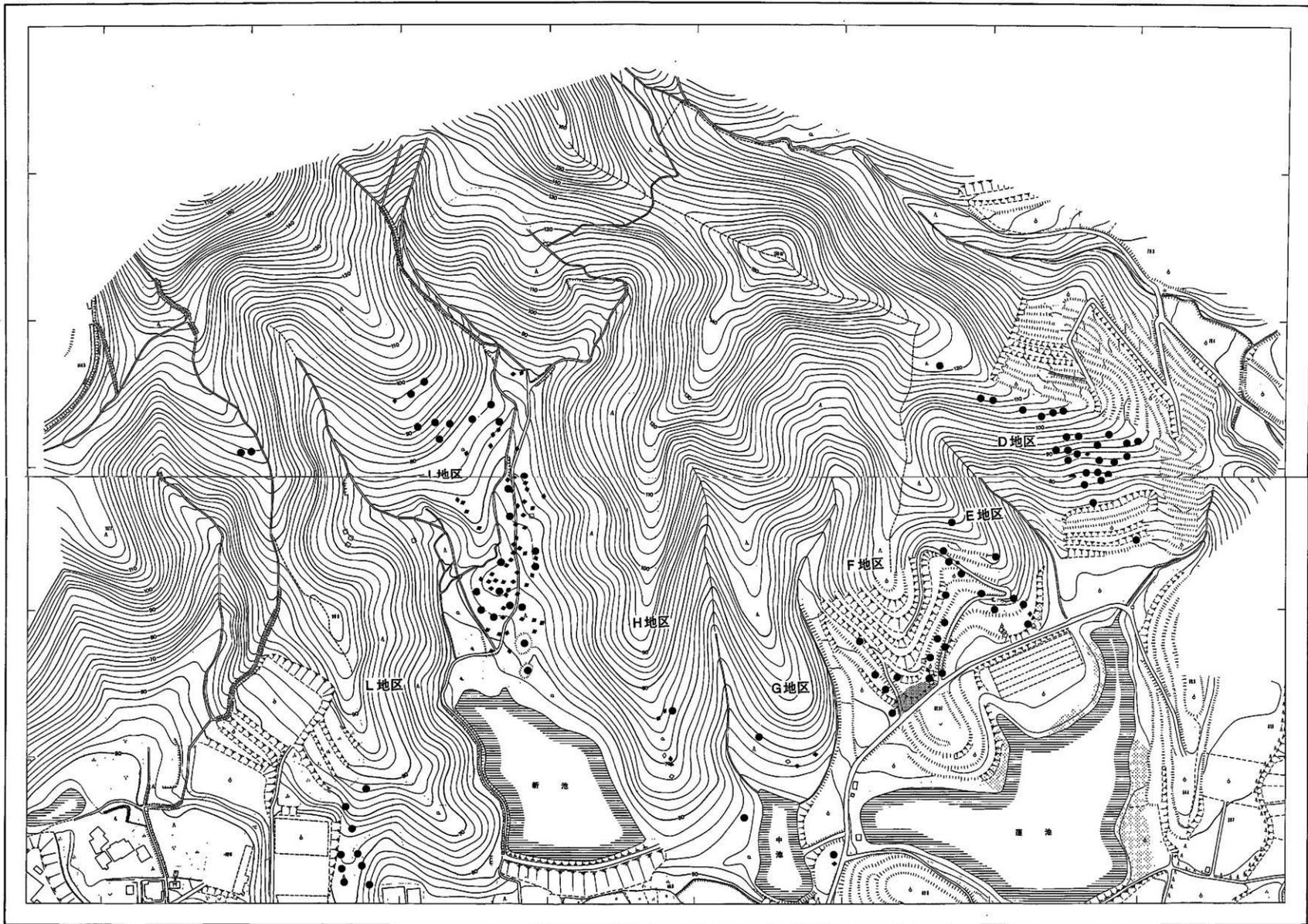


- 1 1号火葬墓
- 2 2号火葬墓
- 3 3号火葬墓



調査風景

包含層出土・表探土器



● 古墳 ◆ 石碑 □ 住居跡 [Hatched Box] 新石器時代基址群 [Dotted Box] 新石器時代遺物分布範圍

付 四 柳區遺跡地形圖 (1/2000)

0 200m

福岡県行政資料

分類番号	所属コード
JH	2133051
登録年度	登録番号
62	3

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-12-

昭和62年 11 月 30 日

発行 福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園7番7号

印刷 ダイヤモンド印刷株式会社

福岡市東区松田3丁目9-32